
昔を今に繋ぐ街【ポケットモンスター】

光芒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔を今に繋ぐ街【ポケットモンスター】

【Nコード】

N6244K

【作者名】

光芒

【あらすじ】

ポケモンと人の神話が数多く残されている北の大地・シンオウ地方。そんなシンオウ地方の中心を貫く霊峰、テンガン山の西には『昔と今を繋ぐ街』という異称を持つハクタイシティという街があった。

初秋のある日、そのハクタイシティに逢沢 悠璃あいざわ ゆうりという名の少女がやってくる。そして彼女はそこで街で一番の実力を持つと言われる“ハクタイの虎”こと立花 恭介たちばな きょうすけと出会った・・・

【プロローグ】

【プロローグ】

うつそうとした木々が広がる広大な森。そこに生息するポケモンたちの鳴き声や動く音が聞こえてくる。昼間なのに薄暗く、木漏れ日のみが照らしている。そんな森の中を、1人の少女が足早に歩いていった。黒く美しい長髪を持つ少女は、周囲の景色や飛び出してきた野生のポケモンには一切目もくれずただひたすら出口を目指し森を越えていく。そんな少女の後に続くのは、濃い青色をしたポケモン。ポケモンの頭部には弾丸のような2つの突起があり、両腕の手首と背中からは鋭い鱗が生えている。鍛え上げられた流線状の体が印象的なドラゴンのようなポケモンであった。

「……疲れたの？ 少し休もうか？」

先を歩いていた少女は立ち止まって振り返る。彼女の瑠璃色の瞳にポケモンの姿が映りこんだ。後ろを付いてきていたポケモンは首をぶんぶんと横に振っては、まだ自分が疲れていないことを精一杯示している。少女は優しい笑みをポケモンに向けると、何も言わずに歩き出し、肩から提げていた鞆の中から分厚い本を取り出す。分厚い本は結構年代物のようで、文字が所どころ掠れて読み辛くなっていた。しかし、少女はそれを気にせずページを読み進めては、気になったページに戻って読み返す。それを繰り返しながら、少女は1人呟いた。

「……ようやく、私の求めているものに近づける」

本のページには、何かの想像画が載っていた。竜のような、獣のような……しかしそれは一般的に人々に認知されているポケモンとは違う。いわゆる“伝説”のポケモンと呼ばれるものである。

「『昔を今に繋ぐ街』……此処は私を導いてくれるのだろうか」

長かった森を抜けた少女は、森と街を繋ぐ短い道路を進んでいく。彼女の目指す『昔を今に繋ぐ街』……ことハクタイシティは目と鼻の先である。

プロローグ 終

第1話：尋ね人

『昔を今に繋ぐ街』それがハクタイシティの異称である。街のはずれには神話に登場すると言われる伝説のポケモンを象った像があり、ハクタイシティが有する博物館にはテンガン山が近い事もあってか、出土品が多く寄贈されている。そのためハクタイシティはシンオウ地方の歴史や神話を学ぶ者たちにとっては欠かさず訪れておきたい街であった。

「……」

たった今、ハクタイの森を抜けてこの街へと入って来た少女がこの街を訪れるのは初めてのことである。少女はハクタイシティは歴史を伝える街ということで何処か古めかしい印象を抱いていた。だが実際に見るハクタイシティは高層ビルが多く立ち並び、だいぶ発展した様子を見受けられる。街の入り口に広がる商店街、および繁華街にはハクタイシティの住民と思しき人々が行き来していた。

近年、シンオウ地方は他の地方との交流が深まったのを皮切りに、ヨスガシティやコトブキシティを筆頭に都心化が進み、それが他の街に伝播していったのである。これがハクタイシティ近代化の主な原因であった。ただ都心化によって風貌が壊れる、と言った意見を言った人間は居らず、この街の住民たちはハクタイシティの発展を快く受け入れていたようである。

「でよあ、アイツカツアゲした奴にポケモン使われて逃げられてんだぜ」

「マジで！？ ダッセー！！」

しかし、発展の裏側には必ず弊害が起こる。昔からそう相場は決まっていた。顕著な例が少女の目の前にたむろする一かたまりの集団。変形した学生服を身にまとい、髪の色は赤青黄色、緑に金。見るからに“不良”と呼べる奴らだった。数十人の不良たちは、あちこちに目配せしては通りかかる人々を睨みつける。人々は怯え、街の中に不穏な空気が漂う。少女は長い黒髪をかき上げ、不快そうな顔を浮かべた。

「おい」

視線を感じた不良の1人が立ち上がり、少女に声を掛けた。不良からは強い敵意が感じられる。しかし、少女は興味なし、と言った形で不良を無視すると、その場を足早に立ち去ろうとした。それを見た不良たちは一斉に少女の元に駆けて行くと少女の行き場を無くすかのごとく、少女を取り囲む。

「おい、何見てんだよ」

「俺らがそんなに珍しいかあ？」

柄の悪い不良たちが少女に詰め寄る。「きゃっ」と状況を見ていた住民から悲鳴が漏れた。しかし、少女はそんな状況にあっても一切動揺する素振りを見せず「フン」と鼻で笑うと不良たちを一瞥する。そして一番近くにいた不良の手を掴み取ると、その手を一気に捻り上げた。

「ひいっ！」

不良は情けない悲鳴を上げると、その場に転がるようにして倒れこむ。不良たちは一見ひ弱そうな色白の少女が見せたその態度を前に逆に動揺の色を浮かべる。そんな不良たちをリーダー格と思わしき赤い髪をした少年が一喝して落ち着かせると、少女に詰め寄って来た。180センチ以上はある長身の赤髪の不良は、160センチ台の身長 of 少女からはかなり大きく見えた。上から見下ろす不良に對して、見上げるように不良の眼を凝視する少女。不良は1つ咳払いをすると、目の前の少女に尋ねてきた。

「おう、あんた。何も俺たちはあんたをどうしようと言う訳じゃない。ただ聞きたいことがあるだけさ。

俺たちは人を探している。“ハクタイの虎”……こいつに用があるだけさ」

第2話：ハクタイの虎

「ハクタイの虎」……誰それ？」

少女はそう言っ、首を傾げる。不良たちは「この街の人間なら知っているはずだ」とざわめきだす。知っているはずだと言われても、この街にはまだ来たばかりなのに見知らぬ人間の居場所を聞かれたところで答えようがない。しかし“ハクタイの虎”という仇名が普通にまかり通っているという事はこの界限では有名な人物なのであろう。この街のことをまだそれほど詳しく知らない少女にもそれは理解できた。

「なんだ、知らねえのか？」

「私はまだこの街には来たばかりだから。そんな奴のことなんて知らないわ」

「ちっ……見当違いだったか。そっぴやあんたここいらじゃ見ない顔だな」

不良たちは耳を寄せ合い、何やらこそこそ話し合うと囲いを解いては少女の元から去ろうとしていた。普通ならこれだけの不良に囲まれて、何もされずに解放されるのは相当運の良いことである、普通なら。だが、少女はその普通 of 感覚を持っていなかった。

「待って」

そんな時、少女は不良のリーダー格を呼び止めた。周囲からざわめきの声が漏れ始める。赤髪の不良は訝しげな表情を浮かべて振り返る。少女の青い瞳は不良を鋭い目つきで睨みつけていた。不良たちは蛇に睨まれた蛙、ならびにアーボックに睨まれたニョロモの如くその場から動けなくなる。

「何か……忘れていない？」

「忘れた？ 何をだよ」

不良たちは少女が問いかけた“忘れもの”の意味を理解できずにいた。少女は呆れた様子を見せると大きく溜息を付くと、右手の人差し指で地面を指す。

「頭を下げなさい」

まるで高い位に位置する者が、格下の者を見下すような眼をして言つてのけた。少女のその言葉に不良たちの顔色が一斉に変わる。

「……何のつもりだ」

赤髪は再び少女に詰め寄る。不良たちは一見何の変哲のないただの少女が自分たちを堂々と侮辱していることに一種の不安感を覚えていた。だが、そうまでされて怯えていては面目が立たない。ましてこちらは数十人の集団である。赤髪の不良にはそれをまとめる者として、このまま引き下がるわけにはいかなかった。

「はあ？ 何で俺たちがそこまでしなきゃならねーんだよ」

「無関係な人間を巻き込んだ。十分に謝るべき事だと思っけど？」

「面倒だ。第一俺らそんなことまでしている時間無えし」

「簡単なことよ。ただ『ごめん』と一言言えば良いだけじゃない。それとも……これだけの集団のリーダーを務めておきながら人に頭も下げれないのかしら」

赤髪の不良の顔に青筋が立つ。誰がどう見ても怒っている。その様子を見た少女は口に手を当て、クスリと小馬鹿にしたように笑う。そんな少女の言動は赤髪の感情を逆なでするだけだった。

「こんな群れる事しか出来ないキバナアのような奴らの頭など所詮はこの程度のレベルなのね。あつ、それじゃあキバナアに失礼か」

極めつけは少女がそう言って笑ったときであつた。赤髪の後ろから真つ黒なポケモンが飛び出し、その鋭い鉤爪を少女にさし向ける。悪タイプと氷タイプを持つ“かぎづめポケモン”のマニニューラである。トレーナーである赤髪の不良が侮蔑されたことに腹を立て、自らこうして躍り出てきたのだろう。少女はマニニューラに恐れるどころか、そんなマニニューラを見て何処か嬉しそうに微笑んでいた。

「さつきから人が下手に出てりやいい気になりやがって……お前ポケモントレーナーだろ。」

俺とポケモンバトルしろ！ その生意気な口を二度と利けなくしてやるぜ！――」

そう言つて勢い付く赤髪。後ろで控える不良たちからは彼の雄姿に歓声上がる。少女は臨戦態勢を整えたマニニューラを見据えると、無言で手を振り上げた。彼女の後ろに控えていたスレンダーな体躯をしたポケモンが前に出て、マニニューラと対峙した。風にあたなびく美しい黒髪に瑠璃のような澄んだ瞳をした少女。逢沢 悠璃が持つのはドラゴン・地面タイプを併せ持つ珍しいポケモン、“マッハポケモン”のガブリアスである。

第2話：ハクタイの虎（後書き）

ついに物語のヒロイン・逢沢^{あいざわ} 悠璃^{ゆうり}が本格的に登場しました。
しかし言動を見るとそこはかとなくするDQN臭……（え

感想・アドバイス・意見など広くお待ちしております。

第3話：悠璃の余裕

「ガブリアスとは珍しいポケモン持ってんじゃねーか。だが、このバトル俺の勝ちだな！」

赤髪の不良はバトルが始まる前に早くも勝利宣言をした。確かにドラゴン・地面タイプのガブリアスに氷タイプを持つマニニューラは相性が良い。それにマツハの速度で飛行すると言われているガブリアスを上回るスピードを持つと言われているマニニューラはガブリアスだけに限ったことではないが、ほぼ全てのドラゴンタイプの天敵と言える存在であった。つまりこのバトルの結果は最初から見えている。それが赤髪の不良、もとい周囲で事の様子を見守っている観衆たちの率直な感情であった。悠璃にとっては絶対的不利な状況。そんな中にあっても悠璃の顔には焦り1つ見えなかった。

（おい、あれまずいだろ……あの不良どもにあれだけのことを言っただ。きつとただじゃ済まないぞあの子）

（警察だ！ ジュンサーさんと呼ばべ！）

（おい、お前助けに入ってやれよ）

（無理だつて。あんな大勢を相手に……それこそ“ハクタイの虎”でもない限りさあ）

悠璃は手を口に当てると「フン」と小さく鼻を鳴らす。驚く事に彼女はこの状況で笑みをこぼせるほどの余裕があった。

（馬鹿みたい。助ける気も力も無いくせに）

何に対して笑っているのか。それは自分を取り巻く者全てに対してである。戦う前から勝てる、と息巻いている赤髪の不良にそれを囃し立てる赤髪の配下の不良たち。そして自分が負けると決め付け、一連の物事を止める役を互いに押し付けあう観衆に対してであった。

「物事を深く見ることなく、何も考えずに物事を判断する……… 実力、知識の備わっていない奴にありがちな言い草よね」

「ああん？ 何だって？ よく判んねえことをブツブツ言うくらいなら負けたときの言い訳でも考えな！」

「…… お気遣いありがとう。じゃあ、あなたの物を参考にさせてもらうわ」

悠璃が喋り終える前に赤髪のマニユーラが動いた。拳に冷気を溜めてガブリアスに突っ込んで来る。マニユーラの主力技の1つ、冷凍パンチである。対するガブリアスは迫り来るマニユーラに対してその場から一步も動けずにいた。マニユーラはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると冷凍パンチをガブリアスの胸に叩き込もうとする。

「なっ………」

しかし、ガブリアスの体をマニユーラがすり抜けた。まさか冷凍パンチを回避されると思って居なかったマニユーラは驚きのあまり気が動転して態勢を立て直すのに遅れる。ガブリアスは冷凍パンチが直撃する寸前に影分身をして攻撃を回避する態勢を整え終えていたのだ。それに気付かず突っ込んできたマニユーラはガブリアスにとって格好の的である。

「ガブリアス！」

ガブリアスがマニューラの背後からすかさず龍の怒りを叩き込んだ。龍の怒りはタイプ相性に関係なく一定のダメージを与える技。そのためこの一撃だけではマニューラを倒すまでには至らない。しかし、どうせ攻撃するならドラゴンクローなり地震なりもつと威力の強い技で攻撃すればマニューラにより大きなダメージを与えられるし、何より防御力の低いマニューラである。攻撃の当たり次第では勝負を決めることも出来るはずだった。もちろん悠璃もそれを理解していた。だが、彼女はあえてそれを行わなかった。

「やっぱりこんな技じゃ無理ね」

「龍の怒りだと……お前俺を嘗めてんのか！？」

マニューラは再びガブリアスに突っ込んでいく。まるで頭に血が登ったケンタロスが如く。マニューラ自身も相手を見くびって掛かっている事に気付いたのであろう。渾身の冷凍パンチをガブリアスに撃つ。それだけを考えていた。しかし、目の前の敵に対する怒りに捉われる余りに、相手の状況を伺う事を怠る。ガブリアスは身を低く屈めると、鎌のような鱗を持つ左腕が空を切る。ガブリアスはその場で竜巻のように高速で回転し始めた。高速回転によって周囲の砂埃が舞い、風に乗って嵐となる。やがてガブリアス自身が竜巻となってマニューラを吹き飛ばした。マニューラは空中に吹き上げられながらも、砂嵐の中に氷の礫を作り出しては放つ。だが、手ごたえは無い。案の定マニューラは砂嵐に視界を阻まれガブリアスの姿を見失ってしまった。

「無駄よ。知ってると思うけど、ガブリアスの特性は“砂隠れ”。砂嵐の中にある限り回避率が上昇するわ」

「回避率だと……？ ええい、例えば砂の中に隠れたとしても攻

撃が全部外れるなんて事は無いはずだ！砂嵐の中にガブリアスは居る！そこに向かってひたすら氷の礫を連射しろ！！」

マニユーラは野球のボール程度の大きさの氷を作り出しては、砂嵐の中に撃ち込む。確かに砂隠れの効果で回避率が上がったとしても、全ての攻撃が必ず外れるわけではない。氷の礫が1発当たるだけでガブリアスにとっては致命傷になりかねない。これは悠璃にとっても賭けであつた。

「……………」

「氷の礫！ 氷の礫！ 氷の礫つ…………ちつ、どうしてこんな当たらないんだよ！！」

マニユーラは既に数十発氷の礫を放っている。しかし一向に命中した気配がない。あても無く氷の礫を放ち続けるマニユーラは悪戯にスタミナを減らすだけであつた。

「そんな、ガブリアスはある砂嵐の中に居るはずだつてのに……………」

「ふふつ…………あははっ、本当に何も考えていないのね！」

がつくりと肩を降ろす赤髪の不良。目の前の現実には動揺する赤髪の様子を見ると、悠璃は高笑いをする。赤髪の不良はそんな悠璃を凝視する。不良には悠璃が何故そこまで余裕を持っているのかが未だに理解することが出来なかつた。

「ガブリアスはまだ砂嵐の中に居る…………誰がそんな事言つたかしら？」

悠璃がそう言い終わると、マニユーラの足元の地面に1つ、また1つ輝が生じ始める。赤髪の不良が悠璃の言葉の意味に気が付いた

とき、マニユーラはガブリアスの奇襲攻撃をもろに喰らってしまっ
た後であった。

第3話：悠璃の余裕（後書き）

ガブリアスでマニユーラ相手にこんなバトル出来たらいいのに。
ちなみに技に関してはアニメ基準で4つ以上使用出来るようになっ
ています。

第4話：白い着物の乱入者

ガブリアスによる地中からの奇襲攻撃によって、マニョーラは空中に突き上げられる。悠璃はすかさずガブリアスに追い討ちとばかりに攻撃を命じた。動きが不自由な空中ではマニョーラの自慢のスปีドは生かすことが出来ず、空中でも戦闘が可能なガブリアスにとっては格好の獲物である。スปีドを殺されたマニョーラなど相性で有利とはいえ、ガブリアスの敵ではなかった。ガブリアスは炎の牙でマニョーラの体に喰らい付くと、流れるように放たれたドラゴンクローでマニョーラを地面に叩き付ける。ガブリアスの攻撃力が高いこともあってか、マニョーラのダメージはかなり大きかったようであった。

「確かに砂嵐を使ったのは砂隠れを発動させるためでもあった……でも、それが本当の目的ではないわ」

砂隠れは限られた状況下であるとはいえ、発動するととても厄介な特性である。そのため一度砂嵐が吹き始めると、ガブリアスの特性はどうにも警戒されやすい。相性で勝っていても、攻撃が当たらなければ何の意味もない。最悪の場合そのまま勝負をひっくり返される可能性もあるのだから。しかし、相手が砂隠れを警戒しすぎるが故にそこに隙が生まれることもある。砂隠れという特性が発動している以上、大抵はその特性の効果を最大限に生かすためにポケモンは砂嵐の中に居続ける。それこそ砂漠に生息しているようなポケモンで無い限り、砂嵐に妨害されてガブリアスの姿すら確認する事が出来ないのだ。だから相手はガブリアスが砂嵐の中に身を潜めて

いるという前提でバトルを進めてしまっ

『砂嵐の中に“必ず”隠れている』相手にそう信じて疑わせないというバトルをすれば、相手の裏をかく事など容易いこと。一度の読み違いが勝敗を左右する。それはポケモンバトルにも大きく影響する事であった。

「まっ、まだだ！ まだ俺のマニョーラは倒れないぞ！」

「ふん。しぶといわね……」

赤髪の不良がマニョーラに喝を入れる。マニョーラは不良の指示に応えて何とか立ち上がった。どうやらトレーナーとポケモンの間にある絆の深さでは悠璃に負けていないようだった。

（大した力も無い癖に。無駄に負けん気だけ強いなんて…… 本当に腹が立つ）

悠璃は「チッ」と小さく舌打ちをした。今の舌打ちはマニョーラがまだ戦闘続行可能である事に対してではない。あの攻撃で仕留められなかった自分に対する怒りであった。悠璃は刺すような鋭い目つきでマニョーラを睨みつけると、ガブリアスにとどめを刺すように命じた。今の疲弊しきったマニョーラなら100%の動きをすることは出来ない。自分と相手の力の差を思い知らせてやるのだ。そんな時である。静まり返った観衆の中から突如拍手が響き渡った。

「そのバトル、俺も混ぜてもらえないか……！」

悠璃は声のした方に振り返った。見ると観衆が道を空けて一本道が出来る。その直線上には一風変わったいでたちの少年が立っていた。肩まで伸びた黒髪が特徴的な少年は、雪を思わせる純白の着物

に黒い上着という服装は聊か独自のファッションセンスが見て取れる。少なくとも世間の流行とはかけ離れていた。

「というか……本当は俺に用があつたんだろ？」

しかしそんな独特なセンスの中にも品格と威厳が感じられる。少なくとも悠璃には目の前の不良たちを遥かに上回る威圧感が伝わってきた。

「……ハッ、ハクタイの虎！！」

「だからその呼び名は止めてくれよ。俺には立花 恭介たちばな きょうすけっていう名前があるんだからさ」

少年は溜息交じりに立花 恭介たちばな きょうすけと名乗った。だが悠璃の中では彼の本名よりも不良たちが探していた“ハクタイの虎”と呼ばれる人物がこのような少年であつたことが重要だつた。悠璃は虎という強い存在に例えられるほどの者なのだから、てつきり老練な凄腕のトレーナーを想像していた。しかし蓋を開けてみればこのような華奢な同年代の少年。がっかりした反面、実際見たときの衝撃も色々大きかった。

「まったく、何度追つ払つてもこうしてハクタイまでやってきて……しかも関係ない人にまで迷惑掛けてる。そろそろ本当に警察に突き出してやつてもいいんだけど？」

「くっ……」

「まあ、戦いたいんだつたら来なよ。俺が全員まとめて相手してるから」

ハクタイの虎……いや、恭介が挑発の意を込めて中指を立てる。それと同時に恭介の目の前に空中から竜のようなポケモンが降りて

きた。竜のような外見に大きな翼、尻尾の先についた赤い炎が特徴的な“かえんポケモン”のリザードンと思われるが。

（あれは、本当にリザードンなの？）

悠璃が首を傾げる。恭平のリザードンは普通のリザードンに比べて微かに大きいように思われた。いや、体の大きさなど個体差によっていくらかでも確認されている。槍玉に上げられるのはそこではない。普通のリザードンなら体の色は燃え上がる炎を彷彿とさせる橙色をしているのだが、恭平のリザードンはそこが大きく異なっていた。

「こっちはリザードンが1匹。そっちは何匹でかかって来てもいい。まあ、こいつを、俺を倒せる自信があるなら……ね」

ニッコリと微笑む恭平に合わせて闇夜を思わせる漆黒の体のリザードンが小さな火の玉を吐き出す。赤い翼を広げて相手を威嚇するその姿はまるで悪魔を彷彿させるものだった。

第4話：白い着物の乱入者（後書き）

もう1人の主人公キャラ・立花^{たちばな} 恭介^{きょうすけ}登場です。

“ハクタイの虎”なのに連れているポケモンはリザードン。
そこはあまり気にしないでください（え

第5話：恭介の流儀

「ちっ、覚えてろよ！ ハクタイの虎！！」

「……だからその呼び名は止めろって」

恭介が現れると、事は物凄いスピードで収束していった。さっきまで周囲を取り囲んでいた不良たちは恭介の黒いリザードンが翼を広げて威嚇するだけで蜘蛛の子を散らすように逃げていったのである。リーダー格の赤髪の不良が敗れた（厳密には倒されていないが）ことで戦う意思を無くしたのか、それともあれだけの数を有しておきながら恭介1人に勝てないことを悟って退いていったのか。この街に来たばかりの悠璃にはそれははつきりとはしなかった。だが、そんな彼女の心の中には明らかなわだかまりが残っていた。悠璃はひとまずガブリアスをボールに戻すと、どこか不機嫌そうな顔をして俯いた。

「割り込むようなことをしてごめんね。でも、これは俺とあいつらの問題であってね」

ふう、と一息ついた恭介が悠璃の方に振り返る。さっき不良たちと対峙していたときとは違って、穏やかな表情で話しかける。ポケモンと共に戦うときは“ハクタイの虎”と呼ばれるほどの恭平であるが、どうやらこの穏やかな立ち振る舞いが恭介の本当の姿のようだった。しかし、悠璃にはそんな恭介の声などまるで聞こえていな

い。

「どこか、怪我でもしてるの？」

何かあったのか、と不思議に思った恭介がと言つて手を差し伸べた。彼は彼なりに気にはなっていたのだ。自分と何の関係も無い、見知らぬ少女が自分のことで絡まれていたのだから。

「……ふざけるな」

すると、悠璃は突然その手を思い切り払いのける。パチン！という乾いた音が周囲に響き渡った。払いのけた際に悠璃の手が恭介の手を叩いたのである。

「えっ？」

恭介は突然のことで驚きを隠せなかった。強い力で手を弾かれたんだから当然ではあるが、などと考えているうちに手に痛みがじわりじわりと伝わってくる。見てみると叩かれた右手の甲は赤く腫れていた。何故いきなり手を叩かれたのか。恭介は正直動揺を隠せなかった。その一方で悠璃は怒りの籠った眼で恭介を睨み付ける。

「何故邪魔をしたの？ あ程度の奴らなんて私1人で全員倒せたわ！」

「邪魔……？」

物凄い剣幕で噛みついてくる悠璃。一方、邪魔と言われて、恭介は首を傾げる。恭介からしてみれば、悠璃の邪魔をする気など毛頭無い。それにこれは自分とあの不良たちの間に起きた問題であり、この街の住人たちはもちろんのこと此処に来たばかりの名前も知ら

ない少女に迷惑など掛けたくない。不本意ながら問題の当事者となつてしまった身として、無関係な人を巻き込むのは出来る限り避けなかった。だが、そんな恭介の切実な考えは悠璃には伝わらない。

「あのバトル、私は勝っていた。このままドラゴン・地面タイプと氷タイプの相性の差を完璧に覆し、圧倒的な力の差をあの赤髪の不良に思い知らせる事が出来た。より多くの相手を倒してさらに強くなることだって出来たはずよ。でもそれを阻んだのはあなたと、あなたの黒いリザードン。こんな終わり方で私の気が済むと思う？」

「まあ、思わないよね」

「それが判っているのなら、今私とポケモンバトルをしなさい。こっちはガブリアス、あなたはあの黒いリザードンでね」

「バトルなら大歓迎……と言いたいところだけど、ごめん！今は無理」

恭介はそう言いながら、悠璃の腰についているモンスターボールを指差した。

「見たところ、君の手持ちはそのガブリアス1匹。バトルを見る限り、相当鍛えられているね。しかしガブリアスは万全の態勢で戦いに臨めていたかい？ 多少疲れているようにも見えたけど……どうかな？」

「……」

恭介の問いかけにそっぽを向いて答えない悠璃。悠璃のその態度に恭介は凶星なんだな、と思つて苦笑いを浮かべる。またそんな恭介を見て悠璃はまた舌打ちをした。奇妙ななりをしながら、一目見ただけで思つていたことを平然と言い当てる恭介を悠璃はどうにも気に入らないようだった。

「俺はポケモンをバトルさせる上で一番大事なのはポケモンのコンディションだと思っている。どんなに強いポケモンでも体力が減っていたり状態異常にかかっている状態では本来の半分の力も出せないし、それは眼に見えない疲労やスタミナの消耗にもいえる。人間も寝不足だったり、病気だったりすると普通に動くのが辛くなる、それと同じ。どうせバトルするんなら、互いのポケモンが万全の状態でないとき、本気でバトルが出来ないでしょ？」

ポケモンバトルにおいて互に対等な条件を整え、何者の介入も受けずに双方の実力同士をぶつけあう。実力をぶつけあうといってもただ単調に技を繰り出すだけではない。相手の攻撃を読み、ポケモンに采配を下す。それがポケモントレーナーの役目。トレーナーと共に戦うポケモンは、自分のトレーナーの出す指示を信じ、信頼するトレーナーのために戦い、トレーナーの笑顔を望み、トレーナーの幸せを願う。野生の生き物である事を捨て、人とポケモントレーナーと共に生きていくことを決めたポケモン。そんなトレーナーとポケモンの絆。その絆の深さを確かめる1つの手段が、ポケモンバトル。

その理念の下に、ポケモンバトルを重んじる。それが“ハクタイの虎”こと立花 恭介の流儀であった。

「まあ、さっきみたいに対等な状況下じゃないときに戦えないのも駄目だけどさ」

「長い」

「そうそう、長いよね……ってえっ？」

間の抜けた顔をして首を傾げる恭介。反対に悠璃は膨れっ面をして恭介に詰め寄った。

「自分の理念を語りたいのは判ったけど、つまらないしその上冗長。もう嫌、興醒めしたわ。じゃあね“ハクタイの虎”さん？」

「だからその呼び名は止めてって！ みんな虎とか鬼とか勝手に仇名つけるから大変なんだよ色々」と

恭介は“ハクタイの虎”以外にも仇名がある。“ハクタイの虎”の次に呼ばれることが多いのが“白い着物の鬼”という仇名であった。この仇名は普段から白い着物を着用する事が多い恭介を鬼に例えたものであるが、この呼び名のせいで近所の幼稚園では毎年節分に鬼役を頼まれる。変なところで人の良い恭介が断りきれず、いつもの白い着物に鬼の面を被って幼稚園に行くと幼稚園児たちは鬼を恐れるどころか平気で豆をぶつけてくる。加減を知らない年頃なので、豆を皆思い切りぶつけてくる。そのため、この歳になつて未だに納豆が食べられない。また、虎の異名も、意外な影響を及ぼしていた。それはプロ野球で長い歴史を誇る、縦縞なエレブーズファンと勘違いされることであった。恭介はエレブーズのライバル球団、ミミロップズのファンなのに、仇名のせいで出会って間もない人にはそんな風に誤解されてしまう。それも地味に嫌だった。

「……ぶつ、変なの」

それを聞いて、悠璃が不意に吹き出した。そしてこれまで見せていた仏頂面が崩れ、微かに笑みを見せる。

「……変で結構。もう笑われるのには慣れたからさ。さて、此处で出会ったのも何かの縁。改めて名乗るね。俺の名は立花 恭介、ハクタイ高校に通う高校１年生だ」

そう言つて手を差し出す恭介。だが悠璃はまたしても、恭介の手

を取る事は無かった。呆氣に取られた恭介を背に、その場を去ろうとする悠璃。彼女の中では未だバトルを中断させられたことに対する不信感が渦巻いていた。しかしそれは単純に良い格好をしたかったためではなく、体調や疲労などポケモンの状態を案じての判断であつた判ると、その不信感はますますよく判らない感情へと変化していった。だがそれでも、恭介に借りを作ってしまった事は紛れも無い事実である。そんな時、傾いた太陽を背に歩いていた悠璃が振り返り、その場でこつちを見つめている恭介を見る。

「私は……逢沢 悠璃。この借りはいつか必ず返させてもらうから」

そう言つと、悠璃は再び前を向き直り、自分の荷物が届いているであろう新しい住処へと向かった。

そして、恭介は去りゆく彼女の背中を見えなくなるまでずっと見つめていた。

第6話：朝

「……………」

周囲がまだ朝もやに包まれる中、恭介は1人家の庭に立っていた。右肩を大きく露出させる形で寝巻の浴衣をはだけさせた恭介は両手で棒状のものをしつかりと握り締めると、掛け声と共にそれを思い切り振った。恭介が握り締めているものに朝日が反射してキラリと輝く。朝、気合を入れたときに恭介はこの家の誰よりも早起きすると、父親に貰った銘の無い日本刀の素振りをする。それが中学生の時から恭介の習慣の1つ。明らかに同年代の少年が行わないような変な習慣であった。しかし、その鍛錬が功を期しているのか、服の上からでは細身に見える恭介の身体は同年代の少年と比べるととても鍛え上げられていた。

「ふっ！ はあっ！！」

繰り返す素振りをする恭介の威勢の良い掛け声が朝の閑静な住宅街に響く。

「あら……相変わらず早いだね。キョーくん？」

後方から誰かの声が聞こえる。恭介は振り返って家の縁側を見た。

そこには寝巻がだらしなくはだけた若い女性が立っていた。女性は名を立花^{たちばな} 雅^{みやび}という。苗字から判るように立花家の人間であり、恭介より6つ年上の22歳。この家の長女である。

「おはよう、姉さん。今日も相変わらず酷い格好だね」

「キョーくんの力の籠った掛け声ですっかり眼が覚めちゃった。今や私にとってはキョーくんが一番の目覚まし時計ね」

雅の寝間着は胸元が大きくはだけており、危うく胸が見えそうになっていた。弟としては姉のだらしない格好は何とか改めてもらいたいところであるが、姉はそんな弟の言葉には耳を貸さない。それどころか、可愛い弟が朝から1人真面目に素振りをしている様に見惚れている始末。雅は俗に言う“ブラコン”という特殊な性癖を持っていた。

「あのさ、俺もう16歳だよ。いい加減キョーくんなんて呼び名は止めてよ」

「確かに年々キョーくんはカッコいい男になっていくわ。でも、私の中じゃいつまでもキョーくんは小っちゃい頃の女の子みたいに可愛いキョーくんのままよ」

「はぁ……もう好きにして」

今日も姉を矯正することが出来なかった、と溜息を付いて肩を落とす恭介。その一方で雅は落ち込む恭介の姿を見て1人悦に浸っていた。まあそんなことで何時までも落ち込んでいるわけにはいかない、と自分に言い聞かせた恭介は、両手で頬を叩いて気合を入れなおすと、再び黙々と日本刀を振り始めた。何故、恭介がこのような事をしているのか。それは今日は新学期が始まる日であるからだっ

た。

恭介の通う『ハクタイ高校』は前期と後期の2期制を採用してお

り、夏休みは9月の末まで、つまり昨日の9月30日まで続いていた。そして今日、10月1日が後期開始の日である。その外見や行動からして学校側やPTAからはあまり快く思われていない恭介であるが、何故か生徒たちからの信望は厚い。何故か自分を信じてくれる友達のために、少しでも立派にありたい。それがせめてもの恭介の努力であつた。

「そう言えば……あの人もハクタイ高校に行くのかな」
「あの人？」

剣を鞘にしまい、縁側に置いてあつたタオルで汗を拭っていた恭介はふと縁側に腰掛けてコーヒーを啜っていた雅に話しかけた。雅は興味深そうに前のめりになって恭介の話を聞く態勢を取る。恭介は雅に昨日出会った同年代の少女のことを話した。ただし明らかになつているのは彼女の名前が“逢沢 悠璃”だということと、ガブリアスを使う腕利きのトレーナーということだけだつた。

「……なるほど。この街に来たばかりの女の子と知り合つた、と」
「知り合つたというレベルじゃないよ。むしろ怒らせちゃつたというか」

「怒らせた？ こんな可愛いキョーくん相手に突然怒るなんて変わつてるのね。その子」

いきなりそんな方向に繋がる姉さんこそ変わつてるよと思つたが、此処で話を広げると面倒な事になるので、敢えて触れずにおいた。しかし、雅曰くハクタイシティのこの近くに引っ越してきたのなら地理的にハクタイ高校に通うことになるとのこと。ハクタイ高校は勉強以外にもポケモントレーナーやブリーダー、コーディネートのための授業も取り扱っているから、他の街からわざわざ通う人も多い。もしそんな強いガブリアスを連れてくるのなら、悠璃が此処

に出来ない理由はない。

「さてと、朝の鍛錬は一旦休憩。次はポケモンたちの状態チェックだ」

「あらポケモンたちのチェックもするの？ いつになく真面目ね」

「ああ、何たって今日はハクタイ高校の名物“始業式エキシビジョンバトル”の日だからね」

「そっか、キョーくんその代表に選ばれたんだよね」

恭介はボールからそれぞれポケモンを出した。ハクタイ高校にはポケモンに関するいくつかの恒例行事がある。その1つが始業式の際に行われる学生同士の学校公認のポケモンバトルだ。学生の投票によって選ばれた学生トレーナー2人が全校生徒の前でポケモンバトルをするというもの。ハクタイ高校は生徒全員がポケモンを持っているので、この行事は校内でも随一の人気を誇っていた。

今年度の後期のバトルは主に1年生の票を大量に集めた恭介と上級生の票を集めた2年生とのバトルである。基本学年が上の方がポケモンバトルの腕やレベルは高いという認識でなので、この票結果を見た教師たちは一方的な試合になるのではないかと危惧していたが“ハクタイの虎”“白い着物の鬼”といった仇名がついている恭介なら上級生とも互角に渡り合えるだろう。教師たちはそう踏んで今回のバトルにGOサインを出したのだ。そのため恭介はあくまで下に見られている事になる。

「まったく。学年が下だからってキョーくんが必ず負けるだなんて有り得ないわ」

「そうかな？」

「そうよ。だってキョーくんはおじいちゃんに私たち兄弟の中では一番大物になる、って言われたのよ」

「大物……か」

雅の言葉にしばらく考え込む様子を見せる恭介。確かに祖父にはそのような事を言われた。しかし、未だに恭介はその祖父の言葉に引っかかる場所があった。

「……今はそんなことを考えてる場合じゃないな。さあ、練習を続けよう！」

第7話：ハクタイの学生たち

「んんっ……うん。もう朝か……」

鳴り終わった目覚まし時計を片手に悠璃は時間を確認した。時計の針は7時30分を指していた。起きようと思っていた時間よりまだいぶ過ぎており、悠璃はベッドから慌てて飛び起きる。パジャマを脱ぎ、壁にかけてあったハクタイ高校の制服に袖を通すと、簡単な朝食を取った。部屋のあちこちにまだ洋服や生活用品が入ったダンボールが山積みになっている。

あの後、悠璃は自分が住むアパートの部屋に向かい、先に届いていた荷物の整理に時間を費やした。しかし、結局全部片付くわけもなく、悠璃はそのまま疲れて眠ってしまった。だが、その眠りも決して良いものではなかったようである。何故なら、昨日出会ったばかりの恭介が悠璃の夢の中に出て来たのである。夢の中の恭介は別に何をするわけでもない。ただ、延々と昨日の出来事が悠璃の夢の中でリピートされるのである。

「どうしてあいつが夢に……つくづく気に入らない」

悠璃はブツブツと愚痴をこぼしながら、髪の毛をセットする。それだけ昨日の恭介との出会いは悠璃にとっては大きな出来事であった。相性では圧倒的不利であり、周囲の人間は悠璃の負けを想像し

ただろう。しかし、そんな状態にあつて悠璃は勝利寸前まで相手を追い詰めた。相性の関係をも覆すほどの圧倒的な力の差を相手に思い知らせたのである。

だが、勝利寸前というときに割り込んだのが恭介だった。それも相手にとどめを刺すことなく逃がしてしまった。ポケモンが経験値を得るには相手を倒す（戦闘不能にする）必要がある。恭介が不良たちを追い払ってしまったので、このバトルがいわば無駄足となつてしまったのだ。悠璃からしてみれば恭介に全てを持っていかれたことになり、当然彼に良い感情は抱かない。

「……」

さらに彼女の神経を逆なでしたのが、ガブリアスの疲弊を見抜き、悠璃のバトルの申し出を断つた事。恭介からしてみれば、互いにフェアな状況で戦いたいという意思や疲れていたガブリアスを気遣つてのことだと思うが、悠璃はそう受け取らなかった。自分は明らかに下に見られた。その屈辱にも近い思いが彼女の中には渦巻いていた。

「……駄目だ。あいつの事ばかりを考えていては……それよりも、早く学校に行つて先生に挨拶しないと」

後期からハクタイ高校に編入する悠璃は通常よりも早めに行く必要があつた。悠璃は深呼吸して高ぶる気持ちを落ち着かせると、部屋を出た。

+++++

しかし、改めてハクタイシティの街中を歩いてみると、本当にポケモントレーナーの数が多い。最近手持ちのポケモンの中で1番目にボールを設置しているポケモンを外に出して一緒に歩く“連れ歩き”という行為が流行っていることもあって、よりたくさんのポケモンを見掛ける。トレーナーになりたてであろうか、初々しい小学生くらいの少年は後ろにナエトルを連れ歩き、作業服を纏った屈強な男性はゴリキーなどの腕力に自信のあるポケモンを従えていた。だが、あくまでそれはごく一部の例である。

今この街で最もよく見る光景は自分と同じ制服を着た男女がポケモンを連れている事。通常の学業だけではなく、ポケモンについての教育課程を取り入れているハクタイ高校の生徒たちだ。ハクタイ高校はシンオウ地方でも早くからポケモントレーナーの生徒はポケモンを連れて登校する事を義務付けていた。だからこそこの高校を出たトレーナーがシンオウリーグなどの大きな大会で入賞する事も少なくない。そのようなトレーナーたちがたくさん居るこの高校に通うことで、より大きな力を身につける。これは悠璃がハクタイシティに來た目的の1つであった。

「しかしハクタイ高校の名が通っているのは聞いていたけど……まさかこれほどまでとは」

悠璃は地図に従い学校に向かっているのだが、その途上たびたびハクタイ高校の学生同士の野良バトルを見掛けていた。ポケモントレーナーが互いを確かめ合う最適な行為であるバトルであるが、こゝも道端で連続して行われているとさすがに迷惑行為として取られないだろうか。悠璃は挑まれたバトルこそ受けるが、それなりに常識というものは持ち合わせているつもりだ。あまり他人に迷惑や負担を掛けるのは好きではない。だからあまり関わらずに足早に学校

に向かう事にした。急ぎの用事もあるのであまりのんびりともして
いられない。のんびりする訳にはいかないのだが、悠璃はある1つ
のバトルに気を取られていた。

「なあなあ、俺たちとちょっと遊んでくれるだけで良いんだからよ
？」

粗暴で、教養のなさそうな声が聞こえてくる。

「い、嫌です。わたし学校に行かなきゃいけないんで……」

粗暴な声に返って来るのは弱弱しい怯えたような声。見てみると
数人のハクタイ高校の男子生徒が1人のハクタイ高校の女子生徒を
取り囲んでいた。それは昨日悠璃が置かれていた状況に酷似してい
た。だが昨日と違うのは、囲まれている側に明確な闘争心があるか
どうかということ。囲まれている女子生徒はすっかり及び腰になっ
ており、今にも泣き出しそうだった。

そんな女子生徒を守ろうと単身女子生徒の前に飛び出し、唸り声
を上げている1匹のポケモン。“ダークポケモン”のヘルガーだ。
少女は弱弱しい外見の割に獰猛なポケモンを連れていた。だが彼女
自身が臆病そうなので、ヘルガーのようなポケモンは彼女に寄って
来る悪い虫を追い払う番犬のような役割を知らずと果たしているの
だろう。抵抗の構えを見せるヘルガーに対して男子生徒たちはゲラ
ゲラと笑い声を上げると、リーダーらしき男子生徒のポケモンがヘ
ルガーと対峙する。青色の大きな体を持ち、また怪獣のような外見
をした男子生徒のポケモンはヘルガーを威嚇するかのように大きな
口を開く。“おおあごポケモン”のオーダイルだ。オーダイルは水
タイプの貴重なポケモン、対してヘルガーは炎・悪タイプで、相性
ではヘルガーは不利な状況にあった。

「お前ハクタイ高校だな。だったら俺の顔は知ってるだろ？俺は今日のエキシビジョンバトルに出る。これがどういう意味か判るか？」

怯える少女に対して凄む男子生徒。あのような肩書きのようなものを振りかざすという事は、それなりの実力者であるのだろ。しかしヘルガーは一步の退かない。それどころか男子生徒たちに小さく火炎放射を吹き掛けるほどの豪胆さを備えていた。不意打ち同然の攻撃に驚いて後方に跳んで下がる男子生徒。しかし撃を受けた事で男子生徒たちの顔にも怒りの様子が現れる。

「ふざけた真似しやがって！オーダイル、アクアテールだっ！！」

水を纏ったオーダイルがヘルガーに強烈な尻尾の一撃を叩き込んだ。

第8話：気合の襷

オーダイルのアクアテールがヘルガーにクリーンヒットした。ヘルガーは元々打たれ弱いポケモンであり、特に物理攻撃に対する耐久力はかなり低い。そのため水タイプの物理技などまともに喰らってしまえば、一撃で戦闘不能にされることはまず間違いなかった。しかし、そんなポケモントレーナーたちの常識を覆すが如く、ヘルガーはオーダイルの強靱な尻尾を全身で受け止めていた。

「なっ……何でヘルガーがオーダイルの攻撃を耐えるんだよ!？」

オーダイルのトレーナーの顔に焦りの色が現れ始める。例え相性で勝っていたとしても、ポケモンに指示を出すトレーナーが平静さを失えば勝負はまだ判らなくなる。その一方でヘルガーのトレーナーである少女は口を手で隠し、驚いた様子を見せていた。どうやらヘルガーが本当にオーダイルの攻撃を耐えるとは思って居なかったようである。だがヘルガーがオーダイルの攻撃を耐えるのは当たり前のこと。ヘルガーが持っていた道具の力が働けば。

「気合の襷……」

悠璃はヘルガーが持っていたその道具を見逃さなかった。気合の襷という道具はHPが満タンの状態から一気に瀕死になるほどの大きなダメージを受けた場合、1度だけ戦闘不能になることを防ぐ事

が出来る道具である。比較的希少価値の高い道具であり、主に耐久力の低いポケモンに好んで持たせるポケモントレーナーが多い。ヘルガーはその代表格といえるポケモンだった。そして気合の襷で相手の攻撃を極限の状態で耐えたとき、最大限の力を発揮する戦法をヘルガーは持っている。オーダイルの巨大な体を、押し退けるヘルガー。体のバランスを崩し、オーダイルの胸がから空きになる。ヘルガーはその時を、その機会を見逃さなかった。

「ヘルガー、かつ、カウンター！！」

そしてがら空きになったオーダイルの鳩尾に強烈な一撃を叩き込んだ。カウンターは相手から受けた技のダメージを倍にして返す技である。そのため受けたダメージが大きいほど相手に与えるダメージは大きくなる。故に防御力の低いヘルガーが相手の物理技を気合の襷で耐え、それをカウンターを返せばどうなるか。

「オーダイルっ！？」

それはカウンター攻撃を受けたオーダイルの姿を見れば判る事であった。2 m以上あるオーダイルの大きな体が、まるで波に揉まれる木の葉のごとくあっさり飛ばされていく。それを見るだけで、オーダイルのアクアテールの攻撃力がかなり高かったこと、そしてその分カウンターで返されるダメージも相当なものだという事が伺える。

「てめえ！ 俺のオーダイルになんてことしやがるんだ！」

男子生徒は急いでオーダイルに駆け寄ると、瀕死になって動けないオーダイルの様子を見た。体中についた傷がカウンターのダメージの大きさを物語る。完全に回復するのには最低でも数時間以上の

安静が必要なようだった。さつき男子生徒は「エキシビジョンバトルに出る」などと言っていたが、これだとオーダイルは当然バトルする事など出来ない。さらに男子生徒の腰にはモンスターボールが1つ付いているだけ。どうやら手持ちのポケモンはオーダイルのみのようだった。絶対的不利な状況からバトルに勝利した、とヘルガーのトレーナーの女子生徒が理解すると、女子生徒は腰を抜かしてへなへなとへたり込むとすっかり虫の息のヘルガーをぎゅっと抱きしめた。ヘルガーは多少苦しそうであるが、驚きが混じりまだ信じられないといった顔をして抱きついてくる女子生徒の顔を見ると、小さく呆れたように溜息を付いた。

「やった……ありがとう、ヘルガー……」

ヘルガーの頭を懸命に撫でている女子生徒。しかし彼女はオーダイルをボールに戻した男子生徒が仲間を引き連れ女子生徒を取り囲もうとしていることに気付いていなかった。

「……」

無言で女子高生を見下ろす男子生徒たち。ヘルガーが唸り声を上げて追い払おうとするものの、男子生徒たちはそれを無視し続ける。そして、鬼のような形相を浮かべた男子生徒が女子生徒の胸倉を掴んで引つ張り上げては、思い切り突き飛ばす。

「きゃっ！ なっ、何ですか？」

「てめえのせいで俺のオーダイルがバトルできなくなっちゃったじゃねーか！ どう責任とってくれるんだよ！」

「そんな……私はあなたとちゃんとバトルをして勝ったのに……」
「うるせえ。黙ってる！」

男子生徒たちの手が女子生徒の体に伸びていく。女子生徒が悲鳴を上げてしゃがみこんだ時。その場に響いたのは男子生徒の悲鳴だった。

「……これ以上見苦しい真似をしないでもらえるかしら？」

女子生徒が恐る恐る眼を開けてみると、男子生徒の手を見たことのない黒髪の美少女が捻り上げていた。悠璃である。彼女は最初はバトルを遠巻きに見ていただけであつたが、少女に危害が及びそうになると判つて何時の間にか飛び出していたのであつた。悠璃は男子生徒の手を取ると、本来曲がらない方向に腕を曲げさせ、男子生徒の動きを完全に封じていた。余りの痛みに顔を歪める男子生徒。

「何だお前！」

「その手を離せ！」

仲間を助けようと悠璃の腕を掴む他の男子生徒たち。しかし、悠璃は「触るな」と冷たく言い放つと、右側に立つ男の脛に右足で思い切り蹴りを入れた。右側の男子生徒が痛がつている隙をついて、反対側の男子生徒の腹に左足で蹴りをもう一発。悠璃の攻撃を受けた2人の男子生徒たちはその場にうずくまる。これを見た周囲の男子生徒たちが怯んだ。その隙に悠璃は女子生徒の手を掴むと、一気にそこから駆け出した。悠璃としてはそんな男子生徒のことなど正直どうでもいいと思つている（腹立だしい存在ではあるが）。しかし、その一時の憤りよりも、彼女をこの状況から救い出す事が最重要だと悠璃は確信したのである。男子生徒たちの囲みから抜け出す事に成功した悠璃は、女子生徒の背中を思い切り押し出した。そして「走つて！」と思ひ切り叫ぶ。悠璃がこんな大声を出すのは久しぶりだった。しかしその分彼女が真剣であることもまた確かである。女子生徒は最初躊躇うような素振りを見せるが、悠璃が眼で「行け」

と合図すると、深々と頭を下げると、こちらを振り返ることなく走っていった。上手い具合に学校の方向に走っていつてくれた。それを確認した悠璃の体がもの凄い力に引き戻される。さっきまで腕を捻り上げていた男子生徒だ。さすがの悠璃も屈強な男子の力には敵わなかった。

「お前……見ない顔だな。どこのどいつだ？」

「……るな」

「はあ、ルナ？ 聞いたことない名前だが……」

「……その汚い手で私に触るなっ！！」

悠璃は鋭い眼つきで男子生徒を睨み付けると、掴まれていた腕を組み替えると、男子生徒を一気に投げ飛ばした。どこか柔道の背負い投げに近い投げ方で投げられた男子生徒は路地裏のゴミ捨て場まで飛んで行った。悠璃は額の汗を拭くと、残りの男子生徒たちを同じように睨みつけた。これを見た男子生徒の仲間たちは戦おうとせず、散り散りになって逃げていく。どうやら悠璃には敵わないと判断したのである。

「……はあ。無駄な時間を過ごしちゃったわ」

腕時計を見ると、時刻は既に始業時間の8時30分を回っていた。

「遅刻、確定ね」

悠璃は編入生であるにも関わらず、後期初日の学校に遅刻が確定してしまっただのである。溜息を付き、肩を落とした悠璃はとぼとぼと学校へ向かった。

第一章
終

第二章に
続く

第8話：気合の襷（後書き）

これにて一応第一章が終了となります。如何でしたでしょうか？
ちなみに次からは第二章となり、本格的にハクタイ高校のキャラクターが登場し始め、またストーリーのほうにも動きを出していく予定です。

感想・アドバイスなど常時受け付けております。

第9話・職員室（前書き）

この章でついに恭介と悠璃が激突します！

第9話：職員室

ハクタイ高校はハクタイシティの北部に位置しており、後背には広大なシンオウ地方を南北に二分するテンガン山が聳えている。そのため、ハクタイシティの中でもハクタイ高校の校舎はこの街の象徴と言える建造物の1つと言えた。ハクタイ高校の校舎は5階建てで、1階は職員室や保健室などがあり、2階から4階まではそれぞれ学生の教室がある。そして5階は学校行事が行われる事が多いホールを兼ねた室内用のポケモンバトルコロシウムが設置されていた。またポケモンのためのアスレチック施設などを校庭に備えているため、近くで見るとまた遠くから見るとは違った威圧感を感じる。そんなハクタイ高校の校庭を1人、肩で息をしながら校舎に向かって歩いていく姿があった。

「初日から遅刻なんて……ムカつく」

誰に対してもない不満をブツブツと呟きながら、悠璃は職員室へと向かった。さすがに教師となると、目上の人間。こんな悠璃でも最低限の常識や礼儀は持っているので、職員室に入る前に職員室のドアの窓で自分を顔や髪型をチェックする。自分の顔がイラついたものになっていないか。身だしなみを一通りチェックすると、悠璃はノックの後に静かに職員室のドアを開けた。職員室には数人の教師らしき人物が居たが、その中の1人が職員室に入って来た悠璃へと近づいてきた。見たところまだ20代前半と思われる若い女性であった。

「もしかしてあなたが、今日編入してくる逢沢 悠璃さん？」

「はい」

「あつ、私は1年4組を担当している浅尾^{あさお} 麻紀^{まき}。あなたの……逢沢さんの担任となります」

たどたどしい丁寧語を使う浅尾先生は何処か緊張した様子だった。浅尾先生は昨年の春に大学を卒業したばかりの勤続2年目の若手教師であり、その風貌は年下のはずの悠璃よりも幼く見える。だが、澀刺とした初々しい笑顔には、何処か好感を抱ける。

そんな先生の様子を見た悠璃はニコリと微笑むと「これから宜しくお願いします」と丁寧にお辞儀した。そんな悠璃の行動が意外だったのか焦った浅尾先生は「こつ、此方こそ不束者ですが……」と言葉の選択すら出来ておらず、悠璃は浅尾先生の様子を見て思わず吹き出してしまった。このままでは会話がまとまらない、そう危惧した悠璃は取り敢えず浅尾先生に謝る事にした。

「取り敢えず落ち着きましょう、先生。あの……今日は遅刻してしまい申し訳ありません」

「あつ、うん。私も始業式までに来ないからどうしたのかなって思ってた心配してたの。でも無事なら良かったわ。最近ハクタイシティに他の街の不良学生がよくやってくるから、教師としても大変なのよ」

浅尾先生の言う“他の街の不良学生”というのは昨日悠璃を襲った不良たちのことでまず間違いないだろう。しかし、不良たちと実際に対峙したみた上で悠璃は唯一確信出来ることがあった。それは不良たちがこの街を度々訪れる理由である。

「先生、私不良たちがこの街にやって来る理由判ります」

「えっ、そうなの？ 先生に教えてくれるかしら？」

「それはですね……」

悠璃がそう言いかけた時。突然職員室のドアが開いた。

「浅尾先生、もうすぐエキシビジョンマッチなんですけど…… あっ」
「…… あっ」

呆然と立ち尽くす悠璃と恭介。共にハクタイ高校の制服を着ているため、昨日とは違った印象を受けていた。数秒ほど無言の時間が続く。そんな中、先に口火を切ったのは恭介だった。

「やっぱり、この学校だったんだ」
「……そうだけど。何か」

ブスツとした膨れっ面で恭介に背を向ける悠璃。あれだけ勝手に夢の中に出て来ては不快感で眠りを妨害しまくった本人が目の前にいる、と思うと何故か必要以上に怒りが込み上げて来た。一方の恭介はどうして悠璃が機嫌が悪いのか、考えてみたが首を傾げたところで何も思い当たらなかった（悠璃の夢の中の話なので、当然の話であるが）。取り敢えずそっぽを向いてしまった悠璃は後回しにして、恭介は当初の役目を優先する事にした。

「あつ、先生。ちょっと報告したい事が」
「何かしら？」

「実は始業式後のエキシビジョンマッチなんですが、僕の対戦相手の人がまだ来ていないんですよ」

恭介の発した“エキシビジョンマッチ”という言葉に悠璃が反応した。そんな言葉何処かで聞いたことがある、と思った矢先。彼女はついさっきバトルに負けたオーダイル使いのハクタイ高校の学生

がそれについて言っていたのを思い出した。気の弱そうな女子高生を集団で取り囲み、言い寄っていたあの学生。相性で勝っている事をいい事に無策にも突っ込んでヘルガーのカウンターで返り討ちにされた情けない男。あいつが、あんなのが恭介とバトルをする相手だということを悠璃は感じ取った。

「……もしかして、対戦相手ってオーダイル使いの」

「そう！ その生徒よ」

「あれ、なんでそれを知っているの？」

悠璃は事の顛末を恭介と浅尾先生に話した。学生の所業を聞いた浅尾先生は天を仰ぎ溜息を付いた。あのオーダイル使いの学生は、自分のバトルの強さを鼻に掛けては女子高生に次々手を出していく卑劣漢として学校内で有名な人間であった。もちろん彼のやる事を注意しようとしたり、反発した生徒も居たが、数と力で何でもかんでも抑え付けるその生徒の前に敵う者は居なかったという、この春までは。

しかし、そんな学生に鉄槌を下したのが恭介であった。新学期の新入生歓迎のエキシビジョンマッチで立花家の人間という事で新入生代表に選ばれた恭介が在校生代表となっていた学生とバトルをしたのだ。使用ポケモンは学生がオーダイルであったのに対して、恭介の使用ポケモンはあの黒い色違いのリザードン。相性からしてみればリザードンが不利であるが、リザードンはオーダイルに1回の攻撃もさせぬままにオーダイルを戦闘不能にし、新入生代表としては異例の完勝を挙げたのだ。今、彼が多くの学生から慕われている理由の1つに、そういった段違いのレベルで繰り広げられるバトルにもあった。

「俺が居ないところでそんな事を……あの先輩も懲りないですねー」
「まったくだわ！ もう本格的な処分を考えないといけないわね」

ちなみに話したのは、オーダイル使いの学生がバトルに負け、その腹いせに相手のトレーナーであった女子高生に詰め寄っていたのでそれを助けたところまでである。本当なら背負い投げ一発で成敗したと声高々に言ってみたが、そんな事を言ったところで何の意味も無いので、止めておいた。どちらにせよ相手方に負はあるのだから言う言わないは最早関係のないことだろう。しかし、オーダイルのトレーナーが何をしたかなど、争点はそこではない。この後に控えているエキシビジョンマッチについてだ。

このエキシビジョンマッチは生徒のみならず、教師の中にも心待ちにしている者が多く、ハクタイ高校の名物となっているため外部からの観戦希望も寄せられているほどだった。そのため学校側としては来年度の入学者集めを考えると、中止などという最悪の事態は何とか避けたいところであった。

「どうでしょう……対戦相手」

悩む浅尾先生の横で恭介は涼しげな笑顔を見せる。そして先生に「良い考えがあります」と告げた。すると考えとは何なのか、と思いながら半分傍観者となっていた悠璃を指す。

「彼女、えーと確か……」

「逢沢 悠璃!」

昨日しっかりと名乗ったのに1日で忘れられている。自分はあれだけ夢の中に勝手に出て来られて参っているというのに身勝手だ、と悠璃は不満に思った。しかし、その不満も恭介の次の言葉で一気に吹き飛んでしまう。

「そうそう、逢沢さん。逢沢さんを自分の対戦相手に指名したいん

ですが、どうでしょう？

第10話：恭介VS悠璃〜初対決〜（1）

「えっ」

恭介の突然の誘いに思わず悠璃は聞き返す。首を傾げて不思議がる悠璃に恭介はニコリと微笑んだ。昨日悠璃の前でたくさんの不良相手に物怖じせず凄んでいた時の恭介からは想像も出来ないような反則的な笑顔。微かな笑みながら悠璃にはそう見えた。

「昨日言っていたよね。俺とポケモンバトルがしたいって。それなら、やろう。エキシビジョンマッチの舞台で。まあ、予想していたよりずっと早くなってしまったけど……」

そう言って、浅尾先生にエキシビジョンバトルの相手を悠璃にするように頼み込む恭介。恭介の中でエキシビジョンバトルの対戦相手は既に悠璃へと切り替わっていた。一方の浅尾先生は最初は悠璃をバトルに参加させることには消極的だった。もちろん先生はまだ悠璃のバトルを見た事が無いので悠璃の実力がどれほどの物かを知らないし、それにまだこの学校に来たばかりで不安な面もあるであろう生徒をいきなりこんなバトルに駆り出すのもどうなのか。教師という職業柄、悠璃の気持ちを汲み取らなければならなかった。しかし、浅尾先生が心配しているほど悠璃に不安は見られなかった。確かに驚きというものもあったが、いずれ恭介には再戦を申し込みたかった悠璃にとってこれは千載一遇のチャンスであった。

『こっちはリザードン1匹、何匹でもかかって来な。こいつを、俺を倒せる自信があるなら……な』

あの時、あれだけの不良トレーナーに畏怖されている恭介の姿は悠璃の脳裏に鮮明に焼きついていた。恭介の発した言葉の中に見える余裕と自信。得意気に語っている中に垣間見える風格。ポケモントレーナーの本能と言ってしまうえば変なのかもしれないが、悠璃は瞬時に恭介が強者と感じ取ったのだ。もちろん強者と対したときの本能だけではなく、バトルを邪魔されたり断られたり……はたまた夢の中に出て来て安眠妨害されたことなど不純な私怨も幾つか混じってはいるが、悠璃が恭介と戦いたいと思ったことには変わりなかった。迷った末に浅尾先生は悠璃がエキシビジョンマッチの代役としてバトルすることを許可した。提案した恭介と共に悠璃が自ら代役となることを望んだのだ。

そうなると浅尾先生に却下する理由は無。当の生徒たちがそれを望んでいるのだから。ちなみに、このエキシビジョンマッチのルールは双方使用ポケモンは1対1のシングルバトルという極めてシンプルなルールだった。ガブリアス以外にポケモンを所持していない悠璃に使用ポケモンの数はあまり関係ない話だったが、複数のポケモンを持っているポケモントレーナーからしてみれば、他のポケモンに頼る事が出来ない以上、ポケモンを出し合ったときに相性が悪ければその時点で勝負の有利不利が決まってしまう。そのため事前のポケモン選択はよく考えて行わなければならないかった。

「じゃあ、バトルフィールドまで案内するわね。」

悠璃は浅尾先生と恭介の案内でバトルが行われる5階のコロシムムに向かっていた。その途上で悠璃は恭介に対してどのように立ち

回るかを考えていた。恭介が出して来るポケモンとなるとやはりあの黒い色違いのリザードンだろうか。勝利を確実に狙ってくるなら手持ちの中でエースのポケモンを出して来るのは必然のこと。だが、いくら強いリザードンとはいえ、ドラゴンタイプのガブリアスに主力の炎タイプの技は効きにくい。机上のセオリーに則ったならばガブリアスの方が有利。しかし、その有利不利もトレーナーの技量であつさりと引っくり返ってしまうものだ。恭介ならその辺りも考えた上でバトルに望んでくる。そうになると、頭の中でバトルのことを考えるだけでは勝負を決めることなど到底出来なくなる。それならば、ガブリアスの力を、ポケモンの本能を信じて戦うのみ。そしてその力を最大限に引き出すのは自分だという事。それを心に決めていた。

「逢沢さん」

いざ対戦に臨む。そんな時、恭介が声を掛けてきた。コロシアムの構造上、恭介がコロシウムに入る場合は悠璃とは反対側の出口から出る必要があつた。悠璃は何故恭介が此処にいるのか、と疑問の色を浮かべていると、恭介が右手を出してきた。

「良いバトルをしよう」

恭介は握手を求めているようである。悠璃はそんな恭介を一瞥すると、無視してコロシウムの方へと歩いて行つた。恭介はスポーツの大会のような正々堂々としたバトルを臨んでいたようであるが、悠璃からしてみればそんな綺麗なバトルなどする気は無かつた。ただ目の前の敵を全力で倒す。その決意のもと戦うだけ。より大きな力を手にするために。

「……さて、やるか」

1人取り残された恭介は、決して不快な顔を浮かべる事なく自分の持ち場へと向かっていく。彼の中に残るのは、悠璃と同じようで違う、強いポケモントレーナーと戦える事に対することに対する喜びであつた。

+++++

コロシウムに出た悠璃と恭介の耳を劈くような歓声が響く。その歓声の大半はよく見知った恭介に向けられている事は悠璃も知っていた。このコロシウムは恭介にとっては慣れ親しんだホームのようなものであり、逆に初めてこの場に立つ悠璃からしてみればアウェーという事になる。しかし、悠璃はそんな会場の雰囲気飲まれることなく、堂々とコロシウムに立った。その立ち振る舞いには客席の学生たちからもどよめきが起こる。

「なあ、あれ誰だ？ 俺あんなカワイイ子見たこと無いんだけど！
」

「はて……俺も知らないが……エキシビジョンマッチで恭介の相手を務めるんだ。きっとそれなりの腕を持っているんだろう」

客席では2人の男子生徒が話していた。派手な金髪が目立つ長身の少年が悠璃をべた褒めし、その隣では背中まで伸びたストレートヘアの黒髪が印象的な美少年が冷静な物言いをしている。そしてその後ろに座っていた3人の女子がその話題に食いつくように話に割り込んできた。

「またあんたは女子の外見ばかり！ いい加減気持ち悪いから止めなさいよ」

「んだとお！」

「まあまあ……もうすぐバトルが始まるのでお2人とも落ち着いてください。あら？ どうされたのですか、美夏^{みか}さん」

「えっ……いや、何でもない！」

金髪の少年に突っ掛かったのは短髪が特徴的な眼鏡の少女。少年とは違い小柄なものの、強気な性格なのか物怖じすることなく少年と言い争いを始める。そんな少女を隣に座った何処と無く和を感じさせるおしとやかそうな少女が宥める。そしてその少女の隣に座っていた少女は、登校時に悠璃が助けたヘルガー使いの少女だった。

『これより本年度第3回目の学生同士によるエキシビジョンマッチを行います！ 両者、コロシウムに上がり、使用するポケモンをボールから出してください！』

審判を務める生徒の声がマイクを通してコロシウム中に響き渡る。割れんばかりの歓声がこだました。

恭介と悠璃は審判の指示に従ってモンスターボールを手にとると、コロシウムに向かって同時に投げた。

「行きなさい、ガブリアス！」

悠璃のボールから出て来たのはもちろんガブリアス。昨日は疲れが見えたので恭介にバトルを断られる羽目になったが、今日は体調は万全でいつでも全力を出して戦える状況にあった。そして、恭介

のボールからもポケモンが飛び出してくる。だが、それはあのリザードンとは違う、別のポケモンであった。真紅の体を持ち、両腕についた巨大な鍬がコロシアムのライトを浴びて煌めいていた。

「頼んだよ、ハッサム！」

ガブリアスとハッサム。2匹のポケモンが大勢の観客が見守るコロシアムの上に力強く立った。

第10話：恭介VS悠璃／初対決／（1）（後書き）

サブタイトルは『恭介VS悠璃』で続きます。

第11話：恭介VS悠璃〜初対決〜（2）

学生を始めとした観客たちの声援を受けながら対峙する悠璃と恭介。だがその歓声が続いている間、双方共に積極的に動こうとはしなかった。力量差は殆ど無く、互角と言って良いほど。しかしそれ故に軽率な動きは出来ず、一度のミスが命取りとなりかねない。そのため2人とも最初は慎重すぎると言っていいほど慎重に自分たちの眼前で起きている状況を捉えていた。

「……ハッサム？ リザードンじゃない？」

悠璃は恭介がリザードンを出して来なかった事に驚いていた。恭介のエースはリザードン。それは自分の勘違いか何かだったのだろうか、と自分の眼を疑った。しかしあの時リザードンの中に見た迫力はハッサムの中には無い。やはり十分強いとは言え、ハッサムはリザードンには及ばないということがわかる。悠璃はそれを理解すると、自分の中に行きようの無い怒りが湧き上がって来るのを感じた。

（嘗められている……！！）

あのリザードンよりも劣るポケモンを出して来た。それは自分なドリザードンを出すまでも無いと言うこと。悠璃はそう思い込んでしまっていたのである。実際はハッサムは鋼タイプを併せ持っているためガブリアスのドラゴンタイプの技には抵抗を持っているし、

スピードこそ進化前のストライクよりも劣っているとはいえ、羽を使って飛ばれてしまえば地面タイプの技も回避されてしまう。ただ、ガブリアスは虫・鋼タイプのハッサムの弱点となる炎タイプの技を覚えている。それを一発でも命中させる事が出来れば、勝負を決めることができる。もちろんそれは相手も知っているだろうから下手な動きは出来ない。それならば一撃で決めてしまうまでのこと。

私を侮辱して……絶対に、倒してやる！

「やっぱり、ガブリアスカ」

一方の恭介であるが、悠璃がガブリアスを出して来ることは知っていた。だがそのためにだけにハッサムを出していたわけではない。実は今日のバトルに備えて恭介は何日も前からハッサムと共に入念なトレーニングに取り組んできた。そこには相手が誰で来ようともどのような結果となろうともハッサムと共に戦うことを決めた恭介の意志があつた。

（まあ炎の牙は覚えていたから……火炎放射も大文字も覚えているのかな）

しかしそうは言っても虫タイプと鋼タイプ双方の弱点である炎タイプの技は怖い。炎タイプではないガブリアスの炎技なら効果が抜群の時に炎タイプの技の威力を半減させる“オッカの実”という木の実を持たせていれば耐えることも可能ではある。だが、今回恭介はハッサムにオッカの実を持たせてはいなかった。そのため一回の炎タイプの技が致命傷となりうるのだ。ガブリアスのドラゴンタイプの技の威力を半減させることを差し引いても、現時点の戦況は恭

介が圧倒的に不利と言えた。

不利だけど……全力を出して戦う、それだけだな。

2人はそんなことを考えながら対峙していた。いつまでも動かない2人に会場はシーンと静まる。だが、ガブリアスもハッサムもいつでも攻撃できる態勢を整えている事は確かな事であり、どちらが先に動いてもおかしくない状況だった。ガブリアスの足が微かに動き、地面をジリ、と踏みしめる音が閑散としたコロシウムに響く。

「ガブリアス、行きなさい！」

先に動いたのは悠璃の方だった。悠璃の指示が飛び、ガブリアスが動く。ガブリアスは両腕の鰭を翼のように広げると、高く飛び上がった。ハッサム目掛けて突っ込んでいく。ドラゴンタイプの攻撃技“ドラゴンダイブ”だ。ドラゴンダイブは当たりにくいものの同じドラゴンタイプの技であるドラゴンクローと比べて威力が高く、たまに相手を怯ませて動きを止める事も出来る。悠璃はスピードで勝っているという点から、ダメージよりもハッサムを怯ませて動きを制限することに賭けたのだ。

「シザークロス」

しかし恭介は慌てる事なくハッサムに“シザークロス”を指示する。ガブリアスのドラゴンダイブが炸裂し、それを受けたハッサムの周辺には轟音と共に土煙が舞い上がる。鋼タイプを含んでいるものの、ただでさえ高いガブリアスの攻撃力があのスピードによって強化されている。それを鑑みればハッサムのダメージは大きいのだ。

が。ハッサムは鋼の腕を交差させてガブリアスの攻撃を受け止めていた。本来シザークロスは虫タイプの物理攻撃技で、多くの虫ポケモンが使用する強力な技である。だが恭介はこの技を防御のために使用した。ハッサムの鋼鉄の腕を交差させる事で即席の盾を作り出したのだ。攻撃を受け止められたガブリアスは、地面にしっかりと足をつけてハッサムの守りを崩そうとする。しかし、ハッサムはガブリアスの攻撃を受け止めるところか、逆に猛烈な力を発してガブリアスを押し返したのだ。スピードでは確かにガブリアスの方が一枚上手ではあるが、その分ハッサムはパワーでガブリアスを上回っていた。力負けしたガブリアスが後方に飛びずさる。ハッサムはそれを追う態勢を取る。

「ガブリアス、火炎放射よ！」

ガブリアスは退がりながらも火炎放射を放ってきた。態勢を崩したところで追い討ちをかけてくるハッサムに備えてのものだった。

「影分身で回避するんだ」

しかしハッサムは瞬時に自分の分身を作り出しては、火炎放射をいとも簡単に回避する。火炎放射を浴びた分身2匹は消えてしまうものの、それ以外の本体を含んだ12匹のハッサムは円状に広がってガブリアスを取り囲んだ。“影分身”は本来分身を作り出して回避率を上げるための技である。しかし恭介はシザークロスと同様に影分身を本来の効果と別の用途で使用した。分身とはいえ、複数匹のポケモンを相手にしている。そのような錯覚を植えつけさせるのだ。そして恭介の思惑通り、分身したハッサムたちはそのまま高速で動くことで、たくさんのハッサムが攻撃の機会を虎視眈々と狙っているという錯覚をガブリアスに植えつけることに成功した。ガブリアスにはハッサムの分身が全て自分に迫ってくるかのように見え

ていた。これにはさすがのガブリアスも動揺せざるを得ない。12匹のハッサムが一斉に動いて、バレットパンチを四方八方から放ってくる、というありもしない幻影に騙されていた。

「ガブリアス、落ち着いて！」

そんな中、悠璃の呼びかけが届いた。トレーナーの張りのある力強い声にガブリアスは眼を見開いた。さっきまで近づいていた12匹のハッサムはまだその場を動いていない。ガブリアスはハッサムのさっきまでの行動が嘘であると思抜いたのだ。正気を取り戻したガブリアスに悠璃は続けて指示を出す。

「相手は影分身を使ってこちらを謀ろうとしているわ！ そんな卑怯な戦法に騙されては駄目よ！」

「ひ、卑怯って……」

恭介のそんな泣き言も悠璃には聞こえない。悠璃は本物を見分ける策を知っていた。

「ガブリアス、地震よ！」

ガブリアスは指示を受けて頷くと、咆哮と共に大地を大きく揺るがした。地震は周囲にいるポケモンを敵味方関係なく全員に攻撃する技。しかし地面タイプの技の特性上宙に浮いているポケモンには一切当たらないし、翼を持っているポケモンには空中に逃げられることであっさり攻撃を避けられてしまう。威力も高く使い勝手の良い技なのだが、はつきりとした欠点も見えている。そのため上級者同士の対戦となると通用しない事も多いのだ。

「ガブリアス、左前方のハッサムが本物よ！」

ガブリアスが左前方に立つハッサムに火炎放射を放った。他の分身のハッサムと違ってそのハッサムはジャンプして炎を回避する。悠璃が言ったとおりこのハッサムが本物だったのだ。火炎放射を飛び上がって回避したハッサムだったが、ガブリアスはその動きを見たと上でハッサムの上方に陣取る。そして上からハッサムの頭にドラゴンクローを叩き込んだ。頭部に一撃を受けたハッサムはそのまま空中から地面に叩き落とされる。マツハの速度で飛行するガブリアスのスピードだからこそ成せる技であった。

「……どうやって見破った？」

恭介が興味深げに尋ねてくる。バトル中なのに緊張感のない男だと悠璃は思った。それでも、恭介の質問には答えたが。

「地震はその場にいるポケモン全体に攻撃を仕掛ける技。例えば分身していたとしても、コロシアム全体に攻撃が及ぶなら、分身は意味を為さない」

「なるほど。それで地震を回避するために分身とは違う動きをしたハッサムを本体と見破った、か」

ガブリアスが地震を放つ瞬間、確かに分身の中で1匹のハッサムが地震を回避しようと動いていた。悠璃はそれを見逃さなかったため、今回の反撃の糸口は生まれた。もしあそこでドラゴンクローではなく火炎放射などの炎タイプの技を放てていれば勝ち間違いなかったかもしれない。しかし、あそこでどんな攻撃でも叩き込んで相手にダメージを与える事。悠璃はそれを最優先にした。

「……良いね。面白い」

地面に叩き落されたとはいえどもハツサムのダメージはまだ少ない。バトルはどのような方向に進むのか、それは2人にも予測は出来なかった。

第12話：恭介VS悠璃〜初対決〜（3）

先に一撃を加えたのは悠璃のガブリアスだった。しかし、一撃を加えたとはいえ、鋼タイプのハッサム相手にはかすり傷程度のダメージである。ハッサムは再度身構えると、今度はさっきまでとは違って変わって積極的に攻勢に転じるようになった。スピードでは負けていてもパワーでは勝っている。それならスピードでも相手を凌駕すれば良いこと。恭介の狙いは緻密そうで実は単純なものだった。

「ガブリアス、避けなさい！」

「無駄だ。バレットパンチ」

ガブリアスはハッサムが動いた時を見計らって攻撃を回避しようとする。しかし、回避のために身構えたその瞬間にガブリアスの胸にはハッサムの重い一撃が炸裂する。ハッサムは進化前のストライクと比べて身軽ではなくなったものの、ストライク時代の名残が相手よりも素早く攻撃することが出来る技、いわゆる先制技というものを覚えていた。今の攻撃は“バレットパンチ”という技で弾丸のように連続でパンチを浴びせかけるといって鋼タイプの先制技であり、ハッサム以外にもメタグロスやルカリオのような鋼タイプからカイリキーやエビワラーといった格闘タイプのポケモンが主に習得する。この技の威力自体は他の先制技同様低く、ドラゴンタイプの中でも耐久力が高めなガブリアスにはさほど大きなダメージにはならない

だろう。

しかし、ハッサムのバレットパンチはその他のポケモンが使用するバレットパンチとはまた違っていた。ハッサムがバレットパンチの技タイプである鋼タイプと共通していたため威力が上がったというのもあるが、一番の効果はハッサムの特性にあった。ハッサムには特性が2つ確認されている。1つは“虫の知らせ”という特性で、体力が減ったとき虫タイプの技の威力が飛躍的に上昇するというものである。そしてもう1つの特性が威力の低い技の威力を上昇させるという“テクニシャン”という特性であり、恭介のハッサムの特性はテクニシャンだった。テクニシャンの効果で強化されたバレットパンチを何度も鳩尾に打ち込まれたガブリアスは苦しそうに唸り声を上げながら前のめりになる。

「ガブリアス、至近距離から火炎放射！」

だが、バレットパンチをハッサムが使用した事によってガブリアスとハッサムの間合いは大きく詰められていた。悠璃はハッサムが一気に間合いを詰めてきた機会を見逃さず、ガブリアスに火炎放射を放たせる。ハッサムは物理攻撃を得意とするポケモンであるから、攻撃をするためにはどうしてもガブリアスに接近しないといけない。攻撃のために接近すると、どうしても守りが疎かになってしまう。その防御が疎かになった時を狙って弱点の炎技を至近距離で撃つ。それを当てる事が出来れば炎を苦手とするハッサムを一気に倒すことが出来るのだ。

「ハッサムー！」

（決まった……！）

灼熱の炎に包まれていくハッサム。悠璃の口元が微かに緩み、彼

女は勝ちを確信した。しかし、その確信は脆くも崩れ去る。炎に包まれたハッサムは倒れるどころか、その炎を纏ったまま高速で回転し始める。そして瞬く間に真紅の竜巻となってガブリアスから離れて行った。まだハッサムを倒せていない。それを確信した悠璃は再び火炎放射で攻撃することに決めた。万が一今の攻撃を耐えられていたとしても、2発目の火炎放射がハッサムに届いていれば戦闘不能になるだろう。ハッサムは今だ赤い竜巻となって高速で回転したままと特殊な状況にあるので、次の行動は読めなかった。だが、恭介も次の火炎放射を喰らってしまったえばハッサムが耐え切れずに倒れてしまうことなど当然判っている。そのためハッサムは距離をとって火炎放射の射程外まで逃げていくだろう。悠璃はそれを読んでかガブリアス自らハッサムに接近を試みた。相手の攻撃が届かないギリギリの場所まで間合いを詰め、相手が下がったらそれを追う。ハッサムを火炎放射で確実に仕留められる距離を保ち、徐々に追い詰める。そして逃げ切れなくなったところで火炎放射を浴びせかけるのだ。

「ガブリアス、ハッサムに近づいて！」

ガブリアスが動き出し、ハッサムとの距離を急速に詰めていく。いつでも火炎放射を放てるように口の中に炎のエネルギーを充満させながら。

（ガブリアスは火炎放射をいつでも撃てる状態にあるわ。さあ、逃げなさい）

悠璃の思惑通りガブリアスとハッサムの距離が段々と詰まってく。その状況を無言で見守っていた恭介が口を開いた。

「正面から突っ込んできた……なら、こっちも突っ込ませてもらうかな！」

恭介の指示の下、なんとハッサムは高速回転したままガブリアスに突っ込んできた。会場にどよめきが起こったが、それよりも想定外だったのは悠璃の方だった。

（えっ……突っ込んで……進んで火炎放射の餌食になると言うの？）

悠璃は自分の中に焦りが広がっていくのを感じた。もしこのままガブリアスとハッサムが接近してしまつたら接近戦が得意なハッサムのペースの持ち込まれかねない。さらに此方が火炎放射を撃とうとしても、撃つ前にもう一度バレットパンチを喰らつてしまい、そのまま畳み掛けられてしまえば敗色が一気に濃厚となり逆に勝利は絶望的なものになる。それだけは絶対に避けなければならない。そう判断した悠璃はガブリアスをその場で止めさせると、突っ込んでくるハッサムにそのまま火炎放射を浴びせかけた。

再び炎に包まれていくハッサム。攻撃は命中したように見えたと、何分手ごたえもあった。しかし、ハッサムはまだ倒れてなどいなかった。いや倒れるどころかその回転はさらに勢いを増しており、ハッサムはガブリアスの火炎放射をまるで布を裁つかのように切り裂きながらガブリアスとの距離を詰めていく。

「火炎放射が効いていないなんて……化け物なの？」

「化け物じゃないよ、ハッサムは立派なポケモンさ！ まあ、今そんなことどうでも良いか」

恭介にはまだ途中に軽口を挟む余裕があつた。その証拠に職員室で悠璃に見せたような笑顔を見せてくる。悠璃はそれに何とも言え

ない感情を抱く。だが、その笑顔も一時のものであり、すぐにバトルに集中する真剣な顔に戻った。

「ハッサム、メタルクローだ」

回転するハッサムの両腕の鉄の部分が激しい光に包まれていく。それに合わせて真紅のハッサムの体がさらに眩く輝いていった。メタルクローは鋼タイプの攻撃技で威力こそバレットパンチと同じように低いが、威力が低い分テクニシャンの恩恵を受けられる。そのため威力は通常より高くなっているのだが……ただテクニシャンの効果だけが働いているわけではない。悠璃は激しく輝いているハッサムの鉄を見て、本能的ではあるが只ならぬ力を感じた。

「ガブリアス、避けてっ!!」

ガブリアスは悠璃の指示を受けて咄嗟に左に跳んだ。攻撃の目標を失ったハッサムのメタルクローがコロシアムの地面に炸裂した。ハッサムの攻撃が命中したと同時に大きな爆発がコロシアム上に起こる。なんとメタルクローの一撃でコロシアムの地面が大きく抉られていたのだ。いくらコロシアムの上が土で作られていたとは言え、とてつもない大きな力で削り取られたような地面を見て悠璃は思わず息を飲んだ。あの攻撃を受けていればガブリアスも一たまりも無かったであろう。

「さすがにメタルクローじゃ隙が大きすぎたかな……」

「……なんで」

「？」

「なんで、火炎放射を2回も浴びたのにハッサムは大きなダメージを追っていないのよ」

「ああ、あれね。実は火炎放射は当たっているようで、当たってい

なかったんだよ」

火炎放射がハッサムに当たっていた、それは恭介も認めた。だが、悠璃はあれで何故ハッサムがダメージを受けていなかったのか。それが理解できなかった。ただ完全に理解できなかったといっても、ハッサムが何らかの対策を瞬時に行っていたから火炎放射のダメージを少なくする事が出来たということは判っていたが。

「火炎放射を受けた時、ハッサムは高速で回転していただろ？ あれはハッサムの“剣の舞”だ。高速で回転して闘いの舞を踊る事で攻撃力を上げる技なんだけど、ああやって回転する事で実は防御にも応用出来る技だね。炎タイプの技が来たときはあれで炎攻撃を弾き返してダメージを最小限に抑えるようにしているんだ。炎タイプの技があればハッサムなんて、つてトレーナーも多いからね。そして……剣の舞で攻撃力が高まったと同時に回転する勢いを利用してメタルクローを使ったんだ」

コロシアムの地面をも大きく削るあのメタルクローの威力は剣の舞と回転の勢いを利用したためのものであった。だがいくら攻撃力を高める工夫をしていたとはいえ、それだけの力を出すにはポケモン本来の力もその分強いということを表していた。もちろん、恭介とハッサムが今のこの立ち回りを実現するためにどれだけ厳しいトレーニングをこなして来たということも。

「さてと……バトルを続けるか。ポケモンたちは俺たちの会話で中断している時間も惜しいほどバトルしたいらしい」

「……ああ」

ガブリアスとハッサムは正面からぶつかり合った。今度は距離を取る事なくドラゴンクローとメタルクローの応酬が繰り広げられる。2匹の立ち回りは力強くもしなやかで、激しくも流麗。まるでそれは刀を携えた侍が命を掛けて殺陣を行っている。そのようにも見えていた。

第12話：恭介VS悠璃／初対決／（3）（後書き）

剣の舞で火炎放射を弾き返すという描写をした（ジヨウト編：サトシのヒノアラシVSツクシのストライク）アニメスタッフには感謝感激雨霰です。

現実に出来ればいいのに……ってそれじゃチートですね。

第13話：恭介VS悠璃〜初対決〜（4）

恭介と悠璃のバトルが始まって早くも15分以上が経過していた。互いに全力を出して戦っていたようであるが、今だに決定打となる技を双方出せておらず、勝負を決めるには至っていなかった。ダメージ的にはガブリアスの方が大きかったのでどちらかというと恭介の方が有利と言える。しかし、ガブリアスにはまだ炎タイプの技が残っており、剣の舞で火炎放射を防げたとはいえ、1つの油断と判断ミスで簡単に有利不利はひっくり返る。バトルはそんな状況下にあった。

「ハッサム、シザークロス」

「ガブリアス、炎の牙！」

現に遠距離攻撃が通じないと知った悠璃は炎の牙による接近戦へと切り替えてきた。

これまではハッサムの攻撃を受けないために距離をとったバトルをしていたが、ガブリアスも本来は接近戦を得意とするポケモンである。例えばパワーでは敵わなかったとしてもハッサムに接近戦で負ける謂れはなかった。炎を纏った牙を閃かせてハッサムに喰らい付こうとするガブリアス。

対するハッサムは両腕の鋏を使い、ガブリアスの頭についている2つの突起を鋏んでガブリアスを近づけまいとする。突起部分を挟まれ、逆に抑え込まれてしまう。ガブリアスは自分から頭を大きく振るってしがみ付いて来るハッサムを離すと、砂嵐を起こしてその中に消えるようにして身を隠した。

「鋼タイプのハッサムは砂嵐のダメージを受けない。やはり砂隠れだな」

恭介は昨日の悠璃のバトルを見ていたので、悠璃の戦法ははつきりと把握している。砂隠れで回避率を上げて、相手がガブリアスを見失っている間に奇襲攻撃を仕掛ける。恐らく恭介がガブリアスの動向を確かめている間、不意を突く形で火炎放射なり炎の牙で攻撃をするのだろう。しかし、この戦法は恭介には、正確に言えばハッサムには通用しない。ハッサムは砂のダメージを受けない事を良い事に砂嵐が吹き荒れる中に自ら突っ込んでいく。そして砂嵐を真っ二つに切り裂くかのように刃を振るう。すると砂の中からガブリアスが弾き出される形で飛び出してきた。

「ガブリアス！……今のは、燕返し」

「その通り。この技は相手に必ず命中するからね。ガブリアスの特性を生かした戦法は通じない」

「くっ……」

“燕返し”もまた特性のテクニシャンの効果を受け、威力は通常より強くなっている。飛行タイプを持たないために威力は進化前のストライクより低いものの、相手に必ず命中することを考えれば十分すぎる威力だった。

（火炎放射は剣の舞で封じられ、炎の牙は届かない。砂隠れを使った戦法も燕返しを使われてしまえば……）

弱点を突いてしまえば勝てる相手。そう考えていた悠璃は自分の見通しが甘かった事を改めて思い知らされた。昨日戦った不良たちが恭介のことを“ハクタイの虎”などと呼んで恐れていたが、そん

なものはまやかしにすぎない。恭介に負けたトレーナーが勝手に呼んでいるだけだ。そう思っただけなら何ら気にしてはいなかった。だが、こうして対峙してみると、あらゆる対抗手段を封じられ、一歩上の行動をしてくる恭介がより大きな存在に思えた。途端に自分の脳裏に浮かぶのはこのまま一矢報いる事もならず負ける自分の姿。悠璃は俯いて顔を何度も横に振って悪い幻想を振り払う。こんな幻想が出現するという事は、自分が追い詰められている。それは明らか事だった。このまま自分は敗れるだけなのか。そんな考えが悠璃の頭の中を過ぎった。

(……いや、まだだ。まだ負けを認めてしまっわけにはいかない)

ここでトレーナーである自分が諦めてしまったら懸命に戦っているガブリアスはどうなってしまうのか。まだ勝負は決まっていけないのに、負けを覚悟してしまっただけなのか。まだ自分は一生弱く力の無いまま。何のために自分はこのハクタイシティまでやってきたのか。悠璃は決意の眼差しを取り戻し、長く美しい黒髪をかき上げて反対側に立っている恭介を睨みつける。それを見た恭介からふと笑みがこぼれた。俯いてしまっただけで悠璃を見て戦意を失ったのか、と思っただけに付けていた恭介であるが、悠璃はまだ戦えるという事が判るとそれが嬉しくて堪らなかった。

「ガブリアス、連続攻撃で畳み掛けて！」

悠璃は考えた。ガブリアスにあつてハッサムにないものは何かを。そしてそれはスピードであることを導き出した。ガブリアスはハッサムに一気に接近すると、ドラゴンクローを連続でハッサムに叩き込んだ。鋼タイプのハッサムにはドラゴンクローでは大したダメージを与えられない。しかし悠璃が期待していたのはダメージではない。連続でハッサムに攻撃を打ち込むことでハッサムの反撃を封じ

るのだ。

「攻撃が激しいな……ハッサム、一旦退がるんだ」

「させない！」

ハッサムは恭介の指示に従い、翼を開いてその場から飛び去ろうとする。だがガブリアスの押し寄せる激流のような連続攻撃を受けてハッサムはその場から動く事が出来ないようだった。防御どころか攻撃も移動も出来なくなるほどの激しい攻撃に鋼タイプのハッサムの体にも（特にドラゴンクローの間合いとなる上半身に）次第に傷が目立ち始める。このままではガブリアスの攻撃を防ぐ手立ては見出せない。だが恭介は意外な場所に活路を見出した。ハッサムは何とガブリアスのドラゴンクローが届かないガブリアスの足元に屈む形を取ったのだ。

「ガブリアス、飛び上がって！」

足を狙われる事を警戒したガブリアスが上空に飛び上がる。しかし逆にそれが恭介の狙いでもあった。

「今だ、羽休めで体力を回復させるんだ！」

地上に降りたハッサムが体を休める。“羽休め”は羽を持つポケモンのみが使える体力を一定量回復させる技である。

「回復をさせないで、すぐに攻撃に移るのよ！」

恭介の思い通りに事を運ばれたと把握した悠璃はすぐにハッサムの回復作業を妨害すべく、ガブリアスを地上へ降下させる。ドラゴンダイブを使って勢いよく降下するガブリアス。ハッサムの回復は

まだ終わらないようで、ガブリアスそのままハッサムに向かって突っ込んでいった。轟音と共に舞い上がる土煙。だがその中に見える影は1つだけだった。それはやはりガブリアスの影のみであって、ハッサムの姿はそこにはない。悠璃は周囲を見回してハッサムを探すものの、見当たらない。すると、ガブリアスの後ろに上空から何かが落ちて来た。ガブリアスは振り向きざまにドラゴンクロウを放つが、そこには誰もいない。悠璃が勘違いなのか、と首を傾げるとガブリアスの背後から黒い影が襲い掛かる。いつの間にかにガブリアスの背後に回りこんだハッサムであった。

「ガブリアス、振り払って！」

ガブリアスは体を揺らしてしがみついたハッサムを振り払おうとした。しかし、ガブリアスが体を動かせば動かすほど、ハッサムの両腕の缺がガブリアスの体に食い込むので、ガブリアスの体にはその度に激痛が走るのである。ガブリアスがハッサムを引き離すのに必死になっている間、ハッサムは必死にしがみ付きながら口を大きく開く。そしてそのままガブリアスの首筋に思い切り噛み付いた。

「そろそろ決めさせてもらうよ。ハッサム、虫食いだ!!」

ハッサムの“虫食い”攻撃がガブリアスに炸裂した。虫食いは虫タイプの技で相手が木の実を持っていた場合はその木の実を奪って食べるという特殊な技で、木の実によつてはその効果を得ることが出来る。特殊な効果があるので、やはり威力こそは低めであるが、テクニシヤンの影響でその威力はハッサムの攻撃技で最強の威力を誇るのだ。全身に食いつかれて、悠璃が持たせていたヤチエの実を食べ荒らすハッサム。ハッサムは氷タイプの技が弱点ではないので、ヤチエの実の効果は得られない。しかし、今期待したのはその効果ではなくガブリアスからヤチエの実を奪い取ったという事であった。

「ガブリアス、しっかりして！」

悠璃の呼びかけにふらつきながら立ち上がるガブリアス。虫食い攻撃のダメージは見た目以上に凄まじく、ガブリアスはもはや虫の息といったところだった。

「ガブリアスの持ち物はやっぱりヤチエの実だったか……虫食いを使っておいて正解だったね」

「どういう事……？」

「どういう事かって？ こういう事さ。なあ、ハッサム」

恭介がパチンと指を鳴らした。この指鳴らしに何の意味があるのだろうか、と思っていた悠璃はハッサムの右腕の鋏の中に何かが隠されている事に気が付いた。ハッサムは恭介の合図に従って、鋏の中に隠していたものを悠璃とガブリアスに見せ付ける。ハッサムの鋏の中に隠されていたもの。それはガブリアスが持っていたものと同じヤチエの実だった。

「これが、勝利への決め手さ」

第14話：恭介VS悠璃／初対決（5）

「ヤチエの実……？ ハッサムはヤチエの実は使えないはず」

悠璃はそう言って首を傾げた。確かにヤチエの実は効果が抜群の時に氷タイプの技の威力を半減させる効果がある。だがハッサムの弱点は炎タイプだけなので、このヤチエの実の効果は働かないのだ。そのため、ただ持たせているだけでは何の意味も成さない。

「そう。ただ持たせているだけでは使えない……ただ持たせているだけならね」

恭介が右手を上げる。すると、その合図と共にハッサムの鉄の中に握られていたヤチエの実が輝き始めたのだ。何が始まるのか、と身構える悠璃とガブリアス。彼女たちの目の前でヤチエの実は青い光となってハッサムの中に注ぎ込まれていく。その途端、仄かに流れ始めるのはこの時期にしてはまだ早いのではないかという冷気。よく見てみるとハッサムの両腕の真紅の鉄が徐々に青く変色していく。

「これは……一体……」

「これは“自然の恵み”という技さ。持っている木の实から力を得ることでその木の实が持っているタイプの技を使うことが出来る」

ハッサムが青く変色した鉄を地面に思い切り叩き付ける。叩き付

けた地面からは巨大な氷柱が現れた。これを見る限り、ハッサムがヤチエの実から得たタイプは氷。ガブリアスが最も苦手とするタイプの技である。恭介はバトルに臨むにあたってハッサムの持ち物をヤチエの実へと変えていたのだった。悠璃がエキシビジョンマッチの相手になる事になり、悠璃の唯一の手持ちポケモン・ガブリアスがこうしてバトルに出て来ることを読んで。ちなみにこの攻撃にもハッサムの特性・テクニシヤンの効果が働くため、その威力はかなり高くなっているのだ。ただ威力も高く、持っている木の実を変えることで相手の弱点を的確に狙うことが出来るこの攻撃も、持っている木の実を消費して発動するため、故に実際に使えるのは一度だけということになる。この一度だけの技を使うために恭介はガブリアスの防ぐ手立てをことごとく潰して来た。弱点とする氷タイプの技の威力を弱めるためにヤチエの実を持っているのではないかと、ということ警戒して先の虫食いで相手の木の実を奪う。また避けられることを防ぐためにいきなりこの技を使うのではなく、相手が疲弊しきって避けられないようにしてから使う。そして万が一耐えられて倒す機会を失わないために相手の体力を予め削っておくということ。考えられる対策は全て行っておいた。だからこそ、今ここで恭介はこのとっておきの技を使わせるのである。このバトルに決着をつけるために。

「さあ、これで終わらせるか。ハッサム」

「させない。そんな攻撃！」

ハッサムは全身に冷気を纏ってガブリアス目掛けて突進してくる。ガブリアスはそんなハッサムに正面から火炎放射を浴びせかけた。一瞬ハッサムに炎が命中したように見えるが、ハッサムは影分身でそれを余裕で回避する。電光石火のスピードでガブリアスの前に躍り出るハッサム。ガブリアスの前に立つと同時に氷の鍬が振り上げられていた。ガブリアスは間一髪、それをジャンプすることで回避

した。確かにガブリアスは大きなダメージを受けているし、スタミナもかなり消費している。しかしそれでもスピードではハッサムをまだ上回っているから勝機はある。悠璃はそれを信じて疑わなかった。だが、攻撃を外し、地面を攻撃したはずのハッサムはいつの間にかにガブリアスの上を取っていたのである。冷気の込められた鍔をハッサムが振り下ろす。上を取られたガブリアスの頭にハッサムの一撃が炸裂した。

「ガブリアス!!」

上から叩き落される形で攻撃を受けたガブリアスは、空中で何とか体勢を整えると、そのまま足で着地した。攻撃の勢いがよほど強かったのか、着地するときドスン! という大きな音がコロシアム中に響く。それと同時に微かにガブリアスの顔が歪み、ガブリアスはそのまま右ひざを付ける。その瞬間を恭介は見逃さなかった。ガブリアスの体に何かしらの異常が起きたことを。ハッサムはガブリアスがまだ倒れていないことを確認すると、とどめとばかりにもう一度ガブリアスに攻撃を仕掛けようとする。自然の恵みの効果はまだ続いていたのだ。

「駄目だ! ハッサム、攻撃を止める!!」

恭介の声が響く。それはまるで落雷を思わせるほど大きく、普段あまり大きな声を出さない恭介がそんな声を出したとあってハッサムも驚きを隠せないようであった。また対峙していた悠璃も恭介の様子を理解できずにいた。ハッサムは指示に従って攻撃を中断する。それと同時に動きも止めて恭介の判断が下されるのを待っていた。だが、その瞬間がハッサムにとって命取りとなってしまうていた。何故ならガブリアスの口の中には炎のエネルギーが駆け巡っており、既に炎技を放てる状態にあったからである。そしてハッサムはまだ

それに気づいていなかった。

- 勝負は最後まで判らない。油断1つで結果はいかようにも変わる。それはポケモンバトルに限ったことではないが、勝負に携わる者にしてみれば鉄則とも言える事であった。

「ハッサム!!」

ガブリアスの炎技が至近距離で炸裂する。火炎放射よりも強力な炎タイプの技“大文字”であった。ガブリアスは火炎放射や炎の牙だけではなく大文字も使えたが、大文字は強力な分連発することが出来ず、避けられることも多かった。悠璃は敢えて使わずに居た。だが、ハッサムの動きが止まったことで、攻撃の機会を見出したガブリアスが自らの判断で使ったのであった。灼熱の炎に包まれながら、吹き飛ばされるハッサム。コロシウムにその鋼の体が崩れ落ちる。羽休めで体力を回復させたとはいえ、炎タイプの中でも最強クラスの技をともに受けてしまった。その影響は大きく、ハッサムはもはや立ち上がることもすらままならなかったのである。

「……はっ、ハッサム、戦闘不能! よって勝者は……えっと……逢沢 悠璃さんとガブリアス!!」

バトルが終わった。審判のジャッジが下ったことでコロシウム中に大きな歓声が響く。単純に勝敗を喜んだり悲しんだりする者も居れば、激戦を繰り広げた恭介と悠璃を純粹に褒め称える声もあった。しかし、勝ったにも関わらず悠璃の顔は冴えなかった。

「私は……勝った……? でも……こんなの……」

悠璃はガブリアスをボールに戻すと、そのまま何も言わずにコロシムから出て行ってしまった。恭介は倒れたハッサムを抱きかかえてすぐに元気の欠片を与えた。戦闘不能となって気を失っていたハッサムが目を覚ます。ハッサムは周囲の状況から自分が負けたことを察すると、恭介に済まなかったと謝った。恭介はハッサムに謝る必要はない、と諭すとハッサムをボールに戻した。

「逢沢さん……」

恭介は悠璃の後を追った。此処を去るときの悠璃の様子が何処かおかしかったのが気になっていた。

+++++

悠璃は小走りで階段を駆け下りていた。何故自分がこのような場所に居るのかもはっきりとは判らない。しかし、悠璃の中には言葉に出来ないような複雑な感情が渦巻いていた。

「逢沢さん！」

上から恭介が悠璃を呼ぶ声が聞こえてくる。それを聞いて悠璃は一度立ち止まると今度は早歩きで下に降りて行く。しかし恭介の足は速く悠璃はあつという間に追いつかれてしまった。待ってくれ、と息を切らしながら悠璃の手を掴む恭介。だが、悠璃はその手を思い切り払いのけた。驚いた顔を見せる恭介を悠璃はその鋭い眼でジロリと睨み付けた。悠璃のその眼は微かに赤く染まっている。

「話を聞いてほしいんだ」

「……何であんな負け方をしたの」

「……」

「あんな勝ち方でこっちの気が済むと思っているの？ ふざけないでよ!!」

悠璃はさっきのバトルのことを思い出していた。それはガブリアスが自然の恵みを喰らって空中から地面に叩き落されたときのことである。あの時点ではガブリアスがまだ倒れていなかったのだから、あの時点ではガブリアスが倒れていなかったのは誰の目にも明らかだったのに、恭介はハッサムに攻撃をやめさせた。恭介からしてみれば思うところがある。何かあったのかもしれない。だが、バトルの相手である悠璃からしてみれば情けをかけられたものと見られても仕方のないことである。

「そればかりは返す言葉がない。素直に謝るよ……しかしあの時は」
「実際に戦っていてあなたは凄く強いトレーナーだとは思ってたわ。それは認める。でも……あんな風に中途半端に花を持たされるようなバトルはただ不快でしかないの！」

それを言い残して悠璃はまた1人階段を下りて行った。恭介はまだ言い残したことがあったので、悠璃を呼び止めようとしたが悠璃

は一度も恭介の方を振り返ることもなく去って行ってしまった。恭介は彼女を心配すると共にあのバトルで様子のおかしかったガブリアスのことも気がかりであった。さっきの言動からして悠璃はガブリアスの異変にはまだ気がついていないのだろうか。あまり長く放置してしまうと、ガブリアスの足に影響が出てしまうかもしれない。つた。

「はあっ……はあっ……」

一方、恭介から逃げるようにして来た悠璃は1階の適当な部屋に駆け込んだ。真っ白なベッドが並び、どこか薬品のような匂いがする。ここは保健室のようだった。保健室の先生はおらず、また生徒がベッドで寝ていたりする形跡もない。今この部屋には悠璃1人だけがあった。悠璃は何も考えず適当なベッドに飛び込んだ。そして頭から布団をかぶって潜る。

「……あのような事を言ってしまったけど……どちらにせよ私は負けていた……」

布団の中の悠璃の声は震えていた。真っ赤に染まった眼からは涙がポロポロと零れ落ちる。此処にきて恭介と自分の間に感じた力の差を思い知り、それが悔し涙となって流れ出てきたのだ。恭介は強い。強く、力があるからこそ負けても自分のポケモンだけではなく相手や相手のポケモンに構うだけの余裕があるのだ。

「私はもっと強くなる……そして、あいつに……立花 恭介に勝ちたい……」

涙の決意の中、悠璃の視界にはやがて暗闇が広がっていった。

第14話：恭介VS悠璃の初対決（5）（後書き）

これで二章の目玉であった恭介と悠璃の初バトルが終了となります。今後はこの2人が対立しながらも、共に切磋琢磨していく姿を描ければな、と思っております。

また、恭介のクラスメートたちも出て来るのでそちらもどうぞ。

第15話：教室へ

「うつ、うつ……」

悠璃が目覚めたとき、彼女はベッドの中で丸くなっていた。

「どうして私はこんな所に……ああ、そうだった」

ベッドからむくりと起き上がった悠璃は恭介とのエキシビジョンマッチのことを思い返していた。恭介とのエキシビジョンマッチで悠璃は結果的には勝利を得た。だが、その勝利は偽りのものであった。悠璃のガブリアスは、ハッサムの唯一の弱点である炎タイプの技を持っていることから、このバトルは普通ならガブリアスに有利なバトルである。しかし、恭介はそんな不利な状況に置かれながらも、技や道具を巧みに駆使して終始悠璃を圧倒。内容的では明らかに自分は負けていたのである。そしてガブリアスの持っていたヤチエの実を虫食いで奪い、弱点である氷タイプの技の威力を下げる効果を消してから自然の恵みで一気に勝負をかけるにまで至った。だが、恭介はとどめの一撃を刺すことは無かった。恭介自身の判断でハッサムに攻撃を止めさせたのである。その行動の真意は恭介のみが知ることであり、あの時彼には彼の考えがあつたのかもしれない。しかし、その考えは対峙していた悠璃になど判るわけがなかった。

「あんな勝ち方など……あれならいっそ倒してもらったほうが」

「あら、ようやく起きたのね？」

何処かから声が聞こえてくる。すると、ベッドの周りを囲むように閉まっていた白いカーテンが開いた。カーテンを開けたのは白衣を纏った妙齡の女性であり、浅尾先生よりも幾らか大人びた雰囲気醸し出している。

「あつ、あなたは……？」

「私は田村 美里^{たむら みさと}。この学校の養護教諭よ。あなた、逢沢 悠璃さんでしょ？」

悠璃の名前は先のバトルですっかり学校中に広まっているようだった。結果はどうあれあのバトルは悠璃の名を広めるのに一躍買っていたのである。しかし、悠璃はあのバトルの結末の内情を考えると名が売れることにあまり良い気分はしなかった。元々目立つことは好きではないが。

「バトルを見たけど、あそこから立花君に勝つなんて凄いいじゃない」「いえ、あれは……」

「うん。私にも判ってるわ。だから今あなたのガブリアスを借りているの」

そう言つて田村先生はカーテンを完全に開ける。すると傷だらけのガブリアスが治療を受けていた。悠璃が眠っている間に田村先生が傷薬を与えてくれていたのだった。勝手にボールからガブリアスを出されるのは抵抗があつたが、ぞんざいに扱うわけではないようなので、それはそれで素直に感謝の気持ちを示した。しかし、悠璃が気になったのはガブリアスの右足に巻かれた痛々しい包帯であった。悠璃はベッドから飛び降りるとガブリアスに近づいて右足を見ようとするが、田村先生に「触っちゃ駄目」と諭された。

「この傷は……」

「さっきのバトルでガブリアスは負傷していたのよ。ほら、ハッサムの自然の恵みを受けてガブリアスが叩き落された時。ガブリアスは足で着地したじゃない。あの時に右足を痛めたのね。気がつかなかったかしら？」

悠璃は無言で首を横に振った。バトル中だったので、熱くなっていたと言えば熱くなっていたのだが、ガブリアスが怪我していたことまでは気がついていなかった。ガブリアスが怪我をしていたことを鑑みると、恭介のあのバトルでの言動にも説得力が増してくる。

「立花君はガブリアスの怪我に気づいていた。だからあの時、ハッサムに攻撃を止めさせたのよ。決して手を抜いたりしたわけじゃないわ。でもあそこで攻撃を続けていたらガブリアスの足はさらに悪くなっていたかもしれない。それを考えるとあのまま攻撃をしないのはある意味正解かもしれないわね」

「……まあ、トレーナーとしては負けちゃ駄目なんですけどね」

その時、部屋の何処かからまた別の誰かの声が聞こえて来た。それに驚いた悠璃と田村先生が周囲を見回すと悠璃が眠っていた隣のベッドからピヨンと飛び出す人影。それは他ならぬ恭介であった。田村先生は恭介にガブリアスの治療を依頼してきたものの、そのまま教室に戻っていったものだと思っていたらしく、恭介が保健室の中に居たとは思ってもいなかったようだった。恭介は小さく欠伸をすると、両腕を組んで伸びをする。どうやら恭介も今までベッドで眠っていたようだった。

「あつ、田村先生。おはようございます」

「おはようございます、じゃないでしょ。立花君こんなところで

何してるの？　　とかいつからそこに居たの？」

「僕ですか。僕はずっと此処に居ましたよ。逢沢さんを探しに来たらベッドで眠っていてそれを隣のベッドで見てました。それで眠っている逢沢さんを見たら僕も眠くなってしまつて……」

何も悪びれることなくニツコリと田村先生の質問に答えていく恭介。恭介は保健室の壁に掛けられていた時計を見ると、小さく「やばっ」と呟いた。時刻は既に10時を回っており、ホームルームどころか新学期初日のためあわよくば下校時刻という時間になっていたのである。

「これはまずいかな……僕浅尾先生に何も言わずに此処に来たんですよ」

「そうなんだ……つてそれつてまずいじゃない！　浅尾先生大丈夫なの！？」

「先生……心配してるでしょうね」

「それが判っているんだつたら早く戻りなさい！」

呆れたように天を仰いだ田村先生は恭介にすぐに教室に戻るよう促した。もちろん此処ですつと眠っていた悠璃にも。悠璃のクラスは1年4組で担任は当の浅尾先生であった。悠璃は落ち着いて考え直してみる。浅尾先生が悠璃の担任であり、また恭介が浅尾先生に何も言わず此処に来た。悠璃はまさか、と思いながら意を決して恭介に尋ねてみた。

「ああ。俺と逢沢さんは同じクラスだよ」

「……」

悠璃は無言で俯いた。まさか因縁の相手といきなり同じクラスになるとは。だがその内面は色々と複雑であった。まず前面に表れた

のは恭介という奇妙で憎たらしい存在と常に同じ空間に居なければならぬのか、という不快感である。だがその不快感の裏に強いポケモントレーナーと共に過ごすという一種の期待が駆け巡っていたこともまた隠しようのない事実である。悠璃は自分の中で渦巻く感情を直視すると、ますます混乱してきた。悠璃は治療が必要なガブリアスを田村先生に預け、恭介の道案内で1年4組の教室へと向かうことにした。無言で廊下を歩く2人の間に沈黙が流れる。恭介が何やら話そうとして悠璃の方をチラチラと見てはいたが、悠璃は相変わらず仏頂面をしており、到底恭介との話に応じる気はなかった。あのバトルでの行動の疑念は解けたものの、悠璃の恭介に対する不満は消えてはいなかったのだ。

「あそこが俺たちのクラスに教室だよ」

「……」

「でも、先に向かうべきところがあるね」

階段を上り、教室のドアの上に掛けられている『1-4』と書かれた札が悠璃の視界に入ったとき、恭介は教室とは突如反対方向に走り始めた。恭介の突然の行動にどうしたら良いのか判らず呆然と立ち尽くす悠璃。だが、恭介はそんな悠璃に対して手で「こっちに来て」と合図をする。悠璃は憚然とした顔のまま恭介のいる場所へと歩いていった。2人が辿り着いたのは水飲み場だった。普段は此处で生徒たちが水を飲んだり手を洗ったりしているのだろう。

「……何よ、いきなり」

恭介の行動を不審がる悠璃。だが恭介はそんな悠璃を構うことなく水道の鏡の前へと立たせた。いきなり腕を掴まれた悠璃は抵抗を試みるも、もの凄い力で腕を引かれたため抗うことも敵わなかった。一見華奢に見える恭介の腕であるが、その腕力は悠璃など及びもつ

かないほど強いものだった。

「ちよっ……離してよ!」

「ごめん、無理やり引っ張って。でも気になって仕方なかったんだ」
「気になったって……何が」

「顔、洗った方が良いよ。ほら、眼の周り……気になるからさ」

鏡の中に写る悠璃の眼の周りは真っ赤に腫れていた。誰にも泣いていたことを悟られないために隠れていたのだが、あのベッドの中で流した涙は悠璃の眼の周りにしつかりと傷跡を刻んでいたのだ。

「……保健室にいた時からすすり泣く声が聞こえていたよ」

「全部……ばれていたんだ」

「少なくとも俺にはね。でもこの事は一切口外しないから気にしないで」

「当然よ。その、恥ずかしいし……」

悠璃は恭介に言われるがまま、顔をゴシゴシと洗う。普段化粧などはあまりしないので、女子とはいえそこは気にせず豪快に洗うことが出来たのだ。何度も鏡を見上げ、顔の周りの腫れが目立たなくなるまで入念に確認を繰り返す。4回くらい洗った頃になると、腫れは肌の色と同化して殆ど目立たなくなっていた。

「はい、これ使って」

恭介が取り出したタオルを無言で受け取って使う。タオルは微かに湿っていた。

「……このタオルは？」

「俺のタオルだけど」

「何か湿っているような気が」

「えっ？ ああ、俺それで汗拭いたんだった」

悠璃は恭介を鋭い眼で睨み付けると、恭介の顔にタオルを思い切り投げつける。そして、こう思った。

やっぱり私は立花のこと嫌いだ、と。

第16話：1年4組の仲間たち（1）

タオルを顔に投げつけられ、驚いた様子の恭介を置いて悠璃は1人教室のドアの前へと立った。此処がこれから自分が過ごす教室。特別緊張するほどのことではないと思いつつも、中々ドアに手を触れられない。この時悠璃は改めて自分が緊張しているのだと理解した。

しかし、悠璃はこんな事で緊張してなどいられない、と首を何度も横に振ってドアに手を掛ける。するとドアの向こうから何やら騒いでいるような声が微かに聞こえてきたのだ。何があったのだろうかと思っっているといつの間にかに恭介が悠璃の隣で教室の中の様子を伺っていた。

「あいつらまたやってるみたいだね」

「っ！……耳元で声を出すな。気持ち悪い」

「ごめんごめん。取り敢えず俺が中を見て来るからちょっと此処で待ってて」

そう言って1人教室の中に入っていく恭介。好奇心旺盛な子供のような笑みを浮かべていた恭介は、悠璃の話は殆ど聞いていないようだった。1人置いていかれた悠璃はドアに耳を押し当てて様子を伺う。中からは恭介と誰かが喋っているような声が聞こえた。

「……………」

微かに聞こえる声色からして男子と喋っているようだった。正直
恭介が誰と喋っていたようにどうでもいい事である。しかしよくよく
考えてみると何故自分がこんなコソコソとした真似をしているのだ
ろうか。悠璃は不覚にも緊張しているようだったが、それに彼女自
身は気付いていない。意味の判らない緊張に苛まれ、1人ドアの前
で変な行動を取るしか出来なかったのである。

「お待たせ」

何の前触れもなくドアが開く。開いたドアの向こうでは恭介がニ
ツコリと微笑んでいた。悠璃はドアが開くとは思っていなかったの
か、開いた瞬間に体が子犬のようにビクッと震えた。幸い驚いたと
ころは恭介には見られなかったが、そういう自分の弱点にやきもき
する。恭介は悠璃を手招きすると「さあ、入って」と悠璃の腕を半
ば強引に引いて教室の中に連れ込んだ。当然悠璃は抵抗したが、や
はり力では敵わない。引き摺られるようにして1年4組の教室に入
った悠璃はその教室の中で広がる光景に眼を奪われていた。何と2
匹のポケモンが教室の中で対峙しているのである。悠璃から見ると奥
の方には巨大な角と体を持った怪獣のようなポケモンが低い唸り声
を上げており、そのポケモンの後ろには恭介よりも長身の高髪の男
子生徒が立っていた。一方、悠璃に背を向ける形になっているのは
人間のような立ち振る舞いをする剣士のようなポケモンで、両肘か
ら生えた刀のようなものを構えては逸る相手を牽制している。その
ポケモンの後ろには眼鏡をかけた小柄な女子生徒が腕を組んで立っ
ていた。

「……何これ。教室の中でバトルをしているわ？」

「うちの学校は教室でもバトルが出来るように作られていてね。授
業の一環でこうしてバトルをしたりもする」

外でやるならまだしも、学校の中しかも教室でバトルが出来るということに関しては悠璃は純粋に驚いた。だが、恭介によると今の世の中ハクタイ高校のようなポケモンに携わる高校はどこもこのように教室の中でバトルが出来るようになっていた。そのため、ここ数年でのシンオウの高校生トレーナーのレベルはポケモンに関わる学校を早くから作り出したカントー地方やジョウト地方、ホウエン地方にもそのレベルは負けていないという。現に恭介が在籍するこの1年4組は意図的に分けていないのにも関わらず、学年でも比較的腕の立つトレーナーが集まっていた。

「おや、恭介。その人は……」

その時、ドアの傍にいた1人の男子生徒が2人に話しかけてきた。男性ながら悠璃と同じように長い黒髪を持ち、猫のような眼をした中性的な顔立ちの少年。恭介を名前で呼んでいることから恭介とは深い付き合いであることが伺える。ちなみにこの少年も観客としてバトルを見ていたようで、悠璃のことを知っていた。悠璃は学内ではすっかり有名人になっていた。

「初めまして、桜木 蛭さくらぎ けいと言います」

丁寧な物腰の蛭は恭介同様に世間一般でいう美青年に相当する容姿である。しかし容姿こそ優れていても、蛭は恭介とはまた違った雰囲気を漂わせていた。悠璃は恭介に抱いた敵対心や猜疑心を蛭に抱くことは無かった。少なくとも恭介よりはまだ話が通じそうな存在である。だが、そんな蛭の中にも何処か影があるように悠璃は思ってしまった。確証は無いので、自分の思い過ごしかもしれないと気にしなかったが。

「それでさっきの続きだけど、あの2人……どっちが勝つと思う？」

恭介が螢に何やら話しかける。恭介が指す“あの2人”とは教室の中心でポケモンバトルを繰り広げている2人でまず間違いないだろう。

「相性では本城さんが有利だが……翔はそんなの気にしないかもな」

螢の言った“本城さん”と“翔”というのは言うまでも無く教室の中心でバトルをしている2人の学生トレーナーのことだ。本城というのは本城紗矢という女子生徒のことである。恭介・螢と旧知の仲である紗矢はとても真面目な生徒であり、このクラスの風紀委員を務めている。昔から小柄なのでよく背の高い男子にからかわれてはいるが、実家が剣道場というだけあって剣道部に所属しており、その小柄で華奢な外見からは想像できないほど剣道は強いという。そんな彼女のポケモンである“やいばポケモン”のエルレイドは何処か剣道の動きに似た構えを取っては、じりじりと摺り足で間合いを取っている。

「何だあ、攻めて来ないのか？ 本城！」

粗暴な言い方で紗矢を挑発するのは久坂翔という男子生徒。派手な金髪に着崩した制服が印象に残る典型的な不良タイプの少年であった。長身かつ不良だけあって風紀委員の紗矢とは犬猿の仲であり、学校生活のことで言い争いをすることも多い。またこのようにポケモンバトルで雌雄を決することも多々あるという。

「うつさいわよ、久坂！ ただ突っ込むだけのあんたと私は違うんだから！」

「んなつ、俺が突っ込むだけだど？ バカにすんな！ 行けっ、サイドン！！」

翔のポケモンである“ドリルポケモン”のサイドンが地面を踏み鳴らして真正面からエルレイドに向かって突進していく。頭部のドリルは甲高い音を立てて回転し始め、エルレイドを付けねらう。だがエルレイドはサイドンの攻撃を軽々と避けると、肘の刃を伸ばしてそれを受け止めたのだ。刃と回転する角が擦れる事で、火花が散り始める。体格や重量には大きな差があるものの、パワーではほぼ互角であり、どちらが優勢というわけでもない。しかし、角をはじめとした全体を攻撃に使っているサイドンと違ってエルレイドにはまだ片腕の刃が残っていたのである。念力によって鋭く伸びていくエルレイドの刃。そこにエルレイドの力が徐々に凝縮されていく。

「サイドン、何とかしてエルレイドを押し返せ！」

翔がエルレイドの攻撃を察知してサイドンにエルレイドを押しかえるように指示を出そうとする。しかし、翔がその指示を出す前にエルレイドの鋭い刃がサイドンの眉間を貫いていた。

第17話：1年4組の仲間たち（2）

エルレイドの“インファイト”が決まった。インファイトは相手の懐に潜り込んで激しく攻撃する技であり、防御が疎かになるという欠点があるものの、格闘タイプの技の中では最強クラスの威力を誇る技である。

「サイドン！！」

サイドンは仰け反るようにして倒れた。マグマの熱にも耐えられる強靱な皮膚を持っているサイドンと言えども、至近距離から放たれたインファイトのダメージは大きい。エルレイドはサイドンが倒れた事を確認すると、その場を後退りしながら下がり、サイドンに向かって一礼する。礼儀正しいポケモンであるエルレイドならではの相手を重んじた行為であった。

「立てっ、立つんだサイドン！」

翔は両手の拳を握り締めてサイドンに呼びかけ続ける。審判役を務めていた生徒や紗矢が翔を制しようとするが、翔はまるで聞こうとしない。

「……何、あれ。あんなバトルをしたら負けるに決まっているのに」

悠璃は翔のそんな様子を見て、呆れたように吐き捨てた。確かに岩タイプのサイドンが格闘タイプのエルレイドに正面から突っ込んでいくのは一般的に考えたら無謀とも言えることである。

「確かに。正面から何も考えずに行くとおあなるかな」

恭介も最初は悠璃に同調する。しかし訝しむ悠璃に対して恭介は穏やかな笑みを向けながら話を続ける。

「でも、あれが翔の良い所でもある」

「……えっ」

「ポケモンが倒れたからと言ってすぐに諦めることをせず、最後の最後まで自分のポケモンを信じ続ける。俺たちトレーナーにとって当たり前のことながら、実は結構難しいことをあいつはすることが出来るんだよ。なっ、蚩?」

「……そうかもしれないな」

恭介は隣に居た蚩と顔を合わせて笑いあいながら、バトルフィールドに横目をやる。

「ほらね」

すると、今まで倒れていたはずのサイドンが巨体を震わせながらゆっくりと立ち上がったのである。その様に周囲からは拍手と歓声が上がる。

「まさか……インファイトをまともに受けたのに……」

「俺のサイドンはそんなものに碎かれるほど脆くは無いんだぜ! 行けっ、メガホーンだ!!」

当然紗矢は信じられないと言った表情を浮かべていた。そんな彼女に対して翔は中指を立てて半ば挑発的な言動を取りながらサイドンに攻撃の指示を出す。サイドンは地面を蹴って再びエルレイドに対して突進し始める。しかしサイドンというポケモンの習性が災いしてか、また正面からエルレイドに向かって突っ込んでいくのだ。これではまた攻撃を受けてしまう。そしてその絶好のチャンスを紗矢は見逃さない。

「また正面から？ そんなんじゃない、また攻撃を受けるわよ！」

エルレイドは突っ込んでくるサイドンに向かって“サイコカッター”を放った。サイコカッターは念力で作り出した刃を放つ 에스パータイプの物理技である。その威力はインファイトには及ばないものの、弱ったサイドンを仕留めるには十分すぎるほどの威力を持っていた。

「馬鹿ね……あのままではまたやられるわ」
「いや、まだだ」

まるで結果が判っているかのような物言いをする恭介に悠璃は何処か得体の知れない不信感を覚えた。だが、恭介のその水のように澄んだ瞳は全てを見透かしているのではないか、という錯覚に陥るほど深く、鋭かった。そんな中、サイドンにサイコカッターが直撃した……かのように見えたのだが、サイコカッターはサイドンに触れたと同時に真っ二つに切り裂かれて明後日の方向に飛んで行ったのである。

「なっ、なんで!？」

「これが俺とサイドンの絆の力だ！」

翔は得意気にそう言うが、実際はサイドンの“メガホーン”がサイコカッターに触れたことで、サイコカッターを切り裂いたのである。メガホーンは虫タイプの技でサイドンのタイプと直接関係を持たないのであるが、捨て身のサイドンの攻撃力と元々の技の威力の高さが相まってその威力は凄まじいものとなっていたのだ。エルレイドはサイドンの攻撃を防ぐために防御の体勢を取ろうとする。しかしインファイトの効果で自ら守りを薄めたエルレイドにサイドンの巨体から繰り出される攻撃を防ぐことなど出来なかった。

「エルレイドっ!!」

サイドンのメガホーンがエルレイドに直撃する。物理防御の低いエルレイドにとってこの一撃は致命傷となってしまったのだ。審判役を務めていた生徒の口からエルレイドの戦闘不能が告げられる。

このバトルは翔とサイドンの大逆転勝利となったのである。

第18話：1年4組の仲間たち（3）

「やったぜサイドン！ やっぱりお前は最高だーっ！！」

翔の歓喜の絶叫が教室中に木霊する。サイドンはふらふらしながらも、喜ぶ翔の下に近寄ると、翔を片手で持ち上げて肩車をして喜ぶ。その光景はまさに歳の離れた兄弟を思わせるほど微笑ましいものだった。確かに翔は正面から突っ込む事が好きな攻撃馬鹿である。それは誰が見ても明らかなのだが、そんな直情的なバトルが出来るのも自分のポケモンを完全に信じているからであり、恭介は翔のそう言ったところをある意味羨ましく思っていた。

「どうだ！ これがお前が散々馬鹿にした不良の実力……」
「……うっ、うっっ……うわあああん！！」

戦闘不能になったエルレイドをボールに戻した後、紗矢は黙って俯いていた。しかし、バトルに勝った翔が負けた紗矢に対して得意になっていいるうちに、強気だった紗矢の眼からは大粒の涙がポロポロと零れだしていた。そして嗚咽と共に紗矢はすぐ近くに居た女子生徒に飛び込むように抱きついた。

「あんな、あんな不良に負けるなんてええー！！」
「さっ、紗矢ちゃん……大丈夫だから、ねっ」

飛びつく紗矢を懸命に励ます女子生徒。悠璃はその女子生徒に見覚えがあった。

「あの子は……今朝の」

「仁科にしなさんがどうかしたの？」

小声で呟くように言った悠璃であったが、しっかりと恭介に聞かれていた。この地獄耳が、と悠璃は思った。しかし聞かれていた以上、何も言わずにいるわけにはいかない。悠璃は朝の出来事を恭介に話したのである。朝、登校する途中にこの学校の生徒と思わしき柄の悪い男子生徒が、あそこにいる女子生徒を襲っていたということ。そして、女子生徒がヘルガーの技を使って男子生徒のオーダイルを撃破すると、逆上した男子生徒が女子生徒に手を出そうとしていたので、悠璃がそれを助け、その騒動があったせいで学校に着くのが遅れてしまったということを。話を聞いた恭介は顎に手を当ててしばし考え込んだ様子を見せると「ふーん」と言って頷いただけであった。果たして興味があるのかないのか……悠璃はやはり恭介という人間がどのようなものかを掴むことが出来ずにいた。

「ほら、もう泣かないで……」

「うつつ、ごめんね。美夏みか」

悠璃が今朝助けた女子生徒の名前は仁科にしな 美夏みかという。好戦的かつ腕が立つトレーナーが多いこのクラスにおいて珍しくバトルがあまり得意ではない、臆病で大人しい生徒であった。しかし、臆病ということは一見悪いように聞こえるが、それは逆を返せば気の優しいことの現れでもあり、その性格から美夏は男女関係なく好かれていた。

「おっ、おい。何も泣かなくてもいいじゃないか」

「駄目だよ久坂くん！ 紗矢ちゃん泣かせちゃ」
「わっ、わりい……」

少し怒ったような眼で翔を睨み付ける美夏。本人は叱っているつもりなのかもしれないが、その外見から怒るような顔をして逆にも可愛らしく見えてしまうことがある。今日も例に漏れずにそのように、怒られた立場にあたる翔もその顔を見てどうにも顔が緩んでしまった。

「翔、ナイスバトル！」

「あつ、兄貴！ 戻って来てたんだ！」

そんな翔の下に歩み寄る恭介。翔は何故か恭介のことを『兄貴』と呼んでいた。同じクラスということは同学年のはずなのにどうしてだろうか、と悠璃が考え込んでいる時であった。

「あつ……あの……」

美夏が悠璃に気づいて声をかけてきたのだ。悠璃が美夏に気づくと美夏はペコリと小さくお辞儀をした。

「今朝は……その、ありがとうございました」

「いや、あの程度どうということはないわ。それよりもそっちは大丈夫？」

「はい。お陰様で……あの、バトル……強いんですね」

恭しい言葉遣いの美夏は顔を赤らめ、はにかみながら聞いてきた。悠璃は「そんな事ないよ」と自嘲気味に返す。田村先生のようにさっきのバトルの実態を知っているのならこの言葉の意味を理解できるようだが、美夏はその言葉に首を傾げていた。どうやら大半の生

徒は恭介の意図に気が付いていないようである。故に一部の事情を知る人を除いて『悠璃は恭介に勝った』ということが校内での既成事実となる。その為、皆が敬意を込めて見る眼に悠璃は何処か違和感を感じていた。

「……どうしてそんなに強いんですか？」

「私は自分が強いなどとは……それよりも、敬語はやめない？」

しかし、話がどうにも上手く進まない。悠璃は美夏との話が何処かぎこちないのは敬語にあるのでは、と考えて美夏に敬語を使うのをやめさせることにした。よくよく考えれば誕生日の違いこそあれど、皆同じ年の同級生である。敬語を使われる謂われはないのだ。美夏は少し戸惑った様子を見せたが、悠璃に同調して敬語を使うのをやめた。双方ともにこの方がしっくり来るようだった。

「私、バトル苦手でいつもポケモンたちに迷惑かけちゃうんだ……」

「バトルが苦手？　じゃあ朝のあれは？」

バトルが苦手、と言うが美夏は実際ヘルガーの気合の襷とカウンターを組み合わせた連携技でオーダイルを倒していた。あれを見る限り苦手というのは悠璃には聊か信じ疑いことであつた。

「あれって？」

「ヘルガーのカウンター。気合の襷を持たせていたじゃない」

「あつ、気合の襷ね。あれ……実は立花くんに教えてもらったんだ」「立花が？」

悠璃は懔然とした表情で翔と紗矢の間を取り持つ恭介を見た。美夏によると、バトルに勝てず悩んでいた美夏に対して恭介はヘルガ

「の防御力の低さという欠点を生かした戦法がある、と言ってこの戦い方を教えた。それからと言うものの、何も知らずに物理技で攻撃を仕掛けてくる相手に対してはある程度勝利することが出来るようになったという。」

「あいつ、そんなことまで……」

そう思っていた矢先、悠璃と恭介の眼が合う。翔と紗矢を伸直り（と言っても元々仲が良いというわけでもないのだが）させた恭介は悠璃が自分を見ていることに気が付くと、にっこりと微笑んで手を振ってきた。それを見た悠璃は恭介をギロリと険しい目つきで睨み付けると、そのまま背を向ける。やはり何かが癪に障るのだった。

「はあっ、はあっ……」

その時、教室のドアが力なく開く。見てみると息を切らして肩で息を整えている浅尾先生の姿がそこにあった。

「……どうしよう。本当に立花君と逢沢さんが見つからない」

「あの、先生。恭介と逢沢さんならそこに居ますが」

えっ、と螢の顔を見る浅尾先生。そして恭介と悠璃の顔を見ると、焦りで染まっていた顔が段々と怒りに変わっていくのが見て取れた。

第19話：自己紹介の悲劇

「もうっ！ あなたたちは新学期早々から何を考えてるの！！」

新学期早々、浅尾先生の檄が飛んだ。教卓の前で先生の叱責を受けているのは恭介と編入してきたばかりの悠璃である。悠璃は先生に許可なく勝手に保健室に行ってしまったことを咎められており、神妙な面持ちで先生の話聞いていた。だがそんな悠璃とは対照的なのは恭介である。

「はい。以後、気をつけます」

説教されている状況にもかかわらず、本当に反省しているのかと思われても仕方がないような微笑みを浮かべていた。それを横目でチラリと見た悠璃は「自分が反省しているのにあの様は何だ」と小さく頬を膨らませていた。だが、怒られているにも関わらず、笑顔を見せる恭介に対して浅尾先生は逆に怒る気を失うのであった。

恭介が校内や街中で慕われている理由としてはポケモンバトルの強さといったトレーナーの才能だけではなく、性格の良さや皆に優しいという点が最たるものである。しかし、それ以外にも恭介に妙な人気があるのが、その一風変わった素行にあった。恭介は学業の方でもかなり優秀な分類に入り、前期の中間テストの時は学年で3位に入るほどの成績を叩き出したのだが、そんな恭介の授業態度は必ずしも良いものとは言えなかった。授業を受け持つ教師たちが口を揃えて言うのは居眠りである。朝の授業からその癖は始まり、6時限目の授業まで各授業必ず最低10分は居眠りする。それならま

だ他の生徒に迷惑を掛けるということではないので教師たちも苦笑いで済ましていたが、浅尾先生が今年赴任して初めて見て唖然としたのは授業中に隠そうとせず堂々と早弁をする恭介の姿を目撃したことだった。

ポケモントレーナーとしては同年代の生徒たちを大きく上回り、文武両道の美男子という一見ケチの付けようのない存在である恭介の自由、別の言い方をすれば奇妙な行動はたちまち生徒たちの注目を浴びるようになった。また、奇行というものも目立つ。昼休みに突然いなくなったと思ったら授業時間中まで屋上で昼寝をしていたり、食堂で弁当を多めに買ったと思ったら校舎裏に住みつく野生のポケモンに餌を与えていたり、授業中に堂々と手を挙げては腹痛でトイレに行き、雑誌の袋とじを開けては中でセクシーなポーズを取るグラビアアイドルを見てニヤニヤする。ハクタイシティでも有数の名家に育った恭介の高尚なイメージから作られた壁は彼自身の言動によってすぐに砕かれ、恭介の周りには自然と人が集まっていた。また、恭介は全体の和や協調、絆を重んじたため、集団で孤立していたり浮いている人を見つけるとすぐにその人に近づいては輪の中に溶け込めるように積極的に働き掛ける。それらの行動を入学して一週間の間に全て行ったものだから、恭介はクラス内に留まらず学年、学内全体で一目置かれる存在になった。そんな彼は今はこの1年4組の学級委員も勤めている。

「ですが先生、新学期早々そんなに怒っては駄目ですよ。逢沢さんが編入してきたんですから、笑顔で迎えてあげないと」

悠璃は先生が怒った理由の半分は恭介にあることを当の恭介自身が理解していないことに顔を顰める。だが浅尾先生はその恭介の言葉を聞いてはっ、と我に帰ったような表情をすると、悠璃に少々困惑した表情を浮かべながら謝ってきた。

「ごめんね、何だか変な空気で迎えることになっちゃって」

「先生は気にしないで下さい。悪いのは全部あいつですから」

ちなみに浅尾先生が此処で謝ったところで悠璃が編入早々教室ではなく保健室に行ったという事実はこのクラスの中では消えることはない。それを割り切って悠璃は編入生恒例の自己紹介へと切り替えていくことにした。1人教卓の前に立ち、浅尾先生は生徒たちに背を向けながら黒板に悠璃の名前を書き込んでいく。

「それじゃあ、自己紹介を」

先生に促され、改めて皆の方を見る悠璃。教室中の視線が全て悠璃に集まっていく。不意に悠璃の中で緊張が生まれる。こんな事で一々緊張してなどいられない、と自分を落ち着かせようとするが、その結果さらに緊張の度合いが高まっていく。

「あ……逢沢 悠璃です。宜しくお願いしましゅ」

自分の名前を言うただけだ、と意を決して名乗った悠璃。しかし最後の最後で噛んでしまった。内心に押さえ込んでいた緊張がこんなところで露呈してしまったのだ。悠璃は噛んだことを認識すると、瞬く間に顔に熱が籠っていくのを感じた。

（かつ、噛んだ？ 嘘……信じられない）

噛んだことよりもこんなことで一々緊張している自分が情けない。悠璃は自分を責めた。何のために故郷から北に遠く離れたハクタイシティまでやってきたのか。此処からが正念場だと言うのにこんなところで小さなミスを重ねていては……と思ったその時。

「宜しく、逢沢さん！」

後ろの方の席から悠璃の失敗などまるで気にしていないような明るい声が響く。声の主はやはり恭介であった。窓際の後ろから2番目の席で屈託のない笑みを浮かべている。そんな恭介に釣られてか、クラスの生徒たちからも次々と悠璃を迎え入れる声が出始めたのだ。やはり恭介はこう言った面でもクラスの中心たり得る存在であった。

（またあいつか……）

一度芽生えた苦手意識はそうそう消えないものであり、悠璃は恭介に素直に礼を言うことなど出来るわけが無かった。悠璃は出来れば恭介とは離れた席に座りたい、と願った。しかし、そこは運命の悪戯と言うものか。先生が悠璃の席に指名したのは、何と恭介の後ろの空いている席だったのである。悠璃は「そうですか」と先生の指示を無表情で聞き流す。勿論内心では「ふざけるな！」の一点張りであったが、それを表に出すわけにはいかない。それに、恭介が前の席ということ差し引いても、周囲の席にはそれなりに安心して座れる面々がそろっていた。

「まさか俺の後ろとはね。改めて宜しく、逢沢さん」

エキシビジョンマッチの前と同じように手を差し出す恭介。しかし悠璃は聞こえない振りをしてそれを無視した。さっき庇うようなことをしてくれたことは感謝したいところだが、やはり恭介を嫌う悠璃としては「余計なことをするな」という感情が先行していたのである。無視されて呆然とする恭介を尻目に悠璃は自分の隣の席に座っていた美夏にぎこちない微笑みを見せる。美夏は多少気まずそうにしながら、悠璃に小声で耳打ちをした。

「ねえ、立花くん握手求めてるんじゃない？」
「良いの。気にする必要ないわ」

そう言つて慚然とした面持ちで席に座る悠璃。美夏はまるで対照的な悠璃と恭介を見て、心配そうな顔をしていた。

第20話：闇討ち

悠璃が席に着いてからホームルームが始まったのだが、新学期初日ということもあって、先生が連絡事項を話し終えたとすぐに終了した。本来なら下校時間となるのだが、物好きが多いこのクラスの生徒たちはすぐに帰るなどということはせず、教室で雑談に勤しんでいた。そしてその雑談の輪の中心にいたのは編入生である悠璃と隣の席の美夏、そして美夏と特に仲が良い2人の女子生徒であった。

「それにしても……さっきのバトルは凄かったわ。まさか恭介に勝っちゃうなんて」

そう言いながら悠璃のバトルを評価するのはさっきまで翔とバトルしていた女子生徒・本城 紗矢である。このクラスの風紀委員であり、翔のような生徒からは目の敵にされている存在であるが、こうして友達同士で喋っている彼女もまた普通の女子高生トレーナーの1人だった。ちなみに悠璃と違って顔を洗ったりはしていないので、眼の周りの泣いて出来た痕がまだ残っている。強気な性格で、校則違反をしている生徒を見つけると常に所持している竹刀で叩くなどする剛毅な彼女はさっきのバトルを見ていたら判るように極度の泣き虫だった。

「そう……ねえ、立花 恭介ってそんなに強いのか？」

「強いってものじゃないわ。この高校では上級生も含めて恭介が一番強いんじゃないかって言われているくらいよ。私は小学校の時から一緒だったんだけど、その時から既に強かったもの。確か恭介の死んだお祖父さんが元々凄腕のトレーナーらしくてポケモンを持ってない年齢の頃から凄いトレーニングを積んできたらしいわ。確かその頃の話は……凜、あなた知ってたよね？」

紗矢が隣で話に参加していた女子生徒に話題を振る。紗矢の隣で終始穏やかな微笑みを浮かべていたのは黒崎 凜という女子生徒である。凜はその名前が現す通り、凜とした立ち振る舞いが特徴的であり、何処か高家のお嬢様のような印象を受けた。悠璃は出会ったばかりなので凜のことを完全に理解しているわけではないのだが、何故か凜にそれほど良い印象を抱けずにいた。しかし、凜は恭介とは違って礼儀正しく、嫌うような面は全くと言っていいほど見当たらない。そのため悠璃自身にも何故凜を密かに苦手と思うのが判らなかった。

「……そうですね。確かに私は立花さんのことは幼少の頃から存じ上げているのですが……あまり関わったことは無いのでどうして立花さんがあのような強いポケモントレーナーになられたのかは判らないですね」

悠璃が苦手意識を抱きつつあるのを露知らず、凜はとても丁寧な言葉遣いで話す。彼女はいかなる年代と話するときも常にこのような口調を使っている。よほど両親に礼儀正しくなるように育てられたのだろう、と思うと妙に合点がいった。

「やはり亡き祖父・雅義さんの影響が大きいのでしょうか。あの方は生前は素晴らしいポケモントレーナーだったようですから」

（祖父、か……）

悠璃は恭介の家族のことを想像する一方で胸を突くような感覚を覚えた。

+++++

「先生！ ガブリアスは」

やがて下校することとなり、美夏たちと別れた悠璃はすぐに保健室へと向かった。田村先生には下校時間までガブリアスを預かってもらっていたのだ。

「ああ、逢沢さん。治療は上手く行ったわよ」

保健室を訪れると、田村先生はちょうどガブリアスの治療を済ま

せたばかりだった。ガブリアスは悠璃を見てニコリと微笑むが、右足に巻かれた包帯が何とも痛々しい。先生いわくそれほど大きな怪我ではないようだ。が決して油断ならない状況にあり、この怪我が治るまでバトルは禁止とのことだった。一日も早く恭介を打ち倒し、強い力を手に入れたい悠璃にとってガブリアスが戦えないというのはショッキングな事実であった。だがここで無理してガブリアスにバトルをさせたところで足の怪我を余計に酷くしてしまつては元も子もない。そのため今のバトルが出来ないという現実を悠璃は黙って受け入れるしかなかった。

悠璃はガブリアスが入ったボールを眺めながら、1人校門を出た。皆既に下校してしまつたようであり、校庭に残るのは部活動の生徒を除くと悠璃だけだった。昼下がりのハクタイの街道は人通りがまばらであり、物を売っている人たちの客を呼ぶ声が響く以外は何処か閑散としていた。北に聳えるテンガン山からは初秋を思わせる風が吹き下ろす。その風に吹かれて悠璃の長く美しい黒髪が揺引く。そんな穏やかな風景。しかし、悠璃はその時何か違和感を感じていた。

（誰かが私を見ている……誰だ？）

誰かに見られている。悠璃はキョロキョロと周囲を見回した。だが誰の姿も見当たらない。悠璃は誰の仕業かと考えた。真っ先に脳裏に浮かんだのは屈託のない笑みを浮かべる恭介。まさかこっそりとストーキングされているのではないか。あの恭介ならやりかねない。そう思つた悠璃はじつと後方を睨み付けると「隠れていないで出てこい、立花！」と言い放つた。だがその声には誰も反応しない。周囲には沈黙が流れた。

(……何だ、立花じゃないのか)

悠璃の中で確定と思われていた『恭介犯人説』はあっさり崩される。冷静になつてよくよく考えてみると、恭介は悠璃が教室で美夏たちと喋っていた時に蛍や翔と一緒に下校していた。それを考えると恭介がずっと悠璃が学校から出て来るまで待ち伏せでもしていない限り悠璃の後ろにいることは考えにくい。そう思うと悠璃は何だか拍子抜けした気分となり、改めて自分の早とちりに呆れる始末だった。だが、その『誰かの視線を感じる』という勘違いは最悪の形で具現化することになる。

「……私に何か？」

帰ろうとした悠璃の眼前に10人ほどの男子生徒が立ちはだかるようにして現れたのである。悠璃が感じていた視線の正体は彼らだったのだ。男子生徒らの制服を見る限り、ハクタイ高校の生徒ではない。しかし悠璃はその制服に見覚えがあった。昨日悠璃に因縁を付けてきたあのマニニューラ使いの赤髪の不良と同じ制服なのである。悠璃はすぐにいつでもポケモンを出せるように身構えた。ガブリアスのバトルは田村先生から禁じられている。しかしそれを目の前の不良たちは知らない。赤髪は集団の中には居ないようであるが、同じ高校なら悠璃に酷くやられたことを知っているはず。それならば迂闊にポケモンを使うような真似は出来ない、と悠璃は踏んだのだ。

「お前か。俺たちの仲間を散々いたぶった女つてのは」

「……だったら？」

「あいつは俺のダチなんぞでな。今日はお礼に来たつてわけよ」

集団の真ん中に立っていた青髪の男子生徒がボールを構える。昨日の赤髪と合わせるとまるで赤鬼と青鬼だな、と悠璃はほくそ笑ん

だ。青髪はこのような状況に至っても悪どい笑みを浮かべられる悠璃を見て、少しだけ後ずさりをした。やはりまだ悠璃が今戦えない状況にあるとは知らないらしい。それならば癪ではあるが、このまま虚勢を張り続けるのが得策だと悠璃は判断した。

「お礼？　ならさつさとボールからポケモンを出しなさいよ。昨日のマニニューラと同じように軽く叩き潰してあげるから」

悠璃の力の籠った声を聞いた不良たちの中からざわめきが聞こえ始める。戦いにおいて敵を前に動揺してしまえばその者の実力の半分の力も出せなくなる。これも立派な心理作戦であった。悠璃は「後一押し」だと判断すると、ボールを投げる構えを見せた。今の状態なら一つ脅しを入れるだけで不良たちの戦意は無くなる。

「さあ、痛い目を見たくなければ、今すぐ此处から立ち去り

悠璃がそう言いかけた瞬間である。悠璃の背中にドスン、という重い衝撃が響いたのは。

「……………！！」

強い衝撃に悠璃の息が詰まる。予想だにしなかった不意打ちを受けて倒れ行く悠璃が見たのは、同じハクタイ高校の生徒が金属バットを持っていた姿だった。

第20話：闇討ち（後書き）

第2章も佳境に入っていました。

此処からストーリーの本番へと繋がっていきます。

第21話：風とともに

悠璃は激痛に苦しみながらも、後ろを振り返る。そこにいたのはハクタイ高校の制服を纏った男子生徒たち。しかし男子生徒と言っても恭介や蛍のように見知った顔ではないし、何分柄がとても悪かった。すると、金属バットを持った男子生徒の後ろからまた1人の男子生徒が顔を出す。悠璃はその顔には見覚えがあった。

「お……まえ……はっ」

「よう。今朝はよくもやってくれたな」

男子生徒は今朝悠璃が登校途中に出会った2年生のオーダー使いのトレーナーだった。美夏に因縁をつけるものの返り討ちにされ、逆上したところを悠璃に成敗された不良である。朝は美夏を助けるために悠璃はこの生徒を素手で倒したが、今回は後方から不意打ち同然の攻撃を受けたため、対応することができなかった。背中を金属バットで殴られたため、上手く呼吸をすることが出来ず、喋ろうにも途切れ途切れになってしまう。それでも悠璃は全身の力を振り絞ってオーダー使いの男子生徒に食い掛かろうとした。

「ひ、ひきよ……うな……まね」

「卑怯？ うるせえな、勝てば官軍なんだよ。それともまたバットで殴ってやろうか!？」

足に縋り付く悠璃を男子生徒は片方の脚で蹴り倒した。足が肩に当たり、地べたに転がり込むようにして倒れる。そんな悠璃を見下ろすかのように男子生徒たちが取り囲んだ。普段は大した相手でもない男子生徒たちがこの時ばかりはとても大きな敵に見えた。その姿に悠璃の脳裏にはとある光景がフラッシュバックする。

(……嫌。嫌だ……もうあの時のようなことは……)

悠璃の目の前はただただ闇が広がるばかりである。そのため悠璃は自信で何を見ているのかすらも把握できずに居た。不意に悠璃の眼から大粒の涙が零れ出す。気の強い悠璃が1日に2度も泣くというのは悠璃自身からしても予想外のことであった。そんな彼女の気持ちを知ろうともしない男子生徒たちは悠璃を汚い言葉で罵り出す。

「おいおい。泣いちゃってるぜ、コイツ」

「こいつ俺の代わりに勝手にエキシビジョンマッチに出てよお、立花 恭介に勝ったんだぜ」

「マジで、あの立花に!？」

「ああ。だがそのバトルが激しすぎてこいつのポケモンは今までもに戦えない状態だ。保健室に預けたって話を聞いたぜ」

悠璃のあの威勢の良さが虚勢であったことを知るや否や、青髪たちの顔は怒りに染まっていく。ろくに戦えない状態の悠璃に此処まで馬鹿にされたという事実は、彼らのプライドをズタズタに引き裂くには十分な材料であった。青髪は倒れこむ悠璃の胸倉を掴んで無理やり立たせようとした。悠璃は呼吸することすら苦しい状況にあるためか、立ち上がることもままならなかった。だがそんな事に男子生徒たちは構ってはくれない。悠璃は体中がジンジン痛むのを我慢すると、悠璃を睨んで来る青髪を逆に睨み返した。こんな状況にありながら悠璃の瞳から力は失われておらず、それは今まさに天

へと昇る龍のような力強ささえ感じられるほどだった。悠璃のその眼に苛立ちとある種の恐怖感を抱いた青髪は拳で悠璃の顔を殴りつけた。再び倒れこむ悠璃。しかし、今度全身を駆け巡る痛みはこれまでのものとは違って直接素肌に加えられたため、バットや蹴りとはまた違った痛みがあった。

「気にいらねえ……気にいらねえんだよその眼が！！ ちょっとポケモンが強いくらいでいい気になりやがるお前みたいな奴がよお！」

興奮した青髪が何か色々と言っているようだが、悠璃の耳にはまるで届いていなかった。仰向けに倒れた悠璃は呆然と空を見ていた。さっきまでは晴れ空であり空に浮かぶ雲がずっと止まっているように見えるほど穏やかな天気だった。しかし、聳え立つテンガン山の影響があるのか、風がにわかに強くなり始め、雲の動くスピードも除々に早まっているように感じられた。

「だから……何？ 弱いのが悪い……」

「そんでお前みたいな糞アマが生意気な口を叩くのは……もっとムカつくんだよ！」

青髪の拳がまたしても悠璃の顔に振り降ろされるかと思っていた瞬間。テンガン山からハクタイシティー帯にかけて強風が振り下ろされたのである。その強い風にその場にいた誰もが眼を背ける。しかし、悠璃だけはしっかりと見据えていた。その風と共に黒い物体が自分の上を飛んでいくところを、そしてその黒い物体に自分の体が持ち上げられていることに。それを見た男子生徒たちが一斉に硬直する。何故なら自分たちの目の前にさっきまで話題に出していた男が何処からとも無く現れたからである。

「これは先輩。僕とのエキシビジョンマッチをすっぱかした揚句にこんなところで女の子に集団で殴る蹴るの暴行を加えているとは……随分とお元気なんですね」
「たっ、立花！！」

そこには恭介とあの色違いのリザードンの姿があった。悠璃の見た“黒い物体”とは他ならぬリザードンのことだったのである。リザードンに跨り、いわゆる『お姫様抱っこ』の状態で悠璃を持ち上げる恭介。悠璃は下から見上げる形で恭介の顔を見た。いつもの憎たらしい顔がそこにある。しかし、さっきまで学校で見ていた恭介の顔とはどこか違って見えた。その証拠に普段薄っすらと弧を描いている口元は真一文字に結ばれていた。これは恭介自身も気づいていない癖なのであるが、普段微笑みを絶やさない彼の口元が真一文字に結ばれているとき。それは彼が既に半分怒っていることの現われであった。

「立花……」

「大丈夫？ 逢沢さん」

「……大丈夫。だから早く降ろして」

「あっ、はいはい」

恭介はリザードンから飛び降りて持っていたビニール袋を地面に置くと、ハッサムをボールから出した。ハッサムもあのバトルの後だったのでガブリアス同様存分に戦うことは出来ないが、怪我らしい怪我は負っておらず悠璃を護衛するくらいのことなら出来た。そのため恭介はリザードン1体で目の前の男子生徒たちと対峙することになる。

「何だよ、俺らとやろうつてのか？」

「……彼女は、逢沢さんは今日から僕のクラスメートになりました。言ってしまえば仲間も同然。そんな人にこのような振る舞いをするということは、僕を含め1年4組全員に喧嘩を売ったことになりますね。先輩、どう償いをするつもりですか？」

穏やかながら力の籠った恭介の言葉に皆が押し黙る。続いて恭介の矛先はハクタイ高校の制服ではない生徒たちに向けられた。

「そして……このハクタイシティで何をしているんだ。シンオウ地方有数の名門校『ミオ学院』の皆さん？ 夏前からコトブキシティやクロガネシティで散々トラブルを起こしていると聞いたが、わざわざこのハクタイシティまでやって来るとはご苦労なことだ。お前たち、何を企んでいる？」

同じ高校の上級生から無関係な他校の生徒に話しかける時にそれまでの丁寧で穏やかな口調から鋭く厳しい口調に変わる。その口調からは明らかな敵意と怒りが感じられた。

「そんなんお前の知ったことじゃねえ！」

「……まあ、俺としてもあまり事を荒立てたくは無いから……今日逢沢さんに暴行を振るつたことを謝罪すれば大目に見よう。さあ、謝れ」

「謝れって言われて謝る奴が何処にいるんだ、行けっ！」

青髪はボールからポケモンを出す。紫色の体に巨大な牙と両腕の鋏、棘の付いた丸い尻尾が特徴的なポケモン“ばけさそりポケモン”のドラピオンである。ドラピオンは鋏を大きく広げては激しく威嚇をする。青髪に続けとばかりに他のミオ学院の生徒も次々とポケ

モンを出す。どうやら臨戦態勢は整っているようだった。

「地面に頭を付けて一言『ごめん』と言えば済んだものを……その歳にもなつて謝ることも出来ないのか！ そっちがその気なら、行くよ。リザードン」

相手に謝罪の意思が無いことを改めて確認すると、恭介はリザードンをポケモンたちの前に対峙させる。リザードンの目の前には総勢20匹以上のポケモンがずらりと並んでいた。だがリザードンはそんな大群を眼前にしても一切動揺する素振りは見せない。それどころか紅の翼を広げて逆に相手を威嚇するほどものであった。

「……」

今にもバトルが始まる。そんな時にもなつて恭介は右腕に巻かれた腕時計を見ていた。そして目の前の敵を睨み付けながら、左手の指を3本だけ立てる。

「3分だ。3分できつちり終わらせてやる」

第22話：3分の決着

「ドラピオン、噛み砕く攻撃だ！」

先に動いたのは青髪のドラピオンである。スピードでは勝てないことを承知の上で突っ込んできた。青髪は自分のドラピオンとリザードンにはレベル差があるのでまともにやりあつては勝てないということに気が付いていた。そのため、青髪たちはリザードンが動く前に全体でリザードン1匹を攻めて戦闘不能にしてしまおうという作戦であつた。基本1匹対大多数のポケモンバトルはルール違反であるが、このような野良バトルにはルールも何もない。それは襲う青髪たちも恭介や悠璃も当然理解している。それ故にそのようなバトルを挑まれたときに勝てるような戦略や戦術を皆考えているものだ。もちろんそれは恭介も例外ではなかった。対するリザードンはふわりと軽く空中に舞い上がってはドラピオンの攻撃をあっさりと回避する。ドラピオンは空中に逃げられたことで攻撃手段を失い、リザードンが降りてくるのを待ち構える。だが、元よりリザードンに地上に降りる気などない。降りたところで地上戦ではドラピオンの方に分があるのだから。それを把握していたリザードンの両翼には徐々にではあるがたくさんの力が集まっていく。

「ドラピオン、気を付けろ！ リザードンの攻撃が

」

それを察知した青髪はすぐにドラピオンにリザードンの攻撃を避けるように指示を出そうとする。だが、青髪が指示を出し終える前にリザードンの両翼から放たれた×字状の風の刃がドラピオンを切り裂く。飛行タイプの特殊攻撃“エアスラッシュ”である。技の威力自体はそれほど高いわけではないのだが、たまに相手を怯ませることのある強力な追加効果を持つ技で、炎タイプと飛行タイプを併せ持つリザードンのサブウェポンとも言える技だった。しかし、悠璃はそのサブウェポンであるはずのエアスラッシュの威力に驚きを隠せなかった。何故なら今の一撃で青髪のドラピオンは戦闘不能となっていたのである。

「ドっ、ドラピオン！？　しっかりしろー!!」

青髪は何度もドラピオンの名を呼ぶが、ドラピオンは気絶してしまっただけで起き上がれそうもない。青髪は諦めてドラピオンをボールに戻す。その凄絶なエアスラッシュの一撃に、後ろに控えていた青髪の仲間たちは呆然と立ち尽くす。彼らもまた悠璃と同様にリザードンの攻撃力にど肝を抜かれている、といった感じだった。

「……もう終わりか？　つまんないな」

恭介は腕を組んで対峙する青髪たちを見据える。一見相手を挑発するかのように言った言葉のように思えたが、恭介のその顔からは驕り高ぶりなどは一切感じられない。それどころか恭介のしっかりと据えられた眼からは「何匹でも来い。全員俺たちが相手をする」といった強い信念が感じられた。そんな恭介に対して本来の集団で挑むという作戦を持っていたはずのミオ学院の生徒たちは黙り込んでしまう。だが唯一抵抗の構えを見せたのは、恭介の上级生にあたるオーダイル使いのトレーナーだった。

「立花ア！ てめえ1年の癖にどこまで俺たちを馬鹿にすれば気が済むんだ！」

「馬鹿になどしていませんよ。まあ、見下げ果ててはいますが」

「うるせえ！ その減らず口、俺が黙らせてやる！ オーダイル、リザードンに“滝登り”だ！」

今朝ヘルガーのカウンターに倒されたオーダイルがボールから飛び出し、いの一番にリザードンに向かっていく。オーダイルの体力はすっかり回復しているようで、水を纏いまるで滝を登るかのような勢いでリザードンに飛びかかる。だがリザードンはそれを軽々と避けると、オーダイルの後ろに回り込んだ。オーダイルはすぐに振り返るとリザードンに向かって再び滝登りを仕掛ける。だがこの時リザードンの体は光を吸収していたため、あまり激しく動くことは出来なかった。草タイプの技“ソーラービーム”である。その威力は草タイプの技の中でもかなり高いものであるが、光を吸収している間大きな隙が生まれることもあって、あまり使用されない技だった。

「ソーラービームだと？ ならエネルギーを吸収し終わる前に一気に叩きつぶしちまえ！」

オーダイルが高らかに咆哮し、改めてリザードンに突撃をかける。リザードンの体にはまだソーラービームを撃てるほどエネルギーは溜まっていない。いくら恭介の鍛えられたリザードンとはいえ、オーダイルの滝登りを受けてしまえばただでは済まないだろう。しかし、そんな状況にあってもやはり恭介は冷静であった。オーダイルが何も考えずに突っ込んで来るのを確認すると、恭介は穏やかな笑みを浮かべて悠璃に微笑みかけた。悠璃はその微笑みを見て何処か胸がチクチクと痛むのを感じると同時に恭介のしようとしていることを一瞬で理解した。

「リザードン、あれを使うんだ」

恭介が指示を出す。オーダイル使いのトレーナーはそれを不思議に思っリザードンをよく見てみた。

「あれって一体……？ まっ、まずいオーダイル！ 止まれ！！」

リザードンの手には赤い色をした葉っぱのようなものが握られていた。恭介の指示を受けてリザードンがそれを自分に使用する。そのアイテムは“パワフルハーブ”であった。パワフルハーブは発動までに時間の掛かる技を一度だけに発動させる道具である。それをリザードンが使ったということはどうか。考えるまでもなかった。リザードンの体に急速に太陽光のエネルギーが充填されていく。恭介がすぐにパワフルハーブを使用した時点では理由がある。それはソーラービームを使用しなかったのには理ワフルハーブを所持していることが察知されやすいということにあった。パワフルハーブを持っていることが相手にばれるとソーラービームがすぐに発射されることが判って警戒されやすく、回避されやすいのである。そこで恭介はリザードンにパワフルハーブを使わずにソーラービームを撃つ態勢を取らせることでリザードンがパワフルハーブを持っていないように相手に錯覚をさせる。当然ソーラービームを発射するまでには時間がかかるのでその間リザードンには隙が生まれる。そうするとどうなるか。その隙に乗じて相手は調子付いて攻撃を仕掛けてくる。リザードンの攻撃までは時間が掛かると思ひ込んで攻撃一本に集中する。その結果防御が疎かになると同時に相手にも隙が生まれるのである。恭介は相手にその隙が生まれるのを心待ちにしていた。現に滝登りの態勢に入っているオーダイルはすぐには防御に転ずることができず、リザードンの真正面から突っ込んで来る。止まりたくても滝を登るかのような攻撃の勢

いが自然とオーダイルを押し進めているために止まることが出来ないのだ。

「リザードン、ソーラービーム」

激しい光と共に放たれた熱光線がオーダイルの体を包み込んでいく。自分からソーラービームに突っ込んでいったため、オーダイルの受けたダメージは相当なものであった。またしても戦闘不能になったオーダイルをボールに戻すと、オーダイル使いのトレーナーは「覚えてろ!」といかにもやられた悪役が吐くような台詞を残して逃げて行く。それに追隨する形で、ミオ学院の生徒たちも恭介と悠璃に何やら恨み節のようなものを吐いてハクタイの森の方へと逃げていった。

「ありがとう。リザードン」

恭介は両腕を上には伸ばしてうーんと伸びをすると、見事なバトルを見せたリザードンの頭をよしよしと撫でてやった。悠璃はそんな恭介とリザードンの立ち振る舞いを見ていつの間にかに恭介を畏怖するかのような感情を覚えていた。

（強い……でもあれはまだ本気じゃない。もし本気を出したら一体どれほどまでの強さをあいつは……）

悠璃がそんな感情を抱いて恭介を見つめていたことなどいざ知らず、恭介は腕時計を見る。

「あつ……やばっ」

すると途端にこれまで爽やかだった恭介の顔が渋くなる。悠璃が不思議そうに首を傾げると、恭介が悠璃の元に歩み寄って時計を見せてきた。

「どうしよう。3分で終わらせるって言ったのに」

恭介はバトル前に自分で言った「3分だ。3分できっちり終わらせる」という言葉を何処か引きずっているようだった。もちろんそんなもの悠璃にとっては心底どうでもいい話である。だが珍しく恭介の顔からあの独特の笑みが消えている。悠璃はそこが気になった。

「3分？ そんなこと別にどうでも良いんじゃない……」

「よくないよ。ほら、まだ2分しか経ってない」

その言葉を聞いた悠璃が「はあ？」とつぶやくと、恭介は地面に置いてあったビニール袋を持ち上げた。悠璃を助け出し、リザードンから降りた時に恭介が地面に置いていたものである。一体何が入っているのだろうか、と悠璃が疑問に思っていると恭介が中身を取り出す。ビニール袋の中から出て来たのは筒状のもの。だがそこからは真っ白な湯気と香ばしい香りが漂ってきた。

「……カップラーメン？」

「ああ。バトル終了と同時に袋から出して食べたかったのにな。ほら、これ熱湯3分って書いてあるでしょう？」

悠璃はまさかとは思ったがそのまさかであった。恭介が切った「3分だ。3分できっちり終わらせる」という啖呵は単にカップラー

メンが出来上がるまでにバトルを終わらせるという意味だったのである。

「まあ良いや。食べられれば問題ない」

そう言っただけで悠璃の目の前で割り箸を割って出来上がったカップラーメンを啜る恭介。麺を啜り、スープを飲んで幸せそうな顔をする。悠璃は呆気に取られた表情で食事する恭介を見つめていた。そして心の中でこう思った。

（こいつ……バカだ）

第22話：3分の決着（後書き）

「3分決着」のカッコいい理由を期待されていた方。
本当に申し訳ありませんでしたorz しかし、恭介はこういう男
なんです（殴

第23話：立花家へ（1）

「さて、何処をやられたの？ 教えて？」

まるでアーボが獲物を一飲みにするかのようにしてカップラーメンを手早く食べ終えた恭介。スープの油がついた口元をハンカチで拭き取ると、悠璃の怪我の様子を確かめてきた。悠璃としては自分の怪我はカップラーメン以下なのかという不信感が残っていたものの、それだからと言って怪我を診てもらわないわけにはいかない。悠璃は取り敢えず目の付くところを探してみた。さっき殴られた顔以外にも悠璃は怪我を負っているのは間違いない。痛みのする場所を探してみると、突き飛ばされたときに制服の上から右の腕と膝を擦り剥いていた。

「目に見えるところはこれだけだね。他は？」

「金属バットで背中を……あと鳩尾も殴られた」

そう言っただけで悠璃は思い当たる箇所をそつと触ってみる。患部はジンジンと痛む感じがした。特に金属バットで殴られた背中中は少し強く触るだけでも激しい痛みが走る。どうやら痣になってしまったようだった。恭介はカップラーメンが入っていたビニール袋から水が入ったペットボトルを取り出す。ペットボトルのラベルには『シロガネ山原産 おいしい水』と書かれていた。おいしい水はカントー地方とジョウト地方に跨るという巨大なシロガネ山で取れた清水を

元につっており、本来はポケモン用の飲み物である。しかし、ポケモンの体力を回復させるような効果があるのだから、人間の怪我に多少なりとも効果がある。恭介はペットボトルの蓋を開けると、悠璃の腕と膝に水をかけた。

「……っ！」

「痛い？　すぐに終わるから我慢して」

ひんやりと冷えた水が傷口から染み込むような感じがする。だがそれと同時に一時的にはあるが、痛みが弱まった感じがした。取り敢えず簡単な消毒は済んだものの、まだ薬を塗ったわけでもないし絆創膏も貼れていない。どちらにせよこのまま放置しておくわけにはいかなかった。それに服の下、殴られた場所もまだ残っている。

「逢沢さん、家どこ？　此处からどのくらいの距離？」

「……何であんたにそんなことを教える必要があるのよ」

「その怪我じゃ歩くの大変でしょ？　リザードンに乗せていってあげるよ」

「余計なお世話よ。気にしないで」

悠璃はこれ以上恭介の世話になるつもりなどなかった。昨日はバトルに乱入され、今日はバトルで対戦相手ながらガブリアスを気遣ってわざと負けを選んだりと何かと借りを多く作ってしまったのである。悠璃はそれがどうしても引掛かった。手助けしてもらうこと自体は有難いことだが、これ以上恭介の世話になることは悠璃の中にあるプライドが許さなかったのだ。

「あっ」

悠璃はそうして強がって歩いてみるが、痛みが全身に走り、よろ

めいて転びそうになる。

「……大丈夫？」

そんな彼女の体を恭介が全身で支えた。悠璃の中でドキッ、という音が鳴り体が震える。悠璃は驚きの混じった眼で恭介の顔を見た。恭介はいつになく真面目な顔をしていた。悠璃が無理して強がっていることは恭介にはすっかりお見通しだったのだ。恭介は悠璃の背中と膝の裏に手を回すと、さっきと同じようにお姫様だったこの態勢を取っては悠璃をリザードンの背中に半ば強引に乗せた。悠璃は無言で手足をじたばたさせて抵抗を試みるが、全身が痛むことから足掻きにすらならない。結局観念した悠璃は癪ではあるが、恭介の好意に甘えることにした。

「私の家はこの道をまっすぐ行っただころにあるわ」

「この道をまっすぐね……時間は徒歩でどれくらい？」

「時間は……10分程度だったか」

今朝急いでいた時の記憶ではあるが、大体そのくらいの時間で学校に到着する手はずだった。今日の場合はあのような事件に巻き込まれたから仕方なかったが。恭介は顎に手を当てて、何かを考え込む。そしてこの後どうするか決めた恭介はリザードンの背中に乗った。リザードンは恭介が乗ったことを確認すると、翼を広げて飛行態勢を取る。

「わかった。よし、リザードン。俺の家まで飛んでくれ」

「はあ？」

悠璃は思わず耳を疑った。そして恭介に改めて今の自分の話を聞いていたかを尋ねた。恭介はいつもの笑顔をに戻ると一言「聞いて

いたよ」と涼しい笑みを浮かべる。

「聞いていたんでしょ？ それなら何であんたの家なんかに」

「逢沢さんの家はここをまっすぐ行つて10分なんでしょ？ 俺の家はそこを右に曲がつて5分のところなんだ」

そう言つて何処か勝ち誇つたかのような表情を浮かべる恭介。恭介曰く、悠璃の怪我を早く治療するためには、徒歩で10分かかかる悠璃の家よりも徒歩で5分で済む自分の家で治療することが得策だと考えたのであつた。悠璃は最初慚然とした表情で恭介の話を聞いていたが、恭介には恭介の考えがあることを知ると恭介の意見に従つた。

+++++

「さあ、着いたよ。此処が俺の家だ」

リザードンに乗つて空を飛ぶこと2分弱。恭介の家には悠璃が思つていたよりも早く着いた。リザードンの背中から降りて恭介の自宅前に立つ悠璃。そこには大きな木造の門があり、入ろうとする者を何処か威圧するかのような重厚な雰囲気を感じられた。

「すつ、凄い家ね……」

「そう？　俺としてはちよつと広すぎて無駄があるように思えるけど」

このような家であつても無理は無い。恭介はハクタイシティ有数の名家『立花家』の一族である。立花家は今から1000年ほど前の時代から伝わる家であり、その時代から主にポケモンと協力することと時代を生き抜いてきた一族だった。当初は伝説のポケモンを崇め奉る神官だった家は中世戦乱の時代を通じて武士となり、文明開化の時代となつてからはポケモントレーナーやブリーダー、研究者など主にポケモンに携わる仕事を生業とする人々を多く生み出してきた。かつてはシンオウ地方以外の地方にも移り住んだことがあつたが、恭介の曾祖父の時代に再び本来の出自であるハクタイシティに居を構え、今に至るのである。悠璃は想像以上に豪華な恭介の家に面を食らつた様子だった。だが家が大きかろうが何だろつが悠璃には本来関係のないこと。「さあ、どうぞ」という恭介の誘いに応じて門を潜ると、玄関までの道を覆うかのように育つた木々のトンネルを通り抜けていく。木の上では野生のムックルやポツポが巣を作り、根元ではナゾノクサやマダツボミが光合成をしている。その様はまるで人間の手が付けられていない、天然の森にいるような気分になった。木のトンネルを抜け、いかにも和式な造りの引き戸に辿り着くと、恭介は鍵を差し込む。鍵が開いた音がした。

「ただいまー」

恭介が室内に向かつて一声掛ける。しかし返事は無い。誰もいないのだろうか、と恭介が首を傾げるが足元をよく見てみると一揃えの靴がある。

「誰かいるはずなんだけどな……まあ良いや。上がって良いよ」

「ええ……じゃあ、おじやまします」

恭介の後ろに付いていく形で悠璃も恭介の家にかかる。長めの廊下を歩いていくと、恭介が不意にすぐ傍の襖を開けた。部屋の中を覗いてみると、畳張りの広い部屋に1人の男性がいるのを見つけた。眼鏡を掛けた真面目そうな青年であり、年齢は20代半ばに見える。青年は机の上に白い布を広げ、その上で石のようなものを削っている。その青年の作業を畳の上に座ったライオンのような鬣が特徴的なポケモンが退屈そうに見つめていた。“がんこうポケモン”のレントラーである。何かの研究でもしているのだろうか、と青年の作業について悠璃は考えるが、それ以前に気になることがあった。それは眼鏡の下、青年の顔が恭介にそっくりだということであった。

第24話：立花家へ（2）

恭介にそっくりな青年は作業に没頭しているようで恭介と悠璃がドアの前に立っただけでも気が付かないようだった。一方でその脇にいるレントラーは恭介を見て「ガウ」と笑顔で微笑む。それを見た青年が石からレントラーの見る方へと視線を移す。

「おお、恭介。帰っていたのか」

「ただいま、兄さん」

青年は石を机の上に置いて恭介と悠璃の2人を見つめる。悠璃は眼鏡の下からの鋭い眼光に全身を貫かれるような感覚を覚えた。顔こそ恭介に似ているものの、抱く印象は全く違う。軽めの恭介に比べてこの青年はそれとなく険しかったのである。この青年の名は立花^{たち}博史^{ひろふみ}。恭介の兄であり、立花家の次男である。年齢は恭介よりも9つ年上の25歳だ。性格は博史にとって妹にあたる雅とは違い、至って真面目な性格で地道な作業を好む傾向にある。それは彼が現在行っていることから判ることではあった。

「良いところに来てくれた。お前、これどう思う？」

現在、博史はヨスガシティにあるシンオウ地方最大規模の大学であるヨスガ大学の大学院にて4年制の修士課程を履修しており、今

年4年目を迎える。そして大学院で専攻している学問はポケモン考古学についてである。主にクロガネ炭鉱やシンオウ地方に広がる地下洞窟などを中心に発掘作業を行っているのだ。恭介と悠璃が帰ってきたことに気が付かなかったのは、発掘された化石の調査に夢中になっていたからである。昔から博史は何かに没頭すると周囲が全く見えなくなることがあった。

「すごく……大きいです」

「お前ふざけているのか。俺は冗談は嫌いだとあれほど……」

「ごめんごめん。これは……化石？」

「ああ、ポケモンの化石だ。石の中心に鋭く尖ったものがあるのが判るだろう」

「うん……ぱつと見たら“爪の化石”に見えるけど」

「俺も最初はその線を考えた……だが」

博史は石についた砂を刷毛で擦って払い落とす。すると化石の中心の尖った部分がより鮮明に現われた。尖った部分は一見爪のように見えるので、このポケモンの化石は“爪の化石”から蘇るアノプスのもののように思える。だが博史の見解は違っていた。博史は爪のようなものの部分を指す。

「アノプスの爪を見てみると判ることなんだが、アノプス系統の爪は二重になっていてな。本当なら此処にそれを示すための線があるはずなんだが……これにはそれがない」

「本当だ。じゃあこれは？」

「調査してみたところ、これは爪ではなくポケモンの“牙の化石”であることが判った」

これまでポケモンの化石は7種類が確認されている。しかし、その中にポケモンの牙の化石はない。これが何を意味するのか、それ

を知った恭介の顔が驚きに包まれる。

「牙つてことは……まさか新種？」

「その可能性が高いだろうな。まだ未確認のポケモンのため解析作業は大変だが、どのポケモンの化石か判ればこれは歴史的発見になる」

兄弟2人が化石談義に話を膨らませる中、悠璃は1人退屈そうに周囲を見回していた。立花家の居間は普通の家と同じような居間の造りになっており、棚の上などには写真立てが飾られている。恭介がリザードンやハッサムと一緒に映っている写真があれば、家族全員で撮られた写真もあった。悠璃はそこで昔の恭介は居ないのだろうか、と思ってその中から恭介の写真を探していた。

「……ん？　そう言えばそこに居る人は誰だ？　見かけない顔だが」「あつ、紹介が遅れた。この人は逢沢　悠璃さん。俺のクラスメートになった人だよ」

恭介はそう言っただけの初対面からさっきの出来事までのことを簡潔に博史に話した。博史は眼鏡のフレームを抑えながら神妙な顔をして話を聞いていた。眼鏡の奥の博史の眼が鋭く輝く。博史は難しい考え事をしているときはこのように眼がギラリと輝くのが特徴である。そしてその鋭い眼光は人やポケモンの様々なものを見抜く。その点は彼の手持ちポケモンであるレントラーに似通ったところがあった。

「ふむ……なるほどな。恭介、お前もつかつかしていらなくなるな」

「えっ？」

「彼女……逢沢　悠璃さんは今後まだまだ伸びる。やがてはお前と

肩を並べるほどのトレーナーになると見た」

悠璃は目の前でそのようなことを言われて何処か照れ臭くなった。ただ、博史からして「うかうかしてられない」と戒められた形の恭介が悠璃が強くなることを喜んでいるのが何処か気になった。本来恭介はこのような時は一緒に笑って喜んでいるような場合ではないはずである。しかしその状況にあってもこのような態度ということとは何を考えているのだろうか。悠璃は小さくため息をついた。

「兄さんの目利き、観察力は凄いからね。きっと当たると思うよ」
「まあ、これは占いみたいなものだからな。当たるも八卦当たらぬも八卦……軽い気持ちで受け取ってくれ。それよりも、彼女の怪我を治してやらなければならぬんじゃないか？」

博史曰く、救急箱は此処とは違う部屋である客間にあるとのことだった。悠璃は無言で博史にペコリと頭を下げると、案内する恭介に従って居間を出て行く。博史は顎に手を置いてまだ何かを考えている様子だった。

「ふむ……逢沢 悠璃」(……85・59・84といったところか。まさか恭介が異性を家に連れてくるとはな……もしやもう既にそういう関係なのか？ 何ということだ。雅ばかりではなく末の弟・恭介にまで遅れを取るとは！ 立花 博史、一生の不覚！)

ぶつぶつと何かを呟く博史の横ではレントラーが大きいため息をついていた。

「兄さんの観察力……俺はあれをバトルの参考にしている」

兄が1人居間で苦悶していることなどいざ知らず、恭介は博史のことを悠璃に話していた。博史の観察力は研究や人物を知ることだけではなく、バトルにも如何なく生かされている。相手・相手のポケモン・自分・自分のポケモン、そして周囲の環境全てを観察し、考察するのだ。それをバトルの時に欠かさず行うことで、バトルのときに必要な観察力と集中力を養える。恭介はそこを博史から学んでいたのである。現にエキシビジョンマッチでガブリアスの異変に気が付いたことについては、これを重視したことの賜物とも言えた。

「観察力が……確かに周囲をちゃんと確認していれば後ろから殴られることもなかったかも」

「でもあれは仕方ないと思うよ。逢沢さんも“一応”可憐な女の子なんだし」

「……一応って何だ。一応って」

そんな話を話しているうちに目指していた客間へと辿り着いた。恭介は博史から聞いた戸棚の上を探す。すると、そこに緑色で十字が描かれた40cm四方の直方体の箱があった。恭介は戸棚の上からそれを降ろして中を開ける。蓋を開くと、保健室でよく嗅ぐような消毒液や湿布の臭いが部屋中に広がった。恭介はそこから消毒液を取り出し、脱脂綿に染み込ませる。そして悠璃の擦り剥いた患部にそれをゆっくりと押し当てた。

「あつ……痛つ……」

「我慢して。すぐだから」

消毒液が染み込んだのを確認すると、恭介はそこに大きめの絆創膏を貼る。腕と膝の処理は無事に終了した。だがあまりの痛みに悠

璃の眼にはうつすらと涙が浮かんでいた。それに気づいた恭介は未使用の脱脂綿を手に取ると、それを悠璃の眼の周りに優しく当てる。悠璃の蒼い瞳にはまるで母親のような恭介の微笑みが映り込む。悠璃は恭介の顔を見るのが突然嫌になり、途端に恭介から顔を逸らした。何故恭介の顔を見ているのが嫌なのか、その理由は悠璃自身にも判らなかった。

「これで大丈夫だ」

「あ、ありがとう……」

「どうしまして。はい、痛い痛いのとんでけーっ！」

恭介が年甲斐もなく無邪気にはしゃぐ。それを見た悠璃は呆れたような表情を浮かべる。

「何それ。私も子供じゃないんだけど」

「法律上では俺も逢沢さんもまだ子供だよ」

「……うるさい。黙れ」

眼に見える部分の治療は完了した。だが次は殴られた服の下部分である。悠璃は恭介がそこをどうやって手当てするのかが気になった。ただ殴られて痣になっている部分など、はっきり言ってしまうと治療の方法などあるかどうかすらも判らないのである。

「もう良いわ。此処の怪我を手当てしてくれただけで十分」

「そういうわけにはいかないよ。もしかしたら酷い怪我になっている可能性があるからね」

「でも……服の下よ？ どうやって手当てするの」

「そうだな……じゃあ制服脱いで」

恭介がそれを言い、悠璃の顔が赤面した瞬間である。

「このストコドッコイ!!」

客間の引き戸が勢い良く開き、1人の少女が乗り込んできた。制服は悠璃のものと同じハクタイ高校の女子生徒の制服を身に纏っていた。この少女の名は立花^{たちばな}希^{のぞみ}。恭介の姉であり、立花家の次女。ハクタイ高校の3年生であると同時に昨年まで生徒会長を務めていた人物だ。

第24話：立花家へ(2) (後書き)

弟が変わっている。その兄妹も変わっている。

これは定理ですよ。

第25話：立花家へ（3）

「全く、あんたって奴は！　どうしてこうもデリカシーが無いのよ！」

恭介の姉・希が拳骨で恭介の頭を殴る。恭介は何故自分が希に殴られているのか判っていなかった。

客観的に見てみると、その理由は明らかである。恭介に一切悪気が無かったにしても、異性の前で年頃の少女に対して服を脱げなどと言ってしまうえば、明らかに少女の側が傷ついてしまう。そのため希の一連の行動は理に適ったものだった。ただ、この行動は決して単なる暴力ではなく、希の姉として弟を想っての行動でもある。希はそれを恭介に理解してほしいとも思っていたので、その面持ちは何とも複雑そうだった。

「じゃあ逢沢さんの怪我はどうするの？」

「私がやるわ。あんたは部屋に戻ってなさい」

そう言つて半ば追い出す形で恭介を締め出す希。恭介の足音が段々小さくなるのを確認すると、希は疲れた顔をして「ふう」と溜息をついた。

「ごめんなさいね。変な弟で」

「いえ。まあ……あつ、あの私は……」

「逢沢 悠璃さんでしょ？ 私も一生徒としてバトルを見させてもらったから知ってるわ。あんな凄いバトル、久々に見ちゃった」

希は前生徒会長として、一般の生徒たちとはまた離れた場所でバトルを見届けていたのである。ちなみに恭介の姉というだけあつてか、最後恭介がガブリアスの怪我に気づいて攻撃を躊躇ったことに気付いていた。悠璃はそれを「自分の負け」と捉えていたが、希は悠璃とは違ってあのバトルを「悠璃の勝利」として見なしている。悠璃が何故、と尋ねると、希は明朗にはつきりと答えた。確かに恭介の行動は悠璃のガブリアスを思つてのことだったかもしれない。しかし希からしてみれば真剣勝負のあの場で手を抜くこと自体が相手に対する無礼に当たるところである。

希は幼いころから正義感の強い性格で曲がつたことや非常識なことなどが大嫌いな少女であつた。幼稚園で悪ガキに友達が泣かされているのを見たらすぐに助けに入つてはその悪ガキをとつちめ、小学校で授業を真面目に受けずに騒いだり立ち歩いたりした生徒がいると即刻厳重注意をするなど、ある意味教師以上に規律に厳しかったのだ。それでいて友達思いでポケモンの腕も確かなことから瞬く間に生徒や教師、保護者の信望を集め、やがてはハクタイ高校の生徒会長を勤めるにまで至つた。そのため癖の強い立花家の5人の子どもの中では最もまともな人間と言えた。

「じゃあ……ちょっと制服脱いでもらえるかな」

希は手慣れた感じで救急箱から塗り薬を取り出す。悠璃は首元のリボンを外すと、ワイシャツを脱ぐ。悠璃の背中が露わになった。元来色白な悠璃の背中は10代ということもあつてとても綺麗なものであつた。だが、綺麗な背中を持っている故に、金属バットで殴られた部分の痣はより痛々しかった。

「……！ 酷い痣。これは何で殴られたの？」

「金属バットです」

「あいつら……」

それを聞いた希の顔が憤怒に染まっていく。握り拳を作ってはそれをしきりに床の畳に叩きつけた。希が生徒会長になる前、新入生として入ってきたのがオーダイル使いのあの男子生徒を中心とした不良グループである。彼らが入学したことで当時の1年生にはいじめ、カツアゲなどの校内暴力が多発し、上級生として希は悩まされ続けていた。

生徒会長になってからは希を中心とした生徒会が問題の解決に当たり、時には希が直接彼らの元に乗り込んで主言葉（たまに実力行使）で品行を改めるように言いつけたこともあった。だが、強い力を振りかざせば振りがさすほど彼らは反発し、その対立は学内に無用な混乱を招いてしまった。希がそんな目の上の瘤に頭を抱えていたまま1年が過ぎ、希は高校生活3年目の春を迎えた。今年の春もいつもと変わらず新入生が入学してくる。それが恭介たち今の1年生であった。

恭介は中学時代から優秀なトレーナーとして名を馳せており、かつ希の弟ということもあって早速不良たちの格好の的となった。もちろん恭介はそんなことなど気にも止めず、クラスメートたちと楽しく毎日を過ごしていたのだが、馬鹿に真面目な希はそれに心を痛めた。

自分のせいで恭介をはじめ多くの人に迷惑をかけているのではないかと。

そんな姉の気持ちに真っ先に気付いたのが恭介であった。彼はその知名度から新入生歓迎バトルの新入生代表に選出された。本来な

ら上級生代表が対戦相手を務め、その代表は生徒会長が務めている前例が多かったので希は恭介とのバトルになると思っていた。だが、恭介は希と対戦することを断わり、対戦相手に不良グループのリーダーであるオーダイル使いの男子生徒を指名したのである。希は恭介たちにこれ以上迷惑を掛けたくない、と恭介を説得しようとしたが恭介自身は何処吹く風。説得には応じなかった。

そして希が心配する中、数日が経ち、バトルの当日となった。バトルに臨む際、恭介は希の元を訪れ、こんな言葉を残した。

『姉さん、俺に任せて。俺が全てを終わらせるから』

そう言っただけでバトルに臨んだ恭介。そして勝敗はすぐに付いた。相性で有利なはずのオーダイルは恭介のリザードンに指一本触れることなく惨敗した。それからと言うものの不良たちの暴力行為は瞬く間に鎮静化した。だが、それは表立ってのことであり、水面下では今日の悠璃や今朝の美夏のように悪行を重ねていたと思われる。

「立花の奴……そんな事を」

「ねえ、正直あいつ変わっているでしょ？」

実の姉の前でどう答えるべきか、と迷った悠璃であるが、希の「正直に言っていよいよ」という言葉にコクリと頷く。昨日・今日と僅か2日間という短い時間であるが、多少関わってみて悠璃にも恭介が他の人間に比べて多少変わっているということは判っていた。ただ変わっているというだけならまだしも、悠璃は恭介という人間の正体が掴めず、苦手意識と共に嫌悪感をも抱いていた。悠璃は正直にそう述べると、希は苦笑いをする。

「そう思われても不思議じゃないかもね。それは私も認める。でも」

途端に希の言葉が詰まる。希の双眸からはポロポロと涙が毀れていた。

「あの新生歓迎バトルに出る前の恭介の言葉……私はすごく嬉しかった。私、あいつのあの言葉に救われたの」

悠璃の背中に薬を塗り、患部にガーゼを貼り付けると希はそのまま泣き始めた。彼女は新生歓迎バトルに恭介がどのような気持ちで臨んでいたか。その時の恭介の真意を理解した時、彼女の恭介に対する感情が溢れだしたのだ。

「あの……大丈夫ですか？」

悠璃は何とかして宥めようとしたが、どうすれば良いか判らず困っていた。取り敢えず制服を着込んで自分の部屋にいる恭介を呼びに行こうとした矢先。廊下からドスドスと何かの足音が聞こえてくる。悠璃が何だろうと思っていると、突然客間の襖が勢いよく開かれる。

「あつ、いらつしゃーい！
博兄ひろにいから話は聞いたわよ！ キョーく
んの友達なんだってね！」

まるで都心を歩くギャルのような風貌の女性が目の前に立っていた。立花家長女・雅である。雅は博史と同じヨスガ大学に通っており、今年で4年生となる。就職難と言われるこの時代に早々と就職内定を取り、あとは卒業論文を進めるだけとあって大学生最後の1年を悠々自適に過ごしていた。そして今日は大学の講義が早めに終わったこともあって、手持ちポケモンの空を飛ぶを使い真つすぐ家

に帰ってきたのである。

（別に立花とは友達にはなった覚えはないんだが……というかキヨ
ーくんって）

悠璃は複雑な気持ちではあったが、今はそんなことを考えている
場合ではない。悠璃は希のことを雅に相談した。雅はまたか、とい
う表情を浮かべると「任せて」と言っただけで泣きじゃくる妹の元へと歩
み寄った。

「ほら、3年生が後輩の前で泣かない！」

「お、おねえちゃん……」

「あんた真面目すぎるのよ。私を見習ってもっと毎日楽しく生き
なさい！」

「でも私のせいで恭介や恭介の友達に迷惑が……」

「……大丈夫よ。あんたは一生懸命やってるわ。だからそんなに自
分を責めるのは止めなさい。あんたがそんなに悲しんでいるとキヨ
ーくんも悲しむわよ」

雅の胸の中で希が泣き止んだ後、恭介と博史が部屋に入ってきた。
博史曰く、恭介が昼食を作ったので、悠璃も一緒に食べていってほ
うかということだった。悠璃は恭介が料理も出来るということに
驚きを隠せなかった。あまりその腕に信憑性が持てなかったが、そ
れだけのことをして貰った以上無碍には出来ないということで恭介
たちの好意に甘えることにした。

第26話：立花家へ（4）

再び今に通された悠璃が目にしたのは、5人分のチャーハンのお皿だった。これらの昼食は恭介が全て1人で作ったのだ。恭介はこう見えて5人きょうだいの中でも一番料理が得意であり、母親が仕事で帰るのが遅い時、こうして恭介が皆の分の料理を作ることが多かった。そのためいつの間にか料理の腕がめきめきと上達してしまっただけという。

「本当は私やお姉ちゃんがやらなきゃ駄目なのにね……」

何処か自嘲するかのようには話す希。脇では何故か雅がニヤニヤしていた。

「とか何とか言っちゃって本当は大好きな恭介の料理が食べれて嬉しいんですよ？」

「な……なっ、そんなこと！」

「弟が可愛く思える気持ちは判るわ。同じ姉としてね」

「ブラコンのお姉ちゃんと一緒にしないでよ！」

小馬鹿にするような口調でからかう雅。希は目の前に悠璃が居ることも忘れて雅に飛び掛ろうとする。そんな2人に「お客さんの前で何をしている！」という博史の雷が落ちた。“イッシュ地方”というシンオウ地方とはあまり交流のない遠い地方へ単身赴任してい

る父・雅幸^{まさゆき}と仕事で家に帰れないことが多い長男・雅治^{まさはる}に代わって博史は家の大黒柱のような立場であった。そのため、姉妹喧嘩（雅と希はよく喧嘩をするので）が起きた場合は常に博史が中心となつて裁定をするのである。もちろん几帳面なところが目立つ博史の説教は異常に長いので、雅と希からは嫌がられているのであるが。

「ほら、飯が冷めるぞ。早く頂こう」

「そうだね。逢沢さんもどうぞ？」

恭介に手招きされ、恭介の隣に座る悠璃。見た目は普通のチャーハンだ。だが本当に食べれる代物なのだろうか。悠璃が蓮華を手にしたままじつとチャーハンを見つめていると、不意に横から別の蓮華が伸びてきて、悠璃の皿から小さじ1杯分くらいのチャーハンを掬い上げた。蓮華の持ち主は恭介であった。恭介は悠璃の方を見ながらチャーハンを口に運んだ。悠璃が何がしたいのか、と思っていると恭介は「うん。我ながら上出来」とニッコリと微笑んだ。恭介は悠璃が自分の作ったチャーハンの味を警戒していたことに気付いていた。いわば恭介は毒味役を自ら買って出たのである。恭介の言葉を信じて蓮華を口に運ぶ悠璃。すると、口の中にはとても香ばしいチャーハンの味と香りが広がった。

「お……美味しい」

「本当？ 良かった」

あまりの美味しさに思わず顔が綻ぶ悠璃。それを見た恭介はほつと胸を撫で下ろした。実は恭介がこうして家族以外に料理を振る舞うのは初めてだったので、実はかなり緊張していた。普段ポケモンバトルなどでは緊張の色1つ見せずに冷静に戦う恭介からしてみればとても意外なことであった。

「さすがキヨークン！ 今の世の中男の子も料理できないと駄目だからね」

「そんなものなのか？」（なるほど……俺も後で料理の練習をするか）

恭介の料理は博史や雅にも絶賛だった。しかしそんな中で唯一希だけが複雑な表情を浮かべていた。恭介の料理は確かに美味なのだが、希には何か合わないようだった。希は難しい顔しながら立ち上がると、襖を開けてそのまま部屋を出て行った。このような美味しい料理が口に合わないのだろうか、と悠璃が首を傾げる。しかし、希が出て行ったことに関しては恭介も博史も雅も全く気に留めていないようだった。

「あゝやっぱりこれがないとね」

「お客さんの前では程ほどにしなさいよ」

希は数分もしないうちに戻って来た。その手には無色透明のチューブが握られており、中に入っている緑色の物体が透けていることで緑色に見えた。小さな手の隙間からは「さ」という字が見える。一体何なのかと思っていると、希は突然チューブの蓋を開ける。そしてチューブを力強く絞ってその中身をチャーハンの上に大量に出したのだ。

「!？」

悠璃はそれを見て呆然とした。チューブの中身はワサビだった。希は性格自体は真面目で心優しいのだが、博史や雅、恭介と比べてとにかく味覚音痴なのである。そのため上手な料理の味が不味く感じてしまい、それを力バーするために何にでもワサビを掛けて食べる癖が付いてしまったのだ。もちろんそんな味覚の持ち主という

こともあつてか弁当すらろくに作ることが出来ず、恭介や雅の世話となるが多かった。

「あれ、どうしたの逢沢さん」

「いや……楽しい家庭ね、此処は」

恭介に作ってもらった料理を食べ終わった後、悠璃は恭介に頼みごとをした。悠璃がさつきからずっと気になっていたこと。恭介のリザードンの出したあのエアスラッシュのことであつた。レベル差があるとはいえ、ドラピオンを一撃で戦闘不能にまで追いこんだあの攻撃力の正体を知りたかつたのだ。悠璃は最初尋ねるときに相手の手を盗み見るような形になつてしまつたのではないかと躊躇したが、恭介はそんな事を気にすることなく見せてくれるようだった。立花家の縁側に呼ばれ、悠璃はそこに腰掛けながら様子を見つめる。庭では制服から普段着の白い着物に着替えた恭介がリザードンをボールから出す。

「あんたいつもその格好なの？」

「過ごしやすいからね。さて、さつきのエアスラッシュを見せればいいんだね？ リザードン！」

恭介の指示の下、リザードンが再び飛び上がる。そして両方の翼にエネルギーを集中させてはドラピオンに放つたような×字状の風の刃を放つ。×字状に象られたエアスラッシュは物凄いスピードで飛んで行き、それは庭にあつた大きな岩へと命中した。ポケモンの相性の上では飛行タイプの攻撃技は岩タイプのポケモンには効果は今ひとつである。しかし、ポケモンの技の使い方と威力、レベルや実力の差によつてはその定義をあつさり覆すことも容易ではない。

悠璃はそれを目の当たりにした。何と今のエアスラッシュの一撃は大岩を貫き、地面までもが×字状に切り裂かれていたのである。当然岩や地面が切り裂かれた音など全く聞こえなかった。ただこの技に威力には指示を出した恭介も驚いていたようで、大岩を覗いては悠璃をそっちに呼び寄せようと手招きをしている。悠璃はそれを無視すると、恭介に改めて今の攻撃について問いただした。今の攻撃はエアスラッシュの割に威力が高すぎるのではないかと。悠璃のその疑念は変わらず晴れることが無かったのである。そして悠璃がリザードンに興味を持っていることに恭介は喜んでいた。今日のバトルではあのような結末になってしまい、ギクシャクした仲が多少改善されるのではないかと。

「今のエアスラッシュを見て感づいたこととかはある？」

「えっ……まだわからないわ」

「じゃあ今度もエアスラッシュを撃ってみるね。それを見れば判るよ」

リザードンが再び飛び上がってエアスラッシュを放つためのエネルギーを翼に集中させる。そしてもう1発エアスラッシュを放ったのだが、今度の攻撃はさっきのエアスラッシュとの違いは誰の目にも見て取れた。今の攻撃を放つ際、リザードンは右の翼のみに力を集めていたのだ。そして繰り出されるのは×字状ではなく三日月状の風の刃であり、肝心のパワー、スピード共に大きく劣っていた。

「今のが“普通”のエアスラッシュ」

「風の刃が1つ……」

「そう。そしてさっきは2つ出たけど、何故2つの刃を出せたのか」

「今は片翼のみで攻撃したけど、さっきのは両翼で攻撃した……」

「正解」

そう。恭介のリザードンが使った両翼を使って出したエアスラッシュは、通常のエアスラッシュを出すモーションで一度に2発のエアスラッシュを放ったのだ。恭介はかつてトゲキッスが出ていたポケモンバトルを見て感じ取ったことがあった。何故トゲキッスを初めてとしたエアスラッシュを覚えるポケモンは左右両方に翼があるのにも関わらず片方の翼のみしか使わないで、エアスラッシュを放つのだろうか。実際の結論としては空中で両方の翼を使ってエアスラッシュを放ってしまうとバランスを崩してしまい、相手に攻撃させる隙を与えてしまうからなのであるが、もし両方の翼から一度に2発のエアスラッシュを放てばどのようなになるのか。恭介はそんな好奇心から「リザードンはエアスラッシュをそのように放つことが出来るのだろうか」と、トレーニングを重ねたのだ。その結果が今のリザードンが放ったエアスラッシュだ。威力や技のスピードなどは2発のエアスラッシュが相乗することで約2倍にまで膨れ上がっていたのである。そしてエアスラッシュを1発放つのと大して変わらぬ隙でこの攻撃を出せることになる。つまり、恭介のリザードンがそうやってエアスラッシュを放つということは、相手は一度に2発分のエアスラッシュのダメージを受けるといったことだった。

「何て奇想天外な……」

その言葉の裏で悠璃は改めて恭介がポケモントレーナーとして、リザードンがその恭介のポケモンとして優秀なことを思い知らされた気分だった。だがその中で同じように燃え上がるのはそれほどの強者を倒したい、という決意であった。

+++++

「はあっ……はあっ……」

悠璃が恭介の家に居たのと丁度同時刻。青髪のトレーナーを始めとするミオ学院の生徒たちと、オーダイル使いのトレーナーら不良学生たちはハクタイの森の中腹まで無我夢中に逃げて来た。彼らは春頃に恭介に敗れたことで自分たちの立場が危うくなること危惧して、密かにミオ学院と協力体制を結んでいたのである。

「何だよあの強さ……聞いていた以上じゃねえか!」

「春の時に一回戦ったがあの時よりずっと強くなってやがる……」

「マジかよ。これはウチの生徒会に報告したほうが良さそうだな。俺たちじゃとても太刀打ち出来ないぞ?」

「お前たちのところの生徒会?」

ハクタイ高校に生徒会があるように、他の街の高校にも生徒会というものは当然存在する。それはミオ学院も例外ではなかった。しかしミオ学院の生徒会のことについてオーダイル使いのトレーナーは何も知らない。ミオ学院の生徒会の情報に関しては噂1つ聞こえてこなかったのである。そのためオーダイル使いのトレーナーらハクタイ高校の不良勢力はミオ学院の規模には油断できない様子であった。

「ミオ学院の生徒会って……」

『私たちに何か疑問でもありますか？』

「んなっ！？ 何処だ、何処から……」

オーダイル使いの耳に風に乗って少女の声が届く。慌てて周囲を見回すと、鬱蒼と繁るハクタイの森の木々を駆け抜けて1人の少女が木の上から降りてきた。少女は背後に“みつりんポケモン”のジュカインを従えており、その出で立ちはまるでネットワークが溢れる現代には合わないの1のような忍者装束であった。

「ハクタイ高校の方ですね。色々と聞きたいことがあるのです……
我らの悲願の為に」

第二章 終

第三章に続く

第26話：立花家へ（4）（後書き）

第二章はこれで終了となります。

第三章からは4組他生徒のバトルがあったり、ミオ学院の面々が物語に絡んできたりします。

第27話：ホームルーム

次の日、悠璃は恭介から貰った薬と包帯を付けて登校した。薬の効力は中々のもので、患部を強く触るなど、故意に弄る以外では痛みは殆ど感じられなくなっていた。またガブリアスの脚の方も八割方回復したといってもいい状態で、その辺りはポケモンという生き物に備わる自然治癒力の強さを大きく示した形となっていた。しかし、背中はともかく腕や脚など人目に触れるところを包帯で巻いていたりもすると、自然に注目を集めてしまうようで、編入早々昨日のバトルで活躍した悠璃の姿が印象強かったハクタイ高校の生徒たちは悠璃の様相に眼を白黒させていた。

（やはり注目されるものなのか……あまり良い気分はしないわ）

悠璃がそんな事を考えていると、後ろから1人の女子生徒が駆け寄ってくる。美夏だった。

「おはよう。悠璃^{ゆう}ちゃん」

「ゆ……悠璃ちゃん？」

“悠璃ちゃん”という聞き慣れない呼び名に戸惑う様子を見せる悠璃。美夏曰く“逢沢さん”のように苗字で呼ぶのは何処か堅苦しいのではないか、ということの名前にちゃん付けで女友達を呼ぶことにし

ているという。最初は何処か子供っぽいあだ名に渋い顔をする悠璃であったが、最終的には了承した。代わりに悠璃はその交換条件と称して美夏のことを“美夏^{みか}”と下の名前を呼び捨てにして呼ぶことを決めた。美夏は呼び捨てに多少戸惑ったような顔をしたものの、「いいよ」と悠璃と同じようにその呼び名で呼ぶことを許す。2人は苦笑いしながら、その呼び名で呼び合ってみた。

「ねえ、悠ちゃん」

「何？ 美夏」

最初は何処か照れくさい感じもしたが、2人はすぐに慣れたようだった。

和気藹々とした雰囲気になる中、美夏は自分たちを見て何かひそひそ話をしながら通り過ぎていくハクタイ高校の生徒たちの様子が気が付く。美夏はなんでかな、と首を傾げる。悠璃はそれほど知らなくても良い理由だ、と一言戒めるように言っと、腕と脚の怪我を見せた。怪我を見た瞬間美夏の表情が凍りつく。

「どうしたの、その包帯!？」

「昨日色々あってね……」

「もしかして、昨日の朝に私にちよっかいを出してきた人たちに？」

悠璃は美夏の思わぬ鋭さに眼を見開く。何故それを美夏が知っているのだろうか。今の時点でこのことを知っているのは1年4組では悠璃と恭介だけのはず。そうなるとう悠璃の矛先はもう1人の関係者へと向く。

「立花……お喋りな奴」

「うっん。私立花くんからはそんなこと聞いていないよ?」

「えっ? じゃあどうして」

「昨日帰り道で立花くんに出会ったの。その時立花くんが私に『朝の不良たちが襲ってくるかもしれないから途中までボディーガードも兼ねて途中まで一緒に帰るよ』とリザードンに乗りながら言ってきたんだ。でも私はその時紗矢ちゃんや凜ちゃんと一緒に帰っていたし、2人ともわたしなんかよりずっとポケモンバトル強いからいざというときは大丈夫だよ、って断ったんだ」

ちなみにその時悠璃に矛先が向かうんじゃないか、と恭介に言ったのは美夏である。恭介はそれを聞くと、すぐにリザードンに乗って悠璃を探しに学校などハクタイシティの多くの場所を探し回ったという。悠璃は恭介に助けてもらった後、家に連れて行かれ、治療をしてもらったことなど昨日の下校時に起きた出来事を全て伝えた。美夏はポケモンが戦えない状況にあるポケモントレーナーを集団で狙うなんて最低と息巻いていたが、それと同時にたった1人で悠璃を助けた恭介の話に眼を輝かせていた。

「やっぱり立花くんって凄いやね。悠ちゃんがピンチってことを聞くとすぐに探しにいくんだもん」

（その途中にコンビニでカップラーメンを買ってお湯を入れていたけどね）

そうこう話しているうちに、2人は学校に着いた。これからはハクタイ高校の生活が始まる。そう思った悠璃はこのような出来事などどつと忘れてポケモンについての勉強に取り組みたいという思いがとても強かった。教室に着き、いつもの席に座る2人。恭介はまだ学校には来ていないようだった。しかしその間、クラスの女生徒たちは悠璃が包帯を巻いていることに気が付き、腕や脚、そして背中、怪我にまで触れ始める。あまり大事にしたいくない悠璃の願いとは裏腹に、噂は瞬く間に1年生の間に広がってしまった。

「まったく、逢沢さんはお喋りなんだから」

始業時間ギリギリに登校した恭介は子供をあやすような笑みでそう言った。悠璃はいつも（？）のようにそれを無視した。昨日は新学期開始日ならびにエキシビジョンバトルもあったので、学校主催のバトルなど娯楽的なことは行われない。普通の高校同様に勉強が始まるのだ。比較的学力は高いほうに位置する悠璃にとっては授業もそれほど難しく感じずに過ごすことが出来た。恭介がよく悠璃の方に振り返ってくることを除けば。そして、授業は4時間目。教室の壁に貼られた時間割表によると、この曜日のこの時間の場所には「HM」と書かれていた。「HM」とはホームルームを略した単語である。この時間は授業以外で学校や学級の役割分担などを行うためにクラス単位で設けられていた。そして進行役は先生ではなく学級委員が中心となつて務めることとなっていた。このクラスの学級委員である恭介が教壇の後ろに立ち、生徒たちと対面する形になる。その後ろでは書記役の男子生徒が黒板の前に立った。

「起立、礼、チャーム」

恭介がそう言うと、書記役の生徒と翔がわざとずっこけた。それと同時に教室中で笑いが起こる。これは今から約30年ほど前にとあるお笑いグループが学校をモチーフにしたコントをしていた際に使われたボケの応用である。恭介はたまにこのようなボケを言つて教室の空気を和ませることがある。このようなくだらないギャグを堂々と言うところもまた恭介が皆に好かれる一因であった。

（何してるんだあいつは）

もちろん悠璃にはその面白さは伝わっていなかった。

「逢沢さん、これは起立・礼・着席をもじったもので……」

「……説明はいいからさっさと進めろ。バカ」

悠璃に叱られる形になった恭介は、気を取り直してホームルームの進行に戻る。それと同時に恭介の顔が真剣なものとなる。

「今日の議題は……という前にまずは皆に言っておくことがある。まあもう噂になっているから知っているとは思うけど……ミオ学院のことだ。昨日下校途中にミオ学院の生徒とうちの高校の不良2年生に逢沢さんが襲われた。奴らは逢沢さんのガブリアスが満足に戦えない状況にある中で逢沢さん自身に暴行を加えた。うちの高校の不良たちは3年の姉さ……立花前生徒会長と2年の真田生徒会長が先生方と相談して、処分を下してくれるから良いとして、問題はミオ学院。最近はコトブキシティやクロガネシティ、ソノオタウンのように俺たちと同じポケモントレーナーが通う高校がある街に何度も出没しては闇討ち紛いの行為でその生徒を襲っているという。昨日、一昨日と逢沢さんが襲われたことを見ると、きつとまたハクタイシティにやってくるだろう。だから皆は出来るだけ3人以上の複数で帰ってくれるようにしてほしいんだ。1人だと狙われる危険性が高いからね。だからといって襲われなくなるとは言い切れないけど……これ以上皆を危険にさらしたくない。取り敢えず俺は生徒会や他のクラスの学級委員とも協力して今後の対応を話し合う。あいつらの行動の目的を調べないとね。もちろんこれ以上好き勝手はさせないし、土足でこのハクタイシティにも踏み込ませない。だから、皆にも協力してほしい」

淡々と話す恭介の前に教室中がシーンと静まり返る。悠璃はまず恭介という人間がわからなくなっていた。普段の態度はふざけているし、悠璃に対する態度も何処か気に食わない。だがそれと同時にクラス全体のことを考えていたりもする。見方によって如何様

にも姿を変える。まるでメタモンのような人間に見えた。

「……」

教室が静まり返ったのを受けて恭介は突然パン！と一拍手を叩く。

「さて、暗い話はここまで！ 本題に入るよ。来週から始まる文化祭についてだ！」

破顔一笑。恭介の顔にはいつもの笑顔が戻っていた。

第27話：ホームルーム（後書き）

これから第三章が始まります。第三章は結構長めになると思います。

ちなみに「起立、礼、チャーム」の元ネタは「8時だよ！全員集合！」です。

放送していた頃は自分も生まれていないのですが、テレビの再放送とかで知ってはまった人間ですw

第28話：18対18

ハクタイ高校では毎年10月に文化祭が行われる。日程は2日間あり、1日目は各クラスがそれぞれ出し物を行う通常よく見られる文化祭の形式のまま行われる。それに対して2日目は主にハクタイ高校など学生トレーナーが通う高校のみで行われる生徒によるバトルーナメントが開催される。学年別にトーナメントを組み、学年別の優勝者を決めるこの年に1度の大会こそがハクタイ高校の文化祭の一番の目玉と言えた。

そして今日はホームルームの時間を使って1日目のクラスの出し物を決めなければならない。悠璃はそのような話は全く聞いていなかったのだが、美夏によるとどのような出し物をするかは後期が始まる前までに粗方決めてしまったらしい。今日は2つにまで絞られた候補からどちらかを選ぶのが一番の議題だった。

「それでどんな候補があるの？」

「えつとね。『お化け屋敷』と『喫茶店』だよ」

またワンパターンな、と悠璃は思ったが高校の文化祭だから規模的なことについては仕方ない。だがどちらの候補を選ぶかでクラスの生徒の目の色は変わる。恭介の指示で書記の生徒が黒板にお化け屋敷と喫茶店の文字を書く。最終採決に入るに当たって恭介と書記の生徒を除くこのクラスの全生徒36人はどちらを希望するかを選ばなくてはならないのだ。黒板の左側に書かれたお化け屋敷を希望

する生徒は教室の左側へ、黒板の右側に書かれた喫茶店を希望する生徒は教室の右側へ、それぞれ移動する。しかし、悠璃はどちらにしようかまだ決めかねていたため、1人教室の中心に取り残される形になってしまった。そんな悠璃を見て、左右から誘惑の声がちらほらと伸び始める。

「逢沢！ 迷ってるなら俺のところへ！」

「悠璃！ こっちのお化け屋敷に来なさいよ！」

「此方の方がきつと盛り上がりますよ」

翔、紗矢、凜をはじめとした生徒たちが悠璃をお化け屋敷側へ引き込もうとする。悠璃としては騒ぐのが好きそうな翔は判るとしても、泣き虫の紗矢とおしとやかな凜がお化け屋敷派というのがどうにも合点が行かなかった。もちろんこの3人は単に楽しいからといった理由でお化け屋敷を選択などではない。それぞれ胸の奥に秘めた思惑があり、悠璃の眼にはそれがまじまじと見えていた。

（お化け屋敷で風紀委員を脅かしてまた泣かしてやるぜ）

（お化け屋敷で久坂を脅かして今度こそ見返してやるんだから）

（怖がる逢沢さんも見てみたいですね）

「悠ちゃん！ 一緒に喫茶店やろうよ！」

「こっちの方が準備は楽だぞ」

その一方で美夏や蛍が喫茶店派として悠璃を誘う。美夏は単純にお化け屋敷といった類が苦手であることから早くから喫茶店希望に回っており、蛍は自分があまり派手なのを好まないことや、準備期間や費用でよりリーズナブルな喫茶店を選ぶなどあくまで合理的な一面があった。悠璃はそれなりに考えもしたが、正直どちらでも構わないしどうせなら2日目のバトルだけ出たいということころもあった。

た。そんな悠璃の動向を見守る恭介。恭介は学級委員のため希望選択には加われないのだが、恭介にも希望はあるようだった。

「立花、あんただったらどっちにするの？」

「んー、俺は皆が楽しめるならどっちでも良いけど……どちらかと言うとお化け屋敷かな？」

「何故？」

「だって、逢沢さんの驚く顔を見てみたいし」

「そうか判った。じゃあ私は喫茶店にする」

悠璃はもし自分がお化け屋敷に行ってお化け屋敷の方が多く票を取ってしまったらますます恭介を調子付けさせることとなる。この2日間で恭介に散々振り回されてきた悠璃としてはそれは何としても避けたかったのだ。

「ちょっと恭介！ それって誘導尋問じゃないの！？」

「えっ、これ俺が悪いの？」

お化け屋敷派の生徒からクレームの嵐を浴びる形となった恭介は何故自分がクレームを付けられているのかを理解していないようだった。結局そのまま採決が行われたのであるが、数を集計した書記役の生徒の表情は晴れなかった。恭介が「どうしたの？」と書記に尋ねてみる。

「それが……お化け屋敷と喫茶店、ちょうど同数なんだよ。ほら18対18」

「ああ、このクラスで俺とお前を除いたら36人になってちょうど2で割れちゃうんだよね」

前期まではこのクラスの総生徒数は37人であり、決めるときは

2人が抜けて35人。ちょうど2で割れず、このような決め事も同数になることなくスムーズに多数決を取ることが出来た。しかし、後期になって悠璃がこのクラスに編入してきたことで数のバランスに変化が生じたのである。全ての事項で同数になることは少ないとはいえ、このような結果も普通に起こり得ることだった。

「逢沢さんがこのクラスに来るから……」

「それどういう意味かしら」

「冗談冗談」

「冗談を言いながらも、恭介と書記役の生徒はどのようにして決めるべきか迷っていた。そんな時、教室の後ろで物事の動向を見守っていた浅尾先生が口を開いた。

「こんな時はポケモンバトルで決めるのはどうかしら？」

クラス内でおお、と歓声が上がった。確かにハクタイ高校においてはそれが一番手っ取り早い手段であった。恭介は自分が審判を勤めることを申し出ると、お化け屋敷派と喫茶店派からそれぞれ1人ずつ代表者を出してその代表者がポケモンバトルを行い、勝った方の出し物を行うという形式にした。ちなみにルールは試合の長期戦化を防ぐために使用ポケモンはそれぞれ1体のシングルバトルというものである。そのため手持ちポケモンが1体の生徒も出ることが出来た。

「さて、誰が代表をやる？」

喫茶店派は蛭が中心となって代表決めに取り掛かった。だが悠璃は皆の視線が自分に集まっていることに気が付いた。幸いにもガブリアスの怪我はすっかり治っており、普通にポケモンバトルを行っ

ても大丈夫なようにはなっていた。

「ということで逢沢さんをお願いしたい」

「私は構わないけど……なんで桜木くんはやらないの」

「俺はなあまり激しいバトルは出来ないんだ。対戦相手はあいつになりそうだし」

そう言うってお化け屋敷派の集まりを指差す蜚。集団の中では翔が何やら屈伸のようなことをして気合を入れていた。お化け屋敷派の代表は恐らく翔になるのだろう。確かに翔のバトルを見ていた限りでは力と力の激しいバトルになりそうではあった。それにサイドンのあの攻撃力と防御力に正面から受けて立てるのはこの中では悠璃のガブリアスしか居ないようだった。

（あいつのサイドンはエルレイドのインファイトを耐え、反撃の末に勝利した……）

悠璃の頭の中では、昨日翔の力押しながら相性の差を根性で跳ね返して勝利をもぎ取った瞬間がフラッシュバックする。実力は恭介に大きく及ばないとしても、あのような逆転劇を何度も起こされてはさすがの悠璃も堪らないだろう。しかし、恭介以外のクラスメートとも戦うことはさらなる自分のレベルアップにも繋がり、結果的に悠璃の一番望むもの“強い力”への一歩ともなる。それを考えると悠璃はこの機会をみすみすドブに捨てるような真似は出来なかった。

「じゃあ確認する。お化け屋敷チームの代表者が翔で使用ポケモンはサイドン、喫茶店チームの代表者が逢沢さんで使用ポケモンはガブリアス。それでバトルの場所だけど……編入してきた逢沢さんはまだ使ったことが無いからね、案内も兼ねて屋上のバトル場でバト

ルをしよう。あいにく今からだともうすぐ4時間目が終わっちゃうから……バトルの時間は放課後にしよう。各自、それまでポケモンや道具の準備を済ませておくこと。良いね？」

第29話：足りないもの

4時間目のホームルームからあつという間に時は流れ、放課後になった。生徒のほとんどが授業を終えて帰路に就く。普段この時間になると屋上に人やポケモンの姿は無く閑散としているのだが、この日この時ばかりは妙に賑わっていた。それは1年4組の生徒同士がクラスの出し物をバトルで決めるからであつた。

ハクタイ高校の屋上は教員学生関係なく開放されており、そこで各自思い思いの時を過ごすこともあれば、トレーナーらしくポケモンバトルを行ったりもする。この屋上は普段教室でバトルをするときは違つて屋外であり、全てのポケモンが最大限の力を発して戦うことが出来るのだ。特に教室の中では自在に飛ぶことの出来ない飛行タイプのポケモンや水辺でしか戦えない水ポケモンが本領を発揮することが可能であり、いつも教室で行っているバトルとは一味違つた環境で戦うことが出来る。そうやってトレーナーやポケモンは特異なフィールドで戦う訓練を積んでいく。これはジム戦やポケモンリーグに参加することを見越してのものであつた。

悠璃は無関係なギャラリーが多いことに多少苛立ちを覚えていたが、それを出来るだけ表に出さないように押さえつけると、自分が戦うフィールドの特徴を調べていた。フィールドは典型的な草地であり、ガブリアスにとっては有利も不利もない地形であつた。ただその草地の周囲は水で覆われている。悠璃はそれに注目していた。

「よっし！ お化け屋敷のために勝つぞっ！！」

終始考え事をしていて沈黙を貫く悠璃の対面では翔がサイドンと一緒に気合いを入れていた。翔はいつもバトルの前になると自分とサイドンに活を入れるために今のような“儀式”を行ったりもする。悠璃には翔の気持ちは理解できず、あのような行動に何の意味があるも判らない。だが気合いを入れて強く、まるで真夏の太陽のように輝く翔とサイドンの眼を見ると、改めて一筋縄では行かない相手だということは判った。悠璃はモンスターボールからガブリアスを出すと、昨日痛めた右の脚の様子を見た。ガブリアスは全く痛がる素振りを見せなかった。悠璃はガブリアスが無理をしているのではないかと用心深く尋ねてみるがそれは杞憂だった模様でガブリアスの脚は完全に治っていた。改めてポケモンという生き物の自然治癒力に感嘆させられた悠璃はガブリアスの肩に手を置いた。

「私は……勝ち続けなければならない。これまでもこれからも……」

悠璃が言った一言にガブリアスは一瞬悲しそうな顔をしたようにも思えたが、すぐに「任せて」といった表情で頷いた。そしてバトル開始の時間になり、フィールドの中では静かに目の前を見据えるガブリアスと既に鼻息が荒いサイドンの対照的な2匹が対峙する。トレーナーが立つ所定の場所に悠璃と翔が入ると、審判の立ち位置に恭介が立つ。恭介は悠璃とガブリアス、翔とサイドンをそれぞれ見ると、審判役としてルールの確認を始めた。ポケモントレーナーとしてはバトルをさせる側だけではなく、このような場合に備えてバトルを見届ける役をもこなさなければならないのだ。

「使用ポケモンは1体、シングルバトル。放課後のため時間は無制限。両者、不正を犯すことなく戦うこと。それでは……バトルスタート!……って言うって俺が笛を吹いたらバトルを始めてね」

恭介のボケにその場にいた全員がずっこける。翔は呆れながらも爆笑していたが、悠璃はますます不機嫌な顔になっていた。

「……あ、兄貴ー！？」

「あんたふざけてるなら審判やらなくてもいいんだけど！」

「一回やってみたかったんだよね、これ。じゃあ今度こそ……バトルスタート！」

恭介によつてバトル開始の笛が吹かれる。それと同時にガブリアスとサイドンが動き出した。悠璃は様子を見ることも考えたが、昨日のバトルを見る限りでは翔のサイドンは少なからず突っ込んで来る。パワーでは互角であるが、スピードでは大きく上回っている。そのことから動かず待機して相手に先手を打たせるのではなく、こちらから先制攻撃を仕掛けて畳み掛けてしまふのだ。

「ガブリアス、地震だ！」

ガブリアスが咆哮と共に地面を大きく揺らす。衝撃波が物凄いスピードでサイドンに向かっていく。

「サイドン、お前も地震で対抗しろー！！」

対するサイドンも大木のように太い尻尾を地面に叩きつけて地震を起こした。サイドンの起こした衝撃波はガブリアスの起こした衝撃波と正面衝突し、互いに威力を弱めあつて消滅する。体重が重く鈍重なサイドンではガブリアスの攻撃を避けるのは難しい。だから翔は同じ程度の威力の地震をサイドンに起させることで、ガブリアスの地震を打ち消したのだ。“攻撃は最大の防御”という言葉があるが、まさにこのような事態を指すのだろう。地震を打ち消しあうという作戦をお互いに知っている。それを確認したことで、悠璃と

翔は迂闊に地震を放てなくなった。

「サイドン、とにかく突っ込め！ “突進” だ！」

サイドンはその巨体を存分に生かして突進攻撃を仕掛ける。技の威力はそれほど高いわけではないのだが、頑丈な体と強力なパワーを持つサイドンが使うと、実際の威力以上に技は強いものと感じられた。ガブリアスはサイドンの突進を真正面から食らった。サイドンの突進力の前に軽いガブリアスはあっさり跳ね飛ばされるが受身を取ってダメージを最小限に抑える。突進などの技は使用すると自分に反動ダメージが返ってくるのだが、サイドンは反動ダメージを一切受けていなかった。これはサイドンの特性“石頭”によるものだった。

「俺のサイドンの突進を受けてケロっとしてやがる……やっぱり兄貴に勝つだけあるなあ！ 逢沢！！」

「あの程度の攻撃、避けるまでもないわ」

「んだとお！ サイドン、お前の全力を見せてやれ！」

サイドンはゴリラが威嚇するように両腕で胸を叩くと、突然高々飛び上がった。とてもサイドンのものとは思えないジャンプ力に悠璃とガブリアスは目を奪われ、動くことを忘れる。そしてそのまま落下したサイドンはその巨体でガブリアスに押し掛かった。“押し掛かり” 攻撃は突進同様ノーマルタイプ以外のポケモンが使った、それほど威力は高くないのだが、本当に注目すべきことはその追加効果にあった。ガブリアスは反撃に移ろうとするが、全身が麻痺してしまい、思うように動けない。

「ガブリアス！！」

「どうやら麻痺しちまったようだな。このバトル貰った！」

押し掛かりは追加効果で相手を麻痺させることのある技だ。麻痺してしまうとそのポケモンのスピードは大きく下がってしまう。それはガブリアスのようにスピードバトルを得意にするポケモンにとつては致命的な一撃であつた。スピードで逆転したサイドンは地面を大きく踏み鳴らすと、頭の角を高速で回転させ始める。サイドンなど鋭い角を持つポケモンが使用できる一撃必殺の技“角ドリル”である。一撃必殺技は命中すれば相手を一撃で戦闘不能に追い込む技である。その強力すぎる効果を持つ代わりに成功率は異常に低く、外せば大きな隙を生んでしまう。まさに諸刃の剣といえる技であつた。しかし、今はガブリアスは麻痺してしまい、ろくに動くことから出来ずにいる。今の時点なら角ドリルを命中させることはそう難しくは無い。当たつたその時点で勝負が決まる。ガブリアスは必死に回避しようとするが、麻痺の効果でいつもの動きをすることが出来ない。

「サイドン、行けーっ!!」

高速回転するサイドンの角がガブリアスの体に突き刺さる。勝負が決まつた、と周囲の観衆からざわつきが起こる。

「これで俺の勝……」

角ドリルは確かに命中した。しかしガブリアスは倒れるどころかダメージを全く受けていなかった。

「なっ、何だよ！ 角ドリルは確かに当たつたはず……」

「……もしかしてあんた一撃必殺技の効果を知らないの？ やっぱ

り決定的なものが足りないわね、久坂！」

「一撃必殺技の、効果……？」

角ドリルを初めとした一撃必殺技を使う時は忘れてはならないことがある。それは自分よりレベルが上のポケモンには相性や特性に関わらず一撃必殺技は全く通用しないということであつた。翔は一撃必殺技が格上相手に効かないことと、サイドンよりガブリアスの方がレベルが上ということを知らなかったのだ。ガブリアスは角ドリルが通用せず、呆然としているサイドンの眉間にドラゴンクローを叩き込む。犀の弱点は角の生える眉間にあり、そこを攻撃されることを嫌がる。その眉間を攻撃されて怯んでいるところでガブリアスはサイドンと距離を取つた。

「皆の前でカツコ付けようとしてミスつちまつたぜ。でもガブリアスは麻痺してスピードを失っている。普通にぶつかれば勝てるぜ！」
「確かに普通に正面からぶつかったら危ういけど……なら、正面からぶつからずにいれば良いのよ」

ガブリアスは再度攻撃を仕掛けようと突っ込んで来るサイドンに敢えて背を向ける。サイドンは警戒しながらも急に止まることが出来ないサイドンとしての特性からか躊躇わず突っ込んでいく。だが、ガブリアスはサイドンが突っ込んで来るのを確認すると、フィールドを覆う水のフィールドへと飛び込んだ。ガブリアスは陸上を最も得意とするが、空中や水中でも戦うことが可能である。それは“伝説の生き物”と称されるドラゴンタイプならではの適応範囲であつた。

「水に逃げ込んだ……？」

「あんたのサイドンはエルレイドのインファイトやガブリアスの攻撃を耐えるだけの防御力がある……だが、その反面特殊防御力は低

い」

「…さっ、サイドン！ 止まれ！ 攻撃をやめるんだ！！」
「遅い！」

ガブリアスは水中から飛び出す。しかしただ水中から飛び出すのではない。ガブリアスはフィールド周辺の水を自在に操ることで波を作り出していた。ガブリアスの“波乗り”攻撃がフィールド全体を飲み込む。サイドンは岩タイプと地面タイプを併せ持ち、その両タイプ共に水タイプの技を弱点としている。そして悠璃が指摘したとおり、サイドンは防御力こそは高くとも特殊防御力はかなり低かった。そのためこの一撃が致命傷となった。

「サイドン、戦闘不能！ ガブリアスの勝利！」

恭介のジャッジが下る時、屋上には喫茶店派の喜びの声とお化け屋敷派の溜息がそれぞれ響いていた。

第30話：翔の決意

文化祭の出し物決めバトルは喫茶店派の代表・悠璃の勝利で幕を閉じた。普通ならそこでクラスの出し物は喫茶店と決定するはずであるが、そうも行かないのが1年4組の学級委員である。恭介はバトルの審判を勤める傍らで、なんと喫茶店とお化け屋敷を融合した企画を考え出していた。入口から中に入るとそこはお化け屋敷となっており、お化け屋敷で散々怖がった後に喫茶店で飲み物や特性の料理を楽しむという形だった。しかし、ただお化け屋敷や喫茶店をやるのでは面白くないので、自分たちが持っているポケモンの力を借りて出し物を行う。特にお化け屋敷などはポケモンの力を生かしたものにすれば他のお化け屋敷との差別化も成るというものである。

「まあ、衣装や設備、仕掛けの準備が大変だけど……皆で協力すれば出来ないことじゃない。早速準備に取り掛かるとしよう！」

恭介のその号令にクラスが1つにまとまった。喫茶店派もお化け屋敷派もそのような派閥など全く関係ない。1年4組という1つのチームの旗の下に。だが決定権を賭けてバトルをした悠璃と翔は多少複雑な面持ちだった。特に悠璃からしてみれば、またしてもあの忌々しい恭介の気まぐれに付き合わされたことになるのだから。

「……ねえ、久坂。私たちのバトルって意味があつたのかしら？」
「どうなんだろうな。でも兄貴昔っからああいうところあるし」

翔は恭介のあのようなところにすっかり慣れてしまっていたようだった。腑に落ちない顔をする悠璃に今度は翔が尋ねてくる。

「ところでよ、さっき言ってた『決定的なものが足りない』ってさ…… 具体的にどんなところだ？」

「自分で考える。アホ」

「ア、アホって…… いや俺確かにそんなに頭良いわけじゃないけどよ…… って別にそんな事どうでも良いじゃねえか！ 別に教えてくれたって良いだろ！？」

そう言って悠璃に食い掛かる翔。彼もまた悠璃や恭介と同じようにこのハクタイ高校に通う生徒として、一ポケモントレーナーとして強くなりたいという心は人以上に持っていた。特に“兄貴”と呼んで慕っている恭介に恥ずかしくないようにと、更に強くありたいという翔の願いは形や目標に違いこそあっても、何処か悠璃に通ずるところがあった。

「まず一撃必殺技の効果について。自分よりレベルが上の相手には一切効かない。そんなの常識でしょう」

「あー。実は角ドリルを使ったのってさっきが初めてなんだよ。つい最近使えるようになった技だからよ」

「そんな不安定な技をいきなりバトルで使わないで。あと…… ポケモンの能力もそう。サイドンは物理面で優れているけど、特殊面では脆い。せめてドサイドンに進化すれば特性の力でガブリアスの波乗りのダメージを抑えられたからまだ勝負は判らなかつたけど」

翔のサイドンの特性は石頭。特性が石頭のサイドンはドサイドンに進化することで特性が“ハードロック”へと変化する。ハードロックはとても貴重な特性であり、効果抜群の技を受けるとその技のダメージを弱めることが出来る特性である。この特性の力があれば、

中途半端な弱点タイプの技ならあっさり耐えられることもあり、これほどまで相性の不利を恐れる必要も無くなるのだ。また進化するということもあって、サイドンが得られる恩恵も大きかった。特性のおかげで苦手なタイプに対する耐久力が上がると共にサイドンの高い攻撃力と防御力はさらに跳ね上がるのだ。その攻撃力はガブリアスをも大きく上回り、パワーではほとんどのポケモンに引けを取ることは無くなり、パワー対決なら常に優位を保てるのだ。

「進化か……」

「もつとも進化には“プロテクター”というアイテムが要るんだけど」

「そっか、じゃあ良いや」

「……は？」

“進化”という言葉聞いてから、それまで明るい顔をしていた翔の顔が一気に曇る。その言葉に何か引つ掛かるものがあるようだった。悠璃はそれが気になってさらに問い詰めてみるが、翔の返答は変わらない。強くなるということをしり引いても、翔はサイドンを進化させることに異常なまでに抵抗したのである。顔を真っ赤にして進化という選択肢を否定する翔。そして悠璃の前では「絶対に進化させない。進化させるくらいなら俺はサイドンを野生に帰す」とまで言い放った。そこに普段の軽い口調の翔の姿は無かった。翔は一見意固地な主張を繰り返しているだけにも見えるが、そこには彼がサイドンに対してどれだけ真剣に考え、トレーナーとしての自分の信念を抱いているかが現われていた。

「とにかく！俺はサイドンを進化させない。そう決めたんだ！」

悠璃にそう言い放って、翔は一人で教室に戻ってしまった。屋上に1人取り残される形となった悠璃は翔が何故あそこまで進化を嫌

がるのか考えていた。あまり踏み入れられるのが好きではない悠璃もあのような翔の態度を目の当たりにしては何故あなのか、と考えるを得なかった。そんな時である。考え込んでいた悠璃の肩を誰かの手が叩く。驚いて振り返った悠璃の後ろにはさつきクラスメートたちと一緒に教室に戻って行ったはずの恭介の姿があった。

「翔には翔なりの理由がある、ってことだよ。逢沢さん？」

「たっ、立花！ あんたもう教室に戻ったんじゃ……」

「俺はさつきからずっと此処に居たよ。厳しい口調でもなんだかなだ言っただけ翔のことをしっかりと考えてあげているんだ。逢沢さんは優しいね」

「有り得ない、あの単細胞に対してそんなこと。でもあそこまで言われたら気になるでしょう」

渋い顔をする悠璃に対して恭介はいつもながらの清らしい表情で聞き役に徹していた。2人は翔のことについて話しながら廊下を歩く。

「確かに翔のサイドンに対する思い入れは強い。中学校の頃に初めて会った時からそうだったからね」

恭介が翔と出会ったときの話を始める。恭介が翔と出会ったのは中学校2年生の時であった。中学校1年生の時はそれぞれ違うクラスであったが、互いに名前だけは知っていた。恭介は中学時代から既に天才トレーナーと名を馳せており、そのバトルの強さは恭介の通っていた中学校だけではなくハクタイシティ全体の学生トレー

ナーの間で噂になっていた。対する翔も有名ではあったが、恭介のように良い方面で有名であったわけではない。彼の場合はその悪名が高かった。中学入学時から今のように金髪にピアスを開けるという年齢にそぐわない出で立ちをしていた翔は同級生だけではなく上級生や教師とも毎日のようにいざこざを起こしていた筋金入りの不良だったのである。そんな対称的な2人は2年生に進級して同じクラスとなった。クラス替え早々に恭介は早速新しいクラスメートの大半と友達になった。昔から人と交流することが大好きだった恭介のコミュニケーション能力の高さはこの時から健在だった。その一方で翔に近こうとした者は誰も居なかった。1年生の時の悪行が知れ渡っている学校内で彼が孤立するのは当たり前のことであり、翔もそれを理解してか誰かとつるむこともなく一匹狼で過ごしていた。重苦しい空気が教室中に広がる中、翔に声をかけた者が居た。他ならぬ恭介である。今彼が悠璃をクラスに馴染ませようとしているように、翔をクラスに馴染ませようとしたのだった。

「……その頃の久坂はそんなに悪かったのか」

「うん。俺が声掛けたらいきなり殴りかかってきた」

翔からしてみれば皆の中心にいる恭介という存在は疎ましかったのだろう。何の前触れもなく不意打ち同然に恭介に殴りかかったのである。しかし幼い時から祖父に武術を教え込まれていた恭介はそれをあっさり避けると、拳の代わりにモンスターボールを突きつけた。ポケモントレーナー同士、戦うならば殴り合いの喧嘩ではなくポケモンバトルをしよう。恭介はそう言って翔を誘ったのである。翔は恭介のバトルをまじまじと見たことは無いものの、手持ちポケモンがリザードンだということは知っていた。炎と飛行という2つのタイプを併せ持つリザードンなどサイドンの敵ではない。例え恭介がどれほど優れたトレーナーであっても相手にすらならない。そう思った翔は恭介との勝負を受けた。

『サイドン、戦闘不能！ リザードンの勝ち！』

バトルの結果は、恭介の圧勝だった。“日本晴れ”で日差しを強くすることでサイドンの眼を眩ませ、ストーンエッジなどの技を放たせなくする。そして溜める必要がなくなったソーラービーム1発でサイドンを倒してしまったのだ。1分程度でついでに決着に翔は大いに悔しがった。しかしどうしてか不思議なもので、このようなバトルを経験した後にトレーナー同士の馬が合うことが多くなるのも事実であり、恭介と翔もその例に漏れなかった。また翔が恭介のことを“兄貴”と呼び始めたのはこのバトルの後からである。恭介は皆に分け隔てなく接し、勉強で判らないところがあれば自分の勉強をそっちのけで付き合い、運動で苦手なところがあれば一緒に砂まみれになって練習し、ポケモンのことについては一流の研究者に匹敵する知識と行動力で教えた。その恭介の姿に感銘を受けた翔は尊敬の念を込めて恭介を“兄貴”と呼ぶようになったのだ。

「中2の夏前になると、すっかり俺たちは親友になっていた。そうになると色々と話すことが増えてね。その中にサイドンのこともあった。聞きたい？」

恭介はそうに尋ねる。しかし悠璃は今この時点では翔のことを恭介に聞こうとはしなかった。確かに気になることは気になるのだが、それを聞いて果たして今の自分に何ができるのか。逆に翔の心の傷を抉ることになるのではないか。そう考えてしまうと、途端に興味が失せてしまったのである。

「私は……必要以上に踏み込むのも踏み込まれるのも好きじゃない

わ」

「まあ、そうだろうね。俺たちは親友とはいえ所詮は部外者。最終的に解決の糸口を掴むのは他ならない翔だ。俺は翔のことを遠くから見守る。それで良いんだよね」

（私はまだ久坂と親友と呼べるほど仲良くなつた気はないんだが……突っ込むとまた面倒なことになるな）

悠璃がそんなことを考えていると、突然恭介が悠璃の手をギュツ、と握ってきた。あまりに突然のことで、悠璃の心臓がドクンと大きな音を立てる。

「……」

「さて、教室に戻ろうか逢沢さん。文化祭の出し物については逢沢さんの協力が必要だからね」

「あ、ああ……」

第31話：文化祭1日目／逢沢 悠璃の憂鬱（1）

そして瞬く間に日は流れて文化祭の当日となった。恭介たち4組の生徒たちは準備にギリギリまで時間を費やしたが、その甲斐もあつてか出し物の出来は中々良いものになっていた。特にお化け屋敷の仕掛けに人為的なものではなくポケモンたちの力を利用するといった作戦は、他の高校ではまず見られないものとして校外の客から非常に珍しがられた。

『さあさあ！ 寄つてらっしゃい見てらっしゃい！ 此処はポケモンとトレーナーが協力して作り上げたお化け屋敷だよ！』

教室の入り口の前で客を呼び込むのは蛭が相棒とする“マジカルポケモン”のムウマージである。その魔法使いを彷彿とさせる姿を持つムウマージはドアの周辺をふわふわと浮きながら人間の言葉で呼び込みをする。それを何も知らない人は「言葉を喋るムウマージがいるぞ」と珍しげにやってくる。勿論これはムウマージが直接言葉を喋っているわけではない。ムウマージの首には超小型のスピーカーが取り付けられており、教室でムウマージのアテレコをする生徒の声がそこから聞こえていた。そのため何も知らない人からしてみればムウマージが喋っているように思えるのである。この作戦は客の呼び込みには絶大な効果を発揮しており、お化け屋敷を抜けた

後に入れる喫茶店もかなりの盛況さだった。

「うん。賑わってる賑わってる」

学級委員である恭介は生徒会に協力して文化祭本部の役員として中央の仕事をしており、現在は見回りの最中に自分のクラスを覗きに來たのである。そんな恭介に喫茶店でウエイトレスをしていた悠璃が話しかける。

「……立花」

「やあ、逢沢さん。その服似合っているね」

「やっぱり納得できない……何故私がこんな格好をしなければなら
ないのよ!!」

悠璃が怒るのも無理はない。ウエイトレスを勤める女子生徒たちに配られたそれは普通のウエイトレスが着るような代物ではなかった。悠璃の頭からはポケモンのものである耳が生え、特徴的な美しい黒髪は水色の髪のかつらの下に隠れている。これは一部の特殊な趣味を持つ人々によって作られたポケモンを擬人化した衣装である。

悠璃が纏っているのはイーブイの進化形で“しんせつポケモン”のグレイシアのモチーフにした衣装だった。グレイシアはその可愛い外見からとても人気の高いポケモンであり、専門の人々によって何度もコスプレ衣装が作られていた。もちろん悠璃はこの企画が出たとき猛烈に反対した。当然そのような格好が出来るか、という至極真つ当な意見であった。しかし、この衣装を作ったのが他ならぬ浅尾先生であると知ってからというもの、反対意見は急速に静まったのである。浅尾先生の学生時代唯一の得意科目が家庭科であり、裁縫など被服関連のものが得意であった。そのため喫茶店のコスプレ衣装のデザインからお化け屋敷の仮装まで全て浅尾先生が中心になって製作した。その努力を無駄にしてはならない、という

意見からこれらの衣装を結局着ることになってしまった。

「確かに浅尾先生の気遣いは無碍にしたいわけではないから我慢している。けど何故私がグレイシアの服なのよ。しかも無駄に露出が多い」「氷タイプだから涼しげな意匠にしたんだね。でも皆は喜んでるみたいだよ」

衣装は作る人の趣味や嗜好によって変わるのだが、悠璃のグレイシアの服は妙に胸が強調され、スカートも短い。いわゆるセクシー系の服であった。恭介の兄・博史が認めるほどのプロポーションの良さがこの服によってさらに強調されるため、男子のみならず女子の注目も一身に集めていた。

「つまり私はこのクラスの客寄せピカチュウというわけか」

「ああ、自分の役割を理解できているね。それは良いことだよ」
「……」

呆れたように大きく溜息をつく悠璃。そんな悠璃の肩を美夏が勢いよく叩いた。

「ほら元気出して悠ちゃん！ オーダーたまっちゃうよ！」

「美夏。あんたは少しくらい恥じらいを覚えなさい」

「えっ、なんで？」

美夏も悠璃と同じようにポケモンのコスプレをしていた。美夏のコスプレは“かんしゃポケモン”のシェイミを象ったものだった。美夏の服は悠璃ほど露出が多いわけでもないが、美夏もまた魅力的な体つきをしていた。スタイルは悠璃のように細身というわけではないのだが、胸の大きさはクラスでは一番だった。そのため露出こそ少なくとも自然と人の注目を集めていた。だが自分が思っている

以上に見られていることに美夏は全く気が付いていなかったため、悠璃とは違い明るく朗らかにウエイトレスを勤めていた。

「ほら、美夏！ 悠璃！ 油を売ってないで働きなさいよ！」

「3番と7番のテーブルのオーダー出来ましたよ」

厨房のスペースからキルリアのコスプレをした紗矢が2人を注意し、注文された飲み物とデザートをユキメノコのコスプレをした凜が渡してくる。悠璃は文句をぶつぶつと言いながら接客へと戻っていった。

「はい、チョコレートパフェ……とつとと食べて帰りなさい！」

悠璃の接客態度は良いものではなかったが、それは狙ったものであり、接客態度の悪さから早々にこの仕事を止めて終わらせたいと思っていたのである。しかし、世の中そう上手く行かないものである。その素っ気無い態度が良いということで男性客の受けは逆に上昇し、悠璃は結局休憩時間まで働き詰めとなってしまった。

+++++

「……やつと休憩」

「お疲れ様〜大人気だったね」

「全く、ここに来る男は変態ばかりだわ……」

紗矢から1時間半の休憩時間をもらった悠璃と美夏は他の女子生徒に喫茶店を任せると、他の出し物を見て回ることにした。しかし、格好はコスプレのままであることから、普通に過ごしていても人目を引いてしまう。休憩時間でもその格好なら客引きに生かせるのではないか、と凜が提案したことで1年4組の生徒はコスプレのまま過ごすことになっていたのである。

「何か落ち着かないわね。この格好じゃ」

「なら、普段と同じ格好をしてると思えばいいんだよ。それなら恥ずかしくないでしょ？」

「……美夏。あなたは憎らしいほどポジティブね」

「えっ、そうかな？　ねえ、それよりも他のクラスの出し物見に行こうよ！」

「ちよつと……あんまり引つ張らないでよ」

楽しげに他のクラスの出し物を見て回る美夏はまるで子供のようにであり、そんな美夏に引つ張られるように付いていく悠璃はまるで保護者のようだった。最初ははしゃぐ美夏を後ろで見守っているとつい感じだった悠璃であるが、美夏と一緒にあちこちを回るに当たって徐々に悠璃自身も楽しんでいった。特に射撃の出し物を行っているクラスでの悠璃の活躍はまさに獅子奮迅と言っているものだった。

うまく狙いを定められない美夏に代わって射撃用のライフルを持つと、一番大きな景品であるポケモンのぬいぐるみを一撃で落としたのだ。悠璃のその腕には周囲の生徒も感嘆したようで、ぬいぐるみを続けて落とした悠璃には多くの拍手が贈られていた。

「ほら、このぬいぐるみが欲しかったんでしょ？」

悠璃は美夏にポツチャマのぬいぐるみをプレゼントする。思わぬプレゼントを貰った美夏はまるで子供のように感情を前面に出して喜んだ。

「ありがとう！ わたしポツチャマのぬいぐるみが欲しかったの！」

「そう。それは良かったわね」

「じゃあわたしからもお返し！ これあげる！」

美夏が悠璃に手渡したのはポツチャマのついでに悠璃が落としたヒトカゲのぬいぐるみだった。悠璃は最初ぬいぐるみなど自分には似合わない、と言って断ろうとしたが、美夏の満面の笑みを見てしまつとどうにも断りきれなくなつてしまった。

『やあ、その釣り眼のグレイシア。ヒトカゲのぬいぐるみが恐ろしいほど似合つてないね』

教室の前を通りかかると、蛭のムウマージと同じようにスピーカーをつけて客引きをしていた“かみなりポケモン”のサンダースが声をかけてきた。このサンダースは凜のポケモンであり、グレイシアと同じようにイーブイの進化形ということもあってか、その外見を生かして主に女子生徒の客引きに役立っていた。そんな中声をかけられた悠璃は不機嫌だった。何故なら声を聞いただけで誰が裏で

喋っているのかを見抜いてしまったからである。

「あんた、立花ね？」

「……えっ、何で判ったの？」

声に合わせてサンダースは首を傾げた。どうやら図星だったようだ。

「私にそんな口を叩くのはお前だけだ。すぐ判る」

『はは……鋭いね。今は冗談。ぬいぐるみは凄く似合っているよ』

「……」

『あつ、どうせなら逢沢さんと仁科さんもお化け屋敷を見ていかな
い？』

「断る」

『なんで？』

「自分のクラスのアトラクションなど見てもつまらないでしょう」

『もしかして……怖いのか？』

挑発するような口調のサンダース、ではなく恭介の言葉に悠璃の
眼に怒りが走った。

「何ですって？」

「うーん……わたしは怖いのはちょっと駄目かな……悠ちゃん1人
で行って……」

「行くわよ。美夏」

「えっ」

悠璃は後ろで怖がる素振りを見せていた美夏の手を握ると、共に
お化け屋敷へと入っていく。
そんな2人の様子を入り口で客引きをしていたムウマージとサンダ

― スは多少不安げな顔をして見つめていた。

第32話：文化祭1日目／逢沢 悠璃の憂鬱（2）

「うええ……入りたくなかったのに」

「美夏。あんたは立花に馬鹿にされて悔しくないの？」

「うーん、それは……」（あれって馬鹿にしてたのかなあ……悠ちやん立花くんのことになると過剰に反応するけど何かあったのかな？）

美夏は珍しく必死な悠璃の態度に疑問を感じていたが、結局2人でお化け屋敷に入ってしまった。美夏はお化け屋敷を苦手とはつきり言っていたが、此処で戻ってしまうと恭介に馬鹿にされる、そう思ってしまうと始めから悠璃の中には退くという選択肢は無かった。

「とにかく早く抜けてショートケーキ食べようよ」

「……そうね」

悠璃の腕にしがみ付く形で進んでいく美夏。その一方で悠璃も何故か美夏のコスプレ服の袖を掴んで離そうとしなかった。慎重に進む彼女たちを見て、お化け役の生徒たちは意地の悪い笑みを浮かべて仕掛けを作動させる準備に入る。そんな2人を見つめる眼はまるで自分たちのテリトリーに何も知らずに入っていくコラッタを狙うオオタチを思わせるかのように鋭かった。

「思っていたより暗いわ……」

「みんな暗幕をいっぱい用意していたからね。でも懐中電灯を貰ったから大丈夫だよ！」

そう言つて受付で貰つた懐中電灯の明かりをつける美夏。しかし懐中電灯をもつてしても前方全てを照らせているわけではなく、まだ所々薄暗く感じた。油断せず慎重に進もう、と悠璃が美夏に提案した矢先。2人は頬に冷たくぬるぬるした何かが当たるのを感じた。小さく悲鳴を上げてパニックになる美夏。悠璃は暗闇を探るように手を動かすと、その気持ち悪い感触の正体を突き止めた。

「美夏、落ち着いて。犯人はこれよ」

「これは……こつ、こんにやく？」

「全く、古臭い手を使つわね」

壁の向こうにこんにやくを放り投げる悠璃。ベチャツ、という生々しい音の後に誰かが驚くような声が聞こえた。こんにやくを糸で吊るしていた人にでも当たったのだらう。悠璃のささやかな仕返しが決まったところで2人は先に進むことにした。今回のお化け屋敷のキャッチフレーズが『ポケモンとトレーナーの協力』ということから、人間の作った仕掛けだけではなくポケモンたちもお化け屋敷の仕掛け役を担っていることがわかる。そのためあらぬ方向で何かが起こっても何も不思議ではない。悠璃は周囲を見回してポケモンを探してみた。

「悠ちゃん、あそこにヨルノズクが2羽いるよ」

美夏の指差す先には木を象つた置物の上に2羽のヨルノズクが止まっていた。ヨルノズクは動くどころか声1つ立てずこちらをじつと見つめている。何もしてこないならばそれで構わないのだが、ただひたすらこちらに視線を寄せているところが何とも不気味に感じ

られた。次に見つけたのは天井に止まるズバットの群れだった。ズバットたちはキーキー鳴きながら2人の上を飛び回る。彼らは2人を驚かせようとしているのだが、ズバットに敵意がないことを知っている2人はそれほど驚かなかった。やはり此処に居るポケモンは皆このクラスの生徒のポケモンということが判っていると、ポケモンで驚くのは逆に難しかった。

「何だか……あまり怖くないね」

「そうかもしれないわね。さっさと抜けましょう。こんなところ長く居る必要も無いわ」

「あつ、ちよつと待ってよ!」

美夏の手を引き、早歩きになる悠璃。早く出ようと躍起になっていたのか、2人の警戒心は薄れていた。そこに掃除用具が入った口ッカーからベトベターの扮装をした生徒がゾンビのように飛び出して来る。

「うわっ!」

「きゃああああ!」

不意打ち同然の登場に思わず悲鳴を上げる2人。ベトベター役の生徒は女子生徒なのか、構わず悠璃と美夏の体に纏わり付いてくる。その感触はまるで本物のベトベターに触られているかのようにリアルであり、それが2人の恐怖心を掻き立たせる。

「ゆ、悠ちゃあああん」

「早く逃げるわよ!」

「ふわあああん! もう許してえええ!」

美夏の手を引っ張り、先に進む悠璃。早くも半泣きになっている

美夏はベトベターたち（偽物）を振り切ったことが判ると、悠璃の胸の中に飛び込んできた。

「美夏、泣くの早すぎ」

「うっ。だつてえ……」

悠璃に慰められて安心した美夏が顔を上げる。すると、それ待っていたかのように天井からイトマルとアリアドスの大群が落ちてきた。

「ひいっ！」

「落ち着きなさい。ただのイトマルとアリアドスよ」

「そ、そうだよね……わたしったら何これくらいで驚いているのかしら……」

そう言つて照れ笑いをする美夏。そんな美夏をイトマルとアリアドスたちは尻の顔のような模様をくねらせてはニヤニヤと笑う。

「あんた、ポケモンにまで馬鹿にされているわね」

「うっ……笑うなー!!」

イトマルとアリアドスたちはムキになる美夏を馬鹿にするかのような感じで天井へと戻つていった。今のやり取りで、緊迫した空気が少しほぐれたように感じた2人は再び手を握り合つて先に進んでいく。すると、少しばかり歩いた先で美夏が何かを見つけた。美夏が見つけたのはテレビであつた。地上デジタルが発達した今の世の中、電器屋では置いていないような古い型のテレビであり、コンセントには繋がれていなかった。

「何でこんなところにテレビが……」

「テレビから白い着物の女の人が出てきたりする映像あるよね。心靈番組でよく出て来るような」

「あれは映画でしょ。あんなの信じるほうが馬鹿よ」

そんな会話をしていると、コンセントが入っていないはずのテレビがひとりでに付いた。

テレビは最初砂嵐の状態だったが、やがてうつすらと何かを写し始める。テレビの中には古ぼけた井戸が映っていた。

「ねえ、美夏」

「なに、悠ちゃん？」

「さっきあなたが言っていた映画の幽霊って何処から出てきたっけ……？」

「確か……井戸」

「井戸」

映像をじつと見続ける2人。すると井戸の淵に何者かの手が掛けられたと同時に、井戸から白い着物を着た長い黒髪の女性が飛び出すように現れる。

「まったく、呆れるわ。お化け屋敷だからって何の工夫も無いホラー映画のビデオを流すなんてね」

「……」

「美夏？」

「なーんか、このお化けこっちに來てるような……」

「まさか……そんなわけないじゃない」

得体の知れない不気味なものを感じてテレビから離れる悠璃と美夏。テレビの電源のスイッチを押してみるが、テレビは消えようと

しない。それどころかテレビの中の白い着物の女性はどんどん2人の立つ方向に迫ってくる。そして焦点の合っていない眼で2人を睨み付けると、そこで有り得ない言葉を吐いた。

『行かないで。悠ちゃん、美夏ちゃん……』

「「いつ、嫌あああああ……!!!!」」

お化け屋敷の中に悠璃と美夏の悲鳴が木霊した。

第32話：文化祭1日目／逢沢 悠璃の憂鬱／（2）（後書き）

夏にふさわしい話だと思いますが、この小説の時系列は2009年10月です。

第33話：文化祭1日目／逢沢 悠璃の憂鬱（3）

絶叫と共にお化け屋敷の中を猛ダッシュした2人は今自分たちが
お化け屋敷の何処に居るのかすら判らなくなるほど混乱していた。
息を切らしてその場にへたり込む美夏の横で、悠璃はやりよしの無
い怒りの矛先を恭介に向けていた。

「たつ、立花ああ……」

「なんでそこで立花くんの名前が出てくるの？」

「あんな悪ふざけをするような人間が立花以外にいないと思う？ 私
と美夏を驚かすために映画の編集までするなんて…… お化け屋敷を
出たら張り倒すわ」

「本当にあれ立花くんのしわざなのかなあ？」

もちろんあのビデオを作ったのは恭介ではないのだが、悠璃の中
で恭介に対する怒りのボルテージは急速に上がっていく。普段はク
ールな悠璃も恭介が絡むと何かと感情を前面に押し出すようになって
いた。悠璃と友達になり、悠璃と接する機会が増えた美夏は自然
と悠璃のこんな姿を見かけることが多くなった。恭介と悠璃の仲が
悪い（悠璃が恭介を一方的に嫌っているのだが）ことは既にクラス
の皆知っており、その事は噂となって学校中に響き渡っていた。

「本当について……美夏が一番知っているでしょう？ 普段からあい

「つは私のことをおちよくっているじゃない。疑う余地は無いわ。あいつが犯人よ」

「ははは……厳しいね」

しかし、近くの席となり、恭介と悠璃のやり取りを見ていた美夏は恭介と悠璃が決して不仲だとは思わなかった。本当に不仲なら会話どころか眼を合わせることすらしない。そのようなところは人の行動に自然と現れているものだ。だが、言い争いをする一方で2人が共通の話題で話し込んでいることもまた事実だった。2人の共通の内容としてポケモンがある。2人はポケモンに関する授業の後、机を合わせて真剣に話していることが多いのだ。傍から聞いていた美夏が頭が痛くなるような詳しい話もあった。まあ最後は恭介と意見が合わなくなった悠璃が喧嘩をして終了、という結末がお決まりの事態となっており、美夏はそれを見る度に仲裁役を担っていた。

（悠ちゃん、立花くんと何だかんだ言って仲良くなっていることに気づいていないのかなあ……）

「ちよつと美夏。何ボーつとしてるのよ」

「あつ、うつん！？ 何でもない！」

「そう……まあ、今すべきことは此处を出ることよ。行きましょう」

美夏は顔を真っ赤にして否定する。悠璃の言うとおり、今置かれた状況において大事なものはそのことではなかった。悠璃と美夏はホラー映画のビデオを見つけたときにパニック状態となってしまう、そのときに今自分たちがどこにいるかすっかり判らなくなってしまうのだ。正当な順路を探し、戻らなければならない。しかし、さっきのパニックで懐中電灯を落としてしまった2人は文字通り暗中模索で出口を見つけなければならなくなった。

「やっぱり懐中電灯がないと怖いね」

「でも暗闇にだいぶ眼が慣れてきたから、障害物があるか無いかはわかるようになってきたわ。そこ、2つに道が分かれているから気をつけて」

悠璃が言う通り、この先の道は2つに分かれていた。どっちが正しい道なのかは判らないが、必ず出口もしくは正しい順路に繋がるはず。それを信じて進むしかなかった。

「あつ」

悠璃と美夏は相談した上で左に進むことに決め、歩き出した。その時、美夏は床とは違うまた別のものを踏んだように感じた。むぎゆつ、というその感触は最初は何か布のようなものに感じたが、足元からほのかに熱気を感じた。それは明らかにただの布ではなかった。

「どうしたの？ そんなところに立ち止まって」

「今なんか変なものを踏んだような……」

「変なもの？」

美夏の言葉が気になって美夏の立つ方を凝視する悠璃。すると、美夏の後ろに赤い眼をした何かが全身の毛を逆立ててこちらを睨み付けているのである。その“赤い眼をした何か”の正体は“きつねポケモン”のキュウコンであった。キュウコンの代名詞とも言える幻想的な9本の尻尾には神秘的な力が備わっており、寿命は1000年続くとも言われているポケモンである。このような伝説が残っていることから、キュウコンもまたお化け屋敷の意匠に相応しいポケモンの1匹である。

「わっ、キュウコンだ！ 綺麗〜！」

美夏はそう喜ぶが、悠璃はキュウコンから只ならぬ何かを感じていた。キュウコンがこんなところに居るのはきつとお化け屋敷のアトラクションとしてクラスの誰かが此処に設置したのかもしれないしかし、全身の毛を逆立ててこちらを睨み付けているキュウコンからは誰の眼にも明らかな敵意が感じられた。

「美夏、そのキュウコンに近づかないで！」

「えっ……なんで？」

悠璃の制止に疑問を呈する美夏。すると、キュウコンは近づいて来る美夏に対して青白い炎を弾丸のように放ってきた。不気味な炎を放って相手を火傷状態にする“鬼火”である。ポケモンに対しては火傷状態にするだけでダメージは発生しない技であるが、人間に使うとなっては話は別である。

「きゃあっ!!！」

「美夏!!！」

鬼火を浴びた美夏の服や肌の一部が焦げる。キュウコンは助けに入った悠璃に対しても容赦なく鬼火を打ち込んできた。悠璃はガブリアスを出して応戦することも考えたが、お化け屋敷は教室の半分以上を敷地に使っており、此処でガブリアスを出して攻撃させたら教室にいる他の人たちにも迷惑を掛けてしまうのではないか。またこれだけ大きいとはいえ、このお化け屋敷派所詮は学生の手作りである。もし下手に戦えばお化け屋敷が壊れ、自分たちが生き埋めになる危険性もあった。

「うっ……何で怒っているかは判らないけど……急いで逃げるわよ」
「うっ、うん!!！」

悠璃と美夏は何故自分たちがキュウコンに八つ当たりされなければならぬのか、という憤りを抱いてキュウコンから逃げることに成功した。ちなみにキュウコンが怒っていた原因は元を正せば美夏に原因があつた。それは美夏が悠璃に付いていこうとしたときに、美夏が踏んだものの正体にある。実はあの時美夏が踏んだ布のような柔らかい感触のものはキュウコンの尻尾であつた。キュウコンの持つ神通力などの不思議な力はその9本の尻尾によって発せられている、という説があり、キュウコンは自らの尻尾をとて大事にしているのだ。そのためキュウコンの尻尾を不意に踏んでしまえばどうなるか。一説にはそのキュウコンの寿命が続く1000年の間、子々孫々が延々と崇められるというものがあるが、それを実証した記録などがないため真実は明らかとなっていない。しかし、ポケモンは時折人間の常識を超越した力を発することがあるので、どのようなことが起こるかなど、誰にも判らなかつた。

「此処までくればもう大丈夫かな……」

「そうかもね……つつ！」

「悠ちゃん!？」

2人はキュウコンを何とか振り切つた。しかし、キュウコンが追つてこないことを確認すると悠璃が突然その場にしゃがみこむ。心配した美夏が悠璃の様子を確かめていると、悠璃は左足に火傷を負つていた。美夏を助ける際にキュウコンの放つた鬼火が当たってしまったのだ。

「大丈夫よ。このくらいななんと……」

「痛むんでしょ? なら無理しちゃいけないよ」

痛みを圧して立ち上がった悠璃であるが、美夏に諭されて

その場に座り安静にする。

患部を冷やそう、ということでも水を探す美夏であるが、お化け屋敷の中に水源など存在しない。やはり水で患部を冷やすためには一度外に出なければならなかった。美夏は負傷した悠璃を置いてまずは1人で出口にたどり着き、外にいるクラスメートに悠璃の怪我のことを伝えて応援を呼ぶことにした。

「あんた1人で抜けられる？」

「……正直、自信ない。でも悠ちゃんが私をかばって怪我したんだもの……いつまでも1人でびびってなんていられないわ！」

何処か弱々しい美夏の表情がきりつと引き締まる。その顔からは美夏の強い意志と決意が感じられた。悠璃はそんな美夏を何処か頼もしく思いながら、美夏と別れた。美夏は意気揚々と出口に向かっていこうとする。

「さて出口は……こっちな……ってうわっ！」

だが、美夏は出口に向かう途中、何かとぶつかった。跳ね飛ばされる形になった美夏は何にぶつかったのかと思って確認してみる。よく眼を凝らしてみると、そこには信じられない光景が広がっていた。なんと暗闇の中で血のような赤い色をした鎧兜が息を切らしながら美夏を見下ろしていた。それを見た美夏は叫び声も上げずに気を失ってしまった。鎧兜は失神した美夏を抱えあげると、お化け屋敷の奥へと進んでいった。

第34話：文化祭1日目／逢沢 悠璃の憂鬱（4）

「美夏……大丈夫かしら。ああは言っていたけど怖がりだから……」

美夏がそのようなことになっているとは露知らず、悠璃はお化け屋敷の中1人誰かが来るのを待っていた。悠璃は美夏を心配こそしているが、逆に美夏が居なければ居ないで困ることも少なからずあった。

「それにしても……やっぱり好きになれないわ。暗いところは」

意味深な表情を浮かべて考え込む悠璃。美夏のことを気遣っているが彼女も幽霊や暗闇といった類のものは苦手としているのだ。もし恭介に挑発されたとしても美夏が居なかったらきつとお化け屋敷に入らなかつただろう。そんな時、彼女の耳に何かの足音が近づいて来るのが聞こえてきた。足音は美夏が行った方向から響いてくる。悠璃は美夏が誰かを呼んできてくれたのではないかと美夏の名前を呼ぶ。しかしそこに居るはずの美夏から返事は無い。不思議に思った悠璃の目の前に現われたのは美夏ではなく、美夏を抱えた謎の鎧兜であった。血のような赤の鎧兜はお化け屋敷の暗闇の中でも際立っており、その風貌は美夏を気絶させ、悠璃を動揺させるのには十分であった。

「みつ、美夏！？ お前……美夏に何をした！？」

「あ……さ……」

「くっ、来るなあ……！」

鎧兜は面の下から何かを呟いたが、うまく聞き取れない。鎧兜は床にゆっくりと美夏を降ろすと、悠璃の下へ歩み寄ろうとする。しかし鎧兜に美夏が何かされた、と決め付けていた悠璃は周囲に落ちていたガラクタのようなものを鎧兜に投げつけて抵抗する。もちろん相手は鎧兜なのだからこのような攻撃は全く通用していなかった。しかし悠璃はそれに気付かないほど取り乱しており、徐々に自分へと近づいて来る鎧兜に対してはただ純粹に恐怖を感じていた。

「あいざ……さ……」

「……いつ、嫌あつ……！」

「逢沢……さん」

悲鳴を上げてうずくまる悠璃。しかし、その時聞こえた自分と呼ば名を聞いて顔を上げる。鎧兜はしゃがみ込んだ悠璃に手を差し伸べていた。悠璃が呆然と鎧兜を見上げていると、鎧兜は顔につけていた面を取り外した。なんと防具の下から現われたのは、他ならぬ恭介の顔。この鎧兜の正体はなんと恭介だったのだ。

「立花……なんでお前が……」

「悲鳴が聞こえたんだ。だから2人を探しに来た」

「な、何でお前はそんな格好を？」

「コスプレのリクエストで人気がある格好を男子連中とやっていた。俺はジャンケンに負けて鎧兜を着せられてね……」

そう言って苦笑いする恭介。顔を覆っていた防具が外れたことで恭介の顔が暗闇の中にうつすらと見える。暗闇ということや鎧兜を

着込んでいたことがあつて恭介の顔は普段ほどよく確認出来なかった。しかし、そんな状況においても恭介の顔にはあの微笑みが浮かんでいた。

+++++

恭介の案内によつてお化け屋敷の外に出た悠璃と美夏。クラスメイトとはいえ、自分たちの出し物から怪我人が出てしまったということは少なからずクラスメートの皆を動揺させていた。悠璃と美夏を驚かせたがつていた恭介であるが、必要以上に2人を驚かせてしまったということで恭介は自ら悠璃と美夏の怪我の治療を志願した。保健室から借りてきた薬を使つて悠璃の足の火傷を治す恭介。

「これで一安心だね」

「よかったあ……」

「全然良くない」

悠璃の火傷はそれほど重くないようで、チーゴの実から作り出し

た火傷治しを使うと、瞬く間に火傷は治ってしまった。悠璃の火傷が治ったという事でほっと胸を撫で下ろす美夏。しかし怪我が治ったとはいえ、悠璃の怒りは収まらなかった。もちろん恐怖に慄いている姿を恭介に見られたという弱みもある。だが特定の人物を驚かすために改変した呪いのビデオに人に向かって鬼火を飛ばして来るキュウコン、赤い本物の鎧兜と学生の出し物にしてはオーバーすぎるというものまた事実だった。

「幾らなんでもあれはやりすぎよ！　そこまで私を驚かせたかったの？」

「うん」

「うんって……そもそも私を驚かせて何になるのよ」

怒りの収まらない悠璃は何故恭介が悠璃を驚かせたかったのかが気になった。自分をただ驚かせることに一体何のメリットがあるのか、悠璃には全く判らなかった。

「……このお化け屋敷のおかげで逢沢さんがお化けとかが苦手ということが判った」

「だったらどうした」

呆れるように吐き捨てる悠璃。恭介は悠璃の真正面に座ると、じっと悠璃の眼を見つめて微笑んだ。

「結果俺たちは逢沢さんという人間の新しい一面を俺たちは知ることが出来た。違う？」

恭介の思惑。それは“逢沢 悠璃”という1人の人間がどのような人間なのかを皆により知ってもらおうというところにあった。悠璃はだいぶクラスに馴染んで来たとはいえ、相変わらず不器用で近

寄りがたい印象を人に抱かせるところもある。恭介はそんな状況が多少気がかりであり、それを改善するきっかけが欲しかった。そのために丁度よく翔たちから提案されたお化け屋敷を活用し、悠璃という人間がどのような人間なのかを皆に知って欲しかったのだった。もちろんそれは悠璃に取っては余計なお世話と言えることであり、恭介のお節介に過ぎなかった。だが、今の悠璃を見て悠璃を冷たそうで近づきたい存在と思う人間は少なくなり、代わりに増えたのは悠璃もお化けに怖がる普通の少女という認識である。現にお化け屋敷での出来事に顔を真っ赤にして反論する悠璃の姿はそのグレイシアのコスプレ姿も相まってどこか愛らしく見えたこともそれには影響していた。

「でも結局は逢沢さんと仁科さんを怖がらせてしまったことには変わりない。そこは正直に謝るよ。申し訳ない」

恭介はそう言って立ち上がると、突然地べたに座り込んで悠璃と美夏に土下座をした。それには悠璃と美夏が逆に驚かされた。多くの人間が見ている目の前で脇目も振らず土下座をする。悠璃はそんな恭介に行動の意味がまるで理解できなかった。

「やめてよ立花くん！ わたしたちそんなに怒ってないから！
ねえ、悠ちゃん！？」

「あつ、ああ……」

恭介の行動に度肝を抜かれた悠璃は美夏に言われたままにするしか無かった。だが恭介に弱みをこれ以上見せたくない悠璃は強がってみせる。

「あんたのその情けない姿を見ていたら怒る気がしなくなった」
「そうか、それはありがたい」

「でも……さすがにあれはやりすぎよ。ホラー映画の台詞を私と美夏用に改変するなんて」

「そうだよ！ あれはすつごく怖かったんだから！」

悠璃と美夏はあの仕掛けの意図を恭介に尋ねる。しかし、恭介はその質問にはきょとん、とした顔を浮かべていた。

「ホラー映画……？ いや、俺は何もしてないけど」

「えっ？」

「……じゃあ他の誰かがやったっていうの？ 正直に言って……やったのは誰よ！？」

悠璃の怒声が沈黙する教室に響き渡る。悠璃と美夏はクラスメイト1人1人に聞いていったが、誰もがそのホラー映画のビデオについて知らないと言いつつ張った。そして驚くべきことにこのクラスには悠璃と美夏に鬼火を撃ってきたキュウコンのトレーナーも居なかったのである。

「えっ、じゃあ……」

「あのビデオは本物ということに……」

悠璃と美夏は顔を真っ青にすると、「ひいひい」と消え入るような悲鳴を上げてはあの時の恐怖を互いに分かち合っていた。2人の話を聞いて事態を重く見た恭介と蛍がお化け屋敷の中を探しに入ったが、そのようなホラー映画が映っていたテレビとキュウコンの姿は何処にも見当たらなかった。後日、このエピソードはハクタイ高校で起きた不可思議な事件の1つとしてオカルト好きの学生の中で密かに話題になったという。

こうして、文化祭1日目は波乱の中終了した。2日目はトレナーである生徒たち全員が期待する晴れの舞台、学年別バトルトーナメントである。

第34話：文化祭1日目／逢沢 悠璃の憂鬱／（4）（後書き）

次話から文化祭2日目のトーナメント編に入ります。ここでは一応4組主要登場人物全員のバトルを描くこととなりますので楽しみに。。。

第35話：文化祭2日目・組み合わせそれぞれの朝（前書き）

文化祭2日目・学年別トーナメント編が始まります。
かなり長くなと思いますが、宜しくお願いします！

第35話：文化祭2日目・組み合わせるそれぞれの朝

文化祭2日目の早朝。まだ陽が昇り始めた頃、恭介は1人寝巻き姿に真剣を持って朝靄の立ち込める庭に立っていた。恭介は前日いつもより早く眠りについた。しかしこれは珍しいことではなく、恭介が大事なバトルの前にいつも行っていることである。別段恭介が早く寝ることに意味は無いのだが、これは恭介からしてみれば「良いバトルが出来ますように」という一種の願掛けのようなものであった。

「空気が澄んでいる。今日は良い天気になりそうだ」

恭介は薄い紙を手にとると、それを刀の上にそつと被せてみる。すると紙は一人でに真つ二つに切れた。それは恭介の持つ刀がとても良い出来であることを示していた。恭介はそれを見て刀を鞘に収める。そして亡き祖父が大事にしていた刀を縁側にゆっくりと置くと、その代わりにモンスターボールを手にとった。モンスターボールからは真剣な表情をしたリザードンが色違いのポケモンが出す特殊な光と共に現れる。リザードンは恭介の眼をまっすぐ見つめると、何も言わずに頷いた。

「リザードン。今日のバトルは……お前に全部任せるよ」

ハクタイ高校の文化祭は1年生と2年生が学年別にトーナメントを行う。それがもはや伝統の行事となっていた。1日目に2年生の部が行われ、2日目に1年生の部が行われる。一般的に一番バトルの実力が高い3年生は受験勉強など進路が関わる重要な時期ということもあつて、文化祭には自由参加となっており、トーナメントは行われない。しかし、それでも前途ある学生トレーナーたちのバトルが見られるとあつて、集客力はかなり高く、ハクタイシティはもちろんのこと、他の街からもこのバトル目当てに客がやってくるほどのものだった。恭介は汗を洗い流すためにシャワーを軽く浴びると、制服に着替えて朝食の準備を始める。こうして早起きすることが多い恭介は母親や姉たちに代わって家族の分の朝食を作ることが多いのだ。

「……あら、恭介。どうしたの？ 早いじゃない」

「おはよう。母さん」

「またあなたに朝食作らせちゃうなんて……私は母親失格かしら？」

「そんなことはないよ。俺が勝手にやっていることだし……あつ、じゃあ一緒に作ろうか」

台所に立つ恭介に話しかけるのは彼ら5きょうだいの母親・美那^{みな}であった。美那は恭介たちの父・雅幸と20歳のときに結婚し、その2年後に長男・雅治を産んでから雅幸との間に合計5人もの子供を設けた。年齢は今年で50歳となるが、昔から童顔ということがあったのか外見は実年齢よりも10歳以上若く見える。そのため、当初は子供が育てられるのかと不安がられていた彼女であるが仕事柄海外出張が多く、家を空ける雅幸の代わりに5人の子供をしつかりと育て上げ、周囲の評判もすこぶる良いものであった。

「そうか、今日は文化祭のトーナメントだったわね」

「ああ」

「やっぱり優勝狙う？」

「どうだろう……確かに勝つことは嬉しいけど、勝ちよりも負けの方が多くのことを得ることが出来るからね。負けたら負けたで結果を大人しく受け入れるよ。でも悔いの残るバトルはしないつもり」
「相変わらず小難しいことを言うのね、あんたは。友達に老けてるとか言われてない？」

美那の突っ込みに恭介は苦笑いをしながら自分で握ったおにぎりを口に含んだ。塩の味がした。

+++++

午前8時10分ごろ。恭介が学校に着くと、既に教室の中ではバトルを待ちきれない生徒たちがポケモンを出して組み合わせ抽選のときを待っていた。トーナメント方式で行われるこのバトルは1年生の4クラスの生徒全員を4つのブロックに分け、コンピューターで対戦カードを決める。組み合わせや試合順はすべてポケモンリーグで使用されているコンピューターと同型のコンピューターがランダムに決めるため、結果は表示されるまで判らないのだ。それが若い学生トレーナーたちを血気に逸らせる。

「おはよう、恭介」

登校した恭介に蛍が声を掛けて来た。普段から冷静な蛍はこのような状況になっても変わらず平静さを保っていた。そんな蛍の周りを彼のムウマージがふわふわと飛びまわる。

「おはよう、蛍。なんかいつもより早いね」

「そうか？ まあこのような大きいバトルは久しぶりだからな。自然と体に力が入る」

「蛍はムウマージで行くんだね」

「ああ。こいつは何だかんだいって一番最初にゲットしたポケモンだからな」

蛍はムウマージ以外にも“よろいどりポケモン”のエアームドと“ライトポケモン”のランターンを所持している。今回の大会のルールは事前に登録した1匹のポケモンのみが使用可能なルールであるため、3匹のポケモンを持っている蛍はそこから1匹を選んで出場しなければならないのだ。もちろんこのルールを適用することとなると、恭介も1匹しかポケモンを使用できない。だが恭介は既に誰をバトルに出すかは決めていた。恭介の後ろに付き従うリザードンが口から小さな炎を吐いて意気込みを露わにする。

「恭介はリザードンか。1回戦で当たらないことを願うばかりだ」

「またそんな事を言って」

「謙遜などしていない。最終的に俺はお前に勝てていないんだからな」

2人は互いに顔を見合わせて苦笑いする。学校内では天才トレーナーとして名を馳せている恭介であるが、そんな恭介と常に互角以上のバトルを蛍は演じている。互いを知り尽くし、高い実力を持つ2人だからこそ出来る会話であった。そんなとき、悠璃と美夏が一

緒に登校してきた。美夏はいつものようにヘルガーを従えては多少緊張した面持ちを浮かべており、一方の悠璃はいつもと変わらず無愛想な顔をしていた。

「おはよう。逢沢さん、仁科さん」

「あつ、立花くん！ おはよう！」

緊張しながらも元気に明るくあいさつをする美夏。しかし悠璃は恭介のあいさつを無視して自分の席へと座る。もちろん悠璃に恭介のあいさつが聞こえていないわけではない。いつもよりも早起した恭介に比べて悠璃は今日のバトルのことをずっと考えていたために寝不足気味であったのだ。そのため自慢の黒髪には多少寝癖が残っていたし、眼の下にはくまが目立っている。悠璃からしてみれば誰とも話したくないという状況であった。悠璃はぐったりした面持ちで席に座り、机に項垂れる。そんな内情を知ってか知らずか、恭介は自分の通学鞆の中からノートを1冊取り出すとそれを筒状に丸める。そしてそれを悠璃の耳元に近づけると、大声で叫んだ。

「おはよう！ 逢沢さん！」

「きゃああつ！！」

筒状に丸められたノートはメガホンの役割を果たしていた。ノートの反響して響いた恭介の声に驚いた悠璃は悲鳴を上げて椅子から転げ落ちた。そしてかすかに充血した眼で恭介を睨み付けると、脛を思い切り蹴り飛ばす。脛は『弁慶の泣き所』という異名を持っており、人間にとって鍛えようのない弱点とも言える。普段から体を鍛えている恭介とはいえ、この部分の痛みを我慢することは出来なideいた。

「い……いきなり何をする！！」

「良かった。いつもの逢沢さんだ」

「……バツ、バカ！」

恭介の頭に来たたんこぶが痛々しく膨らんできた頃、始業時間を迎え、浅尾先生によってコンピュータの画面が大きく黒板に映し出される。

「これが今日の組み合わせよ！ 皆頑張ってね！！」

浅尾先生の激励の言葉に合わせてクラスの生徒全員が黒板前に駆け寄る。その中には当然たんこぶの出来た恭介と寝不足の悠璃も混じっていた。悠璃は眼を凝らして4つのブロックの中から自分の名前を探し出す。悠璃の名前はAブロックの第一試合の場所にあった。第一試合ということはトーナメント最初の試合を悠璃は飾ることになるのであった。

「第一試合だと？ また面倒な……」

そう言いながら悠璃は隣に書いている対戦相手の名前を確認する。

「嘘……」

第一試合。悠璃の対戦相手となったのは、他ならぬ美夏だったのである。悠璃がその事実に驚く中、美夏は啞然として組み合わせに沸き立つ生徒たちの中に立ち尽くしていた。

第35話：文化祭2日目・組み合わせるそれぞれの朝（後書き）

第一試合は悠璃VS美夏！

第36話：文化祭2日目・第一試合、悠璃VS美夏（1）

「まさか悠ちゃんとわたしが当たるとはね……しかも1回戦で」

文化祭2日目のメインイベント、学年別トーナメント1年生の部でAブロック第一試合を戦うことになった悠璃と美夏。まさかいきなり当たるとは思っていなかった2人は苦笑いしながら対戦を待つ学生たちで賑わう廊下を歩いていた。2人は第一試合のため、会場となる5階のホールへと向かわなければならなかった。このトーナメントはAからDまで4つのブロックに分かれており、それぞれ5階のホール・屋上・体育館・地下バトル場でバトルが行われるようになっていいる。だが生徒たちはトーナメントが開かれる前に1年生の代表生徒による選手宣誓などが行われる開会式が開かれる屋上に行かなければならなかった。

「正直言って自信ない……悠ちゃんとわたしじゃ力の差がありすぎるもん」

「バトルの前から諦めてどうするのよ」

「へへ、つい……でもポケモンたちも張り切っているからね。結果はどうあれ楽しかった、って思えるバトルにしたいな！」

「ええ、その意気よ。互いに頑張りましょう」

悠璃の言葉にいつもの微笑みを取り戻す美夏。しかし悠璃が説得

力のある言葉を言ってもその寝癖で威厳が薄れてしまう。美夏は悠璃にその寝癖を直すことを提案した。やはり大勢の観客の前でバトルする以上、身なりを気にするのは女子として当然のことであった。

「まずは悠ちゃんその寝癖を治さないかね。わたしも付き合うよ」

「それくらい私1人で出来るわ。ほら、時間がないんだからあんたは早く開会式が行われる屋上にでも行つてなさい」

「……もう、つれないなあ。じゃあわたし先に行つてるからね！

さーて、どのポケモンを出そうかな」

そんなことを言いながら美夏は1人で開会式が行われる屋上へと行った。悠璃は制服のポケットから櫛と整髪用の水が入ったスプレーを取り出すと、女子トイレの洗面台に立った。鏡に映る悠璃の眼の下にはくまが出来ており、黒髪は起きたときのまま寝癖が目立つ。悠璃はスプレーを頭に掛けると、櫛で髪を丁寧にとき始める。

（美夏と対戦……そういえば此処に編入してから2週間は経つけど、まだ美夏とバトルしたことは無かったわね……）

悠璃が美夏のバトルを見たのは後にも先にもあの朝のときだけであった。美夏の手持ちポケモンの1匹がヘルガーという事は判っている。仮に美夏がヘルガーをバトルで出してくるのであれば、ドラゴンと地面タイプを併せ持つガブリアスとは相性が良い。しかし美夏のヘルガーには攻撃を躊躇わせる理由があった。それがあの朝のバトルで披露したカウンターである。物理攻撃を得意とするガブリアスが速攻で地震など弱点をつける技を放ったとする。ヘルガーはその防御力の低さを逆手にとって持ち物である気合の襷で攻撃を堪えると、カウンターで物理攻撃を倍返ししてくるのだ。倍返しの攻撃を受けてしまえば、いくらガブリアスとて一たまりもない。しか

し、気合の襷の効力を無効化するならば手段はたくさんある。その1つはカウンターをしてることが確定の上で、特殊技や変化技などで予めダメージを与えておくことだ。気合の襷はポケモンのHPが満タンの状態で一撃で倒されるほど大きなダメージを受けたとき、ギリギリ持ちこたえさせる道具。そのためHPを少しでも削ってしまえば気合の襷は発動しなくなる。だがそこで様子を見たり二の足を踏んだりしているとヘルガーの高い特攻から繰り出される攻撃に思わぬ痛手を被る危険性もある。そのためこの作戦は諸刃の剣とも言えるのだ。

（この作戦なら勝率はグンと上がる……けど）

悠璃の中にはまだ心残りがあった。それはさっきの美夏との会話の中にあつた。「さーて、どのポケモンを出そうかな〜っ」悠璃が引っ掛かるのはこの言葉である。悠璃は美夏が普段ヘルガーを連れ歩いていることは知っているが、それ以外のポケモンをまだ見たことがないのだ。もし美夏がヘルガー以外のポケモンを出してきたとすれば、今まで考えた対ヘルガー用の作戦はまるで無駄になってしまう。悠璃はどうすべきか考えた。正直美夏相手に此処まで悩むことになるうとは、と自分自身で驚いていた。そんなとき、腰のモンスターボールが激しく揺れる。悠璃の様子を心配したガブリアスがひとりでにモンスターボールから出てきたのである。

「ガブリアス……」

悩む悠璃にガブリアスは無邪気な笑みを見せる。その笑顔を見た悠璃ははっ、と立ち返る。悠璃の脳裏にはさっき美夏が言った、楽しかったと思えるバトルがしたいという言葉が響いていた。確かにバトルには知識や戦略も必要ではあるが、それに囚われすぎていては美夏が言うようなバトルは出来ない。ガブリアスはそれを悠璃に

伝えたかったのだ。

「そうよね、こんな事で一々悩んでなどいられないわよね」

悠璃は顔を洗ってくまを目立たないようにすると、意気揚々と女子トイレを出た。さっきまで人がたくさんいた廊下はすっかり閑散としている。どうやら皆既に屋上へと向かったようだった。遅れてはならない、と急いで駆け出す悠璃であるが、そんな状況において1人まだ呑気に廊下を歩いている生徒が居た。

「やあ、逢沢さん」

「立花……」

リザードンを連れた恭介はまるで開会式に遅れることを厭わないかのように階段を登っていた。そんな恭介は悠璃を見つけると、手すりに腰掛けては悠璃に話し掛ける。

「逢沢さんはAブロックの第一試合だってね。それで対戦相手は仁科さん」

「だからどうしたっていうのよ」

「俺はBブロックの第十一試合。Bブロックの人としてAブロックの人と当たるには準決勝まで勝ち進まないといけない」

「……」

「俺は準決勝まで勝ち上がる。そしてAブロックの人……いや、逢沢さんとまたバトルがしたい」

恭介は微かに笑みを浮かべているものの、その眼差しは力強いものであった。確かに恭介がAブロックの参加者と当たるには勝ち上がってきた他のBブロックの生徒と戦い、勝たなければならない。このトーナメントのルールでは登録したポケモンのみで戦うことと

なっているので、途中にリザードンが苦手な水タイプや岩タイプ、電気タイプのポケモンを使うトレーナーと当たってしまえば一気に勝利が厳しくなる。そんな状況においても恭介は悠璃にBブロックを勝ち上がると言い切ったのである。もちろんこの言葉には裏がある。

（そうか。立花……）

それは同時に悠璃にAブロックを勝ち抜いて欲しいという恭介の願いであった。実情はどうであれ、恭介はエキシビジョンバトルで悠璃に敗北を喫している。負けたままでは心苦しい、だから次は勝ちたい。ポケモントレーナーとして当然の考えであった。ちなみにAブロックには悠璃と美夏の他にも翔、蛍、凜がいる。悠璃が恭介と戦うためには当たる可能性があるその4人を倒さなければならぬ。しかし第一試合のことばかりを考えていた悠璃はまだ美夏以外の3人と当たる可能性があることを知らなかった。

「ふん。何を言うかと思えば……」

「そうか。じゃあ、約束だね」

そう言っ指切りげんまんをしようとする恭介。悠璃はそれを無言で振り払った。

「あんたは子供か……それよりも早くしないと開会式が始まるわよ」

「あつ、そうか。そーいーや俺1年生の代表として選手宣誓を行うんだっただけ」

「なつ……じゃあこんな所で油を売っている場合じゃないでしょう！」

「選手宣誓で言うことを考えるのすっかり忘れてた。逢沢さん代わりに言ってよ」

「断る！ ほら、急ぐわよ！」

その後、2人は開会式にギリギリのところまで間に合った。恭介は選手宣誓の内容を考えていなかったと言っていたが、いざ本番となってみると綺麗にまとめられた宣誓を行った。そしてハクタイ高校の校長と希の後を継ぐ生徒会長の2年生・真田さなだ 浩志こうじによってハクタイ高校学園祭・学年別トーナメント1年生の部の開催が此处に宣言された。

「さて……行くか。ガブリアス」

悠璃はガブリアスを従え、控え室を出る。そして歓声が響く5階のバトル用のホールへとやってきた。悠璃の姿を見て、ホールが一層沸き立つ。やはり恭介に勝ったトレーナーということでそれなりに名が知れているのだろう。その反対側では緊張した面持ちの美夏が悠璃と対峙する。このような大歓声の前でバトルするのは初めてということもあり、手と足が同時に出て歩くほどのものであった。

（美夏……大丈夫かしら）

（うつうつ……やっぱり緊張するなあ……でもわたしを信じて戦ってくれるポケモンたちのためにも！）

2人が出揃ったことによって審判が所定の位置に付く。今回の大会のために学校はシンオウ地方のポケモンリーグ支部があるスズラン島から審判を呼び寄せていた。

「これより、ハクタイ高校文化祭学年別トーナメント・1年生の部を開始します！ 第一試合、逢沢 悠璃選手と仁科 美夏選手、そ

れぞれ出場させるポケモンを出してください！！」

悠璃の後ろに付き従っていたガブリアスがバトルフィールドに出る。バトルフィールドは普通の平地であり、周囲は水ポケモンが動き回れるようにプールになっていた。そのためフィールドにはガブリアスが対応出来る陸海空全ての環境が揃っていた。

「悠ちゃんのポケモンはやっぱりガブリアスだよね……だったらわたしのポケモンはこの子よ！！」

美夏が天空にボールを放り投げる。それと同時にボールが開き、光と共にポケモンが姿を現した。翼竜のような形をしたそのポケモンは灰色の体をしており、大きな顎と鋭い牙に長い尻尾、そして尻尾の先は矢尻のような形状をしていた。ポケモンは大きな翼を羽ばたかせて空を飛んでは甲高い声で咆哮する。美夏が出したポケモンは数百万年前に絶滅したと言われている“かせきポケモン”のプラデアであった。

第37話：文化祭2日目・第一試合、悠璃VS美夏（2）

観客たちの盛大な歓声の中、学年別トーナメント・1年生の部が始まった。力強く大地を踏みしめる悠璃のガブリアスが吠える。ガブリアスは雄叫びを上げることで自分の体に喝を入れているのだが、その行動は対峙する相手を威嚇するためのものでもあった。しかし、上空を飛ぶ美夏のポケモン・プテラはそんなガブリアスの威嚇など気にも留めず、超音波のような甲高い鳴き声でガブリアスと同じように気合を入れていた。

「……プテラとはまた珍しいポケモンを持っているのね」

互いに威嚇しあう2匹のポケモンを見て悠璃は率直な感想を漏らした。確かにプテラは一介の女子高生トレーナーが持つポケモンにしてはとても不相応な珍しいポケモンであり、現代には存在しないとされているポケモンであった。

美夏とプテラの出会いは美夏が中学2年生のときにまでさかのぼる。中学校当時の美夏はハクタイシティではなくその南にあるクロガネシティという街に住んでいた。クロガネシティはシンオウ有数の炭鉱の街であり、その中学校に通っていた美夏は学校の実習でよくクロガネ炭鉱を見学していた。クロガネ炭鉱では主に鉱石の発掘が行われるのだが、稀にポケモンの化石が発見されるという。その情報は当初は真偽性が疑われたが、若くして炭鉱を束ねるクロ

ガネシティのジムリーダー・ヒョウタが化石を発掘し、最新技術で蘇らせたポケモンをバトルで使用していることからクロガネシティは炭鉱のみならず化石の街としても栄えているのだ。

そんなクロガネ炭鉱に当時中学2年生になったばかりの美夏がやってきたのは2年生に進級してまだ一月も経たない春のことだった。既にポケモンを持てる年齢であった美夏がデルビルと共に坑内の探索を行っていたとき、鼻の利くデルビルが突然壁に向かって吠え出したのである。美夏は逸るデルビルを嗜めて慎重に壁を掘っていくと、そこからは美夏の顔よりも大きな透き通った物体が現われたのである。それこそがプテラが眠るとされる『秘密の琥珀』という化石だったのだ。

それから言うものの、プテラの化石が見つかったということはクロガネシティ中の話題となった。何故かという他ポケモンの化石はたくさん見つかったものの『秘密の琥珀』だけはどれだけ探しても発見されず、研究者たちの間では「シンオウ地方にプテラは生息していなかった」という結論が割り出されるほどであったのだ。しかし、その『秘密の琥珀』を一介の女子中学生トレーナーが見つけたことでその結論は否定されることとなり、シンオウ地方にもプテラが生息していたことが立証された。美夏の発見は人知れずポケモン研究に大きく貢献されていたのである。それから発見者の美夏にクロガネシティの化石研究所から感謝を込めて琥珀から蘇らせたプテラが送られたのだが、元来とても気性の荒いポケモンであるプテラは中々美夏に懐かず、暴れまわることが多かった。そのため美夏はプテラをボールから出すことなく過ごして来た。もちろん美夏もトレーナーであるので人知れずバトルのトレーニングを行ってはいたが、まだまだバトルに出せるほどコミュニケーションを取れている自信は無かった。しかし、いつまでもこのままではいけない。自分が変わらなければならない。そう決心した美夏は悠璃とのバトルにプテラを出したのである。

そんな美夏とプテラの出会いのことを知る由もない悠璃は積極的

に攻めようとはしなかった。悠璃が見たところ美夏とプテラの間にはすっかりとした信頼関係は築かれていない。それならば何故そんなポケモンをバトルに出してきたのか。しかもプテラは獺猛なポケモン、臆病で気が弱い美夏のポケモンということもあって、しっかりと指示を出せるのだろうか。対戦相手の身でありながら、悠璃は多少不安げにも思っていた。しかしその心配は悠璃の杞憂に終わる。最初は地上と空中で互いに睨み合っては様子を伺っている形の2匹だったが、先に美夏のプテラが動いた。空を滑空するような形で地上のガブリアスに攻撃を仕掛けようとしてきたのである。

「動いた……ガブリアス、ドラゴンクローで迎え撃ちなさい」

「プテラ！ 燕返しっ！」

錐揉み状に高速回転しながら急降下を試みるプテラ。地上ではガブリアスがすぐにドラゴンクローを放てる体勢を取って待ち構えている。このまま突っ込めばプテラにとっては自殺行為とも言え、美夏はその先のことを予測していなかったのである。だがプテラはそれを知ってか知らずがガブリアスに向かって急降下する際にわざと体のバランスを崩したのである。ガブリアスから見ればプテラの体は不自然にぶれて見えたため、今の攻撃の目測は本当に正しいのかと微かに動揺する。プテラはその隙を見逃さなかった。ガブリアスの左腕の動きが止まった刹那、プテラの燕返しが決まる。空中からの攻撃を受けたガブリアスの体が大きく吹き飛ばされる。それを見てコロシラムに驚くかのような歓声が響く。プテラのスピードはガブリアスのそれを完全に上回っていたのである。

「プッ、プテラ！？ 今……」

驚く美夏にプテラは呆れた顔で溜息をつく。プテラは美夏にトレーナーならガブリアスの体勢を見抜き、指示を出すくらいのこととは

しろ、と伝えようとする。しかし、美夏はプテラの言葉などまるで聞いていなかった。それよりもこれまで自分の指示を聞かなかったプテラが初めて言うことを聞いたことに驚きを隠せなかったのである。そんな様子の美夏にプテラは苦笑いを浮かべ、再びガブリアスの方へと向き直った。ポケモンとトレーナーの間に信頼関係を築くことは実はとても難しいことであり、トレーナーに技量が無いと判ればポケモンはトレーナーの言うことには従わない。それはモンスターボールでゲットしたとしても是正されることがないものである。一般的にトレーナーはジムバッジを手に入れることでポケモンを従わせるのだが、特殊な例としてジムバッジの有無に関わらず指示に従わないポケモンもいる。美夏のプテラはまさにその典型的な例でもあったのだ。しかし、プテラのその意識はこのバトルで変わった。それが目の前で対峙するガブリアスの存在である。プテラはボールから出た瞬間、自分が戦うことになる相手が自分より格上の存在であることは理解したのだ。実力差では劣っているかもしれないが、そのような相手に挑むときにつまらぬ意地など張ってはいられない。そう望んだプテラの力がガブリアスに先制の一撃を喰らわせたのである。

「プテラ……私、頑張るねっ！」

美夏の方を振り返り、プテラはコクリと頷いた。

「っ……やるじゃない。ガブリアス、スピードでは負けているけどパワーは私たちの方が上よ。焦らずにいきましょう」

悠璃の指示を受けて身構えるガブリアス。先にプテラが動くのを待ってカウンター攻撃を仕掛けるのが狙いだった。そんな悠璃とガブリアスの狙いを知ってか知らずかプテラが攻撃を仕掛ける。大きな口を開き、鋭い牙には冷気が込められ始める。ドラゴン・地面タ

イプのガブリアスの弱点を一気に突く氷タイプの技“氷の牙”である。

（氷の牙……一撃でも喰らったら致命傷……）「ガブリアス、上空へジャンプして避けなさい！」

逆撃の体勢を取っていたガブリアスは攻撃の体勢を解除し、空高く飛び上がった。プテラの氷の牙は空を切り、急降下したプテラは思わずバランスを崩しかける。

「プテラ、ガブリアスを追いかけて！」

氷の牙をかわされたことで一瞬バランスを崩しかけたプテラではあるが、美夏の指示を受けてすぐに持ち直すと、上空のガブリアスを追撃する。陸上や水中でならともかく、空中戦ではスピードで上回るプテラの方に分がある。しかしガブリアスはそんな状況で敢えて空中戦を挑んだのであった。

第38話：文化祭2日目・第一試合、悠璃VS美夏（3）

追いかけてくるプテラに向かい合う形になるガブリアス。ガブリアスはそのジャンプ力と推進力で滑空するように飛ぶことは可能であるが、翼を持たないため普通の飛行ポケモンのように空中で動きを止めることは出来ない。そのため動きの止まったガブリアスの体は地球の重力に吸い寄せられて瞬く間に降下していく。

「プテラ、追いかけて！」

それを見た美夏はプテラにガブリアスに追撃を仕掛けるように指示を出す。氷の牙を閃かせながら同じように降下していくプテラ。その様子を見て悠璃はニヤリと意地悪な微笑みを浮かべる。

「かかったわね、美夏」

「えっ……？」

これこそが悠璃の狙いだった。空中で動きを止め、敢えて地上へ降下する。空中戦で敵わないと踏んだので得意の地上戦で挑むことにした、と美夏とプテラに思い込ませるのである。空中から地上に降りながらの攻撃や防御は制御が難しく、重力に任せて落ちていく。その間はガブリアスは無抵抗になり、隙だらけになる。そんな絶好にチャンスを相手は見過ごすはずはない。「今こそが攻撃の機会

！」とばかりに突っ込んできたプテラに悠璃は制御が難しいのを承知の上で、相手の不意を突く形で攻撃を仕掛けたのだった。

「ガブリアス、ストーンエッジ！」

ガブリアスの体の周りを覆う形で矢じりのような形状をした鋭い岩が現れる。岩・飛行タイプのプテラには岩タイプの強力な物理攻撃技“ストーンエッジ”は効果抜群。そして鈍重なポケモンが多い岩タイプの中で異色とも言えるスピードを持つプテラは、その反面他の岩タイプとは違って防御力はとても低い。そのため一発の弱点技の被弾が致命傷となり得る。プテラのような速攻型のポケモンを使うトレーナーはそれを念頭に置いてバトルに臨まなければならなかった。ストーンエッジがプテラ目掛けて一斉に放たれる。まさに不意打ち同然の攻撃。いくら素早いプテラと言えどもこの距離からの攻撃はかわせない。

「プツ、プテラ！ 守るでストーンエッジを防いで！！」

咄嗟の判断であったが、これが功を期した。プテラが作り出したバリアーが迫り来るストーンエッジをはじき返す。ストーンエッジの被弾こそ免れたものの、プテラは防御に集中するあまり隙だらけだった。そこにプテラが攻撃を防いでいる間に地上に降りたガブリアスが空中目掛けて再び大ジャンプをしては、水中で獲物を追い詰める鯨のごとくプテラに襲いかかる。ガブリアスはプテラの上を取ると、降下に合わせてドラゴンクローを連続で放つ。一方のプテラは攻撃力では勝てないことを理解しながらも、燕返しで懸命に応戦する。絶対に避けることの出来ない、とされている燕返しがガブリアスの皮膚を切りつける。攻撃速度ではプテラの方が上である。しかし一撃の重みはやはりガブリアスの方が上。HPと防御力の低さも相まってかプテラは除々に押し切られていくように見えていた。

「そこまでよ。下がりなさい、ガブリアス！」

そんなとき、不意に悠璃の方からガブリアスに下がるように指示が飛ぶ。美夏は何故此処で悠璃が下がるように指示を出したのか理解できなかった。しかし、今は悠璃のことよりも自分のことを重視しなければならぬ。美夏も同じようにプテラに一旦下がるように命じる。この間に消耗したスタミナを出来るだけ回復させたかった。

「あそこで守るを出して攻撃を防ぐとは……あんたも中々やるじゃない」

「……えっ？」

「バトルの前から気になっていたことだけど、美夏のプテラの特性は“プレッシャー”よね？」

悠璃がガブリアスを先に下がらせた理由に、このプレッシャーという特性の効果があつた。この特性は攻撃してくる相手のPPを通常よりも多く減らす特性であり、守るのように必ず相手の攻撃を防ぐ技と組み合わせられると相手によつてはかなり厄介な戦法になる。ガブリアスの使う技にはポケモン本来の高い攻撃力を生かすための大技が多い。特にストーンエッジは威力も高く、急所に当たりやすい技だがその分使える回数は少ない。故にプレッシャーを放つ相手に連発してしまうとあつという間にPPが切れてしまうのだ。そのためプテラに守るを上手く使われてしまつては有効打となる技が最終的には殆ど使えなくなってしまう。そうなつてしまえば、ガブリアスに勝ち目はなくなってしまう。それを警戒したがため、悠璃は此処に来て途端に慎重な姿勢を見せたのである。

「うっ、うん！ そうだよ、わたしのプテラの特性はプレッシャー。守ると組み合わせれば特性の力で相手のPPを減らすことも出来る

のよ！ ただ攻めるだけじゃないんだからね！」
「……そうね」

顔を真っ赤にして強がる美夏。この戦法も恭介に教えてもらった
などとは口が裂けても言えなかった。

（顔が強張ってるし棒読み……これも立花の入れ知恵かしら）

もちろん悠璃はその事実には薄々感付いてはいた。そして何故か恭介に謂れない予先が向けられる。

「くしゅん！」

「ん、どうかしたの立花？ 風邪？」

「いや……大丈夫。大方誰かが噂でもしてるんだらうね」

客席の恭介が突然くしゃみをする。隣でバトルを見ていた紗矢が
気遣うものの、恭介は平気そうな顔をして視線をバトルフィールド
に戻した。試合順がBブロック後半となった恭介と紗矢はバトルま
でまだ時間があることから、客席で悠璃と美夏のバトルを見ていた。
2人はバトルの腕では圧倒的に悠璃に分があることを知っていたた
め、バトル開始前は勝利は悠璃の圧勝と思っていた。しかしその予
想はいい意味で裏切られることとなる。

「ねえ、このバトルどうなるのかしら？」

恭介と一緒にバトルを見ていた紗矢は恭介に逐一バトルの状況を
尋ねてくる。それほど美夏の善戦に驚いていたのだ。恭介は紗矢の
質問に「さあ、どうなるかな」といったように微妙にお茶を濁すか

のような返しをする。さすがの恭介にもバトルの行く末はわからない。ただ、2人の間に明らかに見て取れるのは此処まで戦うことに全力をつぎ込んでいる美夏に対して、悠璃にはまだ幾らかの余裕が垣間見えることであつた。

ポケモンバトルはトレーナーが先に熱くなつたほうの負け。熱くなつてしまうと周りが見えなくなるため、付け込まれる隙を相手に晒すことになってしまふから。バトルの腕に長けていた亡き祖父や遠く離れた場所にいる父に子供のころによく言われた言葉。恭介はそれを思い出していた。

（逢沢さんにはまだ余裕があるけど……どう動くのかな）

恭介が見守る中、膠着状態にあつたバトルフィールドに変化が現われる。ガブリアスが砂嵐を発生させたのである。特性の砂隠れを発動させるつもりなのかもしれないが、岩タイプのプテラは砂嵐の天候ダメージを受けず、必ず当たる燕返しを持っているため、特性の砂隠れは意味が無い。それは当然悠璃も理解している。理解したうえで砂嵐を発動させたのだ。

「プテラ、燕返しよ！ さっきみたいにぐるぐる回つて！」

美夏の指示を受け、プテラは高く飛び上がった後に錐揉み状に回転しながら燕返しを放った。こうすることでプテラの勢いが増し、通常は控えめな燕返しの威力も上昇する。その証拠にプテラの放った燕返しの一撃はフィールド上に吹き荒れる砂嵐を一瞬で掻き消してしまつた。

「やった……って、あれ？ ガブリアスがない！？」

攻撃が決まった、と喜びかけたのもつかの間、美夏はフィールドにガブリアスがいらないことに気が付いた。砂隠れを発動させるのであれば、きっと砂嵐の中に隠れている。そう思っただけで必ず当たる燕返しを使わせたのだが、攻撃する相手がそこにいないのならば、いくら燕返しでも当てることは出来ない。

「そんな、ガブリアスは何処……？」

「今よ、ガブリアス……！」

焦ってガブリアスを探す美夏。しかしフィールド上にはいない。そんな時、悠璃は上空に向かって指示を出す。美夏が悠璃の後を追って上空に眼を向けてみると、なんとバトルが行われているホール天井にガブリアスが張り付いていた。悠璃は美夏に発生させた砂嵐で特性を活用する、と見せかけておくことで相手の注意を砂嵐と砂隠れに引いていた。その隙にガブリアスを移動させたのである。

「砂嵐を囷にして相手の虚を突く……俺がこの街で始めて逢沢さんを見たときのあのバトルを思い出すな」

恭介は懐かしむように天井に張り付いたガブリアスを見上げていた。その最中、ガブリアスが攻撃に移る。

「ガブリアス、ドラゴンダイブ！」

ガブリアスがプテラ目掛けて一直線に落下する。ガブリアスは天井に張り付いてプテラの攻撃をやり過ぎしている間、ずっと力を溜めていた。そのため攻撃の勢いや落下速度などは通常のドラゴンダイブよりも遥かに強力なものになっていた。プテラはどうか避けようとするが、ガブリアスの稲妻を思わせる落下速度に加え、放た

れる強烈な威圧感を前にして殆ど身動きを取ることが出来なかった。そのため、強烈な一撃をもろに喰らってしまった。

「プッ、プテラアッ!!」

美夏の叫びを掻き消すような轟音と共にバトルフィールドには巨大な隕石が落ちたかのようなクレーターが出来る。その中心では、ガブリアスが戦闘不能になったプテラを荒ぶる息を抑えながら見下ろしていた。

『プテラ、戦闘不能! ガブリアスの勝ち! よって勝者……1年4組、逢沢 悠璃選手!』

審判のジャッジが下る。悠璃と美夏による第一回戦が終わった。

第38話：文化祭2日目・第一試合、悠璃VS美夏（3）（後書き）

次の話では試合後の悠璃と美夏の談話と凜のバトルがメインとなる予定です。

第39話：文化祭2日目・恭介の疑問

設立されて間もないハクタイ高校の伝統となりつつある文化祭での若き学生トレーナーたちのバトル。その第1回戦にふさわしいバトルを見れたことで、観客席からは惜しめない拍手が悠璃と美夏に贈られていた。

「プテラ、大丈夫？」

美夏は倒れたプテラの傷を元気の欠片で回復させると「お疲れさま」と一言労いの言葉を掛けてボールに戻してやる。バトルには負けてしまったものの、美夏の心の中に後悔の念は無かった。確かにバトルの中では指示や判断のミスは多々あったものの、今まで満足にバトルすることがなかったプテラと一緒にこれだけのバトルが出来た。それだけで美夏は十分であった。

「お疲れさま……ガブリアス。ボールに戻って休んでいて」

一方の悠璃も首を垂れたガブリアスの頭を優しく撫でてやる。ガブリアスはバトルの疲れを感じさせないかのように喜びを露わにしていた。悠璃はガブリアスが戻ったボールを腰に付けると、プテラの戻ったボールを優しく撫でていた美夏のところへと歩み寄る。

「美夏、ナイスバトル」

「あつ、ありがと……悠ちゃん」

微笑を浮かべて手を差し伸べる悠璃。美夏はほんのりと頬を赤らめながら悠璃の手を取る。バトルフィールドでは早くも第2試合に挑む生徒たちがポケモンと共にウォーミングアップを始めていた。いつまでも此処にいては邪魔になってしまう、ということで2人は急いでホールから出た。ホール裏の廊下に回ると、ホールの方から大きな歓声が聞こえてくる。第2試合が始まったのだろう。悠璃と美夏は次の悠璃の試合がだいぶ先になるということで、客席から他の試合を見ることにした。

「えっ、第3試合が黒崎さん？」

「うん。凜ちゃんが第3試合で、桜木さんと久坂くんが第7試合だよ」

「そう……黒崎さんか……」

悠璃は顎に手を当てて考え込む。凜と同じクラスメートとなり、美夏や紗矢との付き合いで一緒にいることが多かったものの、初対面のときに何故か感じた一種の「苦手意識」というものが悠璃の中にはまだ残っていた。そのため自分から積極的に凜と話すことはなかったし、凜もそれを知ってか知らずか悠璃と積極的にいることは他の2人に比べて少なかった。そのため悠璃が凜のポケモンバトルで判っていることは手持ちのポケモンがサンダースということだけだった。悠璃と凜が順当に勝ち上がれば2人は第3回戦で当たる。悠璃のガブリアスならば電気タイプのサンダースに対しては一方的なバトルを繰り広げることが出来る。しかし、電気タイプを使うポケモントレーナーならば地面タイプのポケモンとバトルすることを想定して何らかの戦法を考えているのはまず間違いない。そのため悠璃もおちおちと気を抜くことは出来なかった。

「あつ、居た！ 美夏、悠璃、こつちよー！」
「紗矢ちゃん！」

遠くから手を振る紗矢の元へ駆け寄ろうとする2人。そんな紗矢の後ろでは恭介が壁にもたれて済ました顔をしていた。そんな様子の恭介を見て悠璃の顔が微かに強張る。

「2人ともお疲れさま。良いバトルだったよ」

「ありがとう！ 立花くん」
「……」

2人のバトルに素直に賛辞を贈る恭介。悠璃と美夏は真逆の反応を示す。しかし、すっかり慣れてしまったのか恭介はいつもの朗らかな面持ちを崩さなかった。

「私驚いたわ！ 普段バトルに消極的なあんたがあんなに上手く立ち回れるなんて……」

「へへ、そうかな？」

「ああ。逢沢さん相手にあれだけの動きが出来れば上出来だね？ 逢沢さん」

此処で恭介が悠璃に話を振る。唐突なことだったので、悠璃は「ああ」とぶしつけな返答しか出来なかった。だが、それでも美夏は満足したようであり、満面の笑みを浮かべてヘルガーとプテラが入っているモンスターボールを思い切り抱きしめていた。

「ねえ、いつまでもこんなところで喋っているのも何だから観客席に行かない？ 悠璃が2回戦で当たる相手も見れるわよ」

「私は別に次の相手などどうでも良いんだけど」

「そんなこと言わないの！ ほら行こつ、悠ちゃん！」

「あつ、美夏……」

戸惑う悠璃と恭介を置いて先に観客席へと戻っていく美夏と紗矢。話の中心だったはずが取り残された形の悠璃の肩に恭介がそつと手を置いた。

「さあ、俺たちも行こう」

「……！」

不意打ち同然に手を置かれた悠璃は気が動転してしまい、恭介の手を思い切り払いのけた。

「きつ、気安く触るな！」

顔を真っ赤にして怒る悠璃。恭介はそんな悠璃の逆鱗に触れないように慎重に宥めようとしたが、悠璃は恭介を残して一人で観客席へと行ってしまった。

「あらら、怒らせちゃったかな？……」

やれやれ、と一人で自嘲気味に苦笑いする恭介。しかし、その苦笑いがすぐに険しい顔つきへと変わる。

（……さっきからずっと見られていた。あれは誰だろうか？）

恭介は悠璃と美夏を出迎えたときからずっと誰かの視線を感じて

いた。顔見知りなら物陰からずっと監視するような眼で見ない。普通に声をかけてくるはずである。となると文化祭に客として来た人間、という線が真っ先に考えられるが此処はハクタイ高校の生徒しか入れない場所。そうなると文化祭の客という線は消える。

「幸い皆は気づいていなかったみたいけど……用心する必要があるのかな？ まあいいや、俺も観客席に向かおうと」

恭介は敢えて声に出す。まだ何処かで恭介が感じた疑問の人物がこの話を盗み聞きしているのなら、敢えて恭介が監視されていたことに気付いていたことを相手に知らせるために。

第40話：文化祭2日目・凜の戦い（1）

『エレキブル戦闘不能！　ヘラクロスの勝ち！　よって勝者！　1
年2組の関^{せき}　健^{けんじ}二選手！』

悠璃たちは客席から第二試合を見ていた。バトルフィールドではヘラクロスのトレーナーの男子生徒がヘラクロスと抱き合っている。試合の経過としては、試合開始直後はスピードで勝るエレキブルが連続攻撃でヘラクロスを畳み掛けるように攻撃していったが、ヘラクロスの弱点を突こうと思って放ったエレキブルの“炎のパンチ”がヘラクロスに命中した際に炎のパンチの追加効果である火傷が発動してしまったのだ。ヘラクロスの特性は状態異常時に攻撃力が上がる“根性”であり、普通火傷を負ったポケモンは攻撃力が下がってしまうが、根性を持つポケモンは例外的に攻撃力が増加してしまう。そのため、元々高いヘラクロスの攻撃力がさらに高くなってしまうのだ。狙ってやったものではないものの、ヘラクロスの特性を発動させてしまったことにエレキブルのトレーナーに動揺が走る。そのとき生まれた隙をヘラクロスのトレーナーは見逃さなかった。トレーナーからの指示が途絶え、エレキブルの攻撃の手が緩む。そこにヘラクロスが渾身のメガホーンを叩き込んだのだ。防御力の低いエレキブルはこの一撃に耐えることが出来ず、敢え無く戦闘不能へと追い込まれたのであった。

「すつ、凄い試合だったね！」

興奮気味に話す美夏。しかしあのヘラクロスと次に当たることとなる悠璃は比較的冷めていた。

「悠璃、あんたはあのヘラクロスどう見るの？ かなりの攻撃力だったけど」

「対策を立てるほどでもないわ。根性が発動してからのメガホーンで逆転することは出来たけれど、根性が発動しなければあのままエレキブルに畳み掛けられていた」

「なるほどね……でも、私も同じこと思った。なんか力押しよね。まるで久坂みたい」

右隣に座る紗矢とバトルの感想を言い合う悠璃。興奮気味の美夏とは違って何処か冷めた眼で一連のバトルを見ていたようである。このブロックに至っては勝ち負け次第では全員と当たる可能性があるため、当事者である悠璃は目の前の結果をしっかりと分析して見る必要であった。

「えっ、そうだった？」

「美夏。あんた横でキヤーキヤー騒いでいたけど、ちゃんとバトル見てたの？」

「ちゃんと見てたよ、失礼な！」

「じゃあ聞くけど……美夏は今のバトルはどんな感じのバトルに思えた？」

「えーつとね、ヘラクロスのパワーがすごかった！」

美夏の解答に呆れた様子で溜息をつく悠璃と紗矢。それを見て美夏が顔を真っ赤にして怒り出した。

「何よ！ 感想を聞かれたから答えたのにその態度は！」

「いや、実に美夏らしい感想だと思ったからつい……」

「まあまあ、落ち着いて3人とも」

そんな3人を恭介が宥める。気を利かせて3人の分の飲み物を買っていたために遅れて戻って来た恭介は席が空いていなかったため、仕方なく後ろの席に座っていた。

「立花くん！ 悠ちゃんと紗矢ちゃんがいじめる！」

「何処がいじめよ何処が！」

「ははは……でも、バトルを見た上での個人の意見は違って当たり前。だから仁科さんの答えは何もおかしくないよ」

「立花くん……」

（ふん、美夏にまで色目を使つて。これだから優男には腹が立つ）

咄嗟に美夏にフォローを入れる恭介。しかし何故か悠璃はそんな恭介の行動が気に入らなかった。別に自分が対象になっているわけではなく、悠璃自身も何故今の恭介の言動が気に入らないのかを理解することが出来ずにいた。悠璃は重苦しい表情をして恭介が買ってきた飲み物を口に入れる。そんな悠璃の様子が気になった恭介が後ろから悠璃の顔を覗き込んだ。

「どうしたの、逢沢さん？」

「ぶふおっ！？」

『只今よりAブロックの第三試合を始めます！ 選手は入場してください！』

目の前に突然恭介の顔が現われたことで悠璃は思い切り吹き出す。それと同時に第三試合の選手入場がコールされた。凜の対戦相手と

なる3組の女子生徒・川名^{かわな} 遙^{はるか}はモンスターボールを片手に何処か自信があるような面持ちで入ってくる。その一方で凜は普段の穏やかな微笑みを保ったままゆっくりと入場してくる。そんな凜の後ろには出場登録されたポケモン、サンダースが付き従う。悠璃同様に1匹しかポケモンを持っていない凜はサンダースを登録する以外無いのであるが、大抵は試合に出すまでボールの中に入れておくことが多い。

しかし、たくさんの学生トレーナーが通うハクタイ高校においてポケモンを1匹のみしか所持していないことはとても珍しいため、悠璃や凜といった生徒のポケモン情報は自然と知れ渡っているのだ。しかも、恭介や悠璃の存在で何かと目立つ4組の生徒と言うこともあってか、ポケモンを隠すことにあまり意味はなかったりもする。

「凜ちゃん！ 頑張つてー！」

「1回戦で負けんじゃないわよー！」

声援を送る美夏と紗矢。それに気付いた凜は穏やかな笑みを浮かべながら手を振り返す。それを見て恭介は何処か安心したような表情を浮かべた。

「緊張とかは特にしていないようだね。まあ黒崎さんはこんな状況でも全然緊張しない人だから当然っちゃ当然だけど」

「ゴホッ、ゴホッ……そうなのか？」

「ああ。きつといつものようにキレのあるバトルを見せてくれるはず。それはそうと、逢沢さん？」

「何だ」

「なんで選手入場と一緒に飲み物噴き出したの？ もしかして体を張った新ギャグ？」

「うっ、うるさいー！」

観客席で悠璃が恭介に喰いかかるのを余所にバトルフィールドには凜のサンダースが進み出る。全身の針を逆立たせては既に臨戦態勢を整えていた。

「宜しく願います、川名さん。良いポケモンバトルにしましょうね」

いつものように礼儀正しく対戦相手に一礼する凜。対戦相手の遥は得意げな顔をしてそれに応えた。

「ええ、宜しく。でもこのバトル私の勝ちかもね！」

「と……言いますと？」

「だって私のパートナーはこの子なんだから！」

そう言ってモンスターボールを上空に放り投げる遥。光とともにポケモンが飛び出した。

そのポケモンは緑色の体をしており、2枚の翼を持っている。まるで歌声のような羽音を立てながら優雅に空を飛ぶのは“せいいいポケモン”のフライゴンであった。

「フライゴン……ですか」

凜の表情がかすかに曇る、が無理もない。フライゴンはガブリアスと同じ地面・ドラゴンタイプであり、サンダースの電気タイプの攻撃を一切無効化してしまうポケモンなのだ。それにサンダースは防御力が低く、よほどのことが無ければフライゴンの使う弱点技・地震を耐えることはできない。それに耐えたところで電気技が使えない状態では反撃手段はほとんどないと言える。

「……………これってまずいんじゃない？」

「いくらくじ引きで組み合わせを決めるとは言え、これじゃあどうしようもないじゃない……」

対峙する2匹のポケモンを見て、早くも諦め顔になる美夏と紗矢。

「まだ、諦めるのは早いんじゃないかな？」

そんな中においても、ただ1人。恭介だけは諦めていなかった。

「一撃で決めさせてもらっわ！ フライゴン、地震よ！！」

勝負は決まったな。そんな空気が会場を包み込む中、バトルが始まった。既に勝ちを確信していた遥のフライゴンがいきなり地震を放つ。轟音と共に大きな揺れがフィールドを襲った。この攻撃からは空でも飛んでいない限り逃れることは出来ない。

「どう！ 私のフライゴンの地震の威力は！」

「なるほど……確かにこれは強力ですね。でも当たらなければ全く意味はないんですね」

「確かに。でもそれは地面技全体に言えることよね。でも、サンダーは空を飛べないわ。だからこの攻撃から逃れることは出来ない！」

「さて、それはどうでしょうか？」

追い詰められているもとい、圧倒的不利の状態に置かれているのにも関わらず余裕の表情を浮かべる凜。何処からその余裕は出てき

ているのか。遙は不思議に思っ
てフィールド上を見た。

「う、嘘……？」

なんと、地震攻撃を受けたはずのサンダースがそのままフィールド上に立ち続けていた。

「バトルはまだ、始まったばかりですよ？」

第40話：文化祭2日目・凜の戦い（1）（後書き）

実は今回から登場のモブキャラには名前の由来があったりもします。
わかる人にはわかると思いますが……

第41話：文化祭2日目・凜の戦い（2）

「バトルはまだ、始まったばかりですよ？」

凜が穏やかに微笑む。サンダースは無傷ではないにしても、地震のダメージを完全に打ち消していた。サンダースは事前に“身代わり”を発動させていたのだ。今現在確認されているポケモンの中で、スピードにおいてはトップクラスの能力を誇るサンダースは、拘りスカーフのようなアイテムや能力変化などがなければ大抵のポケモンに先制を取って攻撃することが出来る。だが、そのスピードは攻撃のみならず補助技を使用する際にも生かされる。サンダースのスピードは当然フライゴンを上回っている。そのため、フライゴンが地震を放つ前に咄嗟に身代わりを出すことも可能なのである。

「でも身代わりは地震のダメージで消えちゃうじゃない！ それならもう1回地震を放てば良い話かも！」

「……ならばこちらにもまた身代わりを使うまでですね」

確かに身代わりを使い続ければ、フライゴンの地震を回避することはできる。しかし、身代わりは発動させる際に自分のHPを削って発動させる技なので、HPの低いサンダースがそれほど連発できる技ではない。それに地震のダメージを身代わりで封じられたところで、メインウエポンとなる電気技が効かない以上、フライゴンが

圧倒的に有利なのだ。

「それじゃあ堂々巡りじゃない……まあいいわ。地震でカッコよく倒したかったところだけど、相性はこっちが圧倒的に有利なんだから普通に攻撃させてもらうわ！ フライゴン、空中からドラゴンクロー！」

フライゴンは浮遊するかのようにゆっくり空中に浮かびあがると、サンダース目掛けて急降下からドラゴンクローを放った。サンダースは高速移動を応用してフライゴンの攻撃を回避するものの、地上対空中では明らかに空中を得意とする方に分がある。

「サンダース、シャドーボールです」

「フライゴン！ 龍の波動よ！」

サンダースが空中に向かって“シャドーボール”を放つ。攻撃技の種類に乏しいサンダースにとってシャドーボールは貴重なサブウエポンだ。しかしそのシャドーボールも1発命中させたのが最後、あとはフライゴンの龍の波動によって相殺されるばかりだった。

「まずいわね……ダメージを与えられるシャドーボールが相殺されて続けてしまえばサンダースが不利になるばかりよ」

「そつ、そんなあ！ それじゃあ凜ちゃん負けちゃうよ！ どうしよう悠ちゃん！」

焦った美夏が悠璃に縋り付く。悠璃は美夏を諭すかのように優しく落ち着かせる。

「まずは落ち着きなさい、美夏。そもそもバトルしているのは私たちじゃなくて黒崎さんでしょう」

「それはそうだけどさあ……」

「ならば彼女を信じましょう。黒崎さんも私たちと同じポケモントレーナー。きっとなんとか出来るはずよ」

悠璃はそう言って美夏を宥めるが、そう言った悠璃自身も自分の言葉に確証は持てなかった。実質それほど凜は追い詰められているように見えたのだ。そして、シャドーボールと龍の波動の撃ち合いがしばらく続いた後、攻撃の隙をついたフライゴンのドラゴンクローがサンダースに炸裂する。サンダースはあと1発攻撃を受ければ戦闘不能になってしまっただけで疲弊していた。

「さて、そろそろ年貢の納め時ね！ フライゴン、決めちゃいなさい！」

「サンダース、電光石火で距離を取るのです！……やはり地対空では不利ですね」

「そうね！ でもそれ以前にこっちは相性があるから……」

「……でも、もしこちらが地を駆けるだけではなく、空を飛ぶことができたのなら……どうなるのでしょうか？ 川名さん、見たくありませんか？」

改めて勝利を確信したであろう遥の言葉を遮って凜が問いかける。遥は凜の言っている言葉の意味がよくわからなかった。

「はあ？ 何を言ってるのかしら？ 空対空って、サンダースは空を飛べないじゃない！」

「……サンダース、今こそあなたの秘められた力を！」

凜の指示を受けてサンダースがニヤリと怪しい笑みを浮かべる。すると、次の瞬間。サンダースの体がゆっくりと浮かび始めたのである。

「ええっ!?!」

「うそっ!?!」

観客席の美夏と紗矢が同時に驚きの声を上げる。そんな2人と同じように会場全体から驚きの声がざわざと起こり始めた。だが、それも無理もない。本来空を飛べないはずのサンダースが実際こうして空を駆けているのだから。サンダースは陸上を走り抜けるのと同じ要領で空を駆ける。そのスピードは大地を駆けるサンダースのスピードと比べても引けを取らないものであった。啞然とするフライゴンの周りをあざ笑うかのように飛び回るサンダース。その光景は傍から見ても甚だ異様なものと言えた。

「何よそれ……サンダースが空を飛ぶなんて反則かも!」

「これで勝負は完全に判らなくなりましたね」

「そ、空を飛んだって同じことよ! 元々空を飛べるフライゴンと……その、なんていうか……魔法みたいなもので空を飛んでるサンダースとじゃ地の力が違うわ!」

「魔法とはまた素敵な表現を……しかし、これは魔法ではありません。サンダース自身の力で飛んでいるまでのことですよ? さあ、ここからが本当の勝負です」

それまで穏やかな微笑みを浮かべるだけであつた凜の眼がほんの一瞬鋭く光る。それとほぼ同時にサンダースがフライゴン目掛けて駆けていく。フライゴンは翼を羽ばたかせては突風を起こし、サンダースを吹き飛ばそうとした。しかし、サンダースはそれを軽く回避すると、一気にフライゴンの後ろへと回りこんだ。フライゴンは振り向きざまにドラゴンクローでサンダースを捉えようとするが、

サンダースはその小柄な体を生かしてフライゴンの腕の間を潜り抜けて距離を取った。例えフライゴンを超える飛行速度を手に入れたところで、接近戦では物理技を得意とするフライゴンが有利なため、サンダースからしてみれば遠距離戦闘を仕掛けたかったのだ。

「フライゴン、龍の波動よ！」

「サンダース。シャドーボールで龍の波動を相殺！　その後一気に接近してください！」

凜の指示に従い、サンダースはシャドーボールでフライゴンの龍の波動を相殺すると、一気にフライゴンに接近した。もちろん接近戦ではフライゴンの方が有利であるが、凜はそれを理解した上で敢えてサンダースをフライゴンに接近させた。

「自分から倒されに来るなんてね！　やっぱり勝利は私のも……」

「サンダース、最大火力で……めざめるパワー……！」

フライゴンが鋭い爪を閃かせ襲いかかろうとする。だが、それよりも僅かに早くサンダースが全身から溢れ出るエネルギーをフライゴンに向けて放出した。この技は“めざめるパワー”という技で、ポケモンごとに技のタイプと威力が変化する特殊な攻撃技である。そのため初見ではダメージを与えてみるまで相手にはどのタイプのめざめるパワーかどうかが判らない。しかし、電気タイプのサンダースが地面・ドラゴンタイプを併せ持つフライゴンに放て、かつ瀕死級の大ダメージを与えるとその技のタイプは自然と限られてくる。

「ふっ、フライゴン……！」

強烈な一撃を受け、撃墜されるフライゴン。サンダースのめざめ

るパワーのタイプは電気技の効きにくい地面タイプ、ドラゴンタイプ、草タイプに効果は抜群のタイプ 氷タイプだった。

『フライゴン、戦闘不能！ サンダーズの勝ち！ よって勝者！
1年4組 黒崎 凜選手！』

会場からは大歓声が起こる。電気タイプのサンダーズで地面タイプのフライゴンを倒したインパクトはそれだけ大きかったのである。バトル前に見せていた穏やかな微笑みを浮かべながら、凜は観客席に向かって一回一回お辞儀をする。そして、恭介や悠璃、美夏や紗矢を観客席に見つけるとその方向にだけ嬉しそう手を振ってバトルフィールドから退場した。

「やった！ 凜ちゃん勝ったよ！」
「私たちが迎えに行きましょう」

そう言つて裏方へと向かう美夏と紗矢。その場に残った悠璃は1人難しい顔をして何やら考え込んでいた。

「逢沢さん」

そんな悠璃のことを見越してか、恭介が悠璃に声をかける。悠璃は例の如く答えなかった。しかし恭介はそんな悠璃に構わず話し続けた。

「次逢沢さんと黒崎さんが勝てば、3回戦で2人は当たる……となるとさっきの“めざめるパワー”の対策が必須となる。それを考えているね？」

「……」

悠璃は恭介に自分の考えを見透かされたことが嫌だったのか不機嫌そうな顔をして恭介の方を振り返る。そして一言「そうだ」と呟くように言った。

第42話：文化祭2日目・翔VS蛭、翔と蛭、2人の作戦（1）

悠璃がやがて当たることになるであろう凜のサンダースのめざめるパワーと飛行術の対処に追われている間も試合は進んでいく。そして、凜のバトルから数戦が終わり、次の試合の選手が会場に入ってくる。歓声に押されて入ってきた2人はそれぞれ相反する反応を見せていた。

「いよっしゃあああ！ 燃えてきたぜええええ！！」

そう言いながら観客席に向かつて手を振るのは翔であった。翔は後ろに従えたサイドンと共に堂々とバトルフィールドに登る。

「……一回戦の相手がお前とはな、翔」

翔の反対側からムウマージと共にフィールドに足を踏み入れたのは蛭。その振る舞い方から翔とは違い、あくまで冷静沈着な様子が見える。バトル前の言動から相対的な２人には実は因縁があつた。

「まさかまたあの2人のバトルになるなんてね……」

「……また？」
「……これはあの二人に何かあったのかしら」と

美夏の“また”という言葉に反応した悠璃は美夏に詳しい説明を
求める。美夏によると、4月ごろに一度だけ翔と蛍はバトルしたこ

とがあつた。しかし、その結果は翔にとっては語るに散々なものであり、例の如くサイドンの攻撃力でムウマージを倒そうと突っ込んだ結果、ムウマージの“エナジーボール”で返り討ちにされてしまったのだ。エナジーボールは草タイプの特殊攻撃技であり、草タイプ以外のポケモンでも多くのポケモンが習得できる技である。もちろんムウマージは草タイプではないので、その威力は決して高くはないものの、地面タイプと岩タイプという草タイプの攻撃を弱点とするサイドンにとってムウマージのエナジーボールは致命傷となるには十分な威力となっていた。

「つまり翔にとって今日のこのバトルはその時のリベンジ戦ということになるね」

自動販売機で買ったお茶を片手に恭介が興味津津といった様子で身を乗り出す。

「でも久坂は基本猪突猛進タイプ。対する桜木は何重にも策を巡らせては有利な状況を作り、万全の態勢で戦うタイプ。不良でバカな久坂に勝ち目はないと思うわ」

「あの……それはちよつと言いきぎでは……？」

「いいのよっ！　だって久坂だもん」

風紀委員である紗矢にとって日々の悩みの種となっている翔は言わば犬猿の仲である。そのため、バトル前から散々に翔をこき下ろしていた。サンダースで不利なフライゴン相手に勝利を収め、恭介たちに合流した凜が翔を庇うも、紗矢の耳にはまるで届いていない。すると、観客席で自分の陰口を言っているのに感付いたのか、翔が観客席の紗矢の方を振り返ると、思い切りアツカンベーをしてみせた。

「なによ！ 不良の癖に……こつちだつて、アツカンベーだ！！」

お返しとばかりアツカンベーをする紗矢。それを見た周囲の人間は皆「紗矢と翔は結構合うんじゃないだろうか」と心の中で思った。

『Aブロック・1回戦 第8試合を開始します！ 久坂 翔選手と桜木 蛍選手はそれぞれポケモンを出してください！』

フィールドに登壇した審判の号令とともにフィールド上には翔のサイドンと蛍のムウマージが躍り出る。会場からは大きな歓声が起こる。

「やっぱりムウマージで来たか！ この勝負貰ったぜ！」

「……やけに勝算があるようだな。だが、それはそれで楽しみだよ」

試合開始の笛が鳴る。これまでのバトルを見てきて2人も気付いているのか、不用意に動こうとはせずにまずはじっくりと相手の様子をトレーナーの視線から見定めていた。

（翔が慎重……あいつ、何か悪いものでも食べたのか？）

ただ、普段から翔を知る蛍にとって翔がいきなり攻撃を仕掛けず慎重に振舞っていることがなんとも異様なものにしか思えなかった。それだけ翔が本気でこのバトルに臨んでいる。それならば自分も最大限の力を振り絞ってその気概に応えなければならない。蛍がそう決心した時である。じつと様子を窺っていた翔の顔がまるでマトマの実のように真っ赤になっていることを。一体どうしたのか、と蛍が首を傾げると、翔は「うおおおお！」と大声をあげて地面を踏

みならし始めたのだ。

「翔、どうした!？」

突然の翔の奇行に対戦相手であるにも関わらず心配になった螢が声をかける。

「だあああつ！ やっぱ俺には慎重なバトルなんて無理だーっ！
！」

「えっ」

「サイドン、俺たちは攻撃あるのみだ！ ストーンエッジ!！」

翔の攻撃指令に待つてました、とばかりにストーンエッジを放つ。これまでのバトルを選手控え室で見ていた翔は選手のいずれもがバトルの最初は相手の様子を伺い、慎重な行動を心掛けていたことを真似て出だしを慎重にしよう、と思っていた。しかし『攻撃は最大の防御』何はともあれ攻撃あるのみ』というバトルで今までやってきた翔にとってはこの戦法はやはり型に合わなかったようである。

「なるほど…… まあそれでこそお前だ。そしてその方がこちらにとっても色々と好都合だ」

「なに訳判んねえこと言ってんだ！ サイドン、ストーンエッジ!」

サイドンは連続でストーンエッジを放つが、ふわふわと浮遊するムウマージは巧みにストーンエッジを回避する。

「てめえ、避けるなんて男らしくないぞ！ この間みたいにエナジーボールとかで攻撃しろよ!」

「無闇やたらに攻撃するだけというのもどうかと思うがな……しかしそれでは俺のムウマージに当たらない」

「うぐぐ……とつとつとエナジーボールを撃つてきやがれ！」
(……妙だな。何故弱点技のエナジーボールを撃たせたがる?)

蛍はエナジーボールを撃つように誘発しようとしている翔の態度に不審な物を覚えた。

(4月にバトルしたときはエナジーボールで一撃で倒したから普通のトレーナーの視点ならエナジーボールは使われたくないはず。それなのに撃たせるということは何らかの対策を立ててきた……エナジーボールに対する対策は2つ……そうか、そういうことか)

蛍の顔に得意気な笑みが浮かぶ。それに合わせて恭介も「ははあ」と呟いた。

「なんだ立花。気持ち悪い笑みを浮かべて」

「いや、蛍の顔を見て感じ取ったのさ。蛍は翔が何を考えているのかを見抜いたってこと」

「どういうことだ？」

「蛍は昔から頭が良いし、洞察力も高い。だから対戦中にはちょっと考えるだけで相手の作戦を見抜いてしまうんだ」

蛍とは小学校の時から付き合いのある恭介にとつてはもはや蛍の癖や戦法はわかりきったものなのかもしれない。なかった。

「そして、ああやって微笑みを浮かべるのは……見抜いた相手の作戦を考察し、勝つための手段を完成させたときだ」

第43話：文化祭2日目・翔VS蚩／翔と蚩、2人の作戦（2）

得意気に微笑みを浮かべる蚩。そんな蚩の様子にはさすがの翔も薄々と感付いていたようで、首を傾げては蚩は何を考えているのか、と自分なりに考えていた。もちろん顔だけ見て相手が何を考えているのかを“瞬時に”理解することが出来る。などという芸当は翔はもちろんのこと蚩や恭介にも出来やしない。出来るとすれば心を読むことが出来る魔法使いかエスパータイプなどの一部のポケモンに限った話であろう。ただ、蚩は翔の様子や発言から現在目の前に対峙しているサイドンの作戦を見抜きつつあった。

「翔、お前はサイドンに“リンドの実”を持たせているな」
「んなっ?!」

蚩の言葉に顔を真っ青にする翔。リンドの実は弱点のときに草タイプ
の技の威力を弱める木の実である。

「地面と岩タイプを持つサイドンがムウマージのエネルギーを耐えるには2つの作戦がある。1つは気合の襷。だが……もし俺がエネルギーボールではなくシャドーボールのような他の技を使ってHPを半端に減らした場合は発動しなくなるから安定性に欠ける。そして2つ目の方法がリンドの実。これならば、シャドーボールでHPが削られても気合の襷のように発動しなくなるということではなくなり、かつ安定性も増す。リンドの実を持たせていることに気づか

ず、俺が攻撃を仕掛けてきた場合はエナジーボールのダメージを半減され、攻撃のその瞬間にストーンエッジを打ちこめば打たれ弱いムウマージをあっさり倒すことが出来る。そういうことだろう？」

「……」

「どうやら、図星のようだな。だが、もし俺がそれに気付かなかつたら負けていた……お前にしてはかなり考えた方だな」

「……だ、だったらどうだってんだ！ どっちみち攻撃しないとお前が不利になるばかりだぜ！」

「そうだ。このままでは不利になる……そこで、そのリンドの実をこのバトルの間だけ頂く。ムウマージ、トリック！」

ムウマージの眼が怪しく輝く。その瞬間、互いに持たせていた道具が念力で宙に浮かび上がり、ぐるぐると回りだす。“トリック”は互いのポケモンに持たせた道具を交換する技。そのため、サイドンが持っていたリンドの実がムウマージの持ち物となり、ムウマージの持っていた持ち物はサイドンの持ち物となるのだ。

「うおっ、なんだこのケバいメガネは！？」

「“拘り眼鏡”という道具だ。それは特殊技の威力が増すが同じ技しか使えなくなる」

「ちっ……これ以上好きにさせるな！ サイドン、次もストーンエッジだ！」

サイドンはムウマージに向けてストーンエッジを放つが、やはり相手はふわふわと浮いているだけあって闇雲に撃ってはかわされるだけだし、当たりそうになったとしてもムウマージは咄嗟にシャドーボールを放つことで岩を破壊していた。

「お前のサイドンは眼鏡を受け取った後に技を使った……ここで拘り眼鏡の効果が発動し、サイドンはこのバトルの間はストーンエッ

「ジしか使えなくなった」

「へっ、何だその程度。どっちにしる俺のサイドンがムウマージに有効打を与えられる技はストーンエッジだけ。だから今のトリックはあまり意味がないぜ！」

「果たしてそうかな？」

確かに拘り眼鏡とリンドの実をトリックの効果で交換したため、サイドンのエナジーボールに対する耐性は消えた。しかし技がストーンエッジに固定されたことで、ムウマージがエナジーボールを放つより先にサイドンがストーンエッジを命中させてしまえば、勝負は判らなくなる。そのため一概に蛍が絶対的に有利とは限らないのだ。そんな状況にありながらも、蛍は頭の中で勝利までの道筋を組み立て、勝利を確信していた。

「サイドン、ストーンエッジを撃ち込んでやれ！」

「ムウマージ、守るでストーンエッジを防ぐんだ」

ムウマージの体を分厚いバリアが覆い、ストーンエッジを防ぐ。本来ならダブルバトルで全体攻撃を防ぐために使われることの多い守るであるが、たまにこうしてシングルバトルでも用いられる。

「1回攻撃を防いだところで大して変わらないぜ！」

「大して変わらない？ まさか……こうやるんだよ。ムウマージ、恨み」

ムウマージの両目が不気味に光り、紫色のオーラがサイドンを包み込む。しかしサイドン自体に目立った外傷は見られない。

「今、何したんだ？ サイドンはダメージを受けていないようだ」「“恨み”はダメージを与える技じゃないからな」

「まあ何をしたかなんてどうでもいいさ！ サイドン、ストーンエッジー！」

サイドンが地面を踏みならし、ストーンエッジを放とうと身構える。しかし、サイドンがいくら体に入力してもストーンエッジが発動しないのだ。

「なっ、なんでストーンエッジが出ねえんだよ！」

「それが恨みの効果だ」

ムウマージが使った“恨み”という技は相手が事前に使った技のPPを4削るという効果を持つ。ストーンエッジのPPは5であり、ポケモンはポイントアップなどの道具を使用していない限り、PPぶんの数しか技を使うことができない。ムウマージがサイドンに恨みを使う前にサイドンはストーンエッジを4回使用している（いずれも避けられたり、守るの効果で決まっていけないが）。そのためサイドンがストーンエッジを使える回数はあと1回だけとなる。そこにムウマージの恨みが決まることで、サイドンのストーンエッジのPPはゼロになってしまったのだ。ストーンエッジのPPがゼロになったことでサイドンはタイプ一致かつメインウェポンのストーンエッジを使うことが出来ず、ムウマージに対する一番の有効打を失ってしまった。しかし、翔はそれに構うことなく冷凍パンチで攻撃しようとするが、サイドンは一向に技を出さない。だがここで出さないという表現は間違いとなる。正確には、出せないのだ。

「拘り眼鏡っ……まさか最初からこれを狙ってたのか！？」

「……正直、此処まで上手く行くとは思っていなかったけどな」

相手のPPの少ない大技を拘り眼鏡で拘束し、守ると恨みでPPを削ったことで最終的に何も出来なくする。それが蛭とムウマージ

のつた作戦であつた。もはや決着が着いた、とも言えるこのバトル成り行きを見て、客席の悠璃たちは圧倒されたかのように押し黙っていた。

「あれが蛍の怖いところだ。いつの間にか蛍のペースに持ち込まれる。俺も何度負けたことか」

（立花を……負かした……？）

「もちろん、最近は連勝中だけだね」

「何故私を見て言う」

「んー、なんとなく」

恭介と悠璃がどこか不毛な会話を繰り広げている間、前の席の紗矢は美夏と凜に対して散々翔を詰るかのような言葉を連発する。よほど嫌いなのだろう、と悠璃は小さく溜息をついた。

「サイドン……悪あがきだ」

出すことの出来る技が無いサイドンは“悪あがき”をする。悪あがきは出すことが出来る技が無いときにだけ現われるある意味特別な技。相性関係はないものの、与えるダメージは極度に低く、反動もある。

「さて、一気に決めさせてもらうぞ！ ムウマージ、エナジーボール！！」

草のエネルギーが込められたエネルギー体が放たれ、サイドンに直撃する。やはり地面タイプと岩タイプという草タイプの技を弱点とする2つのタイプを同時に併せ持つこともあって、そのダメージは絶大であつた。

『サイドン、戦闘不能！ ムウマージの勝ち！ よって勝者、1年4組 桜木 蛍選手！』

緊迫したバトルが終わり、沸き起こる歓声の中をクールに会場を後にする蛍。悠璃は凜と同様に蛍とも当たる可能性がある。そのため、今後の試合をどう切り抜けるか、またしても悩まされることになるのであった。

「バーカ！ バーカ！ デクの棒！」

「うるっせえええ！！ 黙れチビ！！！」

そして、相変わらず小学生も驚くような程度の低い言い争いを翔と紗矢は続けていた。

第44話：文化祭2日目・紗矢の出会い

悠璃と美夏、翔と蛭、そして凜のバトルがあつたAブロック1回戦は激戦の中終了した。2回戦を控える悠璃・凜・蛭と既に敗北してしまった美夏と翔はBブロックの試合が行われる会場へと移動していた。

Bブロックでは恭介と紗矢の試合が行われる。試合順は紗矢が第2試合、恭介が第11試合。もし2人が順当に勝ち上がれば、2人はBブロックの準決勝で当たることとなる。

「あれ、久坂くんは？ さっきまでそこにいたのに」

「そう言えば……どこに行つたんだ」

「ああ、翔なら皆の分の飲み物を買に行つたぞ」

悠璃や美夏は知らなかったが、バトル前に翔と蛭の間で賭けが成立していたらしく、負けた方が皆の分の飲み物を奢ることになっていたのであった。ちなみにその賭けは当然ながら翔が持ち掛けたものであり、よほど蛭とのバトルに勝つ自信があつたのだろう。

「それでお金は？ 後でジューズ代渡さないと……」

「その必要は無いだろう。そもそもこの賭けは翔が言い出したことだし、あいつは自分でやると言つたことは必ずやる」

不良のような振る舞いをしながらも、何処か生真面目な点がある。

「さあね？　今そんなこと考えてる余裕なんて無いわよ」

「バトルが近いから？　あつ、あの技は効果抜群だ」

紗矢と会話しながらテレビに映し出されたバトルフィールドの様子に釘付けになる恭介。その恭介の様子から何処か不機嫌になる紗矢。自分が緊張している中、話しかけてきた恭介にわざわざ反応しているというのに、話題の元となったことについて恭介は真剣に聞いていない。そう思った紗矢が微かに語気を強める。

「私たちは皆緊張してるの……ま、強いあんたには判らないだろうけど」

「ああ、そんなこと百も承知さ。でも、バトルの前にトレーナーがガチガチに緊張してしまっていては、トレーナーの指示を信頼してただひたすらに戦うポケモンたちは果たして全力を出し切れるのか……そう考えちゃうんだよね」

それまでおどけた表情でいた恭介の顔が途端に真面目になる。このような状況において明るく振舞っているが、恭介も他の皆と同じようにバトルに臨む前となれば緊張する。しかし、ポケモンバトルはポケモンとトレーナーが如何に息を合わせられるかということも求められる。どんなに強いポケモンでも、トレーナーの力量がポケモンに追い付いていなければ、ポケモンは全力を出し切ることができなくなってしまう。そしてトレーナーがどれだけ優れていたとしても、微かな精神の乱れによってトレーナーはその実力が全く発揮できなくなってしまうこともあるのだ。

「あんだ、だからそうやって……」

「まあ、俺は無駄に焦って自分を追い詰めることはしたくないし、それがポケモンたちに知れたらポケモンたちにも迷惑をかけてしまうからね」

そうやって話しているうちに、第1試合が終わろうとしている。
第2試合の紗矢はすぐに控室を出なければならなかった。

「本城さん、リラックス！」

「わかってるって」

無邪気な笑みを浮かべながら紗矢を送り出す恭介。紗矢は呆れたような笑いを浮かべながら、バトルフィールドへと向かうのであった。その道中、紗矢はボールからエルレイドを出す。エルレイドは目を閉じ、精神集中をしているかのような状態でボールから現われる。紗矢はいつものようにエルレイドと向かい合った。実家が剣道場であり、日々鍛錬に励んでいる紗矢とエルレイドは何かあるといつも剣道の試合前のように向かい合う。ポケモンとトレーナーのコミュニケーションの形は多種多様であるが、この礼式にも似たものが紗矢とエルレイドのコミュニケーションなのである。

「……どうしたの、エルレイド？ えっ、私が緊張してるって？」

トレーナーが緊張をしているとポケモンはすぐにそれを感じ取る。恭介がさっき紗矢に言った事であるが、エスパークタイプのエルレイドはそれを敏感に感じ取っていた。

「うん、まあ正直緊張してるけど……でも負けられないわ。順当に勝ち上がればきっと恭介とバトルができる。これはまたとない機会だし、あいつには色々と借りがあるの」

そう言って紗矢は目を閉じる。彼女は小学校のときを思い出していた。紗矢が恭介と出会ったのは小学校3年生のときである。今でもそうなのだが、紗矢は昔から体が小さく、背もクラスの中では一番低かった。剣道もまだ始めておらず、今のように風紀委員を務めるほど積極的ではなく俗に言う『ガリ勉』だったこともあってか、よくクラスの悪ガキたちのからかいの対象となっていた。最初は悪口を言ったりするようなよくあるからかいの対象となっていたが、当時の紗矢は臆病で泣き虫だったこともあり、いつもメソメソとしていた。そのため逆に悪ガキたちの攻撃心を煽る結果となり、物が無くなるなど、徐々にからかいの度合いを越えるものとなっていた。それに、当時紗矢はまだポケモンを持っていなかったこともからかいの対象になっていた。紗矢たちが小学生のときは1人1匹ポケモンを持っていることが常、という認識が一般的だったこともあり、結果マイノリティな存在となった紗矢は中々話の輪に入れないことが多かったのだ。

「いつしよにあそぼ？」

そんな紗矢に声を掛けたのが、当時他のクラスだった恭介である。既に蛭とも親友となっていた恭介は休み時間に校庭で一人ぼっちで過ごしていた紗矢をよく遊びに誘った。小学校3年生にもなると子供は精神的にも色々と成長を迎える年齢であるが、恭介は高校生の現在と殆ど変わらず、この時からクラスや学校で浮いている人を見ると声をかけずにいられない、極度のお節介焼きだった。

「ねえ、さやちゃんはまだじぶんのポケモンをゲットしないの？」

放課後、いつもと同じように3人で遊んでいたときに突然恭介が言い出した。突拍子もない恭介の問いにどう答えようか戸惑ってし

まう。

「うん、今はまだポケモンをゲットする予定は無いよ。お父さんやお母さんにも話してないし……」

「そうなんだ……ねえ、さやちゃんもポケモンをゲットしようよ！」

「えっ？ そんな急に……」

「ストップ、そんな簡単に行く話じゃないだろ。単にポケモンをゲットしたいと願っても、ポケモンを持っていない本城さんが1人でポケモンを探すのは無理があるよ。でも……恭介の言うことにも一理ある。俺たちは遅かれ早かれ自分のポケモンを手にするんだ。早いうちからポケモンに慣れることは大事だと思うよ」

この頃から既に理知的であつた螢のアドバイスもあつて、紗矢は自分のポケモンをゲットすることに決めた。そんな最中、3人の目の前の草むらが音を立てて揺れる。そこからひよつこりと顔を出したのが“きもちポケモン”のラルトスだった。ラルトスは中々人前に姿を現さないポケモンなので、紗矢たちはラルトスをゲットしようと息巻いたが、すぐにレポートで逃げられてしまった。それが紗矢の初めてのポケモン体験であり、その時のラルトスはと言うと今、こうしてエルレイドにまで進化して紗矢の目の前に立っている。

「そう言えばあんたとの出会いはあるんだっただわよね。へへっ、変な時代を思い返しちゃった」

呆れたように笑う紗矢を見て、エルレイドも同じように微笑んだ。今は昔の弱かつた自分とは違う。

「さあ、行くわよ！ エルレイド！！」

顔を両手で叩き、自分に活を入れる。そうして歩き出した紗矢の後を、エルレイドは黙って付いていくのであった。

第45話：文化祭2日目・逆境の紗矢（1）

湧き上がる歓声に押され、フィールドに足を踏み入れる紗矢とエルレイド。緊張しているのか、彼女の頬にはたたりと一筋の汗が流れる。

「緊張するけど……此处で気負ってられないよね。何せ相手があいつだし……」

紗矢は隣で真剣な面持ちをしているエルレイドに苦笑いをしながら話しかけた。紗矢の言う“あいつ”とは紗矢の対峙する相手のことを指していた。紗矢が1回戦で戦う相手は3組の古島ふるしま真司しんじという男子生徒である。3組における彼のポジションは4組でいう恭介や蛭と同じで“実力者”という立場にあり、そのポケモンバトルの実力は恭介にも匹敵するほどのものだといわれている。そのため、紗矢からしてみれば所謂格上の相手というものだった。それに彼には実力的に近い恭介とは明らかに違う点多々ある。特にそれは彼の仕草に垣間見えた。

「古島！ いいバトルにしましょうね！」

「……フン」

そんな彼にとって代表的なものが、この恐ろしいまでの愛想の無さである。普段から感情表現に乏しい真司はバトルの時になるとまるで仮面を被ったかのように無表情になる。そのため、バトルで対

峙している側からしてみれば彼が何を考えているのかも判らなくなってしまうのだ。対峙する形を取るポケモンバトルにいて表情から何を考えているかを読み取られないのは非常に有利なことであった。しかしこの期に及んでそんな事を気にしている場合じゃないということとは紗矢もわかっていた。

『ただいまより、Bブロック・1回戦 第2試合を開始します！
古島 真司選手と本城 紗矢選手はそれぞれポケモンを出してください！』

審判によって試合開始の宣言が為される。紗矢はエルレイドの肩に手を置き、一言「精一杯行こう」と冷静に言った。控え室ではついさっきまで緊張していたのに、と紗矢は何だか不思議な気分になった。

「ヨノワール、バトルスタンバイ！」

そんな紗矢と対峙する真司が選んだのは“てづかみポケモン”のヨノワール。霊界の布を手にしたサマヨールが進化したゴーストタイプの強力なポケモンだ。

「古島くんの手持ちはヨノワール……相性的には……」

「厳しいわね。エルレイドの格闘タイプの技はゴーストタイプには効かないし、ヨノワールのゴーストタイプの技はエルレイドには効果抜群よ」

「エルレイドからは“辻斬り”を使えば弱点こそ突けなくは無いですすが……」

凜の言う通り、エルレイドはゴーストタイプに抜群の悪タイプの技・辻斬りを覚えている。しかし、いくら抜群と言ってもタイプは不一致で威力は伸びず、ヨノワール自身の防御力も高いので、紗矢が不利な状況にあることには変わりなかった。そして会場に鳴り響く試合開始の笛。それが吹かれると同時にエルレイドが動き出した。肘の刃を超能力で伸ばし、戦闘体勢を整えながら一直線にヨノワールへと向かっていった。

「エルレイド、先手必勝よ！ 辻斬り！」

ヨノワールは攻撃力・防御力が共に高いが、その分動きは鈍重である。素早さに勝るエルレイドの連続攻撃で一気に畳み掛けてしまおうという魂胆だ。しかし、ヨノワールのようなポケモンを使うトレーナーとして相手がそのような戦法を取ることを真司が把握していないわけも無い。ヨノワールは向かってくるエルレイドに向かって“鬼火”を放った。鬼火は相手を火傷状態にしてしまう技だ。火傷状態になると、ポケモンの攻撃力が大幅に低下してしまう。物理攻撃を得意とするエルレイドにとって火傷状態はなんとしても避けなければならない。

「エルレイド、鬼火の隙間を縫うように進むのよ！」

ヨノワールの鬼火がエルレイドを取り囲むように飛び交う。だがエルレイドは独特の足裁きでそれを全て回避した。これは紗矢とエルレイドが剣道の修行をしているときに編み出した動きである。此处に来て紗矢とエルレイドの剣道での立ち回りが役に立ったのだ。鬼火を全て回避したエルレイドはヨノワールに一気に接近し、一閃、辻斬りを決めた。効果は抜群であるが、レベル差も相まって決定打とはなっていなかった。

「ほっ……」

敵ながら感心したかのように呟く真司。逆を返せば、まだ紗矢の立ち回りに感心できるほどの余裕が真司にはあった。

「もう一度、辻斬り！」

「守る！」

接近できた貴重な機会を生かすため、エルレイドはもう一度辻斬りを試みる。しかし、今度はヨノワールの発生させた分厚いバリアで一気に弾き飛ばされてしまった。攻撃が高い分、特攻の低いエルレイドがその力を最大限に発揮するためには接近戦で無ければならないが、ヨノワールはそれに拘らず戦うことが出来る。その証拠にヨノワールの手が怪しく動く。エルレイドが攻撃の体勢を整えようとすると、それを阻害するかのように真司の指示が飛んだ。

「ヨノワール“金縛り”！」

ヨノワールの影が大きくなり、エルレイドを黒い影が覆う。途端にエルレイドの動きが鈍くなった。超能力で伸びていた肘の刃がゆっくりと縮んでいき、攻撃の体勢が解除された。

「エルレイド！」

動きの止まったエルレイドに対してヨノワールが再び鬼火を放ってくる。エルレイドは避けようと立ち回るが、ヨノワールは先ほどの立ち回りを見てエルレイドの行動パターンを分析したのか、鬼火を執拗に操ってくる。

「ねえ、エルレイドはどうして攻撃を止めちゃったの！？」

「あれはヨノワールの金縛りが原因よ」

いまいちバトルの流れが把握できていない様子の美夏に悠璃が説明する。ヨノワールの使用した金縛りという技は相手が直前に使用した技を一定の確率で封じ込める技である。ポケモンバトルにおいては守ると組み合わせる相手の使用してくる技を確認し、狙った技を封印させるなど多数のコンボが存在するのだ。

「まずいことになりましたね……本城さんのエルレイドがヨノワールの弱点を突ける技は辻斬りだけです」

「ええっ!？」

「幸いにも金縛りには時間制限がある。それまでどう立ち回るかが鍵になるわ」

確かに金縛りは決まってしまうと強力な技である。だがヨノワールは幾分鈍足なポケモンである。金縛りで辻斬りを封印されたとはいえ、エルレイドにはヨノワールにはないスピードがある。それを生かせさえすれば、金縛りが解けるまでの間相手の攻撃を避け続けることも不可能ではなかった。

「エルレイド、ヨノワールと距離を取って!」

紗矢の指示に従い、後方に向けてジャンプするエルレイド。しかしヨノワールを使うトレーナーとして相手がそのような戦法を取ることを真司は熟知していた。

「無駄だ、“シャドーパンチ”!」

ヨノワールは地面に拳を叩きつける。すると拳が影となって目にも止まらぬ速さで移動し、エルレイドの真下から飛び出す。シャド

ーパンチは相手に必ず当たる技だ。その分威力こそは控えめであるが、エスパータタイプかつ防御力の低いエルレイドにとっては決して軽い一撃ではなかった。

「エルレイド！」

「ヨノワール、エルレイドに接近し……鬼火だ！」

シャドーパンチを応用して影に潜り込んだヨノワールは途端にエルレイドの目の前に現れる。そして、突然目の前に現れたヨノワールに対応しようとしたエルレイドに青白い鬼火がまるで生きた獣のように襲い掛かった。

第46話：文化祭2日目・逆境の紗矢（2）

「エルレイド！」

ヨノワールの“鬼火”が決まってしまった。鬼火は命中したポケモンを火傷状態にしてしまう技であり、相手にダメージを与える技ではない。しかし、エルレイドにとって鬼火という技は普通の攻撃技よりも食らいたくない技だった。

「エルレイドが火傷しちゃったよ！？」

「まずいことになりましたね……」

ポケモンは火傷状態になると徐々に体力が奪われるほかに、攻撃力が大きくダウンしてしまう。そのため攻撃力が高く、専ら物理技で相手を攻撃するエルレイドのようなポケモンにとっては、火傷状態は効果抜群の技に匹敵するほど受けたくないものであったのだ。

「これでエルレイドの攻撃力は大幅にダウンした。ヨノワール、ケリを付けてやれ！」

エルレイドの辻斬りを金縛りで封印し、鬼火で攻撃力を削ぐ。物理攻撃を主体とする相手の戦法を崩す真司の狙いは見事に的中した形になる。勝利を確信し、ほくそ笑む真司はヨノワールにトドメを

刺すように指示を出す。一方の紗矢は俯いたままその場を動かうとしなかった。それは傍から見れば打つ手が無くなってしまったのではないか、という意味にも等しい。ヨノワールのシャドーパンチが迫る。エルレイドは紗矢と同じようにその場を動かうとはしなかった。しかしこれが逆に真司を警戒させた。

（馬鹿な……なぜ動かない。打つ手が無いのならば降参という手もあるはず……）

このような時になり、疑念に駆られる真司。だがその疑念は間違いはなかった。それは動く気配を微塵も見せなかったエルレイドが突如動いたからである。よく見るとさっきの鬼火で受けた火傷は治っており、その手には緑色の小さな木の実が握られていた。エルレイドが持っていたのは“ラムの実”。ラムの実は持っているポケモンが状態異常になると、一度だけその状態異常を治す効果のある木の実である。このラムの実の効果によってエルレイドの火傷は治り、下がった攻撃力も元に戻っている。

「ヨノワール、攻撃を止める！ 距離を取れ！」

「無駄よ！ エルレイド、辻斬り！！」

ヨノワールが後ずさりするよりも早く、エルレイドがヨノワールの懐へと飛び込む。そして、それまで縮んでいた肘の刃が再び長く伸びていく。金縛りの効果が此処に来て解けたのだ。

「つ、辻斬りが決まった！！」

「効果抜群の技を2発も受けてしまえばさすがのヨノワールも……」
「いや、まだよ」

辻斬りを受けてヨノワールの体が大きく仰け反る。しかしヨノワールはまるで起き上がりこぼしを髣髴とさせるような動きで起き上がると、腹部の巨大な口を開けてはそこから漆黒のオーラを放つ。オーラは瞬く間にエルレイドを包み込み、そのままフィールド上を覆い隠した。そのため、客席の悠璃たちからはフィールドの様子を見ることが一時的ではあるが出来なくなってしまった。

「今の技は一体……」

首を傾げる悠璃。すると、少しずつではあるがフィールドを覆った漆黒のオーラが晴れていく。フィールド上にはエルレイドとヨノワール、2匹が変わらず立っていた。しかし、よく見るとエルレイドもヨノワールもダメージを負っている。だが、そのダメージの具合は聊か不可解なものに悠璃は思えた。

「どういうこと……ヨノワールはさっき辻斬りを喰らった時よりダメージが減っていて、逆にエルレイドのダメージが増えているように見える……」

「どうやら“痛み分け”を使用したみたいだな」

蛍の言う痛み分けという技は自分と相手の残りの体力を分かち合う一種の回復技である。他の回復技と違って相手の体力を考慮して使わなければならない欠点もあるが、大ダメージを受けた直後に使えば自分の体力を回復すると共に相手の体力を削ることも出来る技であった。

「せっかくダメージを与えられたのに……痛み分けを使うタイミングは流石ね」

「フン……こちらとしては痛み分けを使うようなバトルになるとは

思わなかったんだがな。何故鬼火を受けてすぐにラムの実を使わせなかった？」

「あまり深い意味は無いわ。単に相手の油断を誘うだけのことよ。まあ、これは他人の受け売りの戦法なんだけどね！」

悠璃は紗矢と真司の会話を聞いて、恭介が不良の上級生と対峙したときのことを思い返していた。

あのとき、恭介はリザードンにパワフルハーブをすぐに使わせずにソーラービームを放とうとした。ソーラービームのエネルギーを溜める隙をわざと作り出し、相手の警戒心を解くため。結果パワフルハーブを持っていないと勘違いした上級生のオーダイルは無策にもリザードンに突っ込み、パワフルハーブの効果で急速充填されたソーラービームをまともに喰らって敗れている。

紗矢が取った戦法はまさにそれを参考にしたものだった。件の不良上級生と比べると、真司は何倍も用心深い。しかし鬼火を受けて打つ手無しの様相を目の前でまじまじと見せられると、どんなに頭の働く者でも勝利を確信することは当然のこととなる。そのため、真司が状況の変化に機敏に反応し、痛み分けを瞬時に使えなければバトルの流れは一気に紗矢のものとなっていただろう。そこは3組の実力者たる真司の腕と知識があつてのものであつた。

（うーん、下手に攻撃したらまた痛み分けをされて体力を回復されるだけだし、鬼火だつて撃たれ兼ねないわ。金縛りもそうだし……）

恭介から教わった戦法を用いて真司の出鼻を挫いた紗矢であつたが、これで勝利が確定したわけではない。鬼火を防いだとはいえ、ラムの実は使用してしまったため次に鬼火を受けてしまえば、今度こそ降参も止む無くなってしまう。ただ、紗矢からしてみれば勝機が完全に費えたわけではない。

（一か八か……不良の久坂に似た戦法になるのは癪だけど、これに賭けるしか……）

「エルレイド、辻斬り！！」

エルレイドが攻撃に転じた。ヨノワールは鬼火を放って牽制するが、エルレイドは鬼火の間を縫うように進み、ヨノワールへと接近する。

（守るから金縛りのコンボで再び辻斬りを封印できれば……しかし、これでは相手は同じ轍を踏むことになるが……）

「……守るで防げ！」

真司はここまま行けばさつきと同じように辻斬りを金縛りで封印できる。しかし、紗矢がこれに対して何の対処を考えていないわけが無い。そう考えるとこのまま行くことに迷いを覚えたが、結局ヨノワールに守るを使わせた。ヨノワールは守るでバリアーを張っては、辻斬りを防いだ。そして、金縛りの体勢に入る。

「ヨノワール、金縛りだ！ 辻斬りを封印しろ！」

ヨノワールの特殊な力でエルレイドの辻斬りが再度封印される。しかし、封印されてもなおエルレイドは攻撃の体勢を崩そうとしている。

（金縛りを使った……今が最大の好機！）「エルレイド、今よ！

“アンコール”！！」

「アンコールだと！？」

アンコールとは、相手が最後に使った技を暫くの間出させ続ける

技である。この場合ヨノワールは自分が最後に使った技・金縛りしか使用することが出来なくなるのだ。

「まさかそんな技を……」

「私も驚いたわ。なんでこんな技を覚えているのかって。でも、この技のおかげで形成逆転ね！」

ヨノワールはなんとかして技を出そうとするが何をどうやっても金縛りしか出ることが出来ない。そして、金縛りは一度に1つの技しか封印することが出来ない。そのため辻斬りを封じている現在、他の技を封印することは出来ない。実質行動不能に陥ってしまったのだ。

「エルレイド、剣の舞！」

行動不能のヨノワールを尻目にエルレイドは攻撃力を大幅に上げる剣の舞を使用する。真司はアンコールが解けることを信じて攻撃を指示し続けるが、未だにアンコールからは解放されない。

「くっ……」

「さて、準備万端ね。エルレイド、サイコカッター！」

エルレイドのサイコカッターが放たれる。ヨノワールがアンコールによって行動不能となっていた間エルレイドは剣の舞で自身の攻撃力を最大まで上げていた。真司のヨノワールのように耐久に特化していた場合は、エルレイドのサイコカッターは本来大したダメージにもならないのだが、疲弊していたこともあり、その威力は十分すぎるものとなっていたのである。ヨノワールは両手を顔の前で組んでは防御の体勢を取ろうとする。しかし、最大威力のサイコカッターはそんなヨノワールをいとも容易く引き裂いた。

『ヨノワール、戦闘不能！ エルレイドの勝ち！ よって勝者、1
年4組本城 紗矢選手！』

歓声が会場内に木霊する。紗矢は客席を振り返ると、最大限の微笑みを悠璃たちに向けたのであった。

「本城さんが勝ったか……リザードン、そろそろ最終調整に入るよ。
もうすぐ俺たちの番だ」

第46話：文化祭2日目・逆境の紗矢（2）（後書き）

新年初更新になります。展開こそ決まっていたが、実際に文字に起こすとなるとこんなにも大変なんですネ・相変わらず技4つという枠は思い切り無視していますが、そこはどうか笑って見過ごして頂けると幸いです。

第47話：文化祭2日目・翔と対峙する者

「美夏ー！」

「紗矢ちゃん！」

紗矢は満面の笑みを浮かべて客席に戻って来た。それを美夏が出迎え、抱き合う。美夏は紗矢の勝利がよほど嬉しかったのだろう。目にはうつつすらと涙を浮かべていた。

（まあ、これは美しい光景。目に焼き付けておかないと）「本城さん。鮮やかな勝利、お見事でした」

「あそこでアンコールを使うとは驚いたよ。確かエルレイドがラルトスだった時に覚えていた技だったな」

蛍は紗矢がエルレイド（当時ラルトス）をゲットしたとき、ラルトスがアンコールを覚えていたのを知っていた。アンコールは本来ラルトスが自力で覚えない技である。しかし、野生においてアンコールを覚えたポケモンとラルトス系統のポケモンがタマゴを作ったことでのラルトスが生まれたのだろう。蛍や紗矢が小学生だった当時においてもそのことはあまり珍しいことではなかった。

「あそこで古島が金縛りを使ってくれなきゃこの勝ちは無かったけどね。博打めいた戦法は久坂だけで十分よ。そういえば久坂は何処に居るの？ あいつ私のバトルちゃんと目に焼き付けていたかしら

？」

「あつ……そう言えばさつきから久坂の姿が見えないな」

「翔は俺との賭けに負けて全員分のジュースを買いに行ったきりだけだ」

悠璃と蛍の話聞いて紗矢の顔がオクタンのように真っ赤になる。

「はあ？　なんであいつ私のバトル見てないのよ！」

「ジュースを買いに行くくらいなら5分と掛からないとは思うのですが」

「久坂くん……もしかして何かあったのかな？」

不安めいた表情を浮かべる美夏と凜。しかし、紗矢にそんな2人の心配する気持ちは届かない。

「きっとあいつ私の勝ちを見るのが嫌で仕方なかったのよ！　それでもって自分の負けの惨めさを思い知るのが嫌で……」

「と、取り敢えず落ち着いてください」

まるでオコリザルのように荒れ狂う紗矢を美夏と凜がなんとかして宥めようとする。その傍らでは蛍が心配そうな面持ちをしていた。

「まさかあいつ何かトラブルでも起こして……」

「久坂はそんなに喧嘩っ早いの？」

「喧嘩を売られると真っ先に買いに行く。中学の時と比べるとだいぶ大人しくはなったけど」

「……最悪の事態を考える必要があるということね」

悠璃はふと時計を見た。会場では次の試合が既に始まっており、恭介の試合まで刻一刻と迫っていた。

「恭介の試合まではまだ時間はある。今から探しに行ってくるよ」
「あつ、私も手伝うわ」

悠璃と螢は荒れる紗矢の世話を美夏と凜に任せると、手分けして翔を探すことにした。

しかしハクタイ高校一番のイベントというだけあってハクタイ内外から人が来ており、単純に翔1人を探すのはとても骨の折れる作業であった。

「居ないな……もしかしたら桜木くんがみつけているのかもしれないけど」

会場からは観客の歓声が響く。液晶画面に映ったトーナメント表を見ると、恭介の試合があと3試合後にまで迫っていた。

『俺は準決勝まで勝ち上がる。そしてAブロックの人……いや、逢沢さんとまたバトルがしたい』

朝に恭介が言った言葉。その言葉は悠璃の中に強く残っていた。何が起こるかわからない、そんなポケモンバトルの大会において準決勝まで勝ち進むという宣言。その裏にあるのはそこまで勝ち進むという絶対の意志と自信。普通のトレーナーが言うには重みのある言葉ではあるが、ハクタイ高校有数のポケモントレーナーである恭介が言うとなるとまた別の話となる。

（この状況においてあそこまで言えるんだ……それ相応のバトルをするんだろっな。そしてその言葉の矛先は私にある。それならば、

しっかりとバトルを見届けなければならない。それが私なりの……)

「おい、ケンカってマジか？」

「ああ。4組の久坂だよ」

「妙にごついオヤジと睨み合ってるみたいだ。俺たちも見にいこうぜ！」

悠璃がそんなことを考えていたその時。悠璃の横を通り過ぎていった男子生徒たちの会話が耳に入ってきた。蛍の悪い予想が的中してしまった。こんなときにトラブルを起こされると色々な面で迷惑なことである。翔がどこにいるかを知ってしまった以上、放っておくわけにも行かない。悠璃は小さく溜息をついて男子生徒たちの後を追いかけた。

「……あれか」

前方を見ると、通路の真ん中に人だかりが出来ていた。翔はあの中に居る。そう確信した悠璃は野次馬となった人々をなんとか掻き分けては騒ぎの中心部へと向かった。

「ちっ……ちくしょう!!」

「どうしたよ、それで終わりか？」

野次馬が円形に囲んでいた中では、2人のトレーナーと2匹のポ

ケモンが居た。

悠璃から見て奥に居るのが翔とサイドン。しかし、サイドンは体中が傷だらけであり、今にも戦闘不能寸前にまで追い込まれていた。その一方、悠璃から見て手前にいるのはさっき男子生徒が話していたような屈強な中年の男性であった。そんな男性が連れているのはサイドンの進化形“ドリルポケモン”のドサイドンだった。サイドンに重厚な鎧であるプロテクターを装備することで進化するポケモンであり、素早さ以外の能力では進化前のサイドンを大きく上回る岩・地面タイプ屈指のパワーを誇るポケモンである。

「久坂っ……」

悠璃が手にボールを構え、2人の間に割って入ろうとする。しかし、そんな悠璃の肩を誰かがぎゅっと掴み、彼女の動きを止める。

「だっ、誰だ！」

「……しーっ」

驚いた悠璃が振り返る。するとそこにいたのはあと3試合後にバトルを控えているはずの恭介であった。恭介は口元で人差し指を立てては首を小さく横に振る。物言わずとも、悠璃が突っ込むのを止めようとしていることはわかった。

「立花、あんたこんなところで何を。もうすぐバトルでしょ？」

「うん、まあそうなんだけどさ。バトルが近いからって控え室にこもりきりになるのはなんかね。だからこうして気晴らしに散歩していたら、これに出くわしたってわけ」

「あんたという奴は……それで、久坂を助けなくて良いの？ 見ず知らずの仲じゃないのに」

「助けるよ。ただ、此処は俺に任せてもらおうかな。あの人とも知

らない仲じゃないし」

恭介はそう言ってドサイドンのトレーナーである中年男性を指差す。

「立花…… あんたあの人と知り合いなの？」

「知り合いも何も。あの方は翔のお父さんだよ」

「えっ」

「久坂 尊。くさか たける このハクタイシティに伝わる伝統工芸の家元。ガチガチの職人さんだ」

そう言って恭介は、驚きで目を白黒させている悠璃を置いて、2人の間に割って入っていった。

第48話：文化祭2日目・親の心子知らず

「まだだ、まだ終わるわけには……」

「無駄だ。今のお前じゃ俺にはどう足掻いても勝てやしない。あんなバトルしか出来ないお前じゃな」

「うるせえ！」

周囲を野次馬に囲まれながらもさらにヒートアップする親子喧嘩。このままでは要らぬ問題を起こし兼ねない。そう判断した恭介はリザードン、ハッサムと共に2人の間に割って入った。

「翔、尊さん。そこまです」

恭介は穏やかな面持ちでいたが、リザードンとハッサムはいつでも攻撃できるような体勢で居る。積極的に刃を交えることこそは望んでいないが、有事の際には全力で相手をする。そんな恭介の意思が2匹の様子からは伺えた。

「あつ、兄貴！」

「おお、立花の末っ子じゃねえか。どうしてこんなところに」

「どうもこうもないですよ。公衆の面前で親友が派手に親子喧嘩をしていたら止めに入るでしょう、普通」

「そついうもんかねえ」

少々呆れた様子の恭介に対してあつけらかんとする翔の父・尊。豪快というか大雑把というか。翔と似たような性格をしているのはやはり親子だなと悠璃は思った。恭介の指示でリザードンとハッサムが攻撃態勢を解く。恭介は2匹をボールに戻すと、翔に傷ついたサイドンをボールに戻すように諭す。最初は苦虫を噛み潰したような表情をしていた翔であるが、恭介に「サイドンのバトルの傷はまだ癒えていない」と言われると、何かに気付いたかのように眼を見開いては、サイドンをボールに戻した。

「さて、落ち着いたところで双方の事情を聞きましょう。まずは翔から話してくれ」

「……」

「どうした、翔？」

恭介が尋ねてみるが、翔はそれに答えず、顔を真っ赤にして俯いていた。唇を強く噛み、微かに震えているようである。恭介は暫く翔を見つめると、翔に質問に答えたくない理由があるのだろうと判断し、質問することを止めた。

「ああ、俺が話すわ。一応この阿呆の親父だからな」

「お願いします」

「……俺は別に親子喧嘩がしくて此処に来たわけじゃない。ただ、こいつのバトルを見てるとどうにも居た堪れなくなっちゃったんだよ」

尊曰く、翔のバトルを見たがための行動であったという。確かに翔は以前の蛍とのバトルのことを考えて、弱点である草タイプの技の威力を半減するリンドの実をサイドンに持たせていた。その対策自体は決して悪いものではないのだが、ただでさえ多彩な戦法を持っている蛍の戦法をワンパターンに捕らえすぎたが故に、トリック

と恨みで攻撃手段を封じられて敗北してしまった。日々蜚のバトルを近い立場で見ているはずの翔が、こうもあっさり負けてしまったことに対しては尊自体は別に責めるつもりは無かったのだが、かつては今以上に拗れていたこの親子は、あのバトルの反省点などを話しているうちに互いにヒートアップしてしまい、最終的に望まぬ親子喧嘩へと発展してしまったのである。

「なるほど。そういうことなら翔、お前に非がある」

「なっ、何で俺の方が……」

「尊さんの話を聞く限りでは尊さんの行動に悪い所は見られないな。それに、バトルで戦闘不能になったばかりのサイドンを無理やりバトルさせようとすることは……俺だったら許せない」

「兄貴……」

自分のサイドンに対する振る舞いを改めて突き詰められることで、しょんぼりとうなだれる翔。しかしすぐに顔を上げると、尊を睨み付けながら言った。

「だけどさ……俺はサイドンと一緒に強くなりてえんだ。だから、絶対にサイドンはこのまま進化させない。それで……親父、あんたに勝ってみせる……!」

そう言っつて翔は人ごみを掻き分けて何処かに行ってしまった。走り去ろうとする翔に悠璃が声をかけたが、翔はそれに答えなかった。

「……」

悠璃は遠巻きで話を聞いているだけであつたが、翔の表情を見てあの3人がどのようなことを話していたのかについては、大まかではあるが把握できたつもりだった。事態が丸く収まったところで野

次馬の人々がその場を離れていく。悠璃は円の中心に居た翔と尊の元へと駆け寄った。

「立花、久坂は……」

「心配ないよ。翔はああ見えてやるべきことはやってくれる奴だから」

「しかし此処まで大事になっちまうとはなあ……俺も親としてはまだまだだ」

「親子同士、互いに言いたい事を言い合えるのは理想的な親子ですよ。今の世の中そういうことを真正面から言い合える親子は少なくなっているから尚更です」

恭介にフオローされて照れ臭そうに頭を掻き毟る尊。一見すると強面の厳格な男性にしか見えないが、こういう面を見てみるとそのギャップにはつくづく驚かされる。

「あんたにも迷惑を掛けちまうなあ、お嬢ちゃん」

（お、お嬢ちゃん……）「いえ……そんな」

「親の俺が言うのもなんだが、ガラこそ俺に似て悪いが、悪い奴じやあないんだ。仲良くしてやってくれや。で……立花君よ、この子はその……なんだ、お前の“コレ”か」

そう言ってニヤニヤしながら小指を立てる尊。悠璃は尊の言う“コレ”の意味は理解できなかったが、本能的に不本意な言われ方をされていることだけは判った。

「断じて違います!!」

悠璃の怒声が通路中に響き渡った。その時である。会場のアナウンスが3人の耳に届いた。

『次はBブロック第11試合です！ 選手はバトルフィールドに入場してください！』

アナウンスが試合開始をコールする。Bブロックの第11試合は他ならぬ恭介の試合だった。

「立花！ 次はお前の試合じゃないか！」

「あらら……もうそんな時間に。今から選手入場口に向かっていくとなるとだいぶ時間が掛かっちゃうから……そうだ！」

何かを思いついたかのように満面の笑みを浮かべた恭介は握った左手でパーに開いた右手をポンと叩く。さっきボールに戻したリザードンを再び外に出すと、リザードンの背中に飛び乗った。

「立花！ それは何のつもりだ」

「今から選手入場口に向かうとなると全速力でも3分以上は掛かる。だから観客席に出て、そこから直接バトルフィールドに行くよ！」

恭介は悠璃と話しながら、リザードンに飛ぶように命じる。

「また型破りな真似を……」

「逢沢さん」

「……何、早く行きなさいよ」

「俺は絶対に勝ち上がる。だから、応援よろしくっ！」

悠璃に向けて親指を立て、飛び去る恭介。その様子を怪訝そうに見つめる悠璃を背に、恭介はリザードンと共にバトルフィールドへと降り立った。

第49話：文化祭2日目・恭介、出陣

「ただいまより、Bブロック1回戦・第11試合を始めたい……の
ですが、対戦者の1人が時間になっても入場して来ません！ 立花
恭介選手！ 何処ですか！？」

審判が困惑した様子で周囲を見回す。第11試合に出場する2人
の選手のうちの1人・立花 恭介がまだ会場に現われないからだ。
1年生ながらハクタイ高校の中では強い存在感を持っている恭介が
入場時間を過ぎても現われないことに、会場の客たちは動揺を隠せ
ないでいた。

「立花くんどうしたのかなあ……」

「私がバトルする前はまだ控え室にいたはずだけど……」

観客席でクラスメイトを見守る美夏と紗矢の顔にも不安と焦りの
色が浮かぶ。

「そもそもどうして悠璃も桜木も帰ってこないのよ。久坂を探しに
行くだけなんだからこんなに時間が掛かるはず無いじゃない！」

「凜ちゃんもさっきトイレに行くって言ったきり戻ってこないし……」

……」

2人をはじめ、多くの人がそのように心配しているのをよそに、

1人恭介が登場しないことに憤っている者がいた。

「なんだってんだよお！ どうして立花 恭介は現われねえんだよ！」

バトルフィールドの上で1人氣勢を上げるのは恭介の対戦相手・3組の男子生徒である鈴木 洵すずき じゅんだった。先ほどのバトルで紗矢を苦戦させた真司と同じクラスの生徒であるが、そのバトルスタイルは真司は正反対であり、「攻撃は最大の防御」という言葉を行動で表したかのようなバトルをする。どちらかというと翔に近い考え方の持ち主であった。一応翔よりかはバトルやポケモンについての知識はあるものの、元来せっかちな性格のため、よく細かなミスを犯すことがあるのが最大の欠点でもあるのだが。

「仕方ないですね……このまま立花 恭介選手が現われないのなら鈴木 洵選手の不戦勝に……」

審判がそう言おうとした瞬間である。

「待つてください！ 俺はここにいます！」

恭介の声が会場に響く。驚いた審判と洵が声のした方を見ていると、なんとリザードンに乗って恭介が上空からフィールドに向かって下りて来るではないか。啞然としている審判と洵をよそに、恭介はリザードンから降りると「遅れてすいません」と審判に平謝りする。あと少し登場が遅れていれば、失格になっていたのかもしれない。そんな状況にありながらも、恭介は平然と笑みを浮かべていた。美夏と紗矢をはじめ、多くの人が他人である恭介の心配をして焦っ

ていた。だが、その当人は全く動揺していない。そのことに洵は驚きを隠せなかった。

「待たせて済まない。さあ、始めようか」

「お、おお……」

ここで恭介のペースに飲まれてはならない。洵は自分にそう言い聞かせながら所定の位置に付いた。対峙する恭介の手持ちはもちろん、リザードン。これまで多くのポケモンとトレーナーを倒してきた実力者だ。

『開始予定の時間より少々遅れましたが、ただいまより、Bブロック1回戦・第11試合を開始します！ 立花 恭介選手と鈴木 洵選手はそれぞれポケモンを出してください！』

「頼んだぜ、フローゼル！！」

審判の合図と共に洵がボールから出したのは“うみイタチポケモン”のフローゼル。泳ぎがとでも得意なポケモンであり、しなやかな身のこなしから水中だけではなく陸上でも高い運動性を発揮するポケモンだ。特に素早さの能力に長けており、そのスピードは特性の“すいすい”と相まって水タイプの中ではトップクラスのものである。

「……フローゼルか……」

ボールから登場するやいなや、シャドーボクシングの構えを見せれば戦闘態勢を整えるフローゼルを見て、恭介が微かに考え込む。

さすがの恭介と言えども、水タイプの相手をするのは辛いのだろうか。しかし、洵はそんな恭介がリザードンで水タイプや岩タイプのポケモンを返り討ちしてきたのを何度も見ている。そのため、相性上では有利と言えども、決して予断が許される状況ではなかった。

（立花 恭介は何をしてくるか判らない……だったら、先手を取って畳み掛ける！）

「フローゼル、滝登りだ！！」

試合開始の合図と共にフローゼルが動いた。全身に水を纏い、まるで弾丸のようなスピードでリザードン目掛けて突っ込んでいく。

「リザードン、上空へ飛び上がるんだ」

直線状に突っ込んで来るフローゼルの攻撃を、リザードンは上空に飛び上がることで冷静に回避する。2匹のレベルの差も相まって、リザードンのスピードはかなり速い部類に入るフローゼルのスピードをも上回っていた。

「なっ……俺のフローゼルがスピードで負けた……」

「リザードン、日本晴れ！」

リザードンの漆黒の体が真紅に輝き始める。するとひとりでに日差しが強くなり始めた。リザードンの使用した“日本晴れ”という技は日差しを強くすることで、フィールドの天候を変える技である。日本晴れの効果は強い日差しによって炎タイプの技の威力を上げると共に、水タイプの技の威力を下げる。また“葉緑素”や“リーフガード”といった特性の効果を発動させ、“ソーラービーム”のよな光を利用する技の使用を早めたりすることも出来るのだ。日差しが強くなって間もないうちにリザードンの体がほんのり白く輝き

始める。太陽の光を背に、リザードンはソーラービームのエネルギーで充電を始めた。

「ソーラービームか……だが、そう易々とは撃たせないぜ！ フロ
ーゼル、空中のリザードンにアクアジェットだ！」

フローゼルはリザードンがどの位置にいるかを改めて確認すると、再び水流を身に包ませる。“アクアジェット”は威力こそ控えめながら、先制攻撃が可能な技であり、先制攻撃を持たないリザードンに対しては例え元の素早さが劣っていたとしても、確実に先手を取ることに出来る技であった。そして日差しが強い状態ではソーラービームの発射を早めることは出来るが、やはりエネルギーチャージの時間は必要であり、その間リザードンはあまり派手に動くことが出来ない。洵からしてみれば、リザードンの動きが止まっているこの僅かな間に可能な限り水タイプの技で攻撃を仕掛けるしかなかったのだ。

「行けえええええ！！」

気持ちの籠った叫びと共に拳を天に突き上げる洵。フローゼルのアクアジェットが炸裂すれば、勝ちが見えてくる。だが、洵のその思いはリザードンの一撃の前に打ち砕かれた。

「リザードン！ ソーラービーム、発射！！」

リザードンの両翼が光り輝き、そこからは太陽の光を受けて極限にまで高められたエネルギーが放出される。圧倒的な力に飲み込まれる形になったフローゼルはその一撃を受け、敢え無く戦闘不能と

なつてしまった。

『フローゼル、戦闘不能！ リザードンの勝ち！ よって勝者、1年4組立花 恭介選手！』

会場がこれ以上にならない大歓声に包まれる。この盛り上がりは、今のバトルがこれまでのバトルで最も早く決着が着いたことやその勝ち方が鮮やかなことにある。しかし、そうして盛り上がっている観客の大半が恭介がどのようにして勝ったのは完全に理解していないかった。

「フローゼルっ！！」

倒されたフローゼルに駆け寄る洵。洵は心の中で何故アクアジェットがリザードンに届かなかったのか、あの時何が起きていたのか、理解できずにいた。

「なんだってんだよ……なんでアクアジェットが届かなかったんだよ……」

自分の作戦が破綻したことに落胆する洵。そんな洵の下にリザードンをボールに戻した恭介が歩み寄り、手を差し伸べる。そして「バトルしてくれてありがとう。まだいつかバトルしよう」と声をかけた。

+ + + + + + + + + + +

「……今のバトル、何があったのかな？」

状況を把握出来ていないのは、美夏や紗矢も同じだった。フロールのアクアジェットがリザードンにあと一步の位置まで詰め寄ったのまでは理解出来ていたが。

「あれは……日本晴れの効果よ」

「ゆ、悠ちゃん!？」

「ちよつと、あんた何処で何をしていたのよ!」

「気にしないで。大したことじゃないから」(それにしても……立花……何という強さだ)

+ + + + + + + + + + +

恭介のバトルが終わり、悠璃が美夏と紗矢の下に戻ったのと同じ

時 観客席の最も後ろの席で2人の人間が会話をしていた。

「……なるほど。日本晴れによって強くなった日差しを背にすることで、自分に向かって来たフローゼルの眼を逆光で眩ませて一時的にアクアジェットの動きを止めたのですね」

まず口を開いたのは小柄な少女。見た限りには小学生のような幼い外見をしている。

「そう。立花 恭介はそこまで計算した上で日本晴れを使用した」

隣に座っていた者が返す。黒いフード付きの上着を着ているため、どのような顔立ちをしているかは判らないが、体格的に高校生くらいの人間と想定できる。それを聞いて隣の小柄な少女は俯きながら続ける。

「うちの生徒が恐れ戦いていたわけがよくわかるような気がします……しかし、我らの悲願を達成するためには、絶対にあの者を倒さなければならぬのです。そして、そのためにはあなたの協力が必要となります。内通者の……あなたの」

隣に座っていた者がゆっくりと立ち上がる。やはりフードのため顔は確認出来ないが、その奥では陰惨な笑みを浮かべていた。

第四章に続く。

第49話：文化祭2日目・恭介、出陣（後書き）

以上で第三章が終了となります。次の第四章は、2回戦以降のバトル（悠璃VS凛など）を中心に展開する予定です。

第50話：幕間・男はつらいよ

「ガブリアス、ドラゴンダイブ！」

1回戦が全て終わり、トーナメントは2回戦へと移っており、その2回戦・Aブロックの第一試合が行われていた。Aブロックの先陣を飾るのは一回戦で美夏を破った悠璃である。だがそのバトルは終始悠璃のガブリアスがパワー・スピード共に相手のヘラクロスを圧倒する形で進み、ガブリアスのドラゴンダイブの一撃が炸裂。悠璃が勝利を収めた。その後、Aブロックを含めたすべての試合が順当に行われ、凜、蛭、紗矢、そして恭介も無事3回戦へと勝ち進んだ。

『これをもって2回戦の試合は全て終了致しました。只今より1時間の休憩時間を取ります。第3回戦は午後1時から開始しますので、参加者の生徒は遅れないように昼食を済ませてください』

途中小休止を挟んで行われるトーナメントは丸一日掛けて行われるので、時間通りに進めば決勝戦をやる頃には夜になる。そのため、参加する生徒はもちろんのこと、応援に付き従う生徒たちにとって

もかなりの長丁場となるイベントなのだ。

「お腹すいたよー！ 早くお昼食べに行こうよ！」

「慌てたところでお昼ご飯は逃げ出したりはしませんよ」

「美夏は食べることに目がないんだから……そんなんだから太るのよ？」

「ええっ……そんなことないもん」

客席で繰り広げられる年頃的女子らしい会話。しかし悠璃はそんな会話にも入らず、どこか上の空であった。

「……」

「悠ちゃん？ どうしたの？」

「いつ、いや。なんでもない……ほら、早く食堂へ行こう。早く行かないと学生たちが押し寄せて。昼ごはんどころではなくなっちゃうわ」

悠璃たちがそう言っ、食堂へ向かうとしていたのと同時刻。恭介たち男子連中はその食堂に居た。

「しかし、凄い混んでんなー！」

「学生がほぼ全員集まるからな、仕方ないだろう。まあその理由の一部分はあいつにもあるわけだが」

そう言っ、螢が後ろを振り返ると、そのには黒山の人だかりが出来ていた。そしてその黒山の大半が女性で形成されており、その中心には恭介の姿があった。

「兄貴はモテるよな……やっぱり顔なのか？」

「それもあるかもしれないが、皆あいつという人間に惹かれて集まるんじゃないのか？ 俺やお前が普段あいつと一緒に居るようにさ」

「そういうもんなのかねえ」

「立花くん、こっち向いてー！」

「握手してー！」

「一緒に写メ撮ってー！」

年下の小中学生から母親と同じくらいの年齢に見える女性に黄色い声援を周囲から送られる恭介。その余りの人数に、恭介は戸惑いの様子を隠せずにいた。

「あ、あの…… 此处食堂なんでこんなところに集まられると他の人の迷惑に……」

そう言つて自ら食堂を出て行こうとする恭介。自分が食堂から出て行けば、この自分目当てに集まった人たちも一緒に出て行くだろうという判断による行動であった。案の定その予想は当たり、恭介の後をまるで夜の砂漠で獲物を追うノクタスを彷彿とさせるかのように女性たちは恭介を追って歩いていく。実際彼女たちがノクタスのように禍々しいわけではないのだが、恭介の眼には何故か女性たちの姿がそう映っていた。

（取り敢えず、翔に自分の分の昼飯を代わりに買っておいてもらうか……）

携帯電話を取り出し、翔にメールを送る。メールを送って1分とも経たないうちに翔から返信が来た。

『了解！ よっ、色男！！』

「ご丁寧に絵文字まで付けて返信してきた翔。恭介はそのメールを見て昼ごはんにあり付けるといふ喜びを味わうと共に、翔と蛭に自分を助けてくれる気がないことを知って落胆した。横目で自分の後についてきた女性たちの姿を確認する恭介。食堂からここまで移動する間に見かけた人が加わったのか、食堂より見た感じ人数が増えていた。恭介は深く溜息を付くと、覚悟を決めて女性たちと向き合うことに決めた。何処か殺気立っているようにも思えるが、こんな自分を慕ってくれているのである。無碍にするのは恭介の中の善意が許さなかった。」

「立花くん、握手して！」

「はい、どうぞ」

「立花くん、一緒に写メ撮ろう！」

「自分なんかでよければ……」

「立花くん、メルアド教えて！」

「それはちよつと……」

テレビなどでファンにもみくちやにされながらも、歌を歌ったりダンスを踊ったりするアイドルの映像を見ることがあるが、まさか自分が体験することになるうとは。恭介は改めて芸能界で活躍するアイドルたちに対する敬意を心の中で深めるのであった。そんな時である。濁流のように押し寄せる女性たちに巻き込まれて1人の少女が恭介の前で思い切り転倒してしまったのだ。小さな悲鳴を上げて転ぶ少女。恭介はすぐにその少女の下に駆け寄った。

「いたた……」

「大丈夫？」

「あつ、はい……大丈夫です」

「そう？ 怪我は……どこにもないみたいだね。君、保護者の人は？」

「えつと、あつちの方に居ます」

「此処はちょっと危ないからすぐに戻るんだ。君みたいな小柄な小学生の女の子には色々と大変そうだしね」

「はい」

恭介は少女を人ごみから出すと、見送ってあげた。少女は廊下の向こうへと一目散に走っていく。

本当に怪我を負っていないようで何よりだ、と手を撫で下ろしていると、人だからからはちらほらと拍手や溜息が聞こえ始めていた。

恭介の行為に感嘆しているのだろう。すると、その中から1人の女性が恭介に近寄ってきた。見たところ40代のようだが、その中には何処か若々しい雰囲気を感じられる。

「あなた、最近の子にしてはよく出来た子ね」

「……あ、ありがとうございます」

「うちの子もあなたの100分の1くらい周りをよく見ることが出来れば……」

「あの、部外者の僕が言うのも何ですが、自分のお子さんを無闇やたらに他人と比較するのは止めてあげて下さい。そのお子さんにはそのお子さんだけにしかない良いところがありますから。そこを見てあげてください」

「まあ若いのにそんなこと……とてもうちの美夏と同一年とは思えないわ」

「……えつ、美夏？」

何処かで聞いたことがある名前、と恭介が思っていると、そこに美夏が真っ赤な顔をして突っ込んで来た。

「ちょっとママ！　こんなところで何してるのよ！」

「えっ、ママ？」

どうやらこの女性は美夏の母親のようである。よく見てみると、何処かふんわりとしたところが似ているように見えた。

「あら美夏……何でこんなところに？」

「それはこっちの台詞よ！　やめてよ、いい年して娘の同級生の追っかけなんて！」

「それくらい良いじゃない。だってカッコいいんだから」

「良くなーい！！」

廊下のだ真ん中で大喧嘩を始める美夏と美夏の母親。顔を真っ赤にして怒る様は親子だけあってとてもそっくりだった。さっきの翔と尊のようにバトルを始める様子は無いものの、あまり騒ぎになつてはまずい、と判断した恭介は止めに入ろうとする。しかし一度ヒートアップしたら何処までも止まらなくなるのが女性の喧嘩である。恭介にはどうしようも無かった。

「フン、色男は大変だな立花」

「逢沢さん、からかうような言い方は止めてよ」

「普段私をからかっている罰だ」

そう言つてじと眼のままアツカンベーをする悠璃。結局恭介がこの場をなんとか納めた時は、既に昼休み終了間際であったのは言うまでも無い。

+++++

「ふう……なるほど。確かにあの者には人を惹きつける魅力というものがあるようですね」

人ごみを歩きながら話すのはさつき恭介が助けた小柄な少女だった。後ろにはシンオウ地方の名門校の1つ・ミオ学院の制服を纏っている高校生が付き従う。

「はい。それに先ほどのバトルで実力は折り紙つき。我らの計画を為すにあたっては必ずや厄介な存在となるでしょう」

「残しておいても面倒なだけです。我らの手で早々と始末するべきでは？」

後ろに従うミオ学院の生徒たちが、少女に進言する。だが少女は歩みを止め、振り返っては2人の生徒を一喝した。

「愚か者、それを決めるのは私たちではない。決めるのは我らが主、ただ1人……違いますか？」

小柄な外見ながら重みのある口調で話す少女の鋭い眼光にたちまち押し黙る2人。

「それに、奴は我らの主と比べると随分と人を見る眼が無い。最重要人物に上げるほどではないでしょう」（そう、奴は私のことを小学生と勘違いした……小柄だからよく間違われるが、私は既に高校2年生だ。それをよくも……あんな公衆の面前で……）

「部隊長？　どうかされましたか？」

「いえ、何でもありません。ああ、ですが本部への報告は怠り無いように。計画を為すにあたって阻害となる人物についての諜報、それが我ら『林』の役目なのですから」

「はっ」

少女の言いつけを受け、人ごみに消えていく2人の生徒。少女は薄ら笑いを浮かべ、空を見上げるのであった。

第50話：幕間・男はつらいよ（後書き）

更新がだいぶ遅れましたが、第四章が始まります。第四章では、文化祭トーナメントの結末までとついに動き出した謎の集団の動きについて力を入れていこうと思います。

第51話：第3回戦・砂と雨の舞（1）

昼休憩が終わり、トーナメントの方は第3回戦が始まるうとしていた。悠璃はガブリアスと共に選手入場口の前で待機し、そこでは対戦相手である凜のことを考えていた。此処に来る前に悠璃に話しかけてきた凜は、いつもと変わらぬ微笑みと物腰柔らかな態度で接してきた。礼節を重んじ、誰に対しても優しい凜は決して悪い人間ではないのだが、悠璃はそんな凜にどこか苦手意識を抱いていた。もちろん格別仲が悪いわけではなく、普段は友だちとして普通に過ごしているのだけど、美夏や紗矢とはまた違う意味での“友だち”であった。

「黒崎さんのサンダーズのスピードはガブリアスをも上回る。先手で“電磁浮遊”を使われてしまえば、地面タイプの技で弱点を付くことは出来なくなる……だけど」

1回戦で凜のサンダーズがガブリアスと同じ地面・ドラゴンタイプのフライゴン相手に見せた戦法が電磁浮遊という技を利用したものである。電磁浮遊は電気タイプや鋼タイプのポケモンが主に習得する技であり、電磁力で宙に浮かび上がることによってしばらくの間地面タイプの技を無効にすることが出来るのだ。しかし悠璃はそれに関してはさほど大きな問題とは捉えていなかった。仮にサンダーズが電磁浮遊によって浮かび上がり、空中戦が可能となったとしても、ガブリアスの攻撃力で押し切ってしまうばそれまでのこと。

防御力の低いサンダースに接近戦を展開するだけで、バトルの主導権を握れるのだから。

「ただ、本当に警戒すべきなのは……」

悠璃はガブリアスの方を向く。ガブリアスは「心配はいらない」とばかりに、ゆっくりと頷いた。この時悠璃がどのような顔をしていたかは、悠璃自身ははっきりとは判らなかった。

だがガブリアスのリアクションからして、きっとらしくないような顔をしていたのだろう。それではダメだ。悠璃は自分にそう言い聞かせてゆっくりと歩き出した。

+++++

「ただいまより、Aブロック3回戦・第1試合を始めます！ 逢沢悠璃選手と黒崎 凜選手はそれぞれポケモンを出してください！」

審判の指示を受けてガブリアスがバトルフィールドに躍り出る。悠璃と対峙する凜は深々と礼をすると、ボールからサンダースを出した。サンダースはガブリアスを睨み付け「フーッ！」と唸り声を上げては、全身の毛を逆立てる。サンダースの戦闘体勢は万全のよ

うだった。

「お手柔らかに……宜しくお願い致しますわ！」

「こっちこそ！」

対峙した2人は互いに声を張り上げる。普段あまり見られない2人の様子に、客席で見ている美夏と紗矢は驚きの色を隠せなかった。

「あんな凜ちゃんはじめて見た……」

「凜も相当気合が入っているようね！」

盛り上がる美夏と紗矢の後ろの席で恭介は1人真剣にバトルの行く末を見ようとしていた。

「さて……どうなるか」

「兄貴、どっちが勝つと思う？」

「さあね。そればかりは俺に判らないな」

不思議そうにする翔に対して、恭介はそう言って首を傾げる。そして会場が言いようのない緊迫感に包まれる中、バトルの火蓋は切って落とされた。

「ガブリアス、地震！」

「サンダース、電磁浮遊で浮かび上がりなさい！」

バトルが始まると同時に、2つの指示が飛んだ。ガブリアスが雄叫びと共に大地を揺らす衝撃波を放つ。だがそれよりも僅かに早く、サンダースが電磁力によって浮かび上がった。浮遊の効果を得て、飛び上がったサンダースはあっさり地震を回避する。そしてガブリ

アスの後方へと物凄いスピードで回り込んだ。このままではめざめるパワーの直撃は免れない。恭介も言っていたことであるが、サンダースのめざめるパワーのタイプは氷。ガブリアスが最も苦手とするタイプの技であった。

（避ける……それでは間に合わない！）「ガブリアス、砂嵐！」

避ける時間など無い。そう判断した悠璃は砂嵐を指示する。運否天賦ではあるが、特性の砂隠れに賭けるしかなかった。風と共に砂埃が舞い上がり、ガブリアスはその中に体を瞬時に隠す。突然発生した砂嵐に驚いたサンダースは、攻撃を中断。絶好のタイミングを逃してしまった。

「怯まないで、サンダース！ そのまま攻撃を仕掛けてください！」

だが、凜は攻撃を止めるどころか、砂嵐に向かって攻撃を仕掛けさせた。砂隠れの効果を利用するということは、その砂嵐の中に身を潜めている。逆を返せばそこにガブリアスが居る、ということをもっと証明していることになるのだ。サンダースの冷機を纏ったエネルギー波が砂嵐に向かって撃ち出され、それが砂嵐を貫く。しかし、手ごたえは全く感じられなかった。

「居ない……！？」

「ガブリアス、ドラゴンクロー！」

砂嵐の中にガブリアスが居ない。凜がそれを認識したと同時に地中からガブリアスが飛び出してきた。砂嵐の中に隠れると同時に穴を掘るを使って地面の中へと潜ったのである。サンダースは電磁浮遊をしているため、地面タイプの技である穴を掘るは当たらないが、ドラゴンクローは通用する。

「高速移動で回避しなさい！」

「逃がすな、畳み掛けて！」

ガブリアスの鋭い爪がサンダースの左後脚を切りつける。しかし、攻撃炸裂と同時に高速移動を使用したため、大ダメージには至らなかった。サンダースに与えたダメージが少なかったことに悠璃は小さく地団太を踏む。

「くっ……千載一遇のチャンスだったのだけど」

「今の戦術は仁科さんの時に見せたものと同じものでしたね。砂隠れを発動させるために砂嵐の中にいると思わせ、相手の隙を突く。その戦法は知っていたはずなのに。うっかり、うっかり」

意表を突かれた形となった凜ではあるが、表情にはまるで焦りが見られなかった。

「うっかり？ 本当にそんなものなのかしら？」

「ええ。ですが、その戦法を知っているということはその戦法の対策も既に練られているということを考えるべきですよ、逢沢さん？」

そう言うてにつこりと微笑む凜。しかし、悠璃の眼には凜の微笑みがとても黒いものに見えた。バトル中という状況下にあって、緊張感に包まれているが故の幻覚かもしれないが。

「砂嵐はいずれ止みますが……このまま自然と消えるのを待っているのはこちらに不利になります。ならばその天気、上書きさせて頂きます！ サンダース、雨乞いを使いなさい！」

サンダーズの小さな体から青い光が撃ち出され、上空で破裂する。すると瞬く間にフィールド上に雨雲が広がり、強めの雨が降り出した。

「さあ、ここから本当の勝負です!」

第52話：第3回戦・砂と雨の舞（2）

雨乞いによって引き起こされた雨がフィールド中に降りしきる。

その勢いは雨雲の範囲内に居ない悠璃や凜までもが濡れてしまうほど強いものとなっていた。また雨によってフィールド全体の様子がはっきりと確認できなくなったため、悠璃は眼を凝らしてガブリアスとサンダースの位置を特定しようとする。だがそれでもガブリアスの後姿が薄っすらと見えるだけで、サンダースの姿までは確認できなかった。こちらからしてみれば、相手が何処にいるか判らないということは十分脅威になり得るのだ。

「これではまともに戦えない。面倒だけど、天候を再度張り替えるしか……ガブリアス！ もう一度砂嵐を……」

「サンダース、目覚めるパワーです！」

ガブリアスが砂を巻き上げようとした時、何処からともなく冷機を纏ったエネルギー弾が放たれた。目覚めるパワーである。目覚めるパワーは雨で視界が悪い中、ガブリアスに直撃。ガブリアスは予め悠璃が持たせておいた道具・ヤチェの実の効果でなんとかこの一撃を耐え切ることが出来た。

「ガブリアス……！」

「……やはりヤチェの実を持たせておりましたか。しかし、それでもガブリアスのダメージは大きい」

ヤチエの実の効果で一撃で倒されるという事態は免れたものの、ガブリアスの足元は何処か覚束ない。これ以上の被弾は確実に敗北へと繋がる。そのため、わずかな隙を見せるものなら躊躇無く凜は目覚めるパワーを打ち込んでくる。それを考えると、ガブリアスに天候を塗り替えるほどの余裕は無かった。

「もう一度、目覚めるパワーです！」

「ガブリアス、ジャンプして回避！」

サンダースが目覚めるパワーを放つ。しかし、今度は来ることがある程度予想できていたこともあってか、ガブリアスは難なく攻撃を回避する。だが電磁浮遊の効果で宙に浮かび上がった状態のサンダースは空中をまるで走るかのように駆け上がり、ガブリアスに追撃を仕掛ける。ガブリアスは龍の波動を放って牽制するものの、やはりスピードで勝るサンダースの攻撃の前に防戦一方という展開になっていた。

（雨が強くて、ポケモンの姿を捉えきれない……しかし、黒崎さんには見えている）

悠璃はそう思いながら目を凝らす。確かに凜は悠璃とは違って、裸眼でも雨の中にいるサンダースとガブリアスの動きを確実に捉えている。これは悠璃がガブリアスが砂嵐の中何処に居るかを把握しているのと同じようなものであった。雨乞いを使用することで、電気タイプの大技・雷が必ず相手に当たるようになる。だがそれだけではまだ完全に雨という天候を生かしかれて居ない。そう踏んだ凜は雨の中どのような立ち振る舞いが出来るのかと考え、その結果生み出されたのが降りしきる雨によって視界を悪くし、相手の眼を眩ます。言わば“擬似砂隠れ”のようなものであった。もちろんこの

ような戦法は一朝一夕で為せるものではない。そこに凜がポケモンバトルにどれだけ強く勝利を求めているか、ということの証でもあった。

「サンダース、目覚めるパワーを撃ちつつけるのです！」

「ガブリアス、龍の波動で相殺するんだ！」

そうこう考えている間に空中での撃ちあいはずっと続いた。だが、突然サンダースの攻撃が止む。

何事か、と思った悠璃がフィールドを見てみると、サンダースがいつの間にか地面へと降りていた。電磁浮遊の持続時間が切れたようである。悠璃はこれを好機と見て、ガブリアスに地面に降りるように指示をする。しかし悠璃はその際に「勢いよく」と付け加えていた。この指示はただ地面に降りるだけではなく、ガブリアスが空中から勢いよく地上へと降り、その衝撃で地震を起こす。そうすればサンダースが電磁浮遊をする時間を与えずに攻撃が出来るというものであった。

「無駄ですよ。逢沢さん」

そんな中、全てを見透かすような凜の瞳が弱まりつつある雨の中から悠璃を見つめる。よく見てみるとサンダースは既に宙に浮きつつあった。ガブリアスが勢いよく着地し、その衝撃で地震が発生する。しかし浮遊状態にあるサンダースには効果は無かった。

「電磁浮遊の効果が切れるなら、再度掛けなおせば良い。それだけの話ですから」

「……そう上手く決まるとは始めから思っていなかった。ただ浮遊状態にあるだけならまだ優位は保てるわ！」

ガブリアスが降り立ち、サンダーズがゆっくりと宙に浮き上がると同時に雨がぱたりと止んだ。これでフィールドの視界がよくなったのだが、砂と雨が交互に舞う形となったフィールドはすっかり泥だらけになってしまった。その証拠にガブリアスがフィールドに足を踏み入れると、水を浴びて泥になった砂がビチャビチャと音を立てる。

（足場が悪いな……下手に踏み込んでしまえばスピードが殺されてしまう）

そう判断した悠璃はガブリアスに空中で戦うように指示を出す。どちらかというと地上戦の方が得意であるが、地対空では明らかに地の方が分が悪い。また、本来陸上のポケモンであるサンダーズはあくまで電磁浮遊の効果で浮いているにすぎず、自力で空を飛ぶことも出来るガブリアスの方が空中戦では勝っているといえる。そのため凜は空中戦対決では不利なことを悟り、先ほどまでのように連続して攻撃を行わないようになってきた。バトルはさっきまでの激しい遠距離技の応酬とは違って変わって膠着状態へと陥る。押しては引き、引いては押す。用心深い2人は双方の動きの様子を見るあまり、互いに思い立った行動は出来ないでいた。

だがそんな状態にあっても悠璃はどうにかしてサンダーズを地面に叩き落とす術はないか模索していた。仮に地面に落としてしまえば地面タイプの技も命中するし、ぬかるみの中に誘い込めればサンダーズの足を封じること出来る。しかもバトルフィールドの足場が悪くなっていることに凜は気付いていないようだった。そのため凜がこのことに気付く前にサンダーズを誘い込む必要がある。だが下手に動いてしまえば勘のいい凜のことだ、すぐに悠璃のやろうとすることに気付くだろう。その危険性を考慮すると今の悠璃には慎重かつ大胆に動くことが求められる。

（成功するか、どうか……この一撃に賭ける！）「ガブリアス、サンダースに接近！ 一気に決める！」

ガブリアスは空中から悠璃の眼を見る。悠璃には何か策がある。そう感じ取ったガブリアスは小さく頷き、サンダースとの距離を一気に詰めようとする。それも回り込んでではなく、真正面から。いつ攻撃を受けてもおかしくない、捨て身の行動であった。

（正面から！？ これでは自殺行為……何故そんな真似を……）

これに動揺したのが他ならぬ凜である。ガブリアスの行動に驚いたのか、指示を出すのが僅かに遅れた。

「……サ、サンダース！ めざめるパワー！」

「遅い！」

サンダースがめざめるパワーを放とうとしたその時、ガブリアスの大きな口がサンダースの胴体に喰らい付いた。サンダースは針を逆立ててガブリアスを引き離そうとするが、その体格差ゆえに完全に身動きを封じられる形となった。

「ガブリアス、ドラゴンダイブ！」

ガブリアスは頭を下に向けると、サンダースを咥えたまま、一気に地面へと急降下を試みる。電磁浮遊の力が働いているため、反重力の力がガブリアスの落下の勢いを削いでいく。だがガブリアスは全身の筋肉に力を込め、その電磁力を一気に振り払う。そしてサンダースもろとも地面に激突する形で落下した。

「ガブリアス！」

「サンダース！」

ビチャッ！ という湿った音が会場中に響く。見ると泥まみれになったガブリアスとサンダースが地上でもみ合っていた。ガブリアスは牙と体格差を生かしてサンダースを泥の中に沈めようとしており、サンダースはそれから逃れようと必死にもがいている。

「もういい、ガブリアス。離れて！」

しかし、悠璃の指示と同時にガブリアスは後方へと飛びずさり、サンダースと距離をとる。至近距離からのめざめるパワーの被弾を避けるためであった。

「追撃を恐れましたね？ 今がサンダースに攻撃を仕掛ける絶好のチャンスでしたのに」

凜の問いかけに悠璃は無言を貫く。凜の顔に微かに笑みが浮かんだ。

「正直何がしたかったのか判りかねますが、捨て身の作戦もこれで振り出しに戻ります。サンダース、電磁浮遊で浮かび上がりなさ……」

サンダースは息を整え、電磁力を体から放ち、宙に浮かび上がるうとした。だが、サンダースがどれだけ電磁力を放つてもサンダースの体は一向に宙に浮かぼうとはしなかった。それまで涼しげだった凜の顔に焦りの色が浮かぶ。凜の様子から悠璃の狙いにはまだ気付いていないようだった。

「サンダースの足元、よく見てみなさい」

悠璃に言われ、凜がサンダースの足元に眼を凝らす。遠いのはつきりとは見えていなかったのだが、サンダースの足は泥の中に完全に埋まっているように見えた。

「こ、これは一体……」

「ガブリアスがサンダースを地上に引き摺り降ろしたのは、ダメージを与えるためじゃないわ。あのぬかるみに引き摺り込んでサンダースの足を封じるため。足さえ封じてしまえば、サンダース自慢のスピードが生かせなくなると同時にぬかるみにはまってしまったことで、泥の重さで浮遊することが出来なくなる」

「……！ サンダース、泥から抜けなさい！ 足さえ抜いてしまえば泥の重しなど……」

「それも無駄よ。黒崎さん“泥遊び”って技を知っているかしら？」

悠璃が口にした“泥遊び”という技は泥を撒き散らすことで電気タイプの技の威力を下げる技である。しかし本来ガブリアスはその技を覚えない。だが砂嵐によって巻き上がった砂を雨乞いによる大雨が濡らしたことで、フィールド上に大量の泥を作ることが出来た。その泥を生かせば簡易泥遊びを使えるようになる。

「……泥遊びは電気タイプの技の威力を下げる技、です」

「知つての通り地面タイプは電気を通さない。電気を遮断するから。それは攻撃技以外にも適用される」

泥がサンダースの体を浮かび上げる電磁力を遮断する。そのため、仮にサンダースの足が泥から抜けてとしても、電磁浮遊をすることは出来ないのだ。

「……っ、最後まで諦めません！ サンダース、目覚めるパワーで

す！」

「ガブリアス、地震！！」

2発の技がほぼ同時に放たれる。だが自慢のスピードが封じられたサンダーズの目覚めるパワーの着弾より早く、ガブリアスの地震が炸裂した。サンダーズはこの一撃を受け、敢え無く戦闘不能になった。

第52話：第3回戦・砂と雨の舞（2）（後書き）

原作の“泥遊び”に“電磁浮遊”を無効化する効果はないので悪しからず……

第53話：Aブロック代表決定戦・悠璃VS蛍（1）

昼過ぎから始まった第2回戦、その次の第3回戦が終わった。トナメントには未だ悠璃、蛍、紗矢、恭介の名は残っていた。陽はすっかり傾き、西の空が朱に染まりつつある。そんな中、各ブロックの代表者、つまり準決勝に進出するトレーナー1人を決めるバトルが始まるうとしていた。

『只今よりAブロックの代表、および準決勝進出者を決めるバトルを開始致します！ 選手は入場してください！』

割れんばかりの歓声と拍手に迎えられながら、トレーナーがバトルフィールドに入場する。かたやガブリアスを引き連れた悠璃、そしてもう一方はムウマージを従えた蛍であった。

「まさか4組の生徒同士が準決勝で当たるとは……なんとも奇妙なことですね」

「うん。Aブロックは悠ちゃんと桜木くん。Bブロックは紗矢ちゃんと立花くん、偶然とは言っても凄いことだよな」

始まる前から盛り上がる会場を見て、美夏と凜は感嘆の言葉を漏らす。Aブロックの悠璃と蛍だけではなく、Bブロックも恭介と紗

矢、4組の生徒同士のバトルなのだ。偶然にしては出来すぎているようにも思えるが、これも日々少なからず鍛錬を積んできた生徒たちの努力の賜物といえた。そして悠璃と蛍はそんな生徒たち1人1人を踏み越えてフィールドに立っている。小規模な大会ではあるが、そのことに對するプレッシャーは少なからず2人に押し掛かっているようだった。

「さすがにこの状況となると緊張するわね……だけど、ここまで来ておめおめと引き下がるわけにはいかないわ。ねえ、ガブリアス？」

悠璃は緊張した様子を見せながらも、ガブリアスと互いの意志を確かめ合っていた。

「……」

その一方で蛍は手を胸に当て、無言でフィールドを見つめていた。

+++++

『スターミー、戦闘不能！ ムウマージの勝ち！ よって勝者、1年4組桜木 蛍選手！』

蛍は前のバトルのことを思い出していた。蛍とムウマージは得意とする小技を絡めたバトルで相手を圧倒。準決勝進出決定戦への勝

ち上がりを決めた。湧き上がる歓声が蛍を祝福するが、蛍は何処か浮かない顔をしていた。その後、フィールドを後にした蛍は一目散にトイレへと駆け込んだ。空いている個室を見つけるとそこに入り、ドアの鍵を閉める。

「ぐっ……はあっ、はあっ……」

そしてトイレの壁に寄りかかってそのままへたりこんでしまった。顔は真っ青に染まり、冷や汗が止まらない。蛍は苦痛に顔をしかめながら、ズボンのポケットから錠剤を取り出す。本来その薬は水と併用しなければならないものであるが、水など当然ここにはない。蛍は一か八かそのまま錠剤を飲み込んだ。本来の服用法ではないが、応急処置にはなったようで、異常は10分もしないうちに収まった。

「少々無理をしすぎたか……？　だが此処まで来たんだ。例えば次に逢沢さんに勝とうと負けようとも、俺は……俺は……」

+++++

（頼む、俺の体。もう少しだけ持ちこたえてくれ……）

蛍の眼はいつにもなく真剣だった。

「桜木くん……」

「あいつがあんな眼をしてんの初めて見たわ。よっぽど兄貴とやりたいんだろうな」

その様子は客席で見守る美夏、凜、翔にも伝わったようで、3人は自然と集中してバトルを見ようとしていた。そんな中、バトルの火蓋は切って落とされる。

「ムウマージ、シャドーボール！」

「ガブリアス、ドラゴンクロウ！」

バトルが始まると同時に両者が攻撃に出た。悠璃はこれまでの蛍のバトルを見て来た上で厄介な補助技を使わせる前に畳み掛けてしまおう、という魂胆であり、蛍は補助技を警戒している相手に奇襲を仕掛けよう、という算段であった。しかし両者共にその思惑は外れる。だが、ムウマージのシャドーボールをガブリアスはドラゴンクロウの一撃で叩き落している。互いに攻撃を放たせた上で、改めて火力ではガブリアスに分があるということが証明される形となった。

（やはり単純にぶつかり合うだけでは勝ち目はないか）「ムウマージ、鬼火！」

ムウマージの周囲に青白い炎が不気味に浮かび上がり、ガブリアス目掛けて飛んでいく。紗矢も対策を強いられた鬼火だ。物理攻撃を得意とするガブリアスも鬼火による火傷状態だけはなんとしても避けたいところである。

「ガブリアス、身代わりを出して鬼火をやり過ごして！」

しかし、蛍のバトルをしっかりと見ていた悠璃は当然対策は講じ

ていた。その1つが“身代わり”である。身代わりは自分の体力を少しだけ減らす代わりに、自分の分身を作り出し、攻撃を代わりに受けさせるものである。身代わりにも体力があり、ダメージを受けて体力が尽きると消えてしまうが、鬼火のような補助技の大半を無効に出来る技だ。

「くっ……やはり覚えていたか」

「隙が出来た。今よ、ガブリアス！」

悠璃の指示に従い、ガブリアスは一気にムウマージとの間合いを詰める。ドラゴンクローが来る、そう察知した蜚はムウマージに避けるように指示を出す、完全に避けるまでにはいかず、手痛い一撃を喰らってしまった。

ムウマージに限ったことではないが、ゴーストタイプはHP・防御力が低いポケモンが多い。そのためガブリアスのような攻撃力の高いポケモンの放つ攻撃を受けるだけで致命傷にもなりかねないものである。だが、蜚もムウマージ自身もそれは十分に理解していた。その証拠にムウマージは攻撃を受ける瞬間、かすかに体をずらしている。これによりドラゴンクローによるダメージを最小限に抑えていた。この辺りの細かいことが出来るのは蜚ならでのこと。しかし、悠璃も数多のトレーナーを倒してここまで勝ち上がってきた強者。いつまでも小細工で誤魔化し続けられる相手ではなかった。

「ムウマージ、シャドーボールで身代わりを破壊し、ガブリアスと距離を取れ！」

この状況を打開する策、それにはまず自分の得意とする戦法を封じる身代わりを破壊することに他ならない。ムウマージは接近してきたガブリアスをシャドーボールで攻撃。身代わりが代わりに攻撃を受け、身代わりは消滅した。だが、ここでただ闇雲に身代わりを

破壊するだけでは何の解決にもならない。残りHPによる制約こそあるが、ガブリアスはあと2、3回は身代わりを作り出すことが出来る。それを一々破壊している間にこちらが反撃を受けて倒されてしまう。

+++++

「ねえ、恭介。桜木の奴なんか調子悪そうじゃ……」

「……確かに。いつもの切れがない。まさか……」

控え室のモニターで試合を見守る恭介と紗矢。この2人は蛍の異常に気付いていた。

（蛍。よりによってこんな時に持病が……）

+++++

「はあっ……はあっ……」

蛍の異常は、対峙する悠璃、そしてバトルを見守る審判にも見て取れた。心配そうな表情をする悠璃は審判に目配せをする。審判が蛍に駆け寄り、蛍に「バトルを続けられるか？」と尋ねる。もしここで身体の異常を訴えてしまえば、このバトルは悠璃の不戦勝となってしまうだろう。体調が万全ではないとはいえ、ここまで戦い抜いた意地が蛍にはある。蛍は肩で息を整えると「大丈夫です」と審判に告げてバトルを続行させた。

「……これ以上、自分の望んだことを不本意に妨げられるのはごめんだ。だから、俺はここを降りるわけには行かない」

蛍は一瞬だけ眼を閉じ、再び開く。その双眸からは強い意志が感じられた。

第54話：Aブロック代表決定戦・悠璃VS蛍（2）

蛍は1回、深々と深呼吸をした。すると、蛍の目つきが変わった。バトルが始まった時とは比べ物にならないほど鋭くなっている。審判は当初蛍の様子がおかしいことを不安気に見ていたが、今の蛍の様子を見る限り、心配はないようだ、と判断した。

（桜木君の目つきが変わった……1回戦で久坂相手に見せたあの鋭い眼。あれが本当の桜木君の眼！）

「……ムウマージ！」

悠璃が蛍のそう考えて蛍の動きを警戒している間に、ムウマージの周りには再び青い炎が漂い始める。悠璃は鬼火が撃たれる、と判断し、ガブリアスに再び身代わりを出してやり過ごすように指示を出した。だが悠璃がいくら身代わりの指示を出してもガブリアスは身代わりを出そうとせず、唸り声を上げたままムウマージを憤怒の表情で睨みつけるだけだった。

「ガブリアス、早く身代わりを……」

「無駄だ。ガブリアスは身代わりを出せない」

ムウマージは身代わりを指示されても身代わりを出すことの出来ないガブリアスは嘲笑うかのような眼で見下していた。さっきムウ

マジが鬼火を漂わせていたのはあくまでブラフに過ぎない。蜚の本当の目的はガブリアスの身代わりを誘うこと。身代わりを出す間にはほんのわずかな間だけ、動きが止まる。蜚はその隙を狙い、暫くの間補助技を出せなくする“挑発”を使ったのだ。

「ムウマジ、鬼火だ！ 火傷させてしまえば、ガブリアスであるうと怖くない！」

「ガブリアス、ジャンプして回避して！」

身代わりが出せなくなった今を狙い、ムウマジは執拗に鬼火を放つ。だが、ガブリアスがむざむざと鬼火に当たるわけもなく、空中に飛び上がってそれを回避する。しかし、空中戦ならば特性が浮遊のムウマジも負けてはいない。攻撃を回避するため、飛び回るガブリアスを追うムウマジ。どちらのスピードもほぼ互角であり、バトルは拮抗状態へと陥りつつあった。

（ガブリアスの持ち味であるスピード……あれさえ削いでしまえばなら、この手で行くか）

「ムウマジ、ガブリアスの足を止める！ 鬼火だ！」

ムウマジはまたも鬼火を放つ。だがそう何度も同じ手が通用するわけもなく、ガブリアスはあっさりそれを回避する。しかし、今回はそれだけでは終わらなかった。ムウマジは鬼火を放つと同時に“サイコネシス”を使い、強力な念力によって鬼火の軌道を操ったのだ。逃げ回るガブリアスを青白い炎が追い回す。

「ガブリアス、竜の波動で鬼火を打ち消しなさい！」

ガブリアスは竜の波動で鬼火を撃ち落とすことが出来たが、鬼火を避けることに精一杯だった。

その隙を突いてムウマーヅが音もなくガブリアスに接近する。相手に動きを悟られずに動けるといふ点ではゴーストタイプのポケモンが最も秀でていけるといえる。

「今だ！ ムウマーヅ、“凍える風”！！」

ムウマーヅの眼が青白く光り、全身から冷たい風が吹き出される。“凍える風”は氷タイプの技である。威力こそ冷凍ビームや吹雪といった他の氷タイプの技と比べて格段に劣るものの、氷タイプの技が得に苦手なガブリアスにとっては十分な痛手であった。悠璃が念のために、と持たせていたヤチエの実の効果でダメージ自体は少なく済んだ。しかし凍える風の恐ろしいところはその追加効果にある。

「ガブリアス、間合いを取って立て直して！」

ガブリアスはムウマーヅと距離をとって立て直しを図ろうとする。だがその動きはどこか鈍い。凍える風の追加効果とは、相手のポケモンの素早さをほぼ確実に下げてしまうというものであった。この技を受けたことにより、ガブリアスの自慢の一つであるスピードが奪われてしまったということである。そしてそれはガブリアスとほぼ互角のスピードを持つムウマーヅに素早さで劣るということ在意味していた。現に距離をとろうとしたガブリアスに対してムウマーヅはシャドーボールを放ち、ガブリアスにダメージを与えている。此処に来てこれまでの有利不利が一気に逆転した形となった。

+++++

「凄え……一気に蛍が有利になった」

咄然とした表情でバトルを見据える翔。悠璃や蛍に比べてバトルの腕は劣る彼ではあるが、この僅か数分での形勢逆転は翔にも十分理解することが出来た。片や動揺した様子の美夏は凜に悠璃は逆転できるか、と何度も問いかける。凜は明言こそしなかったが、逆転できる余地はまだまだあると感じていた。そしてそれは控え室で紗矢と共にバトルを見守る恭介も同じだった。

「恭介、このままだと悠璃は……」

「バトルは、最後までわからないものさ」

恭介の眼はまっすぐに、ただ一点を見つめていた。

+++++

「ムウマージ、凍える風でさらに追撃を掛けろ！」

動きの鈍ったガブリアスにダメ押しとばかりに凍える風を放つ。
ヤチエの実を消費した今、この一撃はさすがに耐えきれない。

「ガブリアス！！」

悠璃の叫びが会場中に響き渡る。するとガブリアスの体から猛烈な砂と風が吹き出し始めた。砂嵐である。ムウマージの挑発の効果がか此処に来て解けたのだ。砂嵐による強風によって、凍える風が打ち消される。

（此処に来て挑発の効果が解けるとは……だが、スピードの奪われたガブリアスなど……！）

「ムウマージ、もう一度挑発を仕掛ける！」

ムウマージは再度挑発しようとするが、砂隠れの効果で身を隠しているガブリアスは挑発を回避する。そして、砂嵐を身に纏いながら高速回転を始めた。舞い上がる砂の中で回転したため、ガブリアスの周囲には自然と砂と砂利による竜巻が形成され始める。

「あの動きは……まさかつ！」

「立花、戦法を借りるぞ！ ガブリアス、剣の舞！！」

ガブリアスの両腕が舞い上がる砂の中で激しく輝く。砂嵐によって特性の砂隠れが発動している間、限界まで攻撃力を上げる作戦であった。そして高速回転しながら剣の舞をするというのは、エキシビジョンマッチで恭介のハッサムが駆使した荒業であり、その回転力はハッサムが本来苦手とする炎タイプの技すら弾き返すほどのものである。

悠璃は恭介とのバトルに敗れ（実際は勝っているが、悠璃自身は自分の敗北とみなしている）、ミオ学院の生徒や上級生の不良に襲われた時に助けてもらうなど、恭介に多くの借りを作っていた。その時の借りを返すため、悠璃は日々研鑽を積んでおり、その成果の1つがこの高速回転しながらの剣の舞であった。

「ムウマージ、ガブリアスを近づけさせるな！ 何としても止める！」

「ガブリアス、耐えきって！」

ムウマージはシャドーボールや凍える風を遮二無二に連打してガブリアスの動きを止めようとする。恭介と幾度と無くバトルをしてきた蚩はハッサムのこの戦法の怖さをよく知っていた。だがガブリアスの周囲を渦巻く砂嵐がバリアとなってガブリアスを守るため、ムウマージの攻撃は全て無効化されてしまっていた。

「それならば……ムウマージ、上だ！ ガラ空きの上を狙うんだ！」

ムウマージはガブリアスの真上に移動して隙の大きい上からの攻撃を試みる。剣の舞による高速回転は横からの攻撃は弾き返せるものの、真上からの攻撃には弱く、攻撃を一手に受けてしまう。しかし、既に巨大な竜巻と化していたガブリアスはこの戦法の弱点をもカバーしていた。隙がある、と思い接近したムウマージは逆に砂嵐に囚われる形になってしまったのだ。

「ムウマージ、何としても抜けだせ！」

「逃がさない……今よ、ガブリアス！ 連続でドラゴンクローー！」

砂嵐に巻き込まれ、身動きの取れないムウマージは風の影響でガブリアスの方へと徐々に引き寄せられていく。そしてガブリアスとムウマージの間合いが十分に縮まったとき。プロペラのように高速回転するガブリアスのドラゴンクローの連弾がムウマージをズタズタに引き裂いた。ただでさえ強いガブリアスのドラゴンクローが剣の舞の効果と高速回転によってさらにその勢いを増し、それが単発ではなく連続で襲いかかったのだ。防御力が低く、既にダメージを受けていたムウマージには最早為すすべが無かった。

「ムウマージ、戦闘不能！ ガブリアスの勝利！ よってAブロック代表は、1年4組逢沢 悠璃選手！！」

耳を劈くような歓声が会場中に響き渡った。悠璃はついにAブロックの代表となったのである。

第55話：蛍の告白

悠璃はAブロックの代表として、準決勝進出を決めた。改めて勝利を実感した彼女は握り拳を解いて、ふう、と小さくため息をついた。そしてガブリアスの元へと歩み寄る。ガブリアスは肩で息を整えると、穏やかな表情を浮かべて頭を垂れる。悠璃は手を伸ばし、ガブリアスの頭を優しく撫でた。

バトルの時はとても荒々しい様相を見せるガブリアスであったが、悠璃にこうして頭を撫でられるとまるで子猫のように喜ぶ一面があった。それはフカマルの時から変わらない悠璃のガブリアスの唯一の点であった。

(……次、立花が勝てば……)

このすぐ後に恭介と紗矢のバトルが行われる。もし恭介がこのバトルに勝利すれば、朝に恭介が悠璃に言い放ったこと、『恭介と悠璃の再戦』が実現するのだ。

「あの時の借り……此处で返させてもらっ

悠璃は踵を返し、バトルフィールドを後にした。その後、反対側の選手入場口から戻ってきた蛍と合流した。バトルの中盤から決着

までの間は元気そうに見えた蛍であったが、今悠璃と話しているこの時は再度体調を崩しているように見えた。

「やはり強いな。流石恭介に勝っただけのことはある」

「そんな……あれは実質私の負けのようなものよ。桜木君だって内情を知っているでしょう？」

「事情は知っているさ。だが、そもそもあそこで恭介が隙を見せたのが悪い。ポケモンバトルはトレーナーとポケモン、互いに死力を尽くして行うもの。どのような状況であろうと手を抜かず戦うことが、相手に対しての礼儀となるものさ」

「……随分と手厳しいのね」

思わず悠璃は苦笑いする。蛍は外面こそ爽やかですこぶる穏やかな印象を相手に与えるが、その内面には外面に似合わない熱い感情が流れているといえる。ちなみにエキシビジョンマッチの後、恭介敗北の実情を知った蛍は恭介に対して敢えて叱責の言葉を浴びせかけていた。恭介とは小学校低学年の頃からの付き合いだったためか、そういう事を互いに言い合える仲であった。

「ふっ、あいつには少しくらい厳しくしたほうがいいのさ。少々甘いところも……あるから……ゲホッゲホッ！」

軽口を叩いていた蛍であるが、突如激しく咳き込み出し、その場にうずくまってしまった。

「桜木君！？」

突然の事態に慌てふためく悠璃。だが当人の蛍はそんなときであっても妙に冷静な口ぶりであった。だが冷静なのは口調だけで、全

身から冷や汗が溢れ出るなど、傍から見るとどう見ても苦しそうだった。

「なに、制服の右ポケットに薬がある……それを飲めば大丈夫だ」

悠璃は蛍の代わりに制服の右ポケットから薬を取り出した。Aブロック代表決定戦への出場を決めた後、トイレでこっそりと服用したものである。薬のケースには水と一緒に流し込むように、と注意書きが為されていたが、生憎近くに水飲み場はないし、あってもそこまで蛍が移動できるかどうかも怪しかった。そのため悠璃はケースから錠剤を2粒取り出すと、蛍の口に押し込むように入れた。蛍は少しばかり驚いたかのように目を見開くが、なんとか薬を飲み込んだ。

「……ふう。どうにか落ち着いた、ありがとう」

「ど、どういたしまして……というかさっきもそうだったけど、今ののは一体……」

「大したことは無いさ」

心配そうな表情を浮かべる悠璃を尻目に蛍はすくりと立ち上がり、そしてそ知らぬ顔で歩き始める。2歩ほど間隔を空けて付いていく悠璃に蛍は振り返ることなく、歩きながら話し始めた。

「実を言うと……あまり言いふらすような真似はしたくないんだが、俺は生まれた時から持病を抱えていてね。こうして医師から投与される薬を定期的に服用しなければ、あのような発作が起きてしまうんだ」

蛍は病気の説明に小慣れているようだった。恐らくこれまで何度も同じような説明を他人にしてきたのだろう。

「正直な話、俺がいつまで持つかはわからない。病気が発覚した時、俺は言葉を喋れるようになるかならないかの年齢だったんだが医者からは『10年持たない』と言っていたようだ」

「そんな……」

「そう気を落とさなくていい。余命宣告なんてあくまで予報に過ぎない。予報なんて大概は外れるものなのだから……と、いうか。今逢沢さんは俺の病気より気にかけるべきものがあるんじゃないのか？」

そう言っただけで微笑みながら振り返る。悠璃はその笑みの裏に隠された雫の気持ちを理解した。

「恭介も、本城さんも……強いぞ？」

+++++

「悠璃……やっぱり強いわね。ねえ恭介？ あんた悠璃とバトルしたいんでしょ？」

紗矢は椅子に腰掛けながら立ち上がって柔軟体操をしている恭介

に話しかけた。

「……どういう意味？」

「私とあんたの力量差は明らか。なら、あんたが勝ったほうが悠璃も喜ぶと思うんだけど……」

伏し目がちに呟く紗矢。すると、ついさっきまでそこで柔軟体操をしていたはずの恭介の顔が紗矢の顔の目の前にあった。「きゃっ」と小さな悲鳴を上げて顔を離す紗矢。だが恭介は少々不服な様子で紗矢に顔を近づけ、紗矢の眼をじっと見つめる。紗矢は自分の顔が赤く染まっているのをひしひしと感じていた。

「なっ、何よ……」

「今の言葉、撤回しろ」

「えっ」

「もし、本城さんが俺とのこのバトルで手を抜くのであれば、俺はこのバトルを棄権する。そんなバトルをしてまで準決勝になど行きたくない！」

普段は穏やかな恭介が怒りを露わにし、声を荒げた。そして紗矢の小さな肩を両手で思い切り掴む。

「俺はどんなバトルでも全力を出して臨む。だから　本城さんも、エルレイドと共に全力でこのバトルに臨んで欲しいんだ！　例えどのような結果になろうとも、後で後悔するようなバトルにはしたくない」

「恭介……ふふっ、ごめんなさい。私がどうかしてたわ。私がそんな軽い気持ちでバトルに臨んでいようものなら、エルレイドに申し訳ないわよね！」

恭介はゆっくりと立ち上がり、拳を突き出した。紗矢も立ち上がり、恭介の拳と突き合う形で拳を突き出した。

「さあ、行こうか」

「ええ。私たちのバトルフィールドに！」

第56話：Bブロック代表決定戦・恭介VS紗矢

恭介と紗矢は選手控え室で別れ、それぞれの入場口へと向かった。恭介はリザードンをボールから出し、リザードンの状態を確認する。なにぶん長丁場なため、回復アイテムで取れない疲労もあるようだが、リザードンはほとんど万全の状態と言えた。恭介は既に臨戦態勢を整え終えているリザードンの首を撫でる。リザードンは甘えるような声を出して恭介にじゃれついた。

「あと3戦。これまで以上に厳しく、辛い戦いになるだろうけど……俺たちならきつと乗り越えられるさ。だから、行こう」

恭介とリザードンは互いの意志を確認しあうと、一步一步歩みを進め、バトルフィールドに足を踏み入れた。割れんばかりの大歓声が恭介と反対側から入ってきた紗矢を包み込む。

（なんだかんだ言っただけで本城さんも此処まで勝ち残ってきた……そして俺のバトルスタイルもよく知っている）

（力量は私より恭介の方がずっと上……だけど、何もせずただ負けるわけにはいかないんだから！）

互いの思惑が交差するバトルフィールド。バトル開始が審判より告げられ、2人の思いを背負ったリザードンとエルレイドが対峙す

る。

「ついに始まったね、紗矢ちゃんと立花くんのバトルが！ どっちが勝つのかな？」

「そんな兄貴に決まってるだろ！ 飛行タイプを持つ兄貴のリザードンの方が相性では有利だぜ！」

「いえ、そうとも限りませんよ。紗矢さんのエルレイドは飛行タイプを相手にした時のための対策を考えているでしょうし、何よりエスパータイプ。小技を交えた戦いも出来ます」

「確かに。恭介のワンサイドゲームとはいかないだろうな……（だが、不利な状況に追い込まれてもそれを知らぬ顔で覆すのが恭介というトレーナーだったりするが）」

自分なりの勝負の展開を予想して話す美夏たちを尻目に、悠璃は1人無言でバトルを見つめていた。悠璃の中ではやはり朝、恭介が悠璃に言った言葉が記憶の中で響いていた。

（あの言葉…… 本当に実現させるのかしら、立花……）

「リザードン、此処は攻めていこう！ エアスラッシュだー！」

バトル開始直後、リザードンはすぐに動いた。片翼を強く輝かせ、空気を切り裂く刃をエルレイドへ向かって撃った。リザードンの得意技の1つ、エアスラッシュである。

「エルレイド、迎え撃つて！ ストーン……」

迎撃しようとしたエルレイドであるが、風の刃の一撃を受け、途中で動きを止めてしまった。エアスラッシュの追加効果は、相手を高確率で怯ませるものである。素早いポケモンが遅いポケモンに向かってエアスラッシュのような相手を怯ませる効果のある技を撃ち続け、相手に何もさせずにバトルに勝利するという戦法もあるのだ。しかし、エルレイドを怯ませたにも関わらず、恭介の顔には曇りが見え、反対に紗矢の顔には微かな笑みが浮かんでいた。

「（1発では決めきれないか……）リザードン、もう1発エアス……」

「エルレイド、ストーンエッジ!!」

リザードンが追撃のエアスラッシュを放とうとしたとき、後手に回っていたエルレイドが先にストーンエッジを放った。

「えっ、どうしてエルレイドの方が先に攻撃を……」

「エルレイドの特性“不屈の心”が働いたのよ。“不屈の心”はポケモンが怯むと素早さが上がる特性。これでエルレイドの素早さがリザードンのそれを上回った」

炎・飛行タイプのリザードンにとって、両タイプの弱点を突ける岩タイプの技は致命傷にもなりかねず、エルレイドのように攻撃力の高いポケモンの放つストーンエッジを喰らってしまえばまず一撃

で戦闘不能に陥るだろう。

「リザードン、エアスラッシュやめ！ 身代わりを出すんだ」

しかし恭介もその対策は考えていた。恭介はエアスラッシュの指示を中止し、ストーンエッジが命中する寸前にリザードンに身代わりを作らせた。そして身代わりに代わりに攻撃を受けさせることで攻撃を間一髪回避したのである。代わりに攻撃を受けた身代わりの体力はゼロとなり、身代わりは消えてしまうものの、これでしばらくは攻撃をやり過ごすことが出来る。

「ふう、危ない危ない」

「くっ……（ストーンエッジはあと7回撃てる。でも身代わりで回避されたり技をよけられたりしたらあつという間にPPが……）」

紗矢の心配はそこにあった。確かにストーンエッジは強力な技であるが、大技故に命中率が低く、PPも最大で8とかなり少ないのだ。そのため、リザードンの使用した身代わり、もしくは普通に回避されてしまうことであつという間にPPが尽きてしまう危険性があるのだ。

（だけどそれは恭介も同じ……身代わりで防ぐことは出来ても身代わりはリザードンの体力が少なくなればいずれ使えなくなる。その時点で恭介にしてみればこのバトルの勝敗は賭けに近いはず。此处で失敗を恐れていては、先は切り開けない！）

「エルレイド、もう1回ストーンエッジよ！」

エルレイドの周囲に浮かんだ鋭い岩の刃が空中のリザードンに向かって放たれる。

「リザードン、もう1度身代わりで受け流せ！」

一方で身代わりを作り出し、ストーンエッジを受け流すリザードン。しかしエルレイドは攻撃の手を緩めようとはせず、追撃のストーンエッジを放つ。

「もう1度、ストーンエッジ！」

「またまた身代わり！」

3回目のストーンエッジを身代わりで防ぐリザードン。盾になった身代わりの体力が尽き、リザードンの姿がフィールド上に再び現われる。

「……この3発で外れてくれることを願ったけど……そう上手くは行かないか」

渋い顔をして空中のリザードンを見上げる恭介。よく見るとリザードンは飛ぶことすらままならないほど苦しそうな顔をしていた。

「リザードン……苦しそう」

「身代わりの負荷が此処に来て響いてきましたね……」

「まんまと本城さんの策に乗せられる形となったな、恭介は」

「なっ、兄貴が乗せられる！？　んな訳ねーだろうがよっ！！」

身代わりは自分の体力の4分の1を削って分身を作り出す技である。そのため、使ったたびにリザードンのHPは削れていく。そして

身代わりを出すのに必要な体力がなくなったとき、身代わりを使うことが出来なくなるのだ。リザードンに攻撃を防ぐ手立てはない。そして体力が少なくなったりリザードンに攻撃をかわすだけの余力もない。

「もうこれで身代わりは使えない！ このバトル私が貰ったわ！」

エルレイドの周囲を鋭い岩の刃が漂い始める。この攻撃が通ればエルレイドの勝利が確実なものとなる。

（恭介にしては随分と気の抜けたバトルだったような気がするけど…… 此处で攻めない道理はないわ！）

随分あっさりとしたバトルの展開に紗矢は微かに疑問を抱きつつあったが、紗矢はこのまま一気に決めることにした。対峙する恭介がリザードンに対して何の指示も出そうとしないことが、紗矢の攻撃判断を煽る形となった。

「エルレイド、これで最後よ！ ストーンエッジ！」

岩の刃がリザードン目掛けて放たれる。絶体絶命の状況にありながら、恭介の顔にはなんと笑みが見られた。

「残念ながら……俺は此处では終わらないよ！ リザードン、“熱風”だ！！」

今まで何の動きも見せずに空を飛んでいるだけだったリザードン

の眼と体が真紅に輝き始める。そして両翼を大きく羽ばたかせて“熱風”を放った。“熱風”は炎タイプの全体攻撃技で、火炎放射より威力は上のものの、その性能上主にダブルバトルで用いられる技である。

「今更熱風を放ったってどうしようもないわ！ エルレイドに攻撃が届く前にストーンエッジがリザードンに当たる！」

「確かにエルレイドには届かない……だけど俺はエルレイドに熱風を撃ったわけじゃないよ？」

「えっ……」

熱風の放たれた先あったのは、今まさにリザードンに直撃しようとしていたストーンエッジ。恭介の狙いは、熱風とストーンエッジの相殺だった。しかし岩タイプは炎タイプに強く、仮に熱風とストーンエッジを相殺しようとも、相性を超えるだけの火力が求められる。もし相殺しきれなければストーンエッジがリザードンに届き、弱ったリザードンの負けが確定となる。

「無駄よ！　いくらあんたのリザードンといっても相性の壁は超えられない！」

「超えられない……？　この状況においても？」

微笑を浮かべる恭介はリザードンを指差した。リザードンの体を真紅のオーラが包み込んでいる。リザードンの特性“猛火”が発動したのだ。猛火は体力が少なくなったときに発動する特性で、炎タイプの技の威力が強くなるというものである。そしてリザードンの手には既に使用されて力を失った木の実が握られていた。

「えっ……あ、あの木の実は！？」

それまで余裕綽綽と言った紗矢の表情が一気の凍りつく。リザードンの手に握られていたのは“ヤタピの実”という木の実である。ヤタピの実はとても貴重な木の実の1つで、持たせたポケモンの体力が少なくなったときに発動する。そしてその効果は持たせたポケモンの特攻をアップさせるものだった。猛火とヤタピの実で強化された熱風の威力は通常のそれとは比べものにならないほど強力なものとなっており、空中のストーンエッジをその高熱で全て溶かしてしまうほどのものとなっていた。ジューと音を立て溶かされたストーンエッジを見て、紗矢の頬に冷や汗が伝う。

「な……なんて威力なの……」

「ふーむ。リザードンのエアスラッシュでエルレイドの特性が発動してしまったのは予想外だったけど……本城さんが攻撃し続けてくれたから身代わりでリザードンの体力を減らし、猛火とヤタピの実を能動的に発動させることが出来た。本当の勝負は此处からさ！」

「で、でもいくら攻撃力が上がってもリザードンはもう虫の息！それに素早さではエルレイドの方が上だから先手を取って終わりよ！エルレイド、ストーンエッジ！」

エルレイドのストーンエッジがリザードンに襲い掛かろうとする。だがリザードンは翼を大きく翻すと、物凄いスピードでストーンエッジの飛び交う間を潜り抜け、一気にエルレイドとの間を詰めた。

「えっ！？なんでそんな動きが……」

「俺のリザードンの体力は確かに残り少ないけど、そんなにスタミナ切れするほど軟くはない！リザードン、最大火力で大文字！」

巨大な翼を精一杯広げたりザードンが、エルレイドの前に躍り出る。翼を広げ、大きめの体をさらに大きく見せる一種の威嚇行動に出たりザードンに、エルレイドはほんの一瞬だけ怯んでしまった。恭介はその刹那を見逃さなかった。一瞬の隙を突き、リザードンの灼熱の大文字がエルレイドに炸裂した。エルレイドは特防こそ高いものの、体力のステータスは低く、またバトル開始時に受けたエアスラッシュのダメージも決して少なくなかったこともあって、この一撃が決定打となった。

『エルレイド、戦闘不能！ リザードンの勝利！ よって勝者！
1年4組、立花 恭介選手！』

第56話：Bブロック代表決定戦・恭介VS紗矢（後書き）

次の話から、恭介VS悠璃編が始まります。

第57話：交わせた握手

恭介と紗矢によるBブロック代表決定戦は恭介の勝利に終わった。一度は優位に立てたものの、それをあっけなく覆されたことに紗矢は軽くショックを受けているようだった。しかしそれが必要以上に落ち込むことはしない。結果はなんであれ、自分とエルレイドの持てる力を全て出し切った上での敗北。紗矢は倒れたエルレイドの元に駆け寄り、その労を労ってボールに戻る。

「おめでとう、あんたがBブロックの代表よ」
「どういたしまして」

Bブロックの代表の座を勝ち取ったにも関わらず、恭介は相変わらず涼しい顔をしていた。

「なによ、あれだけ多くの生徒がいたBブロックのトップに立ったのよ。もっと喜びなさいよ」

「いや、こう見えて俺結構喜んでるよ。でも俺の目指している到達点は此処じゃないし」

「それって、悠璃に勝つことかしら？ それとも優勝でも狙ってるの？」

「……さあね」

恭介が振り返り、客席の方を見る。恭介と、このバトルを真剣に

なつて見ていた悠璃の目が合った。

悠璃は少々焦ったような様子を見せると、美夏たちに何かを話して客席を後にした。恭介と紗矢もフィールドを後にした。

+++++

フィールドを後にした恭介が紗矢と別れ、選手控え室に戻ると、そこには渋い顔をしながらボールを見つめる悠璃の姿があった。きつとバトルのことを考え、集中しているのだろう。そう思った恭介は珍しく空気を読んで悠璃に話しかけることはしなかった。その間にCブロックとDブロックの代表決定戦が行われ、Cブロックの代表は1組の松本^{まつもと} 聡^{さとし}が、Dブロックの代表は同じく1組の小林^{こはやし} 茂^{しげる}となった。この2人のバトルの勝者が恭介と悠璃のバトルの勝者と優勝を賭けて決勝戦で激突する、ということになる。

「松本と小林か……2人とも1組ではトップクラスのポケモントレーナーで互いにライバル同士。どっちが勝つのか見物だね、逢沢さん」

「……」

しかし2人のバトルを見て興奮した恭介はいつものように人懐っこい笑みを浮かべながら悠璃に話しかけるのであった。他方悠璃は

なんとか無視してやり過ごそうとするものの、無視すればするほど恭介が絡んでくる気がしたので、溜息混じりに適当にあしらっていた。

「……ちよつと気になったんだけど、なんでバトルの前なのにこんな浮ついていられるのよ」

「浮ついている？ どこが？」

とぼけた様子で首をかしげる恭介。悠璃は自分のペースがどこか乱されていく感じがしていた。

「本当なら緊張するであろう時にその態度。それを浮ついていると言わないで何と言うのかしらね」

「バトル前に過度に緊張するのが、果たしてトレーナーにとって正しいもののかな。トレーナーが変に緊張してしまえば、その緊張がポケモンにまで伝わってしまう。それでポケモンが本来の力を出せなくなったら元も子もないからね」

確かに恭介の言葉は的を射ていた。ポケモンバトルはトレーナーとポケモンがどれだけ息が合っているか、ということも戦局に大きく影響してくる。それを考慮するとどちらか1つが少しでも狂ってしまうえば100パーセントの力を発揮出来なくなってしまうのだ。それを聞いた悠璃は納得すると同時に苦笑を漏らした。

「あんたって本当に妙な奴。これからバトルする相手にアドバイスをするなど、正気の沙汰じゃないわ」

「勝つにしても負けるにしても、互いに全力にならないとつまらないじゃないか」

「歳の割に変に説教臭いこと語るし、だからモテないのよ」

「……うわっ、そこ触れる？」

『あと10分で準決勝を開始します！ 準決勝第1試合のAブロック代表、逢沢 悠璃選手とBブロック代表の立花 恭介選手は順次指定の場所へ移動してください！』

控え室に放送が流れた。下らない与太話をしている間に準決勝開始の時間が刻々と近づいていたのである。恭介と悠璃は急ぎ控え室を出ると、互いに所定の位置へ向かった。小走りの2人の間に会話は無かった。さすがの恭介もここは集中しているのだろう。そんなとき、もうすっかり馴染みとなったバトルフィールドの入場口の片方へと辿り着いた。

「どうやら、ここが逢沢さんの入場口のようなね」

「そうみたいね、じゃあまた」

「おっと、ちよっと待って！」

バトルフィールドへ繋がる入場口へ入ろうとする悠璃を恭介が呼び止めた。悠璃が振り返ると、恭介がその瞳を輝かせながら手を差し出していた。

「良いバトルをしよう」

悠璃はその光景に見覚えがあった。悠璃がハクタイ高校に編入した日のことである。まだ恭介に対して嫌悪感しか抱いていなかった悠璃は恭介と突然バトルをすることになったとき、恭介から求められた握手を無視していた。これから対戦する相手、いわゆる敵と握手を交わすなど、という甘ったるいことなど出来るものか。それが悠璃の考え方であった。だが、今はそうでは無くなった。悠璃は何

やら周囲を気にするかのようによろよろ見回すと、そつと、その白く綺麗な手を恭介に差し出したのである。

「……」

「じゃあ、また後で！」

恭介は堅く握手を交わすと、駆け足で自分の入場口へと駆けていった。悠璃はしばらくその場に立ち尽くしていた。

（何故だろう……あいつと出会ってまだ2ヶ月も経っていないのに……）

悠璃は恭介と握手した左手を見つめる。悠璃の冷たい手には恭介の手の温もりがまだ微かに残っていた。

（私は……変わってしまったのかな……）

悠璃は左手をぎゅつ、と握り締めて自分の胸に当てる。このとき、悠璃は自分の顔が密かにほんのり紅く染まっていることに気づいてはいなかった。

「……行くか」

悠璃は腰に付けていたモンスターボールを握り締め、拍手と歓声が沸き立つバトルフィールドへの階段を上り始めた。

第58話：準決勝・再戦の恭介VS悠璃（1）

陽はすっかり陰り、空には星が瞬きつつあった。丸1日通して行われるバトルも終わりを迎えようとしているのだ。数多の学生トレーナーたちが勝利に喜び、敗北に涙したバトルフィールドに今、恭介と悠璃が立った。自分たちが倒してきたトレーナーとポケモンの想いが自分たちの体の中に注ぎ込まれる。2人はそんな感覚を覚えた。

「俺と逢沢さんがこうして対峙するのも1月振りになるんだね」

「ああ……立花！ 私は今度は自分の実力だけで勝ちをもぎ取る！ だから……」

「わかってる。『全力でやれ』って事でしょ？」

「……わかってるなら、一々言わせないで！」

悠璃はそう言って天高くモンスターボールを放り投げた。ボールからは勢いよくガブリアスが飛び出してくる。それに合わせて投げられた恭介のボールからは色違いのポケモン特有の輝きを放ちながら、リザードンが現れ、ガブリアスと向き合う。この1月で恭介と悠璃の関係は出会った当初に比べたら大幅に改善された。それでも顔を合わす度に言い争いをしてしまうなど、互いに歩み寄れない点は多々見受けられる。しかしそれはポケモンたちにまでは伝染しなかったようで、恭介のリザードン、ハッサムと悠璃のガブリアスは

すっかり親友と言っても良いほど打ち解けあえていた。だが親友となり得たからこそ、よりバトルが楽しみで仕方がない。同性で種族も近いリザードンとガブリアスはそういう関係になっていた。

+++++

「なんかりザードンとガブリアスの顔が喜んでるように見えるなあ」

「そうかあ？　これからバトルするのに？」

それは当人以外にもわかるものであり、客席からバトルの始まりを待つ美夏の眼にも見て取れるものだった。

「いや、ポケモンたちにしかわからない感情や繋がりというものがあるらしいから、あながち間違いでもないかもな」

「そうよ。水を差すような真似するんじゃないわよバカ」

「んだとお！」

「まあまあ2人とも……これからバトルが始まるんですから静かに見ましよう」

+++++

客席の方で妙な盛り上がりを見せている中、フィールドに立つ2人は言いようのない緊迫感に包まれていた。そして刻が来る。

『これより準決勝第1試合を行います！ バトル開始！！』

「リザードン、燕返し！」「ガブリアス、ドラゴンクロウよ！」

バトル開始の合図とほぼ同時に、2人が指示を飛ばす。リザードンは大きな翼を翻し、ガブリアスは左手の爪を振るう。ガチン、という刀と刀が鏝迫り合うような音が会場中に響く。2匹の技の出し合いは互角。一見するとそう思えたが、数合の打ち合いの後、リザードンの顔に苦悶の表情が見られた。やはり物理技を駆使した打ち合いとなるとリザードンは分が悪い。そして2匹が使用した技の元々の威力の差も歴然としている。しかしそんな中にあっても恭介は冷静だった。

「無理に接近戦を仕掛ける必要もない。リザードン、距離をとるぞ！」

リザードンは翼を羽ばたかせては空へと飛び上がり、ガブリアスと距離を取ろうとする。だが距離を取られたのであれば再び詰めればいいまでのこと。ガブリアスは再度リザードンと距離を詰めようとリザードンのいる空中まで一気に飛び上がる。

「もう一度、ドラゴンクロウよ！」

「リザードン、鬼火で接近を防ぐんだ」

青白く不気味な鬼火を放ってガブリアスを敬遠するリザードン。

鬼火を受けてしまえば物理攻撃を得意とするガブリアスの攻撃力は大幅にダウンしてしまう。蛍とのバトルでその危険性を十分に感じた悠璃は、それだけは何んとしてでも避けなければならない、そう感じて結局リザードンとの距離を開けざるを得なくなってしまう。その隙を突くようにリザードンはエアスラッシュを連続で放ってガブリアスを追撃する。かつて恭介が悠璃を助けたとき、リザードンが使ったエアスラッシュの威力の高さを悠璃は誰よりも実感していた。

「……ドラゴンクローで打ち消して！」

「それならひたすらエアスラッシュだ！」

迫り来る風の刃を1つ1つドラゴンクローで打ち消していくガブリアス。しかし全てを打ち消そうにしても限界がある。エアスラッシュが放たれるペースがドラゴンクローのそれを除々に上回っていく。長期戦を見越されるバトルだけあって、技を打ち消すことに無駄にスタミナを割くわけにはいかなかった。

「砂嵐！」

瞬時に砂嵐を引き起こすことでその中に身を隠すガブリアス。砂に当たることを嫌い、出来るだけ距離を取ろうと後退するリザードンに砂嵐の中から突如飛び出してきたガブリアスが弾丸のように鋭いタックルを食らわせる。ガブリアスは自分の体とリザードンの体を可能な限り密着させると、その状態で連続でドラゴンクローをリザードンに叩き込んでいく。やはりガブリアスのドラゴンクローだけあって、1発1発の重みは馬鹿にならない。

「ガブリアスを引き剥がすんだ！ 鬼火！！」

リザードンが再度鬼火をちらつかせると、ガブリアスはすぐにリザードンから離れていく。しかしその間を見逃す恭介ではない。

「エアスラッシュュ!!」

離れていくガブリアスに追い討ちとばかりエアスラッシュュを叩き込む。そこにはしてやられてばかりではたまらない、という恭介のこのバトルに対する姿勢が垣間見えた。空中でエアスラッシュュを受け、不安定な体勢で地面に着地するガブリアス。一方のリザードンもドラゴンクローで受けたダメージは決して少なくない。互いにこの時のダメージはきつと後々に響くものとなっていた。

「……やっぱり、一筋縄ではいかないね」

「当然よ。もうあの時みたいな屈辱を味わされたくはないもの」

「もしかして……あの時のことまだ怒ってる?」

「……ガブリアス、ストーンエッジ!!」

ガブリアスの咆哮と共に地面から尖った岩石が飛び出してくる。リザードンが特に苦手な岩タイプの技、当たってしまえばこの一撃で勝負が決まる。恭介は苦笑いを浮かべながらリザードンに飛び上がるように指示を出す。間一髪でストーンエッジを回避するリザードンだが、空中では既にリザードンが飛び上がることを見越して先回りをしたガブリアスが待ち構えていた。このまま飛び込んでしまつと、またしてもドラゴンクローの手痛い一撃を受けることとなる。リザードンは大きな翼をマントのように翻しては再度地上へと降りようとする。だがこの体勢ではガブリアスに逆落としのような形で追い討ちを受ける結果となってしまう。

「ガブリアス、ドラゴンダイブで畳み掛けなさい!」

「そうはさせない! リザードン、身代わりを出すんだ!」

落下する形でリザードンに向けて突撃を試みるガブリアス。しかしガブリアスが攻撃を仕掛けたのはリザードンの出した身代わりだった。ガブリアスが身代わりに攻撃を仕掛けている間に、リザードンはガブリアスの後ろに回りこみ、背後を取る。翼を持たないガブリアスは空中で自在に動くことが出来ないため、この時点では有利不利が一時的ではあるが、逆転したこととなる。

「エスラッシュ！」

「竜の波動！」

エスラッシュと竜の波動、2つの技が激突し、相殺。爆発する。その時に発生した爆風が空中の2匹を吹き飛ばす。そして2匹はバトル開始時の位置へと再度戻る。それまで2人のバトルを固唾を飲んで見つめていた観衆から除々に歓声が漏れ始める。下馬評としては相性やポケモンの元々の能力の差からガブリアスが有利と見る声もあれば、実力と経験を兼ね備えたりザードンが相性の差をひっくり返して勝利するといったワンサイドゲームを思わせる声が多かったが、蓋を開けてみるとバトル開始直後から技の出し合いやトレーナー2人の鋭く的確な指示が飛び交うなど、恭介と悠璃によるこのバトルはまさに互角の戦いと呼ぶに相応しいものとなりつつあった。

「さすが逢沢さんのガブリアス、見事なスピードだね。この間バトルしたときよりも確実に上がっている」

「当然よ！ 私とガブリアスはお前と再度バトルをするときのためにずっとトレーニングを積んできたんだから！」

「なるほど……そのスピードがトレーニングの成果の証拠、というわけだ。じゃあ、俺もリザードンとのトレーニングの成果、出してみようかな！」

そう言つて恭介がリザードンを呼ぶ。恭介の方向を振り返つたりザードンに対して恭介は何やら目で指図を送る。それを理解したりザードンは小さく頷き、ガブリアスの方を向き直つた。

「今から、トレーニングの成果……新しい技を見せてあげるよ！」

天に向かい、大きく雄たけびをあげるリザードン。すると、リザードンの体が見る見るうちに灼熱の炎に包まれていく。

（新しい技……？　もしかして“フレアドライブ”？）

悠璃の考えた“フレアドライブ”とは、炎タイプの強力な物理技で威力こそ高いが、その分反動として自分もダメージを負つてしまふ、言わば諸刃の剣のような技。しかし、炎技に耐性があるガブリアスにはやはり今ひとつであるし、リザードンは攻撃よりも特攻の方が高いポケモン。わざわざ新しい技と称してこの時点で使う意義は少ない。それは恭介にだってわかっているはず、悠璃は少なからず動揺していた。

「さありザードン……“ニトロチャージ”だ！！」

第58話：準決勝・再戦の恭介VS悠璃（1）（後書き）

ついに恭介と悠璃の再戦へと突入しました。そういえばBW発売からはや1年ですね……なので新要素〓BWで登場した新技の方を投入させてみました。

第59話：準決勝・再戦の恭介VS悠璃（2）

「ニトロ……チャージ？」

思わず首を傾げる悠璃。だが、無理もない。見たことも聞いたこともない技が自分の目の前で繰り出されようとしているのだから。そうこうしている間にリザードンが全身に灼熱の炎を纏って突進してくる。その攻撃速度は悠璃の予想以上に速く、ガブリアスはその攻撃をもろに受けてしまった。見知らぬ技に戸惑っていた分対処・判断が遅れてしまっていた。しかし、技を受けたガブリアス当人はあまり大きなダメージを受けていないようだった。

「ガブリアス、大丈夫？」

ガブリアスは小さく頷いた。悠璃はどこか拍子抜けしたかのような溜息をついた。

「どんな強力な技かと思えばこの程度……これならエアスラッシュでも撃っていた方が決定打になってよかったんじゃないかしら？」
「……確かにニトロチャージという技に火力はない。でも、それだけと思わない方がいいよ！」

ニトロチャージからの流れでリザードンが火炎放射を放ってくる。しかし、スピードならこちらの方が上、とガブリアスはリザードンの攻撃を回避しようとする。だが、ガブリアスが火炎放射を回避しようとするよりも早く、リザードンの攻撃がガブリアスに直撃した。そうは言っても火炎放射なのでダメージ自体はやはり少ない。しか

し、ガブリアスが動くよりも早くリザードンが攻撃を命中させた。
この事実が大きい。

「馬鹿な！ ガブリアスの方がリザードンよりスピードは上……」
「ニトロチャージの効果は、攻撃に成功したとき必ず自分の素早さをアップさせるんだ！ 逢沢さんのガブリアスは確かに素早いけど……この追加効果で俺のリザードンがそのスピードを上回った！」

まずい、悠璃は内心そう思った。その顕著たる理由がエアスラッシュである。エアスラッシュの追加効果は高い確率で相手を怯ませるというもの。これは相手より素早さが上の場合効力を発するものであり、ガブリアスとリザードンの素早さが逆転した今、連続でエアスラッシュを受けてしまうと、追加効果で怯まされ一気にバトルを持つて行かれてしまう、という危険性があつた。その追加効果の発動はあくまで運が左右するものであるが、相手はあの立花恭介である。そのチャンスが微かなものであっても、きっとそこに勝利への糸口を見出してくるに違いない。そういった恐れが彼女の中には自然と生まれていた。

「ガブリアス、砂嵐！」

ガブリアスの咆哮と共に、強烈な砂嵐がフィールド上に吹き荒ぶ。これにはさすがのリザードンも一たまりもなく弾き返される。砂嵐が届かない場所まで離れたリザードンは砂嵐を打ち消さんとはかりに遠距離からエアスラッシュを連打する。しかし、吹き荒れる砂嵐はその程度の攻撃ではびくともしない。以前バトルしたときよりもガブリアスのレベルが上がっているため、その分威力・規模・耐久力が強くなっているのだ。

（このまま砂隠れで隠れ続けられると後に響いてくる……早々に引

きずり出すか)「リザードン、砂嵐の中に突っ込め! 燕返しだ!」

燕返しは砂隠れなどの回避率が上がる特性の効果を見捨てる、必ず当たる技だ。恭介は始業式のバトルで悠璃の得意とする砂隠れを駆使した戦法を燕返しの一撃で打ち破っている。

「……今! ガブリアス、砂の中から飛び出せ! ドラゴンクローだ!」

しかし、悠璃が何も対策も考えていないわけがない。彼女はいつか迎えることを望んでいた恭介との再戦に備えていたのだ。砂嵐に向かつて飛び込んで行こうとしたリザードンと吹き荒れる砂嵐から飛び出してきたガブリアスが交錯する。一瞬の出来事で何が起きたのか、周囲の観客にはそれはわからなかった。空中で交錯した二体が今、ゆっくりと着地する。その刹那、リザードンの体が大きく揺れ、うつ伏せの状態で倒れた。会場中がどよめく。

「えっ?なに?なにが起きたの?」

何が起こったのか理解できず辺りを見回す美夏。

「リザードンとガブリアスがズバァッとやって、リザードンが倒れて……」

「そんな説明でわかるわけじゃない! 馬鹿久坂!」

「うるっせえチビ! じゃあお前判ったのかよ!?!」

「うつ……りっ、凜! あんたもわかつたわよねえ!?!」

いつものように繰り広げられる夫婦（？）漫才を微笑みの面持ちで見ている凜。蚩と共に3人を落ち着かせると、状況説明を始めた。

「と言っても別段難しいことは起きていないんだけどな」

「えっ？ それってどういうこと？」

「立花さんは砂隠れを発動させているガブリアスに確実にダメージを与えるため、燕返しを指示した。しかし、逢沢さんはそれを読み、カウンター攻撃としてドラゴンクローを指示したんです。そして2つの技は交錯し、威力の勝るガブリアスのドラゴンクローがリザードンに通った……」

凜はフィールドの方へと視線を戻す。よく見ると、うつ伏せになって倒れているリザードンの翼には大きな切り傷が見える。あれがドラゴンクローを受けた痕なのだろう。

「えっ、じゃあ兄貴が……兄貴が負けるってことなのか?!」

「……落ち着け、翔。恭介がああ程度で負けるトレーナーだと思っ
か？」

「ふう……危ない危ない」

恭介が安堵の溜息を付く。それと同時にリザードンがゆっくりと立ち上がった。先ほど受けたドラゴンクローのダメージはもちろん、このバトルの中で受けたダメージの大半を回復して。うつ伏せになって倒れたリザードンは微かな時間を見つけて“羽休め”を使い、

体力を回復させたのである。

「何故羽休めをそのまま使わせたんだい？ とどめを刺す時間は十分にあったはずなのに」

「この程度で終わられては困るのよ。あるとき私が受けた屈辱はこの程度では済まない……」

「なるほど、そういうこと……でもその油断が最終的には命取りになるかもしれないよ」

「そんなの、覚悟の上よ！」

悠璃の指示と共にガブリアスが飛び上がった。鋭い爪を閃かせてリザードンに襲い掛かる。だが、リザードンはそんなガブリアスをも上回るスピードで空中へと舞い上がると、上空からエアスラッシュを放った。ガブリアスは反転し、ドラゴンクローでエアスラッシュを相殺する。しかし、リザードンの攻撃はこれだけでは終わらない。

「これは防げないよ！ 2重エアスラッシュ！」

リザードンは続けてエアスラッシュ2発の威力を1発に集束したエアスラッシュを放つ。これはかつて恭介がミオ学院の生徒から悠璃を守る際に使用したものであり、いわば常識外れの離れ業といえるものであった。

「ドラゴンクローで弾き返せ！」

対するガブリアスも通常のエアスラッシュと同じようにドラゴンクローで相殺しようとする。しかし、さすがのガブリアスと言えども、2重の威力となったエアスラッシュを相殺することができず、押し負けてしまった。先ほどのものとは違い、重みのある風の刃が

ガブリアスの体を切り裂く。しかし、これだけで終わるわけにはいかない、反撃とばかりに龍の波動を放つガブリアス。だが、その一撃もリザードンの放った龍の波動で相殺されてしまった。

「くっ……ガブリアスが力負けするなんて……」

「逢沢さんが日々レベルアップしているのと同じように、俺も日々レベルアップしているんだ！ この間の俺と同じと思わないことだね！ リザードン、エアスラッシュだ！」

リザードンの両翼に力が充填されていく。またエアスラッシュが来る。次の一撃をまともに喰らってはほぼ勝負は決まったようなもの。悠璃の脳裏に“敗北”という2文字が浮かぶ。だが、それを払拭するかのごとく、ガブリアスの雄叫びが悠璃の耳に届いた。

「ガブリアス……お願い。あなたなら……」

悠璃とアイコンタクトを交わし、ゆっくりと、かつ力強く頷くガブリアス。彼女の想いに応えるかのごとく、ガブリアスの両腕が眩い光に包まれていく。

「あれは……」

恭介の顔に微かに見える動揺。それとは対照的に悠璃はその眼差しに決意を宿す。

（この一撃を決められるかどうかでこの勝負の結果が変わる……）
「ガブリアス、ドラゴンクローー！！」

悠璃の想いを受け取ったガブリアスが地上から飛び立つ。その両

腕は巨大な鎌のように鋭く、閃いていた。

第59話：準決勝・再戦の恭介VS悠璃（2）（後書き）

ご指摘を受けまして、この話から文章最後の「続く」というものを無くしてみました。試験的なことではありますが、この方が文章が見やすい、話の区切りがいい、と感じましたら今後はそうしていきたいと思います。文章やストーリー展開についてもそうですが、今後読み辛さを感じさせる点や改善点などについてもアドバイスを頂ければ、と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6244k/>

昔を今に繋ぐ街【ポケットモンスター】

2011年11月11日12時34分発行